

THE LEGEND OF LYRICAL  
喪失の翼と明の軌跡

蒼空の魔導書

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新暦75年4月。時空管理局が誇るトップエース達や将来有望な未来のストライカー達が集い、結成された少数精鋭部隊《機動六課》。

正史ならば近い将来、管理局に反旗を翻した広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツティとその一味を打ち倒し奇跡の部隊と称される英雄となる筈だったこの部隊は、始動初日にして何の前触れもなく隊舎が次元世界最大級の反管理局軍——《次元王軍ラグナバンド》の強襲中隊による襲撃を受け……呆気無く壊滅してしまう。

始動初日にして拠点を失った六課は、クロノ・ハラオウン提督の紹介で知り合った特務遊撃支援部隊《ロストウイング》の課長である階級不明の男の案内でロストウイング

の仕事を手伝う代わりに彼等の隊舎を共同で使わせてもらおう事となるのであった。

そこで出会う新たな仲間達は規定値以下の魔力Fランクのエースに教官潰しの異名を持つ早撃ちガンナーや喧嘩腰のリーゼントヤンキーなど、はぐれ者やならず者ばかりの不良集団？

「特務遊撃支援部隊ロストウイングとは捨て石だ。重大な責任問題を起こした前科持ちや他では面倒を見切れない者や元次元犯罪組織の一員など、言わば曰く付きだが極めて優秀な者達を前線で纏めて使い潰す為のな」

英雄への道が一転し、底なし沼を征く事となつてしまった機動六課の若きエリート達……彼女達はFランクのエースである《ヒュウガ・フリージア》を中心とした翼を失いし男達と共に絶望の未来に立ち向かう!!

「――斬るッ!」

例え夜明けの【黎明】が、絶望を齎すとしても……。

「では――これより、《総オオイナル黎明》への恐怖劇グランギニョルを開演するでしょう」

※入りきらなかったタグ

・パワーインフレ注意

・Dies irae要素多し

- ・英雄伝説軌跡シリーズ要素がチラチラ
- ・R15～17程度のエロorグロ描写があるので注意

# 目次

新連載予告	1	絶望の焼け野原を穿つ黎明の流星	141
本編開始 序章前編、『折られる戦乙女達の翼、恐怖劇（グランギニョル）の開演』		水眼が斬る！	164
壊される英雄譚（リリカル・サーガ）、恐怖劇（グランギニョル）の開演	17	神器形成（セカンドブレイク）	194
誓いを砕く無慈悲の爆炎	46	明の軌跡	207
破壊の柴竜の襲撃	63	第二二六強襲中隊、無念の撤退。	そ
恐怖劇の序章（プロローグ）、傷付けられる騎士の誇り	90	して恐怖劇の序章の終演へ……。	235
絶望の闇を照らす黎明	110	遙か無限の宙（そら）へ！ 破壊の柴竜、管理局へ宣戦布告！！	247
戦乙女達を救い上げる刹那の粉雪		任務完了、帰還する！	266

序章後編、『翼を折られた戦乙女達は喪失の翼（ロストウィング）へとその身を墮とす』

希望の翼を折られた戦乙女達は絶望の淵を彷徨う

絶望の底に堕ちた六課を救うクロノの秘策は傍若無人で危険な大男？ ロストウィングの部隊長、来る！

ようこそ、ロストウィングの隊舎（アジト）へ！！

出会って早々に一触即発？ 飛び立つ翼をもがれた鳥達

激突！ 機動六課VSロストウィング

己の矜持（プライド）を懸けた勝負。

ヴィータVSロッキー！

鉄槌の誓いと揺れる心

陀羅尼摩利支天

男と男の戦い。ザファイラVSゴート

ン

守護の意志

拳と悔し涙と不変の渴望（イジ）

501

スバル激怒？ ガングロチャラ男、

フォックス・ストーン現る

灼熱の中の四対一。 機動六課FW

388

400

418

435

457

475

341

359

FW

(フォアード) チームVSフォックス

555

F W (フォアード) チームの実力

572

幼きあの日、弱き少女は煉獄の炎の中に舞い降りてくれた絶対不墮の天使様に

憧れを懐いた……

595





## 新連載予告

無限の欲望が蘇らせた翼を前に数多の海の守護者達が “次元の王” によって墜とされし時、法の船とそれに仇名す者達との均衡は崩れ、全ての星々を巻き込む戦乱の時代を迎える。

【法の船に排斥されし者達が集うレジスタンス】【十三人構成の白き騎士団】そして【次元の王が率いる竜の群】を中心として法に仇名す者達は次々と立ち上がり、数多の海の法の守護者達を駆逐し始め、星々を蹂躪する。

【翼を失った厄介者の戦士達】と【帰るべき場所を失った才ある戦乙女達】は互いに手を取り合い、決死の覚悟をもって法に仇名す者達に相對するものの、次元の王が遣わせし六の将の強大な力を前に次々と倒れていく。

やがて白き星姫は倒れていく者達を目の当たりにして悲しみに暮れ、次元の王に揺さぶられて遂にはその心が砕けゆく。

そして、十三の騎士が創りし八つの地にて多くの人々の魂を贄に世に顕現した蒼の大樹の頂きに登った【氷眼と雪眼の兄弟】が【白き星姫】を賭けて雌雄を決し、氷の刃が白き星姫を貫いた時――

—  
《<sup>オオ</sup>総イナル黎明》は始まる……。

\*イメージメインテーマ：嘆きのリフレイン（PS4専用ゲームソフト『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』EDテーマより）

新暦75年四月、第一管理世界《ミッドチルダ》。

次元世界の秩序と法を護る司法組織《時空管理局》の地上たるこの世界の南駐屯地にて管理局の新部隊が発足した――

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長の《八神はやて》です」

夜天の魔導書の主であるはやてがある目的を果たす為に起ち上げた新部隊《古代遺物管理部 機動六課》――

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい人々を護っていく事が私達の使命であり、成すべき事です。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォアード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードス

タツフ、全員が一丸となつて事件に立ち向かつていけると信じています」

大きな才能を秘めた将来有望の新人達、はやての家族であり彼女を護る守護者でもある雲の騎士《ヴォルケンリッター》達、金色の輝きを放つ優しき執務官《フエイト・テストロッサ

T・ハラオウン》、そして管理局が誇る不屈のエース・オブ・エース《高町たかまちなのは》等を集結させて始動したこの夢の部隊は――

「まつ、長い挨拶は嫌われるんで……以上ここまで、機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

……始動初日にして隊舎が前触れもなく突然襲撃され……壊滅した……。

まるで世界を縦に両断するかのように海の向こう側から六課の隊舎に振り下ろされた巨大な魔力刀……バターののように簡単に中心から両断された隊舎は無数の瓦礫となつて崩れ落ち、煉獄の炎に包まれてしまう。

「あ……貴方達は、一体何者なのっ!!?」

炎の中から六課の人員達を救出しようと動くなのは達の前に現れたのは、紫竜のエンブレムを掲げる紫の軍服を着た武装集団――《次元王軍ラグナバンド》の強襲中隊であった。

「アハハハッ！ それじゃあ部隊発足記念を祝う楽しいパーティーを始めよつかああああっ!!!」

オーバーSランクを軽く凌駕する戦闘力を誇る敵強襲中隊の圧倒的なチカラの前に若きエース達はチカラ及ばず次々と倒されていく――

「シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん、ザフィーラさん、フェイトちゃん、みんな……」

「こんなところで終わってまう言うんか？ ……わたし達の六課が、夢の部隊が、長い時

間掛けてようやく始まったって言うんに……こないな仕打ち、あんまりやろ……」

頼りになる親友や守護騎士達が全員倒れ、絶体絶命の危機に追いやられたその時――闇夜を明かす『黎明』が彼女達の前に姿を現すのだった。

「目標を確認した。これより任務遂行の為、敵を無力化する」

夜明けの空のように神秘的な青い氷刀のデバイスをその手に持ち、前開きの黒いコートを着た雪の様に白い長髪の小柄な少年の敵対する者を凍てつかせる鋭いアイスブローの瞳は冷徹な雰囲気漂わせるがその奥に強い信念の炎を秘める。その少年は

「まさかキミは、情報部のファイルにもあつた要注意特筆戦力――アレストグレイシア《氷眼》!!?」

「――斬るっ!」

管理局のトップエースであるなのは達が手も足も出なかつた敵中隊を相手に氷眼の少年は電光石火の剣技と『凍結』の魔力変換資質を駆使して単独で互角に渡り合い、敵

を追い返す事に成功する。

「任務完了……帰還する」

「ま……待って！」

そして少年はなのはの制止も聞かずに瞬間移動をするかのようにその場を立ち去って行くのだった……。

敵襲で焦土と化した隊舎はもはや使い物にはならなくなり、局のトップエースが揃いも揃って反乱軍の一部隊程度に後れを取った事で上層部と地上からの信用を失い、部隊

始動初日にして拠点を失った事で行き場が無い六課の面々は後日、部隊設立の後見人の一人である《クロノ・ハラオウン》提督の紹介で知り合った階級不明の大柄の男性《テイビット・マクラウド》に連れられ、第42無人世界《リルプス》の最果てに建つ草臥れた煉瓦の砦に案内されたのだった。

「ボッロ!!」

「なんか幽霊が出そうな雰囲気だね……」

そこで彼女達を最初に出迎えたのは——耳を劈く爆音と鉄でできた正面扉を吹っ飛ばす程の爆風であった。

「「「「「な、ナニゴト……」」」」」

「ハハハッ！ ようこそ機動六課のエリート諸君。 最凶最低最悪の特務遊撃支援部隊

《ロストウィング》の隊舎へ!!」

クソボロの隊舎に空調機すら整っていない環境最悪の設備。 空き缶で自作されたモニタールームの端末に整備が行き届いていない雑草だらけの訓練場。 周辺には近場に不気味な迷いの森と断崖絶壁と何故か砂漠があり、遠目に何故か人喰い鮫が生息している湖と何故か火山と雪山が並び立つという意味不明で超過酷な自然環境。 そして——

「あゝあゝっ!? 一体何しに来やがったんだクソエリート共がよお!!」

素行最悪のロストウイングのメンバー達が歓迎ムード(?)で六課の面々を迎え入れたのであった……。

ロストウイングの仕事を手伝う代わりに彼等の隊舎を仮拠点として共同で使用させてもらえる事となったのは達は暫くの間生活を共にして困難を乗り越えて行くであろうロストウイングのメンバー達と交流を図ろうとするが、局のエリートで所謂良識人である彼女達は素行が悪く不衛生である彼等とはなかなか打ち解けられずにいた。

「アホかつ!? チンタラ足止めて敵が撃つて来た弾ア撃ち落とし続けたところでジリ貧になるだけやろがつ!! 撃たれる前に撃たんかいっ!!」

「あゝあゝっ!? ヤんのかクソアマ! 調子くれてんじゃねえぞゴラツ!!」

「ご、ごめんなさい! 直ぐにタオルと着替えと代わりのコーヒーを——ふぎゅっ!

——イダい、また転んじやったあ……って、ああっ!? そういえば仕事先に電話入れるの忘れてた!!」

「二度も男とヤつた事が無えっ!? おいおい冗談だろ? こんなイイ身体してんのに未経験なんざ勿体ねえぜネエチャンよお。だからさあ、今夜オレの部屋に來ねえか? うんとキモチイイ体験させてやるからよお♪」

「あ、それ僕が趣味で取り付けた『自爆スイツチ』だから押さないでねん♪」

「機動六課がマブいギャルだらけなのはチョベリグなんだけどねえ、それが全員エリー



ト共だつてのはチヨベリバだぜ……えんがちよ」

【教官潰し】の異名を持つ早撃ちガンナー、喧嘩腰のリーゼントヤンキー、発達障害持ちのドジな少年、チャライセクハラ男、ロマン優先の魔導師兼デバイスマスター、死語がウザいガングロ野郎、etc、etc——挙句の果てに彼等のエースは——

「《ヒユウガ・フリージア》、ロストウイングの実動部隊を率いている……これでいいか？  
ならもう行く」

淡々と愛想が無く黒い長髪の小柄な少年で魔力ランクはなんと最低値E以下のFランク？

「……美しいな」

「えっ？ ……私？」

「ああ、なんとも美しい——石ころだ。スケッチしよう」

「「「ズコーーーーーーッ!!!」」」」

しかもクールながら変人であった……。

こんな感じでロストウイングは管理局が保有する部隊である割には対偶が最悪で支給される部隊費も0である為に施設環境も最低、構成員も司法組織の一員と言うには素行が悪かったり性格や体質に難があったりと問題児ばかりで、挙句に言えば戦力保有制限も特例で無制限……その理由とは——

「ああ、恐らくお前が思っている通りだ八神二佐……特務遊撃支援部隊ロストウイングとは捨て石だ。重大な責任問題を起こした前科持ちや他では面倒を見切れない者や元次元犯罪組織の一員など、言わば曰く付きだが極めて優秀な者達を前線で纏めて使い潰す為のな……」

地を這うはぐれ者が集う異質で異常な部隊 ロストウイング 喪失の翼……かくして、機動六課以上にツツコミだらけの彼等と共になのは達は茨の道どころか底なし沼を征く事を余儀なくされるのであった。

行く先々で次々と目の前に立ち塞がって来るオーバースを圧倒的に凌駕する強敵達を相手に彼等は立ち向かう。

「おもしろい。その勝負、タイムマン受けてやるぜ！」

路地裏の不良でありながらSランクの魔力を保有しレアスキル「流水」の魔力変換資質を持つフリーの魔導師の少年。

「私はアンタ達管理局を絶対に許さない！ 大好きだった兄さんを殺したアンタ達を、この弾丸で撃ち滅ぼしてやるっ!!」

「ヒステリックになるのは結構だが、〃場〃を創るといふ本来の目的を見失うなよ——」  
強力なロストロギアを身体に融合させた超人の十三人——《ドライツエーン・ヴァイスリッター白夜十三騎士団》。

「憎き外道の騎士ヴォルケンリッターアアアアアア——ッ!!」

「20年前に我らの故郷を無惨に滅ぼした恨み、魔力を奪われ殺された同志の仇、ここで果たさせてもらおう！ 覚悟っ!!」

過去の闇の書の被害者も含め、何等かの理由で管理局の体制に不満を持つ者達が集い結成されたレジスタンス——《アーノルド決起団》。

「へっ、機動六課の連中か！ここで会ったが百年目!!」

「ノーヴェ、さっそくアレやるツスよ！ ドクターが、あんあの兄ちゃんカオスから貰ったブツインヒューレントを使って完成させた私らの新システム——《R・C・I》を!!」

ある男の介入により本来よりも格段に実力と性能が上がっている広域次元犯罪者《ジェイル・スカリエッティ》が保有する戦闘機人《ナンバーズ》達……そして――

「諸君！　今こそ戦いの時だ！　次元世界を管理するなどという戯言を抜かす体裁者気取りの時空管理局は無論の事、我らに仇名す組織は容赦無く全て殲滅するのだっ!!」

「「「「心得ました、閣下!!」」」」

「我らに勝利の栄光をつ！　我々の成すべき事はただ一つ、地獄を造れっ!!　そしてこの次元世界全てを絶対的なチカラをもつて統治し、俺は次元世界の王――《次元王》になるっ!!」

「「「「勝利万歳!!　我が軍に勝利を!!」」」」

全戦闘員の総合「最低」推定魔導師ランクA A +。《次元王》が率いる総戦力四千万人の規模を誇る次元世界最大級の反管理局組織にして機動六課を始動初日で壊滅させた規格外の竜の群勢――次元王軍《ラグナガンド》。

まさにナイトメアモードと言わんばかりに襲い来る圧倒的な理不尽に機動六課と口ストウイングの面々は心身共に疲弊し精神が磨耗し自分達の無力を知る……。

「何で……何で君がっ!!」

「こんなゴミみたいなオレでも……役に立てたよな……よかった……」

「本局のエース様や未来のストライカー達を護って身を犠牲にする……フツ、何も変で

は無いだらう？ 立派に“捨て石”の役目を果たしているじゃあないか」

「ふざけるんやないわ！ 私等は……私は、誰かに護ってもらう為に六課を設立したんやないっ!!」

「なのはさん達ですら手も足も出ない敵を相手にあたし達が一体何ができるっていうの!!?」

「そこで見ていてみそ。僕は足手まといを抱えて戦うのはメンゴだからさ」

「自分達のチカラで乗り越えたあ？ ハンツ！ テメエ等が今まで“PT事件”だの“闇の書事件”だのデカイ事件の数々を解決して来れたのも時空管理局という絶対的なチカラを持った組織がバックに有ったからだろうがっ!!」

「テメエ、これ以上アタシ達の誇りを侮辱してみろ！ このグラーファイゼンでその汚い面をブツ潰してやるっ!!」

「もう止めて、これ以上自分を顧みない無謀な戦いをしないで！」

「言いたい事は理解しているが、焦るあまりに過度な訓練をして疲労を溜めたまま任務に出て死にかけてお前にだけは言われる筋合いは無いな」

部隊の士気も下がっていき、敵勢力との戦力差も絶望的……理不尽という名の闇の中、彼等彼女等は未来を手にする事が果たしてできるのか……?」

……そして明かされる、ロストウイングのエースであるヒュウガの正体——

「俺は《朱雀》の《火渡カイト》<sup>ひわた</sup>。次元王軍ラグナバンド《六次元将》<sup>オラシオンセイイス</sup>の一人、《黄龍》

の配下の者だが……正直そんな事はどうでもいい!! 今の俺の目的はただ一つ——

《氷 眼》のヒュウガ! 貴様の持つ《黎明のロストロギア》<sup>アレストグレイシア</sup>だアアアアッ!!!」

『いいだろう、《零式凍結機関》の解除を許可してやる』

「ヒュウガ……君?」

それが白日の下に晒される時——

「——零式凍結機関解放、多元干渉虚数方陣展開。《モルゲンモード》専用デバイス《ア

ングレカム》セットアップ——

——とこしえ永久の・やみよ闇夜を明かす・れいめい黎明よ——

——フィンブル・ギア《黎明の神器》——起動つ!!!」

白き不屈の魔導師はその眼に黎明を映す……。

「氷のように冷たい眼に、雪のように真つ白な髪……君は、あの時の——」

少年は絶望という名の闇夜を斬り裂き、黎明を齎す為——

「——斬るっ!」

翼を失った男達と……叙情的に未来へと羽ばたく翼を持った少女達と共に……。

「さあ、僕と殺し合おう——兄さん!!」

『THE LEGEND OF LYRICAL 喪失の翼と明の軌跡』  
2018年春、連載開始予定！



本編開始 序章前編、『折られる戦乙女達の翼、恐怖劇（グランギニョル）の開演』

壊される英雄譚（リリカル・サーガ）、恐怖劇（グランギニョル）の開演

「——世界が氷り漬いてしまえばいい……」

雪が降り積もる銀世界の上を胸の孔から流れ出る液体で赤く染めつつ横たわる少女がその眩きを耳にしたのは十一歳のある日の事だった。

気が付けば目測自分と同年代ぐらいの小さな少女が神秘的なアイスブルーの瞳で哀しそうに死に掛けの自分を見下ろしている。

身体が不調だったにも係わらず無理をして魔導師の任務にあたり、帰還中に正体不明

の自律機動兵器に襲撃されて瀕死の重傷を負ってしまった、結果死にかけている自分に哀れみの念を抱いているのだろうか？ その眼は今にも砕け散りそうな氷の花のように儚げで、切ない感情を抱かせた。

傍らに目を向ければ自分をこのような瀕死の重傷に追い込んだ自律機動兵器らしき物体が無惨にバラバラに切断されていて、雪原上に散乱している無数のパーツが例外無く全て氷り付いており、動力の暴発による煙は一切上がっていなかった。おそらくこの不思議なアイスブルーの瞳の少女がやったのだろう、右手に持つ刀型のデバイス、その自身の瞳と同じ色をしている神秘的な刀身には自律機動兵器を切断した時に付着したのであろう僅かな煤が刃の一部を汚していた。

「き……君はゲホッ！　ゲホッ!!」

「あまり喋らない方がいい、傷口が開く……ごめん、助けるのが遅れた……」

このアイスブルーの瞳の少女に閃いて瀕死状態の少女には面識が無かったのでその素性を目の前の本人に聞こうと口を開くものの血反吐の排出で吭が詰まり、噎せて口周りが赤い液体で汚れる結果になってしまい、件の少女に諫められるという醜態を曝してしまう。

思い詰めるような謝罪が洩らされるとアイスブルーの瞳が近づき、瀕死状態の少女は自身の身体が持ち上げられる感覚と共に繊細ながらも硬い物に包まれる触感を自分の

血でほぼ赤く染まつてしまつてゐる白いバリアジャケット越しに感じるのだった。

「ふ、ふえっ!？」

硬い胸板越しに聴こえる鼓動に驚きと抱擁感を感じて羞恥のあまり思わず赤面し間抜けな声を上げてしまう。　どうやら自分は今このアイスブルーの瞳の少女……いや、少女の様に綺麗な容姿をした少年に抱きかかえ上げられてゐるようだった。　女の自分から見ても羨む気持ちになる腰の下まで伸びる雪のように白く美しい長髪、雪の様に白い肌に戦巫女のように勇ましく整つた顔立ちにはアイスブルーの瞳が見事にマッチしてゐる。　それに見合う小柄で細身の身体だが、黒いコートの下に着た同色のタンクトップには厚い胸板のラインが浮き出ており、肢体を良く観察すれば男性特有のガツチリとした筋肉がその繊細な肢体の内に無理なく納まつてゐるのが判る。

——男の子!?　わたし今、男の子にお姫さま抱っこされて……ふえええっ!!

同年代の異性に抱き上げられるという感覚に慣れていない為か少女は胸に空いた傷から血が流れ出る重傷を負つてゐる現状にも拘らず恥ずかしさで栗色のツインテールを揺らして身悶え、極寒の寒さに当てられて危険なまでに下がり続けていた体温が急激に上昇して行く感覚の動揺に打ち震え出してしまつていた。

「怪我人は大人しくしていてくれ。　安心しろ、すぐに安全なところまで連れて行くから」

「……………あ……………」

その言葉を聞くと少女は何故だか安心感を感じ、超人じみた跳躍で銀世界の中を翔け出した少年の腕の中で意識を手放すのだった。

「世界は美しい。豊かな自然も、厳しい環境で必死に生きる動物達も、どこまでも続く大空も、夜空を彩る星達も、母なる海より未来あしたを齎す蒼く輝く黎明も……でも世界にはそれらを汚し、壊してしまう奴等が居る。血の赤で、骨の白で、焼け爛れる肉の黒で、腹から嘔き出る臓腑の灰で。銃剣の煌き弾丸のメタル、軋む戦車の振動に塹壕の饅えた匂いで。飢えた戦奴達がこの美しい世界を醜い地獄へと変えて消していく、煌き輝く星々でさえも……ああ、それならいつその事——

——世界が氷り漬いてしまえばいい……」

「——のは——なのは!」

「ん……?」

左に結んだ栗毛のサイドテールが揺れる。誰かに肩を揺すられる感覚、それを感じ取り魔導師《たがまち高町なのは》は夢の世界より帰還を果たした。

「あ……フェイトちゃん……どうかしたの？」

「どうかしたのじゃないよ！　すっかりして、今は部隊発足の挨拶の最中だよ！」

「え？……はっ!？」

自分を夢の世界より引き戻した親友の《フェイト・テストロツサ T・ハラウン》が呆れ半分困り半分の表情を作り、その真紅色ルビィの眼を心配そうに向けてきていたので何事かと尋ねてみるのはだったが、どういう訳だか注意され、現在の状況を簡潔に指摘されたのを切っ掛けに彼女は「いけない！」と惚けた意識を完全に覚醒させ瞬時に頬を朱く染めて挙動不審に動揺してしまう。

今現在なのは置かれていた状況を説明しよう。時は新暦75年4月、場所は第一管理世界《ミッドチルダ》南駐屯地A73区画の湾岸に面した場所に建つ古い建物を改装した本日発足する新部隊の隊舎の一角にあるロビー内。なのはは《時空管理局じくうかんりきょく》の茶色の制服を身に纏って壇上の端に立ち、強化ガラス張りの外壁から射す陽の光を背に整列している局員およびスタッフ全員を前に立ったまま居眠りに耽っていたのである。「高町隊長うゝ？　部隊長が真剣に部隊発足の挨拶をしようとしとる時に居眠りするやなんて、ちと不謹慎とちやいますかあゝ？」

気付けば壇上の中央に立つもう一人の親友兼上司が眉の片端をピクピクさせながら笑顔を向けてきていた。やばい、彼女は超おかんむりだ。その上司の右肩辺りを浮

遊する妖精サイズの女の子も腰に手を当てる。ポンポンと怒っており、自分から見て上司の奥側の隣に立つ部隊の副官は苦笑いをしている。眼前に整列している部隊の局員およびスタッフ達は憧れと羨望を抱く管理局のエースの意外な醜態を目の当たりにして唖然と絶句したりクスクスと笑いを木霊させたりして愉快的な混沌を場に形成している。

「(っ)……(っ)めんなさい……」

これは恥ずかしい。なのは自身が曝した醜態の恥ずかしさのあまりシユンと萎縮して謝罪を言う。

——あうう……気持ちが悪付いて油断しちゃったなあ。フェイトちゃんやはやちちゃん達はともかく、これから面倒を見ていく教え子達を前に立ったまま居眠りしちゃうなんて……はああ……。

「高町隊長は後で部長室な」と事が済み次第親友兼上司からきつくいお叱りを受ける事を約束された事での場合は許され、なのはは愕然と内心で溜息を吐いた。混沌とした笑い声も納まり、ふと整列している局員達の中で一際若く他より異彩を放つ四人に目がいく。管理局でのなのはの役職は魔導師としての戦闘技術・戦術を局の魔導師達に叩き込み指導するのが主な《戦技教導官》で今日からその四人が彼女の教え子となるので毅然とした立ち振る舞いを見せて「凛々しくカッコイイなのはさん」を教え子達に

印象付けたかったのだがその企みはこのたった一回のマヌケをもって呆気なく瓦解してしまったようだ。ボーイツシユな青髪短髪の少女はまるでとても信じられない異様なモノを目撃したかのように固まり上の空で、フワツとした印象の翠髪の少女は「ああ、やつちやつたね……」と言わんばかりの苦笑、まだ十歳前後の幼い少年と少女の二人組は共に生暖かい視線をこっちに向けていた。なのはは外面で笑顔を取り繕うものの内心は某破壊の名を冠する魔導戦士のバー〇ーカーソウルをくらいまくってボロ泣きしている。もう止めて、とつくにライフは0よ！

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長の《八神<sup>やがみ</sup>はやて》です」

なのはの不屈の心のライフがバー〇ーカーソウルによつて削り取られていくのは放置し、本日この場をもつて始動する新部隊《古代遺物管理部、機動六課》の発足を告げるべく部隊長のはやてが演説を開始する。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい人々を護つていく事が私達の使命であり、成すべき事です。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォアード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ、全員が一丸となつて事件に立ち向かつていけると信じています」

4年前に起きた空港火災が切っ掛けとなり、どんな事件が起きても即現場に向かえる少数精鋭部隊を目指したはやての夢はこの日この時をもつて成就され、新たな始まりを



告げる。

その空の果てまで見通すような観察眼をもってなのはが選定し部隊に招き入れた将来有望な新人魔導師達。魔導師ランクSSを誇る夜天の主たるはやととその守護騎士にして家族である四人の《ヴォルケンリッター》。数多の難事件を解決してきた優秀な美人執務官にして管理局最速の魔導師のフェイト。そして管理局最優の魔導師《エース・オブ・エース》の称号を持つ英雄として他者からの信頼が厚い戦技教導官のなのは。

「まっ、長い挨拶は嫌われるんで……以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

彼女達が集えばこの次元世界に敵は居ない。どんな残酷な運命や理不尽が襲いかかろうとも自分達ならば誰一人欠ける事無く悉くを打ち破り、輝かしい未来の空へ向かって羽ばたいて行くことができる。不可能など無い。

今はそう……思っていた……。

部隊発足の挨拶が終わり、四人の教え子達に初訓練の開始時間を指定して集合場所を伝え、解散させたなのは部隊長室ではやてに公務中に居眠りをしてしまった事に対するお説教とお仕置きと称したセクハラを一時間受け、現在はこの四年間で急激に膨らんだ胸部に熱を感じながらフェイトと自分達の分隊の副官である二人と並び、隊舎の一角の廊下を歩いていた。

「うう、もうお嫁に行けないわい。はやてちゃんヒドイよお、なにもあんなに胸を揉まなくつたつていいじゃない……」

「はは、災難だったねなのは……でも公務中に気を浮付かせたなのはも悪いよ、ねえ？」  
「ああ。……それにしても珍しいな高町。周りから“仕事の鬼”と称され、仕事の事に関してはいつも呆れる程真面目で隙の無いお前が公共の前面で立ち寝するなど、天変地異の前触れかと思つたぞ？」

動きやすさを重視した白い教導隊服を突き上げその豊満さを主張する自身の双丘に感じる熱の違和感に半泣きになりながら愚痴を洩らすのは。フェイトがそれに苦笑して不幸な目に遭った親友に同情するが不謹慎だったのは悪いと言つて隣を歩く自分の副官に同意を求めると、彼女の副官であるキリツとした双眸が凜々しい女騎士を彷彿とさせる印象の背が高い女性《八神シグナム》がそれに対する違和感を覚えてそう言つた。

ヴォルケンリッターの将であるシグナムが言うように普段のなのはの仕事に対する姿勢は仕事中毒ワーカホリックと言えるレベルで真剣な取り組みを見せており、本局の業務課が「いい加減彼女を休ませる方法はないのだろうか？」と、知人であるフェイト達に相談を持ち掛ける程なのはは社畜だ。故に彼女が仕事中に居眠りをしてしまうという事柄を異常に感じたのだ。彼女が所属する本局戦技教導隊の人間が聞いたらなら「明日はギャック砲の雨が降る」だとか「ス〇スチカが全部開いてハ〇ドリヒ卿が御降臨なされる」とか言つて大騒ぎになる事だろう。

「天変地異は酷いですよシグナムさん……ちよつとね……昔、任務で撃墜された時にわたしの命を救ってくれた男の子の事を思い出してたんだ。それでその時の事が夢に出てきて……」

「ああ」。雪の中に颯爽と現れてはアンノウンを瞬殺し、お姫様抱つこで病院に運ん

でくれて、ベッドの上で気付けば居なくなっていたっていう、なのはの初恋の人か。そりやあなのはが浮付いちやうのも仕方がないかもね。でもどっちにしても仕事の中の公私混同は良くないと思うよ」

「初こっ!? ち、違うよフエイトちゃん!! ただその……助けてくれたお礼も言えなかったからちよつと気になって気が緩んじやったって言うか、そのう……」

「はいはい、気になる彼の事が恋しくて今も探しているんでしよう♪」  
「だから違うってばあ〜!」

その美貌に悪戯な笑みを浮かべて揶揄う一番の親友がなんとも子憎たらしい。なのはが羞恥と焦りに顔を朱色に染めて隣を歩く親友の誤解を解こうと必死に弁明する姿はなんとも可愛らしく、今の彼女はまさしく十九という歳相応の少女そのものだ、とてもキヤリア十年の歴戦の魔導師には見えない……が、これでも彼女は数多の多次元世界の秩序と安寧の維持に務める司法組織のトップエースなのだ。

「お前ら、恋バナに浮かれるのもそれぐらいにしておけよ。アタシもあの時死に掛けたのはを救ってくれた奴には恩義を感じるぐらい感謝しているし、アタシだってできる事なら探し出して礼を言いたい。でも今は八年間も探して行方が分からない人間の事ばかりを気にして身が入らねーようじゃヒヨツ子共に示しが付かねーし、戦闘の最中に浮付いていたら致命的な隙ができる。アタシはもうお前が墜ちるのは耐えられ

ねーから、しっかりしてくれよ、なのは」

優秀でチカラを持った人間程相応の期待と責任が課せられるもので、彼女達エースと呼ばれる魔導師は他の局員達の規範、私情に気を取られて任務に支障をきたさせては他に面子が立たない。なのはの分隊の小さな副官である《八神ヴィータ》はその事を心から訴えるようになるのはに指摘する。

「……うん、それはわかっているよ。　気持ちは心にしまつて切り替えていく。　わたしはもう墜ちるつもりはないし、あの子達にはわたしと同じ目に遭つてもらいたくないから、ちゃんと教えていく。　仕事だつてもうさつきみたいな失敗は二度としないから、大丈夫だよヴィータちゃん」

「わかっているならいい、最近は特に油断できねーからな。　アタシらが追うロストロギア《レリック》を回収していく上での障害になる正体不明の《ガジェットドローン》はもちろん、近年は大人しかった《アーノルド決起団》の連中の動きが次元世界中で再び活発になってきているという情報もある。　ガジェット共はA アンチ・マギック・フィールド M Fの対策さえすればザコだが数が多くて厄介だし、決起団の奴らに至つては管理局黎明時代から管理局の次元世界に対する管理体制に反旗を翻して七十五年間も管理局にケンカを売り続けてきているねちっこい集団な上に構成員の一人一人が並の局員よりずっと強えし【質量兵器】まで使いやがる。　しかも幹部クラスに至つてはエースストライカー級ば

かりで、首領の「アーノルド」なんかは実力と所在が一切不明。噂じゃ奴は魔導師ランクで言うところのSSSSランクをオーバーしているって話だ……」

「三年前の緊急招集で決起団の幹部の一人と戦り合う機会があったのは皆覚えているか？ ……私を含めた此処に居る四人と主はやて、シャマルにザフィーラ、その他二十人ものエース級魔導師や騎士を投入して多くの犠牲を出しながらも捕らえるに至らず退却させるのが精一杯だったあの苦渋を舐めた戦いだ。私もさすがにあの時は死を覚悟したな……」

幼い顔に訝しい表情を作ってこれから先自分達の敵になるであろう計り知れない戦力の規模に浮かかない思いを抱いて悩み、過去にあった強敵との戦いの記憶を思い浮かべて痛い目にあつた事を思い出し遠い目をする分隊の副官二人。彼女らの呻きは六課の戦力が異常なレベルで充実しているからと言つて立ちほだかる強敵達との戦いは決して楽ではない事を痛感させる。これからの道は険しい事だろう……しかし——

「きつと大丈夫だよ、わたし達が揃えばどんな事件や戦いだつてきつと乗り越えて行ける！ ……そりゃあ三年前のあの戦いは相手の方が凄く強く悲慘な結果に終わったけど、あれからわたし達は厳しい訓練と実戦を重ねて更に強くなった。どんな相手が立ち塞がるうと今のわたし達が全力全開でぶつかつて行けば、誰が相手でもきつと打ち倒せる筈だよ。だからそんなに悩んだ顔しないで前向きに行こうよ♪」

我らが不屈のエース・オブ・エースは全力全開で降りかかる火の粉は払うと力強く豪語していた。どんなに壁が高くても頑丈だろうと砲の一撃で撃ち抜いて進む、そんななのはの意志と姿勢に誰もが心を打ち震わせて物事に立ち向かう勇気を与えられてきた。故に彼女の力強い言葉は「不安」という負の霧を吹き飛ばすのだ。

「そうだね、なのはの言う通りだよ。私達は強い、きつとみんなを護っていけるー!」  
「……へっ、そんな事は言われなくてもわかってんだよ! けど己惚れ過ぎんなよ? さつきも言ったが気を抜くと足下掬われるぞ!」

「フツ、騎士とした事がつい弱気を見せてしまったな……。問題無い、行く道が険しいのは寧ろ喜ばしい事だ。敵が強ければ強い程、腕が鳴るといふものだ!」

フエイト、ヴェータ、シグナムがなのはの言葉の強さに当てられて生じた不安を拭い去り沈みかけたった覇気を浮上させる。これを見ると高町なのはという存在は皆にとって本当に希望の星なのだという事が理解できるであろう。たった少しの言葉で周りに正の感情を奮起させる影響を与えているのだから。

「そうそう、その息だよ♪ それじゃあ三人共元気になったところで——機動六課始動初日のお仕事、張り切って行こーっ!」

きつと……きつと大丈夫。この六課に集った皆が一緒なら、どんな困難な道だつて……きつと……。

希望の未来に向かって管理局の戦乙女達は初仕事へと旅立つて行く。

蒼い空に青い海、小波きざなみの音と共にうみねこが鳴くこの雰囲気はなんでもなのはとてもや  
ての故郷に近い感じらしく、機動六課の拠点をこの場所にしようとしたのはそれが理  
由らしい。（移動の足となるヘリが出し入れし易いからというちゃんとした理由もある  
が……）

「あ、丁度帰って来た」

見渡す限り母なる海。

隊舎前の海岸線にて早速四人の教え子達を集めたのはは



手始めの基礎訓練を開始しており、四人の教え子達に隊舎の外周を走らせていた。

「あれ？ 二人だけですか？ 確か《F W》<sup>フオード</sup>は四人だった筈では……」

なのはの側に立つおっとりした雰囲気的眼鏡をかけた女性がランニングから戻って来たのが赤髪の少年——《エリオ・モンディアル》と桃色髪で大人しい印象の少女——《キャロル・ルシエ》の二人しかいない事に疑問を抱く、確か他に二人いた筈だと……それは教官であるなのにも思つたようだ。

「二人共、スバル達は？」

「あれ？ スバルさん達先に到着していませんですか？ 僕達より先行していた筈なんです……」

目の前に到着して乱れた息を整えるチビツ子達に他の教え子二人の行方を訊ねてみるとチビ達は自らの頭上に「？」マークを立てながら不可思議そうに首を傾げてエリオがわからないと返答する。件の二人は南方の地上部隊から六課に引き抜かれた為にチビツ子二人よりも体力があり、あつという間にチビツ子達を引き離して走って行ったようなのだが……不審に思っていると突然隊舎のエントランスの横に逸れた隙間にある薄暗くて狭い脇道から甲高い悲鳴が聴こえてきた。

「うわあああああ————っ!!」

「来ないでええええええ！ ボクはガリガリだからおいしくないよ——！ 食べるなら

こっちの肉付きのいいお姉ちゃんにしてください!! 特にこの十五歳とは思えない大きな胸の肉饅頭なんてジューシーで極上ですよ〜!!」

「ちよつ、ミク!? 人のオツパイ指さしてあたしに誘導しようとししないでよ、親友でしょ!」

「そう、ボクらは親友! だから友情に気を遣つて、ボクを助けてくださいねえええええつ!!」

「ああつ!? ズルいよそんなの————つ!!」

何事かと思いいこの場に居る一同は聞き覚えのある声で響く悲鳴がした脇道に視線を向ける。するとその脇道から短い青髪の少女とフワツとした翠髪をした少女が大慌てで飛び出して来て、その直ぐ後から飢えた野良犬の大群が後を追つて飛び出て来た光景を目の当たりにして、なのは達は目が点になった。

「ワンワンツ!!」

「バウバウツ!!」

「あああつ、ダメだ追いつかれる————つ!!」

「助けてなのはさ——ぐええつ!!」

頼りになる教官を目前にして背中から追手に跳び掛かれ、若い少女二人を下敷きに御犬様の山が積み上がっていく。ざつと二十匹は居るだろう。

「ハア、ハア……ちよつとミクうゝ、どこがショートカットなのさあ」

「ご、ごめんね。 気を遣つて最短の道を選択したつもりだったけど、野良犬の縄張りだったみたい……うん、やっぱりズルは駄目ですよね♪」

「勘弁してよ。 あゝ、酷い目にあつた……」

十秒後、なんとか最後のチカラを振り絞つて御犬様の山の中から這い出て生存を確かめ合う二人だったが、これで命が助かつたと思うのは早計である。 目の前には飢えた

野良犬より恐ろしい般若様が――

「ふうん、そうなんだ。 二人とも教官のわたしが指定したコースを走らないで不真面目にズルしたんだ」

「あ……」

気が付いた時にはもう遅い、般若様は大層おかんむりである。 退路は……無い。

「少し……頭を冷やそうか」

「Oh My God……」

なのはが受け持つ《スターズ分隊》の隊員《スバル・ナカジマ》と《ミクティーン・ベクターン》の頭上には昼前にも拘らず北斗七星の付近にある死の赤い星が輝いていた……。

般な若は様のO★H A★N A★S Iが済み、スバルとミクテイーヌが地グラスハイム獄より建築材にもならぬと戦力外通告を受けて帰還した後、早速初の実戦訓練が始まるのだった。

「陸戦用空間シミュレーター」、なのはの完全監修で作製されたこのプログラムの起動によつて海上に仮想の荒廃都市が具現する。

この場を訓練場と定め、記録チップが埋め込まれたデバイスを手に荒れ果てたビル郡の中をF Wの四人は逃げ回る八体のターゲットを追いかけまわして東奔西走していた。

「スバル！ そつちに行つたよ!!」

「まかせて！ うおおおおおつ！ リボルバー・シユートオオオオオオツ!!」

「きやあつ！」

「ああつ!? ゴメンツ!!」

「キャロ! 大丈夫?」

「だ、大丈夫。ちよつと掠つちやつただけだから」

「もう、フレンドリーファイア 誤射とか実戦だとシヤレにならないですよ? ちゃんと気を遣つて周りを

見て、しつかりしてくださいよスバル!」

「ホントにゴメンね! 次は気を付けるから……つてエリオ! キャロ! 下に四体

纏まつてる。チャンスだよ!!」

「本当だ。キャロ! ブーストお願い!」

「う、うんつ! 《我が乞うは疾風の翼。若き槍騎士に駆け抜けるチカラを!!》」

「うおおおおおおおつ!!!」

六課での初の実戦訓練に悪戦苦闘しながらも懸命にターゲツトを減らしてゆく教え子達を廃ビルの屋上で記録を取りながら、なのはは真剣に見守っている。

「新人達、なかなか苦労しているみたいですけど、みんな一生懸命ですね」

さつきから側に居る眼鏡を掛けた通信士兼メカニツクの女性《シヤリオ・フィノーニ（愛称：シヤーリー）》が訓練の様子を見兼ねて笑顔でなのはにそう言う。

「うん、ちよつと今は動きがぎこちなくて危なげないけれど、みんな良いものを持ってい

るよ。 どう育てようか迷っちゃうくらいにね」

「あの子達、強くなれそうですか？」

「それはみんなの頑張り次第だね。 教導官はあくまでも望む未来を目指す為のお手伝いだから……でも大丈夫、未来に向かって前に進む気概がある限り、わたしがきつとあの子達を立派な魔導師に育ててみせるよ」

腕を組み、キリツとした表情をして子を見守る親のような目で眼下の教え子達を見据えてなのは口許を綻ばせた。 その脳裏に過ぎるは、過去の失敗、教導官として魔法戦を教えていく上での意気込み、これから先に思い描く未来……。

——八年前のあの日……わたしは日頃の無茶が祟って墜とされ、死にそうになったところを氷のような眼をした男の子に助けられて今、此処に居る。 医師の人から「二度と魔法を使う事ができないかもしれない」と診断された時は辛くて悲しい思いを抱いてしまったけれど、もう一度空を飛ぶ為に凄く痛くて辛いリハビリを乗り越えて再び空を飛ぶ事ができた……他の人達にはわたしののように墜ちて辛い思いをしてほしくない。 少なくともわたしの目がある内はどんな相手が来ようと絶対に誰も墜とさせはしない。 みんなの未来はわたしが導いてみせる。

そして、それらを統合して想い抱いた彼女の渴望<sup>ねがい</sup>——

——辛い思い、理不尽な痛み、どうしようもない運命……わたしはそんなものが大嫌

いで、撃ち抜くチカラが欲しくて、戦うチカラを、同じ想いを抱く人達に伝えていく仕事を選んだ。この胸にあるチカラは、魔法のチカラは、理不尽な運命から皆を護り抜けるチカラだから……だから――

「だが悲しいかな、運命とは残酷なものだ。これより始まる物語は翼を持つ戦乙女達による英雄譚ではない」

その声が発せられた瞬間……世界は凍り付いた。

——……えっ!!?

今、世界は異常な現象に陥っていた。歪んだ願いを叶える願望器、世界を滅ぼす壊れた魔導書など魔導師という特異な存在であるが故に高町なのはは飽きる程今まで故郷の星では考えられないような異常と対峙し続けてきたのだが、この異常はその中でも群を抜いていた為にその眼は驚愕に見開かれていた。

——な……何、これ？ ……みんな、止まっ……て？

風に流されて蒼穹の空を流れ続けて行く筈の白い雲が一つの例外なくその場に完全に留まっていた。水面を揺蕩う小波が風景画のように固定され、海の上を漂ううみねこの鳴き声が途絶え、乙女の柔肌を撫でる生暖かな潮風も今は感じられなくなっている。

「っ!? シャーリーツ！ みんなっ!!」

ハッと隣を振り向くのは。日本人である事を疑われるような碧い瞳に映されたのはこうなる直前まで自分と談笑していた筈の女性が笑顔を面に固定したまま身体を彫刻のように硬直させている姿だった。ピクリとも動く気配が視られない。先程まで眼下の仮想コンクリートの上では魔法攻撃特有の轟音が新人達によつて撒き散らされていた筈なのだが、その轟音は今や消し飛び、そこから齎される静寂が異常に陥つた世界をより不気味に演出している。背にしていた隊舎から絶えなく聴こえてきて



いた若い活気も完全に途絶えており、各地上部隊に六課設立の説明をしに行く予定で親友二人を乗せて飛び立つ寸前だったヘリのプロペラの風切り音さえ消失していた。

まるで全てが氷り漬き、世界の全てが停止してしまったかのような……そう、これはまるで——

「——時よ止まれ、お前は美しい……なんて、口に出して言ってみるとこれはなかなか……フフツ、癖になりそうだ」

「っ!?!」

この異常が起きる直前に聴こえて来たのと同じ声……釣られて視線を前に向けると声の持ち主は其処に立っていたのだった。

——な、何この……人? 空に……立つ……て!?

人物の立っている場所が異常だった故に歴戦の英雄であるのはですらも表情を硬直させざるを得なかった……否、それはその存在そのものの奇異さ加減から齎されたものか……。

なのはが足を置く廃ビルの屋上……彼女が向いている切り立つ奈落への縁の先で一人の黒髪の女性が宙に立ち、この世界で唯一時が動いている存在であるのはを愉悦に酔った漆黒の瞳で見つめていた。背はシグナム並に高く、女性特有の丸みのあるボディラインも美しく整っていて一種の芸術作品と言っても誰も疑わないだろう。胸

の豊満な双丘の輪郭をより美しく扇情的に強調する白のタンクトップ、すらりと伸びる長い脚の内右脚の肌のみを外目に曝し柔らかな曲線を描くヒップを魅せるダメージジーンズを身に付け、長い黒髪を白いリボンでポニーテールに束ね、厳格そうな顔立ちをしていながらも柔和な微笑みを見せている。

その一挙手一投足、目に映せば異性どころか同性すらもその場に居る者全てを惹き寄せる程美しい……だがそれ故にその寒気を催す程の奇異で不可解な雰囲気恐ろしく際立っていた。

——人？ ……この人、本当に人なの？ というか……其処に居るの？

なのははその魅力的で美しい女性の容姿を見ても何も感じていなかった。存在感が薄いどころの話ではない、存在感を全く感じないのだ。その漆黒の宇宙のような瞳で向ける視線は「不毛」と表現すればいいのだろうか？ 冷たくも決して冷徹では無く、言ってみれば取るに足らない上に既に知り過ぎている故に物事に興味を無くし、それを愉悦という仮面で下手に覆い隠し、それを上手く隠そうと努力すらしめない。

「はあ、はあ……あ……貴女は……はあ、はあ……いったい……？」

存在自体が意味不明でその感情すら理解不能。なのはは底知れぬ不可解さに精神を侵され、気付けば吐き気を催していた。今、時が氷り付いたこの世界の中で動けるのはなのはと目の前に突然現れた女性の二人のみ。何故この二人だけが動けて他の

生命が全て停止しているのかは不明だが、少なくともなのは時を停止させるレアスキルなど持つてはいない、故にこの異常現象を起こしたのは目の前の宙に立つ謎の女性であるという事を疑うのが道理である。

謎の女性はなののはの問いを聞いても奇異で柔らかな微笑みを崩さない。

「フッフ、そう警戒しなくてもいい。少なくとも私は君に危害を加えにやつて来たわけではない」

「それを信用しろと？ 馬鹿な事を言わないでください」

時を止めてまで接触を図つて来た異常な存在が怪しくない訳がない。なののはほんな人間とでも軽く打ち解ける開けた性格をしているが、得体の知れない存在の言葉を信用する程頭の中がお花畑という訳ではないのだ。

「そうか？ 私のような卑小な存在に対して警戒など無意味だと思ふのだが……まあ、いいだろう。長々と話すと子供を退屈させてしまうやもしれん。手短かに開演を告げるとするか……」

謎の女性の謎の発言になのはは困惑を禁じ得ない。意味不明だ。 開演を告げるとはどういう事なのか？ 首に掛けてある朱い珠——なののはの愛機《レイジングハート》を手に取り如何なる時でも起動する事ができるように警戒を強める。

そして、謎の女性がまるでオーケストラの指揮者が演奏の開始を告げるように両手を

振るい上げた瞬間……背筋に底知れぬ悪寒が走りだした。

「それでは皆の衆、この《トリスメギストス》の歌劇をご覧あれ！ 私にとって何分初めての試みなもので、少々ありきたりな筋書きになってしまいうやもしれんが、役者は悪くない。至高……とまではいれないが、皆優秀でなかなか魅力的だ。故におもしろくなると思うぞ？ では――

——これより、《総オオイナル黎明》への恐怖劇を開演するでしょう」

謎の女性——トリスメギストスが開演する演目を告げ終えると同時に氷り付いていた時が解け。瞬間遙か海の向こう側の空に天を突き破る程の超極大な光の柱が立

ち昇り——剣となつて六課の隊舎に振り下ろされたのだった。

魔法に希望ゆめを乗せ天そらを翔ける戦乙女達の英雄リリカル・サーガ譚は……この日、この時をもって、壊された……。

## 誓いを砕く無慈悲の爆炎

始まりのその日……古代遺物管理部機動六課は墜とされた。

「ぎやあああああああ————っ!!」

天から振り下ろされた極大の光の剣が空を引き裂き海を割る……圧倒的規模で齎された断裂。それはまるで世界そのものが縦に両断されたかのような、衝撃的で圧倒的で非現実的な現象であった。

「く……何が——っ!!?」

隣に立っているシャーリーを咄嗟に抱え、経った今直ぐ横を通り過ぎた魔力刃による暴風のような衝撃波に吹き飛ばされたのはは宙を錐揉みしながらレイジングハートセイブトアツを起動して飛行魔法を発動。白いバリアジャケットを纏った身体を華麗に正常に戻して空中に制止し何が起きたのかと周囲を見回して確認すると、彼女の眼に飛び込んで来たのは縦一直線に両断された世界だった。

「あ……ああっ!!」

本当に世界が真つ二つになった訳では無いが、それはまさに終末カタストロフイが訪れたかのような惨状で、目を疑うあまりに絶句の声を漏らしてしまう程、凄烈で悲惨な光景であった

……シミュレーターで海の上に出していた仮想荒廃都市の彼方から隊舎の先までに掛けて水面地表が大きく割れてしまっており、海は神話のモーゼですら脱帽するであろうの規模で左右の果てまで海水が押し遣られていて、その水底が見渡せる限り全面に浮上している。眼下の仮想荒廃都市には底なしの断崖絶壁を思わせるような広大な地割れが水平線の向こうから中央に走って来ており、その線上にあった森羅万象の全てが例外無く消滅してしまっていた、まるでスポンジケーキを二つに切り分けたかのように……そして何よりも酷い有り様なのが――

「隊舎が……崩壊……！」

その地割れが走る先で中央から無惨にも両断され、ショートケーキをフォークで崩したかのように半分が崩落してしまっていて無惨な姿を曝す自分達の隊舎だった建物だろう。なのはは口を両掌で押さえて悲痛の声を漏らす。辛うじて崩落を免れたもう半分ですら、もはや原型が判らない程半壊して倒壊するのも時間の問題だという事が解る。

更には地獄から湧き出て来たような炎が廃墟と化した隊舎全体を包み込んでいてそれが蒼かった空を灼熱色に塗りつぶし、炎の中からは灼熱地獄で焙られる屍人のような甲高い悲鳴が聴こえて来る。それは紛れもなく隊舎内で仕事に励んでいたのである。う機動六課のスタッフ達の悲鳴だ。彼等が何の前触れも無く隊舎が崩壊するという

不条理な出来事が発生した事により戸惑い、炎上する炎に包囲されて恐怖に晒されているのは間違いない。

「なのはあつー！」

「高町、無事か!？」

「なのはさん、よかつたあ……」

「ヴィータちゃん、シグナムさん、FWのみんなも!」

早く救出に向かわないと焦燥の汗を浮かべるなのはの許に近くの高台で訓練を見物していたヴィータとシグナムがバリアジャケットを纏って飛来して来る。その両脇には仮想荒廃都市の上で訓練に精を出していた筈のFW達が全員揃って抱えられており、どうやらなのはが周囲の状況を確認している間に突然の出来事と衝撃に身を震わせて怯え動けなくなっていたFW達を副隊長二人が救出したのだろう。都市の中央から運よく離れた場所に居た為に四人全員が無事であったのは僥倖だったと言える。

合流した彼女達は魔力刃が振り下ろされた衝撃を受けた時に気絶していたシャリーを近場の建物に避難させた後、はやてやフェイト等六課の仲間達の安否を確かめるべく半壊し無慈悲な炎に包まれている隊舎に急行し、燃え上がる炎を掻き分けて崩れかけのエントランスに足を踏み入れた。

「あ……」



「酷い……」

中はまさに煉獄だった。改装した壁面天井は見るも無残に亀裂が走り無数の孔が至る所に開通していて、そのうちの右半分はほぼ崩壊してしまっていて朱く染まった空が無情にも嘲笑い見下す様が崩落した天井の吹き抜けからよく見える。燃え広がる業火の紅が視界の周囲を埋め尽くし充満する熱を帯びた黒い煙が眼と吭を焼き、色取り取りの配色に彩られていた内装が今は黒一色に染まっている。崩れ落ちた壁面天井の瓦礫が炎に焼かれて石炭に変わり果て、至る所に散乱している様は見る者に悲痛な思いを抱かせるであろう。建物の地盤を組んでいた鉄骨が中央の床に描かれた六課のエンブレムに突き刺さり孔を穿っている光景は目の当たりにした者達を哀毀骨立あいきこつりつとさせる。

「っ!!」

その鉄骨に突き刺さりエンブレムに縫い付けられている肉の塊を目にしてなのは達には戦慄の驚愕を露わにして眼を見開いていた。人間だ……六課の職員だったであろう人間が物言わぬ亡骸と成り果て、胸に鉄骨を貫通させて、その孔から生暖かい赤の液体が流れ出ている。

「うっ、うおえっ!」

「キャロ、気をしっか<sub>r</sub>——うぶっ!」

「エリオも無理はしなくていい、幼いお前達にはまだ早い」

見るも無残な姿を曝す人の死骸を目の当たりにして幼いキヤロは耐え切れずに胃の中の汚物を吐き出してしまい、咄嗟に彼女の肩を支えて正気呼び掛けようとしたエリオもまた幼いが故に吐瀉しかける。そんな二人の後ろに立っていたシグナムが氣を利かせて二人の視界に死骸が映らないように前に出てそう言い落ち着ける。

騎士として甘い優しさかもしれないが確かにそれは十歳の子供が見ていいものではない。燃え上がる業火で皮膚が焼け爛れ、心臓を貫かれて絶命したであろうその者の眼球は絶望の白一色に剥かれていて今にもゾンビとなって襲い掛かって来そうな錯覚を起こさせる程氣味が悪い死に姿なのだから。

——どうして……どうしてこんな……事に……。

六課の人員から死者が出た事実にはシヨックを受けるなのは達……そこへ——

「うおっ!! ここにも火が……ってアレ? あそこに居る人等って……」

「なのは! エリオ! キヤロツ!」

「よかった……ヴィータにシグナム達もみんな無事のようなやな!」

「おー、新人共も雁首揃えて、全員怪我も無いようだなによりだぜ!」

「フェイトちゃん!」

「はやて!」

「ヴァイス陸曹も！」

奥の通路から炎を掻き分けて現れた三人……それははやとフェイトと六課のヘリパイロットである青年《ヴァイス・グランセニック》であった。

「三人共、無事だったんだね！ でもどうして此処に？」

「うん、さつきまで地上部隊の上層部に部隊設立の説明をしに行くのにヴァイスにヘリを出してもらって中央管理局に向かおうとしていたんだけど、飛び立とうとした時に突然SSSランクオーバーのとんでもない魔力反応が海の向こう側から検知されたから驚いてヘリから飛び出したんだ」

「それで海の向こう側を見てみればデツカイ魔力の塔が空高く伸びてこっちに倒れて来たんすよ！ フェイト隊長と八神部隊長が全力で結界を張ってくれたおかげで死にはしませんでしたが、ヤバ過ぎる衝撃で三人共中庭まで吹っ飛ばされてしまつて……気が付いたら六課がこの惨状になつてたんす」

「隊舎の中に取り残されたみんなを救出せなアカンと思つた私らは迅速に行動に移つたんや。その途中でシャマルにザフィーラ、リインとも合流できて今は手分けして生き残っている人達の救出に当たつとるさかい。辛いかもせえへんけどみんなも手伝つてーな。一人でも多くの命を助ける為に」

駆け寄つて合流し、フェイト達がリレー式になのはに問われた事の成り行きと現在状

況を説明。今こうしている間にもこの炎上中で崩壊寸前の隊舎の中で助けを求めている六課の人員達を救助する為には一刻の猶予も無く、はやてはなのは達にも救助に動いてもらうようお願い出る。

「もちろんだよはやてちゃん！ 行こう、絶対にみんなを助けるんだ!!」

当然それを断る理由などなく、なのはの返事一つでこの場に居る全員が行動を開始した。

フェイト、シグナム、エリオ、キャロ等《ライトニング分隊》は上の階に。

スバル、ミクティーン、ヴァイスは一階を。

なのは、ヴィータ、はやての三人は火災の広がりが激しい隊舎外周をそれぞれ見回り、救助対象を発見次第適切な対処をする事となった。

「こっちはです！ 慌てず速やかに避難してください!!」

全方位を覆う防御結界魔法を展開して崩れ落ちて来る天井の破片と燃え広がる炎の熱と煙から救助対象を護りつつ彼等を避難経路に誘導していくのは。火災地点から抜け出して安全な外に逃がすと次の救助対象を捜索しにそそくさと炎の中へとトンボ返りして行き、丁度他の救助対象の避難誘導を終えたはやて達と合流する。

「こっちは順調だよ、そっちはどう?」

「たった今三人程外に避難させたところや。せやけど一人が右脚を瓦礫に潰されたら

しくて今はシヤマルが看とる。だからそつちは心配あらへんけど……」  
「……何かあつたの？」

お互い救助活動の現在の状況を報告し合うが、はやてはなんだか辛そうに俯いている。気兼ねたなのは自分が離れている間に何かあつたのかと訊ねると、口が重いはやてに代わつてヴィータがそれを説明しだす。

「実は完全にブツ壊れてやがつた第二倉庫に通りがかつた時、その倉庫の瓦礫に潰されて死んでた奴を十人程見つけちまつたんだ……」

「あ……」

迂闊な失言をしてしまったと口を押さえるなのは。はやての内情を察してやれなかつた自分を恥じる。

——誰一人も犠牲を出さないって誓つてたんだもんね。それが部隊発足初日で何人も……。

ギリツと奥歯を軋らせて悔しさを露わにする。恐らくはこの一件で死んだ六課の人員はここまで彼女達が救助活動の際に発見できた少数の死骸だけではない。隊舎を破壊した極大の魔力刃、それが振り下ろされた時に不幸にもその軌道上に居た人間達は皆超高濃度の魔力の奔流に飲み込まれて跡形も無く蒸発してしまつたと視て間違いないだろう。部隊員達の命と責任を背負っているはやての心に入った傷の深さは計

り知れない。

「何でや……何でこないな事になってもうたんや？」

「はやて……」

「あの魔力刃はロストロギアによるものやあらへん、間違ひなく《集束魔法》か何かを使つた人為的な魔法攻撃やつた……誰や？ 誰がやりおつた、許さへんっ!!」

腹の底から沸き上がる怒りに打ち震え、はやては顔を上げ、自分達の居場所を破壊し部隊に懸ける誓いに泥をブツ掛けた犯人を絶対に許さないと叫び激しく憤慨する。

隊舎を破壊した犯人が居ると聴いた時、なのははハッ！ とこの惨事が起こる直前に自分に接触を凶つてきていた謎の美女——トリスメギストスの存在が思い当たつた。

———そういえばあの女の、魔力刃が隊舎に落ちて来た時には何時の間にかいなくなつていた……あの人はいったい何者だつたの？ ……【オオ総イナル黎明】？ 【グランギニョル恐怖劇を

開演する】？ いったいどういう意味なの？ ……もしかしてあの人が……。

「うう……八神……部隊……長……」

「「っ？」」

緊迫した空気の中で突如として木霊した男らしき人の呻き声……なのは達三人はその声を耳に拾つて我に返り、声が聴こえて来た方を向くと其処には眼鏡を掛けた生真面目そうな青年が瓦礫の下敷きになつて額から血を流し意識を朦朧とさせているのが見

えた。彼は——

「グリフィス君!!」

機動六課副指令及び部隊長補佐官の《グリフィス・ロウラン》准陸尉はその聡明な顔付きを流血で赤く染め、背中から下半身に至るまで崩れ落ちた天井の大欠片一つが丸ごと覆い被さられるという非常に危険な状態で目測20m先に倒れ伏している。意識を失いかけているのは貧血症状……恐らく流血しているのは外から目に映る額の負傷だけではなく、瓦礫に押し潰されている身体の彼方あちこち此方こちが……このまま放置しておけば彼はいずれ出血多量でチカラ尽きてしまうのは目に見えている。

「酷い怪我……」

「あのままだとヤバイ、とつとと救出すんぞ!」

「当然や! グリフィス君、其処でジツとしとるんやで! 今すぐに助けてよ——」

三人が死に掛けのグリフィスを救出しに駆け寄ろうとしたその刹那だった。突然  
 明後日の方角から鳴り響いた『シユ・パア・アンツ!』という何かの発射音……唐突なそれ  
 に気を取られたなのは達は三人共その方角に目を向け、駆け出しかけていた脚を止める  
 ……止めてしまったのだ。

「……………え?」

振り向いた瞬間【それ】は彼女達の頭上を通り越す。

【それ】の通過を彼女達が全員見逃したこの時をもってグリフィス・ロウラン准陸尉の命  
 運は確定した。安定翼を折り畳んだ棒を尻に付けた直径15cm程の成型炸薬弾頭。

目で追える速度で飛来したそれは、着弾と同時に戦車の装甲すらをも溶かす高熱量を  
 炸裂させる管理局が使用所持を禁じた質量兵器——パンツァーファウスト対戦車擲弾!

「「っ!?!」 きゃあああああーっ!?!」

視線を戻した先で炸裂する閃光と爆音。そして摂氏数千度にも及ぶ爆炎……なの  
 は達は眼を瞬間的閃光で焼かれ、耐え切れず腕で視界を覆って甲高い悲鳴を上げた。



「う……あ……ああつ?!」

そして乙女の柔肌を炙る熱を浴び、血と臓物の焼ける臭いが鼻に入るのを感じ取って彼女達は視界を覆う腕をゆっくりと下げ、飛び込んで来た光景は眼前一帯を焼き尽くす無慈悲な獄炎と……宙に放物線を描いてはやての目の前にドサリと落ちる、黒く焼け焦げた男性の腕らしき肉片であつた……。

「グリ……フィス……君……」

「そ……そんな……」

その肉片が六課の副長であるグリフィスの身体を構成していた一部だと悟ってしまった瞬間、彼女達三人共途方もない喪失感に苛まれ、なのはとヴィータは膝から崩れ落ちて呆然と天を仰いだ。

理不尽で残酷な現実到底知れぬ深海の淵に沈んで行くような悲しみの痕が彼女達の心に深々と刻まれていく。大切な人達は絶対に誰も傷付けさせない。誰一人欠ける事なく部隊を設立した目的を成し遂げ全員無事に試験運用期間を終える日を笑顔で迎えてみせるというその誓いは、部隊始動から経つたの数刻で実に呆気なく壊されてしまったのだつた。

「嘘や……こんなん……絶対……嘘やああああああああああああああつ!!!」

無惨に変わり果てた自分の副官の断片を見下ろしてただ一人現実を理解できずに立

ち尽くし硬直していたはやてが悲しみに耐えきれず顔を歪めて狂い泣き叫び、血と炎で赤く染まった空に響き渡る。グリフィス・ロウラン准陸尉は死んだ……その残酷な現実を前に戦乙女達はただただ悲しみに涙を流すしかできなかつた……彼の命を奪った“滅びの柴竜の戦奴達”がそんな自分達を高見から睥睨していたとしても――

「――喧しい……耳障りだ！」

「!!?!」

仲間の死の悲劇に打ち拉がれ心を抉るような痛ましい空気が流れる中、突如として発せられた厳かな男の怒声が空気を引き裂き紅蓮の炎に包まれる半壊した隊舎中に轟く。間も無くはやての総合魔力量をも凌駕する膨大な魔力が付近でうねりを上げ、同時に戦略破壊級の圧倒的爆熱が天地を揺るがす轟音と共に炸裂した……。

同時刻、機動六課の隊舎があるミッドチルダ中央区南駐屯地A73区画より凡そ10km離れた距離にある港街の湾岸エリア――

「――奴等がミッドに？」

石造りの海岸線付近で宙に投影された空間モニター……その前に立っている艶のある長い黒髪が印象的な人物が、そこに映る筋骨隆々とした大柄な男性が齎した情報を聞き訝し気にそう聞き返している。

『ああ、今さっきな。早速ミッドの管理局の施設を強襲してんぞ。今お前等が居る場所からざつと十キロぐらいい西に行ったところだな』

「中央区の海岸付近か……：……：……：そういえば確かあの場所は今日……」

『ついさつき特別捜査官の八神二佐をトップとする一年限りの試験稼働部隊が発足した。なんでも名の有る【海】のエースと将来有望株と期待されている若手を集めて【地上】に持ち上げられた精鋭部隊らしい』

「あの夜天の……」

『そうだ。ウチ等みたいな訳アリの集まりでもねえのに部隊保有制限大丈夫か？　つ

て言いたくなるくらいに戦力が集められているぜ……過去に「あのゴミ処理部隊」に居た時のお前が長期任務で極秘護衛対象にしていた嬢ちゃんも居るみたいだしな」

「っ!？」

左の眼尻が一瞬ピクツと吊り上がる。それが内心の驚愕を意味する事を瞬時に看破した大柄な男はその通信相手を押揃うかのように口許をニヤけさせる。

『へっ、気になったみたいだなあ?』

「……」

それに対する反応は無言の半目。　「下らない事言つてないで早く本題に入れ」という白けた訴えである。

『……コホンツ！　まあ、どちらにしろ奴等が現れたとなるとウチが動くしかねえ。

海のエースが束になってようが《奴等》の前線部隊の一つを丸ごと相手にするには分が悪いからな……行けるか?』

「なんだつまらねえ」と大柄の男がニヤけ顔を真剣なものに変えるとそう問いてくる。返答は口に出して答えるまでもない。コクリと一回頷くと大柄の男はそう来なきやなという獐猛な笑みを浮かべた。

『へっ、まあ嫌と言つても却下だけだな。やる気が有つてなによりだ……よし、なら行つて来い！　任務内容は「襲撃を受けた部隊の救援と襲撃者共の鎮圧・確保、最低で

も撃退」だ！《零式凍結機関》の解除も許可してやる。全力全開でやってこい！ 健

闘を祈るぜ」

「了解、部隊長」

淡々としながら意志の籠った口調で任務内容を了承し、空間モニターを閉じて通信を切ると黒コートの裾を翻して海岸線から踵を返す。歩く先でその者を迎えたのは、

圧倒的異彩を放つ五人の若き男女——

「みんな、悪いが休日は終わりで。急を要する任務が入った、至急武装を整えて現地向かうぞ！」

「こりやまた急じゃねえか？ あの連中、遂にミッドにまで進行して来たみてーだな、おもしれえ」

「へへっ、丁度新しい戦技を試したかったところだったんだ。齒応えのある相手だったらいんだけどな♪」

「ちよ、ちよつと、これから任務に行くんだからもっと緊張感を持ちなさいよ！」

「確かにそうだね。だけど肩にチカラを入れすぎると効率を下げてしまうから減り張りは大事に」

「はははっ、まあ心配は要らないさ！ アタシ達《シルバーガスト》小隊が全員揃えば怖いものなし！ 例え翼が無くてもどこまでだって飛んで行ける！ そうだろ？」

「……ふふっ」

和気藹々とふざけているように見えてやる気十分な声を聴き、彼等の中央をすり抜ける様に僅かな微笑を漏らして彼等の気概に応えてみせる。せつかくの休日を台無しにしてしまう事への遺憾は無用だったようだ。振り向く彼等を背に任務開始を告げる号令を発する。

「これより、敵襲を受けた古代遺物管理部機動六課の救援に向かう」

その眼に果てしない意志を宿して――

「特務遊撃支援部隊《ロストウイング》、シルバーガスト小隊――状況開始っ!!」

「……了解っ!!」

任務開始を表明すると同時に地を蹴り、襲撃の現場に向けて雷鳴の如く疾走。古風溢れる石造りの建物を踏み台に宙へと舞うと、胸に左手を押し当てて秘めたチカラを解放する。

「《零式凍結機関》解放――」

瞬間、この蒼い空に黎明が顕現した…… // 翼を失った厄介者の戦士達”と”天そらを翔ける叙情的な戦乙女達”の運命の邂逅の時は――近い。



「ぜえ、ぜえ……か、掠っただけで……はあ、はあ……わ、わたしが張った結界が……  
ぜえ、ぜえ……あと少しで破られそうに……!!」

「嘘やろ、あのなのはちゃん防御魔法が……」

「い、いったい何が……何が起きたんだよ？」

紅蓮が完全に通り返り過ぎて行き、なのはが塹壕の上に被せて展開していた桜色の魔法結界を三人で全体的に目視で確認するとそのドームは満遍なく罅だらけになっていた。なのはが展開する防御結界魔法の堅牢さは管理局全体の魔導師随一の折り紙付きだ、それが数秒何かが掠って行っただけでこうも易々と破れかけるとはいったいどういう冗談なのだろうかとはやてが疑いたくなるのも無理は無いと言える……だが驚愕はそれだけに止まらない。肩で息をするなのはが結界を解き、ヴィータが恐る恐る塹壕から頭を覗かせて地上の周囲を見回すと、そこにはあまりにも悲惨過ぎる景色が広がっていたのだった。

「何の……何の冗談だよ、これはっ!!?」

子供の癩癩にも近いヴィータの悲痛の怒号が変わり果てた殺風景に虚しく響き渡る。隊舎が……輝けるエース達と希望の未来へと羽ばたいて行くストライカーの卵達の帰る場所となる筈だった六課の隊舎が、ただの焼け野原と化している。

その奥先に続く区画もだ。海側から見て数秒前まで隊舎が建っていた場の先の地



平線の彼方まで放射状に建物が消し炭と成り果てていて、空から射す太陽の光が遮られる事無く何も無くなった荒野を無惨に照らし出していた。

「ひっ!？」

「ああつ……そんな……!」

ヴィータの後に続いて地上に上がったのはとはやてもまた、辺り一面の焼け野原を見て悲痛の声を上げていた。なのは、はやて、フェイトの三人が同時に空から集束魔法を地上に撃ち込みでもしない限りこんな悲惨な景色にはならないだろう。

——……そうだ、他のみんなは無事? フェイトちゃんやスバル達は何処に居るの!!? 悲壮感に暮れるのはハッ! とそう思い至り、慌てて再度周囲を見回した。すると彼方此方の地面が盛り上がり出し、穴が開いてそこから人の陰が次々と這い出て来る。

「ゲホッ! ゲホッ! ……エリオ、キャロ、大丈夫?」

「は……はい、なんとか」

「フェイトさんが咄嗟に造ってくれた壕のおかげで大丈夫です! そ、それより——」

「な……何なんだこの有り様は!! 主はやて、ヴィータや他の皆は何処につ!!?」

フェイト、エリオ、キャロ、シグナム等ライトニング分隊の面々が無事な姿を現すのを皮切りにスバル、ミクティーン、ヴァイス、そしてヴォルケンリッターの参謀兼六課

の主任医務官《八神シャマル》と盾の守護獣である大型の狼《ザファイラ》、八神家の末っ子である融合機《リインフォースⅡ》と別行動で人命救助に当たっていた仲間達が大ピンを回避していたようだ。

「フェイトちゃん！ みんなあつ！！」

「っ!? なのはー！」

仲間達の無事の姿を視認し、なのは達三人は歓喜の声をあげて仲間達の許へと駆けて近寄る。

「なのはさん！ よかった、無事でよかったですよお！ うわあああんっ！！」

「スバル、憧れのなのはさんが無事だったのが嬉しいのは理解できますが、引っ付いてバリアジャケットに涙と鼻水を擦り付けるのは流石にどうかと思いますよ？ ほら、上司には気を遣わないと」

「あはは……二人共、無事で本当によかったよ」

「主はやて、御無事でなによりです。隊舎は無くなっちゃいましたが、私は——」

「ええんや、みんなが生きていてくれたんならそれでええ……ホンマ……ホンマに生きていてくれてよかった。家族のみんなまでいなくなったら、グスツ、私は……私は……ううっ」



けた。

「ほお……」

「ハハッ」

そこに立つ、又は宙に浮く人間の集団を目の当たりにし、なのは達は全員眼を見開いて絶句した。彼等は何だ？ 様々な形状をしたデバイスや質量兵器で武装された紫色の軍服に身を纏った中隊規模（約二百人）の集団。血臭と硝煙の臭いを蔓延させ大蛇が蛙を睨むような悍ましい重圧は大昔の戦場をも生き抜いてきたヴォルケンリッター達ですら過呼吸に陥らせてしまう。矢面に立つ部隊の隊長らしき長身の男性の右隣で銀髪褐色肌の男がなのは達を値踏みするように見据え、にこやか気の声音を発して狂喜に吊り上がった口端から犬歯を覗かせる様はまさに飢えた野獣である。隊長らしき男を挟んだ逆側でチェーンソーアサルトライフルの銃床を地に着けて立つ十歳前後の幼い少年が見せる純粹な無邪気な笑みもこの場においては小鬼の哄笑のように狂気じみでいて、いかに屈強な精神を持つ者でもその狂気に触れば背筋を凍らせてしまう事だろう。

「……」

「あ……貴方達は、一体何者なのっ!?!」

その尋常ならざる覇気を放つ全員が規格外。特に隊長らしき長身の男性が放出す

る威圧感はその誰よりも重厚で、左手に持つビーフジャーキーを銜える様は煙草を吸うように落ち着き払っていて敵めしい印象を感じさせる。頭の上半分を覆う包帯の隙間から覗く鷹のように朱い眼光は管理局が誇る不屈のエースですらも畏怖させ、発した声に戸惑いを雜じらせる。

察するにこの者達は何処かの軍に所属する部隊だろうが、彼等が腕に巻いている腕章に描かれている「破壊の柴竜のエンブレム」……なのは達全員がそれに見覚えがあった。

故に得体が知れない連中だ。無論、六課が何者かの奇襲を受けて壊滅し、その直後に堂々と姿を現した時点で――

「アンタら……か?……アンタらが、やったんかつ!!」

この襲撃に無関係である訳が無い事なのは確実だ。はやてが怒りの震えで恐怖の震えを上書きし、その怒りを声に乗せて怒号を上げるように謎の軍団に吼えて詰問する。対し敵の隊長と思われる包帯の男が返したのは蔑みの目線であった。

「激情のままに吼えるか……ふんっ、劣等が。部隊長としての器が知れるな」

「なっ!? なんやと『ブチッ!』」

「全員動くな! 蟻一匹逃がさん!!」

続くはやての反発をビーフジャーキーを噛み千切る音で遮り、包帯の男は大空の彼方



なのは達は身構えるのが精一杯であった。全身から汗が流れ出てバリアジャケットの着が恥部に張り付く。気色悪いその感触を気にしてヴォルカーン達から気を逸らせば彼等に一瞬でやられてしまうと、エース級の実力者であるが故に彼我の実力差を感じとって下手に動けないのである。

「——」

「冗談……キツイ……ですよ……」

未熟なF W達に至っては地に伏せて既に気を失ってしまっている。辛うじてミクティー又は意識を保っていたが、その顔色は青く染まっており、戦闘どころかまともに動くことすらできない状態だ。今は彼女達は戦力にならない。

「くっ……」

グリフィス等六課の仲間達を亡き者にした仇がすぐ目の前にいるというのに怒りのまま不用意に仕掛ければ返り討ち……そんなもどかしい状態にはやては歯痒い思いを抱いて呻き、眉を顰めて敵が居る高台を睨みつける。ヴォルケンリッター達も同様の姿勢だ。フェイトとヴァイスは倒れ伏したF W達を心配してなんとか彼女達を助け起こそうと考えているようだが、敵から気を逸らす余裕は無く、はやて達と同じように動けずにいた。

敵の戦力が未知数であるが故の膠着状態。そんな管理局のエース達の体たらくを

見兼ねてヴォルカーンは嘆息するように訝しむ。

「どうした小娘共。私は参れと言った筈だが……まさかこの程度の気当たりで怖気づいたというわけでもあるまい」

「「「「「……」」」」」

「フツ、成程な。今まで私が見てきた管理局のエースと呼ばれる輩は皆自信過剰で蒙昧不遜の愚者ばかりだったが、少しは格の違いを見る目がある者は居たようだな……いいだろう、貴様等が来ないのならばこちらから行かせてもらおうとしよう」

——来るっ！

なのは達はヴォルカーンの圧力を振り払ってそれぞれのデバイスを構え、迎撃に備えて気を引き締める。敵衆が最初にどう出て来るのかと神妙な面持ちで身構えていると、ヴォルカーンが一瞬ニヤリと表情を歪め、他とは別格の雰囲気醸し出している自分の両隣に立つ部下に淡々と命を下した。

「オルランド、イスカンブルグ——殺れ！」

「了解！」  
ヤヴォール

隊長から命を受けた猫目の少年と銀髪褐色肌の男が受領の返事をすると同時に地を蹴る。その音が戦闘開始の鐘となり、六課の部隊長であるはやてが臨戦態勢でなのは達に鼓舞を入れようとした。



「みんな、油断したらアカン！ 来よるd——」

……しかし、その刹那——

「——がっ!!?」

「——がはあっ!」

「……え?」

後ろの仲間達に振り向いた瞬間、はやては時の流れがスローモーション撮影のように遅延する感覚に陥った……いったい何故、何故シヤマルが猫目の少年に得物の前面に付属したチェーンソーで背中から袈裟斬りに斬られ、ヴァイスの鳩尾に銀髪褐色肌の男のメリケンサック型デバイスが嵌められた拳が突き刺さっているんだ? ……非常なる刹那の事象に現実を疑うが、彼女の感覚にして三秒後に時の流れが元通りに戻る事によつてそれが現実であるという事を認識させられるのだった。

「ツツツ!! シヤマルツ!! ヴァイス君——っ!!」

「嫌アア————ツツ!!」

大きく背中に付いた斜めの傷から血飛沫を噴出させて両膝を地に着きそのまま虚ろな眼をして倒れるはやての湖の騎士。「オラアツ!」という敵の裂帛と共に、くの字“に全身を曲げてミサイルのように吹っ飛び、僅かに石炭となつて残つていた建物の残骸に背中から追突し、衝撃で灰塵と化した残骸に埋もれて動かなくなる六課のヘリパイ

ロツト……同時に上がったはやとリインの悲鳴を余所になのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、ザフィーラの四人と一匹は仲間二人がやられたシヨックを受けると同時にコンマの一瞬で接近して初撃を加えた敵二人を前に衝撃的な驚愕を覚えていた。

——うそつ、あの高台から80mは離れているのにこの一瞬で!?

——私より全然……速いっ!!

——何だ……コイツ等っ!?!

——み、視えなかつた。この烈火の将の眼にも……!!

——有り得ぬ……この者等、誠に人かつ!?

衝撃的な事態に時が停滞したかような錯覚を覚える五人。彼女達が囲む中央で二人の獣がニヤリと牙を見せると彼等を中心突風のような衝撃波が広がり、戦乙女達の頭髮とバリアジャケットを激しくはためかした。

——音が後から来た!? 音破衝ソニックブームが起きたって事は、あの二人のスピードは音速を軽く超えている!

過去に音速を超えた速力を出した魔導師は彼女達が知っている限りでは存在しない。管理局最速の魔導師であるフェイトですら、最大速度で音速に至る事はできても音速を超えることは未だにできていない。故に超音速の電光石火の如く一瞬にして迫り来て知覚外の内にシャマルとヴァイスを倒した未知の敵に彼女達は戦慄した。

「くううっ！」

猛烈な衝撃波に吹き飛ばされないようなのは必死にその場で堪えている。飛行魔法を応用して自身の身体をその場の空間に固定し、捲れ上がりそうなミニスカートを右手で押さえながら、レイジングハートを持つ左腕で顔面が風圧に晒されないようにガード……その隙間から見えたのは、背中から大量の血を流して倒れ伏したシャマルに彼女の返り血を浴びた猫目の少年が狂気的な笑みをしながらアサルトライフルの銃口を向けて容赦なくとどめを刺そうとする最悪の光景であつたが為に焦燥感が走る。

「いけない、シャマルさんっ!!」

ここは流石は十年のキャリアを持つベテランの魔導師と言うべきか、させてたまるかと思座に敵の凶弾がシャマルに放たれるのを阻止するべく行動に移る。術式を展開して魔力を収束しては間に合わない。なのでここは速射性に優れている《シヨートバスター》を使用するのが妥当だと判断するが、なのはがその行動を実行に移す前にその敵に向けて別方向から金色の閃光が飛び出していた。

「ハアアアアアアーっ!!」

美しい金色のツイントールを向かい風で逆立たせ、魔力刃の鎌に形状を変えた愛機《バルデイツシュ》を振り上げて、フェイトが音速に近い速度で猫目の少年の横から割つて入る。瞬間高速移動魔法。今まさに地獄への片道切符を湖の騎士に突きつける

引き金が引かれようとする直前、コンマ数秒前に電撃を帯びた魔鎌の切っ先が弧を描いて銃身の横に叩き込まれた。

「にやっ?」

耳を劈く発砲音と同時に銃口から弾丸が吐き出されるが、着弾した先はシャマルが倒れている場所より数センチ右の焦げた黒い土の表面であった。

間一髪で仲間の命を救う事に成功したフェイトだったが、ここでまた別の驚愕が彼女に齎される事となる。

「っ?! ハーケンが——」

刺さらない……猫目の少年の手にあるチェーンソーアサルトライフルに高密度の金色の魔鎌の切っ先を叩き付けたにも拘らずその銃身には魔力の鉤が微塵も食い込んではいなく、表面に突き立っているだけにとどまっていたのだった。

実はこの猫目の少年の得物はデバイスではない。質量兵器”である。バルディツシユのハーケンフォームは普通の質量兵器の素材なら突き刺さるところかそのまま切断する事も容易い凄まじい切れ味を持つている為、それを叩き込んだのに表面の傷一つ付けられなかったという事実からして、このチェーンソーアサルトライフルは何か特殊な素材”を使つて製作されているという事が裏付けられる。

「アハハッ♪ お姉さんやる気だねえ。　そうこなくっちゃあ——」

バルディツシユの魔力刃の切っ先が銃身に突き立った状態で、猫目の少年は嘯み千切るような荒々しい勢いで手元のスターターロープを引き、チェインソーの刃が甲高くも鈍い悲鳴のような音を上げて超高速回転を開始した。その異常と取れる瞬間回転数は激的な摩擦力を生み出し、振動する回転刃の周囲が紅く歪んでいる。猫目の少年は歓喜にも似た声で――

「――面白くないねええええええっ!!」

「きやああっ!」

威勢と共に凶刃を振り上げ金色の魔鎌を苦も無く押し返した。バルディツシユの柄に両腕が上方向に引かれ、無防備となったフェイトの細い胴を異次元の摩擦が薙ぐ。直感で身を翻し瞬間的に上下反転させたので直撃は免れ、凶刃は揺れる豊満な乳房の上部付近の空間を通過しただけで特別外傷は付かずに回避成功かと思われたのだが、回転刃の摩擦力が異常に高すぎる故にその付近の空間は刃が超高速回転している限り常に空気ごと切削され続ける。遵いフェイトの胸元上部のバリアジャケットが引き裂かれた事によつてその部分が弾け飛び、彼女の美しい白い肌と大きな双丘の谷間が外気に晒されてしまい、やられた本人は羞恥のあまり思わず悲鳴をあげてしまふが、たったそれだけの事ならば男衆の眼福で済む話だ……だが――

——この子、エリオと大差無い体格なのになんて凄まじい膂力をしているの!?



の一撃は暴力の光渦となって撃ち滅ぼすべく敵に向かって真つすぐと突き進んで行く……正確には圧縮魔力を込めたカートリッジを二発使用して使うその発展型——《ディバインバスター・エクステンション》なのだが、高密度で圧縮された魔力で破壊力と貫通力を減衰させる事無く撃進するこの魔砲をまともに受ければ誰であろうと一溜りもないだろう。

——よしつ、まずは一人——

倒した……疑いも無くそう思つて然るべきなのだ——

……が。

「その程度か。 仮にも次元世界の法を律する時空管理局のエースが一兵卒程度が放つ砲撃を低度を弁えずに自慢気にするとは……呆れを通り越して哀れみすら覚えるよ、高町なのは」

「アーハハハハツ！ 爽快スペクタクルウウウウウウウウウウウツ!!」

今回の敵は今まで彼女達が十年間対峙して来た者達とは一線を画す怪物であつたのが不幸だった。

相手の視界を埋め尽くす桜色の極太レーザー。 その圧倒的な質量の砲は総てを撃ち抜けると今まで信じていたが、その渴望ねがいは敵部隊の隊長の嘲笑の言葉と撃ち抜く筈だった敵少年兵の馬鹿げた哄笑と共に真つ二つに斬り裂かれたのだった。

「——なっ!!?」

「嘘……そんな!」

「ありえねえ、なのはのデイベインバスターだぞ……」

まるで紙のようにチエーンソーの回転刃の一振りで両断され、明後日の空へと飛んで行ってしまった二つの光束を信じられないという表情で眺めて唾然とするなのは達。

無言のシグナムとザフィーラも蟬谷に汗を流して険しい表情をしている。 デイベインバスターはなのはの最強の魔法ではないが、彼女の代名詞的な魔法と言つても過言ではない大技だ。 それをまるで埃を払うかの様にこうも簡単に破つたと話せば管理



世界の誰が信じられるだろうか……。

「おいおい、何だ今のは？ やる気あんのかこの女共、キヒヒ」

「アハハッ、白のお姉ちゃん、ひよつとして今の砲撃魔法全力で撃つたの？ アハハハハ、ゴメンゴメン、眩しくて鬱陶しかったからついブツ斬っちゃった♪」

「くっ」

戦慄を隠せないなのは達を見回して嘲笑するかのように挑発的に謳う銀髪褐色肌の男と猫目の少年。悔しそうに顔を顰めるなのはに高みの見物をしている敵兵達による侮辱の哄笑が浴びせられる。血が滲む程拳を握り締め、歯を軋らせて私達のエースを馬鹿にするな！ という苛立ちの目線を敵に向けるフェイト達を余所に、重傷のシヤマルをフェイトから受け取ったはやては地面に横たわるシヤマルに無言で治癒魔法を掛け始めていた……その表情に陰を落として。

「でもさあ、この程度で全力だつて言うんなら正直ガツカリだよ？ 諜報部からここに居るお姉ちゃん達はみんな管理局のエースだつて聞いて戦るの楽しみにしてたんだけど、これじゃあ本部近くの森に居る幻獣種でも狩っていた方がマシだなあ」

「ギリッ！」

「テメエ………！」

「アハハッ！ そんな怖い顔しないでよく、ボク本当の事しか言っていないんだからさあ

♪ だったらもう少し頑張つて——「ええで、そこまで言うんなら本気見せたるわ——ん？」

「はやてちゃん？」

恐ろしく冷静な声が話の間に割り込み、ここに居る全員の視線がはやてに向く。彼女はシャマルに治癒魔法を行使しながら何時の間にか空間モニターを出して、怒りに震えた手でモニターを操作し、その表情は驚く程冷静でいて眼からは悔し涙を流していた。

「アンタ等、絶対に許さへん……散々苦勞してようやく発足まで漕ぎ着ける事ができた六課を台無しにしてくれた挙句、えらい馬鹿にしてくれて……それだけやならまだ大人しく罪を償ういうんなら許せた。せやけど……よくも……よくもグリフィス君達を殺し、私の家族を傷付けてくれおったな」

人間怒りの臨界点を越えると冷静になるという。はやては噴火寸前の火山のように冷静な声音で言いながら淡々とモニターを操作して何かを処理していく。

「……機動六課総部隊長八神はやての名において、六課前線の全分隊長・副隊長の“能力限定”の解除を許可します」

「「「っ!!」」」

そう言つてモニター操作を終えるとなのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの四人の

魔力が爆発的に膨れ上がりだし、彼女達から溢れ出る膨大な魔力光が巨大な柱となり天へと昇る。彼女達に掛けられていたデバイスと魔力の出力を制限するリミッターが部隊長が許可を出した事により解き放たれたのだ。

管理局の部隊には「戦力保有制限」という規定が存在する。機動六課という部隊が管理局の主戦力を集結させた過剰戦力の集まりであるという特性から部隊長及び各分隊長・副隊長には能力制限が科せられていた。それが「能力限定」というリミッターを付け部隊の総保有戦力を無理矢理引き下げて規定内に納めるというものであり、解除するには部隊長であるはやての許可が必要となっている仕組みなのだ。

「でも残念や、私がこの手で死んだみんなの仇を取ってやりたいんやが、生憎とわたしのリミッターはあの三人から許可を貰わへんと解除できへん……せやからみんな、すまへんけど代わりにそいつ等全力全開でブツ飛ばしたってえな！」

顔を上げ、周囲の仲間達を見回して流れる涙を堪えながら最後にチカラ強くそう言い放ち、握り締めた拳を突き出した。部隊長からの頼みを受け取ったなのは達は――

「もちろん！ 全力全開でやれるんなら誰が相手だつて負けたりしないよ！」

「うん、だから任せて！ 私達が必ず、グリフィス達の仇を取るから！」

「おっしやああつ！ やつてやらああつ!!」

「仰せのままに、我が主はやて！ この剣に誓い、必ずや！」

「主。 シャマルの事を、どうか頼む」

「リインもやるですよ！ こんな奴等ブツ飛ばしてやるのです!!」

漲る魔力を纏い戦意高揚に昂りつつ気合いを入れて、はやてに了解の意を伝えた。

そして我らがエース・オブ・エースが動きを見せる。

「よーし！ “切り札”はまだ未完成だけど、新しい《フルドライブ》いくよ、レイジン  
グハート!!」

『了解、マスター!』

「エクシード・ドライブ!!」

毅然と言い放つと共になのはのバリアジャケットが姿を変える。人目に曝されていた艶めかしい絶対領域がミニスカートからロングスカートに変化した事で隠され、胸元の可愛らしい赤いリボンが消滅して彼女の双丘の豊かさがより強調されたバトルドレスとなった。またレイジンググハートも変形して砲杖から金色の槍の形状をとっている。

汎用性と持続性を重視した《アグレッサーモード》から持続性と速力を度外視した攻守特化型の《エクシードモード》へ……数々の戦いを勝ち抜いて来た英雄、高町なのはの現時点での最強モードだ。

なのはとフェイトは猫目の少年、戦闘不能のシャマルを除くヴォルケンリッター達は

銀髪褐色肌の男を包囲するように立ちほだかり、デバイスを構えてそれぞれ倒すべき敵と対峙する。

「まだまだこれからだよ！　悪い子にはたつぷりと“お話”してあげるから、そこに直りなさい!!」

「【世界間無断航行】に【器物損壊】、【質量兵器所持禁止法違反】に【公務執行妨害】、そして【大量殺人】の現行犯で貴方達の身柄を拘束します！」

「よくも好き放題やってくれたな、借りは何百倍にもして返してやるぜ!!」

「不屈き者共、この剣の錆にしてくれる！」

「貴様達、五体満足でいられると思うな！」

「はやてちゃんを泣かせた貴方達は絶対に許さないので！　ボコボコのケチョンケチョンにしてやりますう!!」

「!!!「覚悟して(ろ)(なのです)!!!」」

時空管理局最高峰の膨大な魔力を漲らせて襲撃者達に威勢よく言い放つ。歴戦の魔導師・騎士が放つ圧倒的な威圧感と数々の難事件と戦いを乗り越えて来た自信と存在感を前に刃を向けて彼女達に立ち塞がる命知らずな有象無象共はただただ畏怖して慄くのみ――

そう……相手がただの有象無象共ならば……。

「くく、準備は済んだみてえだな……そんじやそろそろ本格的に——開戦と行くかっ!!!」  
 ゴウウウウツ!!　なのは達から向けられた敵意と闘志を感じ取るや否や銀髪褐色肌の男が野獣のような獯猛な笑みで牙を見せるとサングラスの奥の紅い眼光が光り、天にも届く程の轟音と共に次元震すら起こりかねないレベルの激震が大气と大地を揺るがした。

「「「「「!!!?」」」」」

何だ、この馬鹿デカイ魔力は？　かつての闇の書の管制人格すらも霞む圧倒的な魔力

の噴出。何か得体の知れない怪物の鬼気とも言うべきプレッシャー。突如男が発した凶源に当てられた瞬間、なのは達の威勢の一切が駆逐された。

「なっ!?! 冗談やろ、なんやねんこれは!?!」

死に掛けの家族の命を必死に繋ぎ止めていたはやてもまた男の規格外の魔力を感じ取って表情を青く染めていた。ヤバイ、こいつはヤバイ。彼女達の全神経全細胞が激しく警戒警報を鳴らしている。

「……キヒッ! いいじゃねえか、威勢のいい女は俺好みだ」

「——ッ!!」

周囲の空間が異次元の歪みを生み出す量の赤黒い魔力を纏って男が一步目の前のヴィータ達に向けて足を踏み出す。四人の脳内で更に警戒警報が喚き散らし、一步、また一步と本能的に後退りをしてしまう。逃げろ、喰い殺されるぞと。

「次元王軍ラグナガンド、第二二六強襲中隊突撃兵長《ファング・イスカンブルグ》中尉だ。名乗りな女共、騎士だってんなら戦の作法を知らねえわけじゃねえだろ?」

サングラスの奥の紅く光る眼光で夜天の騎士達にゆっくりと迫るファングという男。腹を括るしかない、そう意を決して後退るのを止めたヴィータ達を余所に、彼女達を更に絶望の淵へと落とす事象が顕れた。

「アハハハッ! ファングってば本気じゃん! ……よしっ、ならボクも——ハアアア





今、幕を上げるのであった……。

## 恐怖劇の序章（プロローグ）、傷付けられる騎士の誇り

SSSランク超の規格外な魔力を解放したファングとそれに匹敵する脅威を感じさせる朱い闘気を放つカツツエ。

SSランクオーバーを誇るエース達に底知れない恐怖心と危機感を覚えさせる二つの脅威が顕れた事により、この場合は死地と化したのであった。

「アハハッ、行くよお、お姉さん達い！ そのキレイな顔とえっちい身体をグツチャグチャにしてあげるよおおおっ!!」

押し潰されるような重圧が押し掛かる中で、最初に動いたのはカツツエであった。

異次元の回転数で駆動する刃が周囲の空間を禍々しく歪める摩擦力を発するチェーンソーアサルトライフルを振り上げ無邪気な笑みと狂氣的な喜びを表に露わしてスターズとライトニングの両隊長に地が爆ぜるような踏み出しで向かって行く。

「やらせないっ!」

大気を貫く紅の矢となり音を置き去りにする勢いで地を駆け、狙った獲物を自らの爪牙で引き裂かんとする小さき狂獣、それを迎え撃つたのは近接戦を主体とするフェイトであった。閃光の如くなのはの前に躍り出て彼女の壁となり、金色に光る魔力の長剣

——バルディッシュのフルドライブ形態《ライオットブレード》を持ちて正面から来る紅の狂獣に斬り掛かりに行く。

「はああっ！」

巨大な質量を誇っていた《ザンバーフォーム》を圧縮させた高濃度の魔力によつて切断力を向上させた金色の魔力刃が下方水平に薙ぎ払われ、音破衝を撒き散らしながら地を駆けて飛来する狂気の紅の矢の鏃を両断せんとするが……金色の魔力刃が小さな身体を斬り裂く寸前、その身体はブレた。

「っ!？」

結果、魔力刃は輪郭がブレる小さな身体を透過し、金色の弧が水平の軌跡を描いた。フェイトは振るつた一閃をカッツエに命中させる事ができずに空を切つたのだ。

何故なら——

「アハッ♪」

フェイトが金色の魔力刃を振り出した時、既にカッツエはフェイトの死角に飛び込んでいたのだから。

幾つもの自身の残影を後から追従させ、跳び込むようにフェイトの頭上を跳び越え、彼女の首を後部から切り落とさんと宙より上下反転体勢でチエーンソーアサルトライフルを薙ぐ寸前のカッツエ……それを視ればフェイトの剣が命中しなかった理由を推

測するのは簡単だ。カッツエは幻影魔法も特殊な歩法も使用してはいなく、単純に急加速をしただけに過ぎない。ライオットブレードは速度の緩急によつて生じた残影をただ通過しただけなのだ。異次元の摩擦を纏う凶刃が弧を描いて背後から迫つて来た刹那にフェイトはようやくやくその存在を察知し、唇を噛む。

——くっ、やっぱり速い！

「バルディッツシュー！」

『イエッサーー！ ソニックムーブ!!』

ここで彼女が選択したのは高速移動による緊急回避であつた。《ディフェンサー》で受けようがなのはのディバインバスターを意図も容易く両断したこの凶刃の前にはチリ紙の如く簡単に彼女ごと引き裂かれてしまう事だろう。故に躲すしかない……しかし——

「——ニィツ♪」

「っ!!?」

音速移動で凶刃から逃れた直後、一瞬にして振るわれたチェインソーアサルトライフルの軌道が修正され、滑るように音速移動中のフェイトにその銃口の標準が合わせられた。

「がっ！ ……う……そ……」



「——レイジングハート——」

『ストライクフレイム!』

「A・C・Sドライブバー!!」

『突撃!』  
チャージ

孔を穿つように無傷のなのはが分厚い煙を突き破り、桜光の両翼を広げた光の突騎槍ランスと化したレイジングハートを正面に突き出した体勢で弾丸の如き勢いで飛び出して来たのであった。強張っていたフェイトの表情に安堵が齎されて緩くなる。

「なのはあつ!」

「アハハハッ! この弾魔法で防げるモノじゃない筈なんだけど、上手く逸らされちゃったかな? アハハ、おもしろいよ、お姉ちゃん!!」

「はああああああつ!!」

「アハハハハッ! それ——っ!!」

無邪気な哄笑と共に地を蹴ったカツツエのチェインソーアサルトライフルの超速回転駆動刃となのはの《エクシードモードA・C・S》が空中で真つ向から衝突し、天を揺るがすような大爆発が周囲を覆い尽くす。

その爆音を皮切りに、化物的魔力量を秘める怪物と対峙する騎士達も死地に赴くべく動きだした。

『ヴィータ、ザフィーラ、リイン。私が最初に出る、後に続いてくれ』

念話を使い、共に並ぶ騎士達に言を伝えたシグナムが自らの剣を手に、腕を鳴らしてにじり寄って来ているフアングの前へと足を踏み出した。心得たと領いたヴィータ達を背に将は未知の難敵と約20mの距離を挟んで向かい合う。

「キビ、何だ？ 一人で俺の前に立つとは、中々勇ましい女じゃねえか」

「ああ、ベルカの騎士は一对一が信条なのでな。不満か？」

「いや、俺もタイマンは好きだぜ。特に強え奴との真剣勝負は最高だなあ」

フアングは対面に立つシグナムの全身を舐め回すように視ながらニヤついて言う。

一見それは彼女の扇情的で減り張りのある女体に欲情しているようにも見えるが、実際は筋肉の付き方や立ち振る舞い、チカラの入れ方などを観察して実力を量っている。

この男、根っからの戦闘バトルマシーン狂という人種だ。

「で？ テメエは強えんだろ？ そんな歴戦の騎士面してて弱かったら笑いモンだぜー」

「ふっ、それは貴様自身の身をもって確かめてみるがいい」

シグナムは不敵に笑み、騎士らしく堂々と剣を構える。歴戦の猛者であるが故になまじ相手の実力が測れる分、内心はこの化物級の相手が恐ろしくて仕方がない。だが臆する訳にはいかない。敵の言う戦の作法に則り、声を張り上げて彼女は名乗りを上

げた！

「機動六課ライトニング分隊副隊長。そして最後の夜天の主、八神はやてが守護騎士、ヴォルケンリッターの《烈火の将》、シグナムだ！この我が魂の魔剣《レヴァンティン》と共に私が相手になろう！掛かって来るがいいっ!!」

「へっ、上等だ女。俺を退屈させてくれるなよ……でないと——」

彼女の威勢に触発されたファングが尻を立てて上半身を地面スレスレに伏せる奇妙な体勢で突撃態勢を取り——

「——そのデカイパイオツ、揉み潰しちまうぜえええええええっ!!」

……やっぱ欲情しているじゃないか。そんなツツコミを入れたくなる下品な挑発の内容はさておき、ファングは目の前の女騎士のおっぱ……コホンツ！首元を噛み千切るべく牙を剥いて突攻を仕掛けに出る。それはフェイトすらも脱帽する程の速度が出ているが、驚くべくはそこではない。

——な……なんだ。この奴の奇妙な走法は!?

獣が走るような、蛇が這うような。そんな全身が地面に擦ってしまいそうなくらいの超前傾姿勢をもってジグザグに駆けて来る。あまりにも奇怪な走り方にシグナムは一瞬怯みを見せてしまうが、歴戦の騎士の気概でコンマの内に緩んだ気を入れ直した。だがどうする。



——見ふぎけた体勢だが、これでは頭部しか狙えない。

急所を曝して突っ込んで来るド阿呆のようにも見えるが、実力者にとってヒットポイントの一部に絞られるというのはやり難くて仕方がないものだ。こっちはその一点しか狙うことができず、故に相手はこっちの攻撃の予測を狭く絞り込んで適切な対応を取る事が楽になるのだから。

——それに、やはり速すぎる！ もう考えている暇はない！！

「レヴアンティーン！ カートリッジ、リロード！！」

『了解！』  
ヤウオール  
マルチタスク

並列思考をフル動員させて、シグナムは瞬時に足下に迫り来ているフアングを迎撃する為の行動に移る。炎の剣で地を薙ぎ払い、拡散攻撃によるチカラ技で逆に這い迫る敵の逃げ場を無くして叩き斬るといふ腹である。

「行くぞ！ 《紫電一閃》ツ！！」  
しでんいっせん

カートリッジで瞬間的に魔力を高め、烈火の柴炎をレヴアンティーンの刀身に纏わせて足下を薙ぎ払う。地は抉れ爆ぜ、視界180。半径10mの地面が爆砕して小規模の壕と化し、その範囲に存在したモノは全て粉微塵となる事だろう……しかし、剣は地に届かなかった。

「何いっ!!？」



「あわわっ、地震ですううっ！ 机の下に隠れるのですよおお!!」

シグナムの後に続くとうとしていたヴィータ達はその惨状を目の当たりにして叫び、激震する大地と飛び散って来る土礫に激しい動揺を露わにしている。大量の粉塵と砂煙が巻き上がり、地雷が起動したかのような地の爆進が連鎖的に発生して扇状に広がって行くように地面が広範囲に渡って爆発するように崩壊していく光景は大地の怒りの様だ。

やがて揺れは止み、広がって行った地の爆進が途絶えると、巻き上がって辺りを覆っている砂煙が徐々に晴れて行く……爆心地点に造られていたのは巨大隕石が落ちたかのような大規模のクレーター、その中心には不愉快を露わにして口内の痰を吐き捨てているファングが立っていて、その足下付近には横倒しに倒れてピクリとも動かない烈火の将のやられ姿があった。

「そんな……莫迦な……将が……」

「シグナムさんっ!! ……きつと嘘ですよ、こんなっ!!」

下品な挑発を発してファングが突攻をかけたから僅か四秒弱、ヴォルケンリッターの将は何もできずに叩き潰されて、あつという間に敗北を喫したのであつた……。

「へっ! あばよアウフ・ウィーターゼン蠟燭女ケルツェウアイブ。

こんなカスが将とか、噂の闇の書の騎士も大した事

無えな。期待して損したぜっ!」



さずにケロつとしているではないか。鉄槌が叩き付けられた頭は割れるどころか凹んですらいない全くの無傷。寧ろ叩き付けたグラーフアイゼンの方に罅が入っているのだから驚愕ものだろう。奴の頭に罅割れた鉄槌を押し付けたままヴィータの表情が青く絶望に染まる。

「はああ……おいガキ」

「っ!!」

くだらねえと言うかのように溜息を吐いたファングは頭に押し付けられたグラーフアイゼンの鉄槌を左手で掴んだ。ミシミシと人間では有り得ない驚異的な握力を加え、鉄槌に刻まれた亀裂を徐々に広げていく。

「俺さあ、十五年も待ったんだよ。戦争が、闘争が、心を滾らせられる殺し合いがやつとできるつて楽しみにしていたんだよ！今まで暇してたんだ、長い事待つのつて辛えよなあ？もうシケた模擬戦やザコ共の殲滅戦じゃ満足できねえ!!……だからさあ、俺にここまで譲歩させて萎えるオチつけやがったらダメエら——」

亀裂の広がり小さな手が握られた柄にまで及び、ファングはなんでもない事のように言った。

「——この世界、次元の海の座標から消しちまうぞ？」

「や……やめろおっ!!」

グラーフアイゼンはもう崩壊寸前まで亀裂が広がってしまっていて、あと少しファングが握力を強めたらそれだけでデバイスの修復機能が意図を成さなくなるぐらい粉々に砕け散ってしまいそうであり、ヴィータは泣いて懇願するかにように叫んだその直後

「させるものか! 《鋼の軛》っ!!」

「ああん?」

「おまけですう! 捉えよ、フリーレンフェツゼン《凍てつく足枷》っ!!」

ファングの足下にベルカ式の魔法陣が幾つも浮かび上がり、無数の魔力の鎖が飛び出して彼の身体を突き刺し拘束。訝しんだファングが思わずグラーフアイゼンを手から解放した瞬間、全身に纏わり付いた大気中の水分が凍結して身体を拘束したまま氷の中に閉じ込める事に成功する。

「これは、ザファイラとリインの魔法……」

「下がれ、ヴィータ! ぬおおオオオオッ!!」

そして狼が吼えるかのような雄叫びと共にヴィータの背後から駆けて来たのは先程から何所にも見掛けすらしなかった筋骨隆々たる体格を持つ謎の白髪の男性であった。

頭部に狼のような耳があり、上尻の辺りには同じく狼の尾が生えていて、それが疾走の向かい風でユラユラと揺れている……そう、彼は人型形態に変身した――

「ザファイラッ?!」

「砕けるおおおおおおおおーっ!!!」

咆哮を轟かせ、凍り付いたファンクの前に力強く踏み込み、剛腕を振るってファンクの頭蓋に渾身の鉄拳を叩き込み、粉々に粉碎する。氷の破片が飛び散る瞬間、ザファイラは主の前で人を殺めてしまったかと眼を閉じる。幾ら管理局規定最高のSSランクの魔導師といえども全身を凍結させられて砕かれたのなら命は無いだろう……だが、今回の敵はどこまでも常軌を逸していた。

「……痒い」

「——何っ!!?」

ザファイラの渾身の鉄拳はファンクの身体を砕けなかった。リインの氷結魔法で生じさせた表面の水こそは粉碎したものの、奴の身体の方は砕ける事なく殴り付けられた反動で地を転がっただけであり、絶命どころか僅かのダメージすらも無く立ち上がる。身に付けていたサングラスと軍服の上着が粉碎された氷と共に消滅した為に良く鍛えられた上半身の筋肉が曝され、露わになった魔性の朱い瞳の三白眼で白けたようにザファイラを睨みつけてきた。

「痒い、痒いんだよ。折角わざとテメエらのシヨボイ魔法をくらってやったのに殺意

がカケラしか乗って無え腑抜けたパンチしやがって。舐めてんのか犬っコロ」

「なん……だと……!!」

期待して損をしたと興醒めと蔑視の言葉を浴びせられて盾の守護獣は心外の憤りを露わにしながらも同時に瞳孔を丸くして動揺し、その魔性の朱い視線に射貫かれて全身に戦慄を走らせる。今のは葬るつもりでやった。例え主の意志に背き人殺しの罪を背負ったとしても、エース級の魔導師や騎士を圧倒的に凌駕するような強大なチカラを持ち虐殺行為を平気で行うようなこの者達を生かしておけば危険だと覚悟の上で全身霊の殺意を拳に乗せて突き放った。

だというのにこの者は身体を凍り漬かされた状態でそれを受けても尚、無傷でケロツと立ち上がって来たのだ。これは最早尋常ではない、人の域を超えている。そう戦慄の眼を向けるザフィーラにフアングは呆れ混じりに苛立つ。

「あゝあゝ、もういい！ テメエも期待外れのザコだ——なアツ!!」  
「なあつ?!」

拳で掌を叩いた瞬間に向かい合う敵の足下に出現した異質な魔法陣を目の当たりしてザフィーラは自分の眼を疑い、その異質さと術式の構築に使用されている魔力の強大さに慄いて全身を硬直させてしまう。

——<sup>ハケンクロイツ</sup>鉤十字……だと!!?

その魔法陣の内に描かれている紋様はザフィーラの……否、管理世界の誰もが未だ認



知していない未知の魔法形態であつたのだ。現在管理世界で認知されている魔法形態は二種類。遠距離戦主体の《ミッドチルダ式》は「二重正方形」、近距離戦主体の《ベルカ式》は「正三角形」の紋様がそれぞれ魔法陣に描かれている。しかし目の前の敵の足下に浮かび上がった魔法陣の紋様はそのどちらにも当てはまらない【鉤十字】……あまりにも異質だ。それだけでも驚愕に値し目を奪われるのは必然的と言えるであろうが……その驚愕はすぐに更なる戦慄へと変貌した。

「あ……ああ……っ!!」

「目障りだ犬っコロ。弱え奴はとつとと——」

フアングの右掌の上に途轍もない量の魔力が収束し、形成されていく赤黒い光を放つ球形。それは直径10mはある大きさまで膨張し、掌の方を軸に周囲の空気と砂・小石を巻き上げる勢いで高速回転をしている。その圧倒的な質量は雷光を纏い、勢いよく右肩の上に振り被られる右掌に合わせて鳴動し——

「——くたばつちまいなアアッ!! 《ヴァロン・シユトライク》——ツ!!!」

死刑宣告と共に投げ放たれた。まるで球技の球を遠投するかのように勢いを付けて打ち出されたそれは風圧で地を抉り、大気を掻き乱して竜巻を追従させながら未だに硬直から解かれぬ盾の守護獣に向かって一直線に空気を貫いて行く。

「ぬ……ぬおおおおおおお——っ!!!」







「うおおおおおっ!! ブッ潰すっつ!!」

激震する焼け野原、震撼に震える空、破壊の紫竜の爪牙の前に抵抗虚しく追い込まれていく機動六課の戦乙女達……果たして彼女達の運命は？　そして彼女達の救援に向かう“翼を失った厄介者の戦士達”は間に合うのだろうか？

## 絶望の闇を照らす黎明

早々にシグナムとザファイラが成す術もなくファングに倒され、劣勢の戦況を見守るはやては酷く心を傷め、涙を流す程の苦渋の表情を浮かべていた。

「シグナム……ザファイラ……そんな……」

気を失い地に俯せるシャマルの大きく裂けた背中の裂傷を治癒魔法で癒しつつもこんな嘘だと目の前の理不尽なる現実を否定するようにそう呻く。自分の大切な家族、そして自慢の守護騎士……全員揃えば恐いものは無いと信じていた。しかし次元の海は果て無く広大で非情にして無情、上には上など幾らでも居る。

「……何でや……何でアンタら機動六課を……私らを傷付けるんや!!」

握る拳を震えさせて怒りと悲しみの矛先を海岸線にある高台の上で高みの見物に興じているヴォルカーン達に向け、憤慨の意を乗せて問い質す。散々苦勞をしてやつとの思いで立ち上げる事のできた夢の部隊、それが始動したその日にこんな酷い仕打ち、ふざけるな! そんなはやての怒り嘆きをヴォルカーンはまるで羽虫を払うかのよう  
に鼻で笑い、涙混じりの非難の目を向けるはやてに対して何を言い出すかと思えばと実に下らなそうに彼女を睥睨した。

「ふん、視た印象通りの愚鈍のようだな。　　どうやら先程私が伝えた事柄が耳に入っていないかったと視える」

その言葉に続いて部下達のはやてを馬鹿にするような下卑な表情を浮かべてケラケラと笑い出す中、慇懃無礼にものを言い出すヴォルカーン。

「仕方がないから理解力に乏しい機動六課の部隊長殿にもう一度伝えてやろう。　　総帥閣下の命だからだよ、*〃*新たに管理局内に発足する主力が集う部隊を奇襲し潰せ*〃*とな……どうやら我が軍の長は敵勢力の可能性の芽は摘んでおく算段で我らを此処へと送り込んだらしい」

小娘の怒りなど取るに足りないのかどこか優し気な声音で彼は言葉を紡いでいく。

「他ならぬグロースシュタット閣下の命とはいえ度し難いものだな。　　我らには成すべき事が他にある故、このような処で戦力を遊ばせている余裕があるのならそちらを優先し戦力を回した方が客観的に見据えて合理的だろう。　　貴様らのような劣等な女子供の集まりなど捨て置いても所詮、足の爪先に躓くような小石にすらならないだろうからな」

「っ！　　アンタ……ッ!!」

「だが、私個人としては貴様等を潰すのは吝かではないな。　　身勝手な綺麗事を夢想し、

それを行動理念として見ず知らずの他者に賛同を求めるといふ厚顔無恥な女共に崇高なる戦場をうろつかれるのは心底目障り極まりない。要するに私は貴様等が気に入らないのだよ。故に今のうちに消しておけるのなら喜ばしい事だ」

「ふざけるんじゃないっ!!」

まるで自分達の事を汚らしい虫ケラ同然に見下すヴォルカーンの物言いにはやては激怒した。

「私らは！ 機動六課は理不尽に虐げられ、不幸に苦しみ傷ついている多くの人達を一秒でも早く救いに行く為の部隊や！ 次元世界の秩序と平和を護る、その何が——」

「くだらん、それが身勝手な綺麗事だと言うんだよ」

「——なあっ!?!」

だがヴォルカーンはやての主張を一蹴し、頭に巻き着けた包帯の隙間から朱い眼光を光らせて睨み、彼女を威圧し黙らせる。更には刃のように鋭い口調をもつて相手を刺し殺すように言う。

「要は他者を理由に気に入らないものを排斥して自分の好きなように染め上げたいのだから？ 貴様ら女の考えている事などいつもそれだ。己の理想形態に反する事柄に我慢ならず、自己的な正当性を他者に転嫁し思い通りに取り込もうと画策する。実に女らしく狡すがらい計算だよ八神はやて、反吐が出る」



「な、なにを勝手な事を言うんや！ 私らは——」

「極めつけには生まれ持ち有りしていた中途半端なチカラに思い上がり、自分達ならば全てを救う事ができるだろうと付け上がっているときたものだから始末に負えん。自分達は次元世界の平和を護る時空管理局のエースになる程のチカラを持つ魔導師だ。だからどのような者が相手であろうとも打ち倒し、次元世界中の人々を全て救い幸せにできる筈だとな」

「——っ!!」

「自分達が揃ったのならば成せぬ事など何も無い、何故ならばそのチカラを自分達は有しているのだからと妄信して疑わない。これはなかなか傲慢な思想じゃないか、ある意味で畏敬するに値するよ。幾ら悪辣で欲深い業に塗れた女という人種とは言え、ここまで歪みきつた妄想を内に抱くような身の程知らずは次元世界広しと言えどもなかなか見当たらんからな」

「くっ！」

吐き捨てられる数々の嘲笑・侮蔑に気圧され、はやては声を詰まらせて唇を噛み締めた。気に入らないものを排斥したいなどとは微塵も思つてはいないが、なのはとフェイト、そして自分達八神家がチカラを合わせればどのような局面や困難にぶつかろうとも必ず越えて行けるといふ自信がある……いや、信じている。機動六課は次元世

界の秩序と平和を護り、苦しむ人々を救うと実際に自分の口から公言する程に……しかし、それならば今襲撃者達の内の二人と死闘を繰り広げているのは達が一方的にやられているこの戦況はどういう事だ？

「足りねえんだよガキ共！ もっとチカラ絞り出して来やがれ!! オラアアアッ!!!」  
「ガハアッ!!」

「アハハハッ、金髪のお姉ちゃん遅くい！ そんなんじや運動会の駆けっここでビリ決定だねええええええっ!!」

「う、うそっ!? アガア”ア”ッ!!!」

「フェイトちゃん!? ヴィータちゃんっ!!」

「ぐふっ!!」

桁外れの拳圧をもって暴風を巻き起こすファンングの強烈な右ブローが展開されたベ ルカ式防御魔法《パンツァーシルト》を一撃で突き破ってヴィータの腹部に突き刺さり、小さな身体が“くの字”に曲がって撃ち出された砲弾のように吹っ飛ばされ。同時にソニックムーブでカツツエの背後を取ろうとするも、それ以上の超音速機動で逆に背後を取られたフェイトの左上腕にカツツエの鞭のように撓る右脚が叩き込まれて骨が碎かれ、そのまま蹴り飛ばされてしまう。二人の安否を気遣ったなのは悲痛な叫び声が空に響き、吹っ飛ばされたフェイトとヴィータの背中同士が正面衝突。互いに揉

み合う恰好で荒野の上へと墜落する……何なんだこのザマは？　「エース」とは技術に優れ、戦場にて華麗に戦い、戦場にて勝利を絶対のものとする優秀な魔導師である筈だろう！

「なのはちゃん……フェイトちゃん……ヴィータ……ツ！」

「ふん、所詮は頭数の多さと魔法技術の独占で次元世界を牛耳ってきた管理局（ごみども）のエースか……期待などしていなかったが、こうも拍子抜けだと戦場に立っているという実感がまるで無いな。まるで我らが劣等な餓鬼共が行うような「弱い者イジメ」をしているようではないか？」

フアングとカツツエに手も足も出ずに圧倒され、ワンサイドゲーム展開で無様に傷付けられて窮地に追い込まれていく六課隊長陣を呆然と眺めてはやてが沈痛に苛まれる一方、ヴォルカーンはその惨めな姿に鼻を鳴らした。更には彼の部下達もゲラゲラと笑いだす。

「グラナート隊長お、幾ら本当の事でもそんな言い方は少し可哀想じゃないですか？　もつとこう……」  
「蟻を踏み潰して遊ぶ子供の様だ」とかオブラートに包んだ言い方をく」

「おいおい、それ寧ろ余計に酷くなつてないか？　それなら「無抵抗の蛙のケツに無理矢理ストローブ刺してフーフーしている感じだ」の方が良いぜよ」

「ギャハハハッ！ デリカシーねえなお前え！ 女に対してケツに無理矢理ストローク  
ブツ刺してフーフーとかさあ！」

「ゲヘヘ、そういうえばあの管理局のエースの女共、視た感じどいつもこいつも上玉ばかり  
でエロそうな身体しているよなあ。 ああ、あの栗毛ツインテールのカワイイ顔したお

ネエちゃんのケツにオレツチのストローをブツ刺してヒーヒー言わせてえなあおい！」

「そんなら俺はあのパツキンなツインテールの女を後ろから抱き寄せてパイパイ揉みし  
だくかなあ♪ この距離からガン視しても結構なデカさだけ、あのパイパイ♥」

「ならオレはさつきイスカンブルグ中尉が一撃でブツ倒した巨乳女騎士がいい。 素っ  
裸にして壁に張り付けて、くっ、殺せ！」と言わせるプレイをするからよお」

「ってか、なんかいつの間にか話題がズレてね？ 何で隊長のキツイ言い方をどうオブ  
ラートに修正するべきかを討論してたのに、どの女をどうやりたいのかの議論に変わっ  
てんだよ？」

「いいんじゃないに？ どう言おうとフルボッコにしているのは変わらないんだし」

「それもそうだな……あ、なら俺はあのゴスロリおチビちゃんもらいっ♪」

「おまつ!! それさすがに犯罪だろ！ ロリコンかよお前っ!!」

「「「「ギャハハハハハッ！」「「「「」

「くっ、アンタら……ツツ!!」

悔しいが今のはやてには奥歯を軋らせる程強く噛み締めて高見で下品な笑い声を上げる第二二六強襲中隊の兵達を忌々しく睨みつける事しかできない。大いに蔑まれた挙句、部下にして大切な親友家族達で卑猥な事をする妄想をこちらにわざと聴こえるように言い合つて侮辱されたこの屈辱は彼女にとつて非常に耐え難い事だろう。

そんな彼女を見限り、ヴォルカーンが呆れた表情を作つて爆笑し続ける自分の部下達を諫める。

「お前達、くだらん戯言はその辺にしておけ。取るに足らん敵とはいえ、この場が戦場である事には変わらんのだからな」

そう不機嫌に言つて笑いを黙らせ、巻かれた包帯の隙間から覗く眼を細めて東の空を眺める……正しくはその更に先から向かつて来る者達を。

「気を引き締めろよこの莫迦者共が。何度も教えた事だが、戦場で油断をしていると思わぬ竹箆返しを受ける事がある」

ヴォルカーン・フォン・グラナートの人間離れた空間認識能力は異常に研ぎ澄まされ過ぎていてもはや千里眼の領域だ。遠見を可とする距離だけでも凡そ10kmを超えている。

「あの調子ならじきにイスカンブルグとオランダが機動六課の小娘共を屠るだろうが、お前達は東を警戒しておけ」

その眼で捕捉した来訪者は六人……いずれも不殺を信条とする管理局の魔導師とは思えない容赦の一切が見当たらない鬼気を纏い、凄まじい速度で近づいて来ている。このままだともう三分もしないうちにこの戦場に辿り着く事だろう。

「どうやら客が向かって来ているようだ、それも我々にとつて招かれざる客がな……ふっ、歯応えが無さ過ぎて退屈な戦場だと思っていたが、どうやら簡単に任務達成には至れないらしい」

面倒事を匂わせるような内容とは裏腹にその口端は吊り上がっており、若干の愉悦が浮かんでいた。

「面白い、ならば客を盛大に出迎えてやろうではないか。ド派手な花火を打ち上げて盛大にな」

脅威に値する敵との闘争こそ戦場の醍醐味だ。故に部下達に提案するようにそう言々と景気付けに好物のビーフジャーキーを軍服の胸ポケットから取り出して再び口に銜えた。花火の火種をその獲物を狙う鷹のような眼で見据えて……。

「うう……もう、ダメですう……きゅ〜」

「リインツ!!? ……クソツタレ、ユニゾンが!!」

戦場に視線を戻すと大ダメージを受けた事で遂にヴィータの中に居るリインに耐久値の限界が訪れてユニゾンが解除されてしまっていた。目を回して気を失った小さ

な祝福の風の子を被っている兎っぽい帽子の中に入れて彼女の安全を確保すると鉄槌の騎士は背中合わせで荒野の上に座り込んでいたフェイトと共によろめきながらも立ち上がり、そのまま凝り固まった肩を回してニヤけながらこつちを見遣つてきている半裸の白髪ヤローを憎たらしく睨みながら、何時如何なる時でも自慢の鉄槌を振り下ろせるようにグラーフアイゼンを肩に担ぐ。

その鉄槌は激戦の影響で既に半壊同然な程亀裂が無数に入つていて見るも無惨な姿を曝していたが、それでもこの鉄槌が砕け散らぬ限り、《鉄槌の騎士》八神ヴィータは諦めない。

「フェイトツ！ チカラを貸してくれ。アレをあの白髪ヤンキーにブチかます!!」

「えっ？ ちょっとヴィータ!? アレってもしかして——」

「そのアレだよ！ 三年前に決起団の幹部をなんとか撃退した後、アタシ達が揃つてボコされた事に不甲斐なさを感じてお前とちよくちよく特訓してきたあのコンビネーションだつ！」

「で、でもあのコンビネーションはまだ一度だつて成功させていないし、無茶だよ！ 第一アイゼンがそんな状態じゃ——ツ!!」

フェイトはヴィータの要求を無茶無謀だと反論するが、背中合わせで立つヴィータの蒼い瞳を横目で見て戦慄する。その蒼い瞳の奥には凄まじい怒気が籠っていたから

だ。

「アイゼンなら大丈夫だ！　この程度でブツ壊れる程アタシの相棒はヤワじゃねーし、成功した事が無いならぶっつけ本番で成功させりゃあいいだけだろっ!!」

「ヴィータ……」

「……頼むフェイト。　ラインとのユニゾンが通じねえんじや、もうあのヤローを倒せる可能性があるのはあのコンビネーションだけなんだ。　アタシは絶対にあのヤローを倒したい！　シグナムとザフィーラを傷付け、アタシ達ヴォルケンリッターの誇りを貶し、何よりも壊したい放題に壊してはやてを悲しませたこのクソヤロー共は絶対に許しちやおけねえっ!!」

アイゼンを持っていない方の手を右から左に叩き付ける威勢で前を払い、背中の優しき金色にその怒りを主張するかのように懇願するヴィータ。　その激しい怒りと悲しみを受け取ったフェイトは――

「……うん、そうだね。　四年間はやてが散々色々と駆け回ってようやく始まった機動六課を滅茶苦茶にした挙句、グリフィスをはじめとする多くの仲間達を殺したこんな外道共なんか私達が負けるわけにはいかないよね……わかった」

そう静かに承諾の言葉を口にする幼い背の肩に担がれている事で丁度自分の腕の横の位置に有るグラーフアイゼンの亀裂が無数に入ったハンマーヘッドの中に【電気】



を蓄電していく。

「へへっ、ありがとうよ……そんじや行くぜっ!!」

「うんっ!」

「フェイト F & ヴィータ V、剛雷コンビネーション——ツツ!!」

そしてフェイトの電気が十全に溜まりハンマーヘッドが金色の輝きを放ち出した瞬間——鉄槌の騎士はロケットの如く飛び出した!

「アイゼンツ! 《リミットブレイク》だツ!!」

『ヤヴォール了解! ツエアシユテールングスフォルム!!』

金色に輝くハンマーヘッドが持主の幼い身体よりも二倍以上の質量に巨大化し、先端がドリル、その逆側がロケットの噴射口に変化した。使用者の命すらも削り、限界を超えてチカラを発揮するヴィータとグラーフアイゼンの《リミットブレイク》である。その噴射口から齎される爆進に乗り、幼い身体を軸に大回転する事で強大な遠心力を蓄えつつ大気を爆散させる勢いをもって、叩き潰すべき敵へと向かって直進飛行して行く。

「キヒツ! 面白れえ、来いやガキイ——ツ!!」

「うおおおお——っ!!」

牙を剥く凶悪な笑みを前面に曝して豪胆に煽動するファング。ヴィータの全身全



「——シユラアアアアアアアアクツ!!!」

腹の底から吐き出された鉄槌の騎士の哮りと同時にグラーファイゼンに帯電されたフェイトの雷光が弾け、爆発するかのよう噴射口から吐き出されていく。それによつて生み出された爆発的な推進力は異次元の速度と相応の破壊力を鉄槌に与え、刹那の瞬間の爆進が幼い顔を殴り付ける寸前の鋼拳を超越し、埒外の貫通力を得た金色のドリルがフアングの側頭部に叩き込まれた。

「——グウウツ!!」

しかし今回の敵はどこまでも規格外であった。ハンマーヘッドの内に帯電させた膨大な電力を振るつて叩き付ける直前で暴発させ、その熱量を噴射口から外に吐き出した時に発生する反動を利用し雷速の領域までスイングスピードを加速させてその一撃の破壊力を莫大に上昇させるヴィータとフェイトの連携技《ドンナーシユラク》は音すらも突き抜けるが、その並外れた貫通力を持つ先端のドリルは人間の限界反射速度を超えて振り翳された左腕によつて受け止められ、しかも鋭利な突起は褐色皮膚を破る事無くその上に突き立ったまま回転摩擦によつて火花を飛び散らせている。防がれた。

「っ!? クソオオオーツ! テメエどんだけ人間止めてやがるんだよっ!!」

「ハツハアーツ! この低度の事でキョドリ回つてんじやねえよガキイイ! オラツ、もつと気合いを入れるオオオオオーツ!!」

フアングの左腕に押し付けているグラーフアイゼンにどれだけチカラを籠めて押し込もうとしても飛び散る火花の量が増えるだけでピクともしない。眼前まで振るわれていたフアングの鋼拳はドンナーシユラークが炸裂した瞬間にその衝撃で足下が大きく陥没し、フアングが足を捕られてバランスを崩してくれたおかげで僥倖にも繰り出した本人の方から止めてくれたのだが、大気を激震させ大地を大きく抉る程の一撃を身で受け止めたというのにまるで堪えていないとは如何なる事か!? 噴射口から吐き出された雷撃が複数の稲妻となつて周囲一帯を穿ち、凄まじい剛撃の圧迫が地割れを引き起こし四方に走らせていくなどの天変地異、それらを一撃の衝撃によつて引き起こす破壊力をこの男は何故受け止める事ができるのだ? ここまできたらもう「魔力量がどうこう」の話じゃ説明できない。

その不可解にして絶望的な現実を目の当たりにしたヴィータは子供が痲癩を上げるかのように叫び散らしながらも持てる最後のチカラを振り絞る……だがそんな彼女に更なる絶望が追い打ちを掛けた。とうとう「彼女の相棒」に限界が訪れてしまったのだ。

劣勢の戦いを続けて全体に無数の亀裂が入り、元々崩壊寸前の状態だったグラーフアイゼン。そんな状態でドンナーシユラークなどという攻撃の反動が大きすぎる大技を使ったツケが無情にもここで回つてきた……。

「ア……アイゼン……ブーツ!!?」

氷海が徐々に割れていくような鈍い音を鳴らして鉄槌全体に走っていた亀裂が大きく広がり、「鉄槌の伯爵」の名を冠するヴィータの長年の相棒は無数の鉄塊と化して砕け散る。その無惨な姿を目の当たりにし、涙を飛び散らせて悲痛に相棒の名を叫ぶヴィータ……なんと非情な事か、そんな彼女の心情など無関心にフアングは容赦なく再び拳を振り上げている。

「沈めオラア……ブーツ!!!」

そして今度こそフアングの拳は幼き鉄槌の騎士の顔面に突き刺さり、その小柄で先の先まで地を抉る程に猛烈な威力で殴り飛ばされた。

衝撃で頭に被っていた兎の帽子が外れ、中で気を失っていたリインが外に弾き出されて焼け野原に虚しくもその小さな身体を転がした……そしてヴィータは自身の全身を使って出来上がった道の終着地点で横倒しに倒れ、眼から悔し涙を零しながら意識を暗転させたのだ……この瞬間をもって、この戦いの大勢は決した。

「ヴィ、ヴィータ……ちゃん——ツ!!?」

「アハハハッ! ダメだよお姉ちゃん? 味方が倒れてブーツとしてちゃあ、その間にもっと多くの味方が死んじゃうよお——こんな風にねええっ!!!」

「っ!? しまっ、フェイトちゃん逃げてっ!!!」



れるなのはの首に両手で掴み掛かつて彼女を宙に吊るし上げ、一般の成人男性など足下にも及ばないような凄まじい握力をもって呼吸器官を圧迫……遵つてなのはは一瞬の内に呼吸困難に陥つた事で喘ぎ声を上げ、強制的な浮遊感と息が詰まる感覚に恐慌し足をジタバタとさせて藻掻き苦しみながら拘束されてしまう……ヴィータが戦闘不能に陥つてからここまで経過した時間はなんと僅か三秒……時空管理局が誇る二大エースはこの僅かな時間の間に二人共が敵の暴力の前に腑甲斐無くも無力化されてしまつたのであつた。

「あ、が……あ……ぐ……」

首を絞め付けられ、頸骨が軋む音が焼け野原に痛々しく鳴り響く。酸素の供給を断たれ、耐え難い圧迫感と段々と意識が朦朧としていく酩酊感で抗う気力が抜けていく……なのはは苦しみに喘ぎながらも生気が消えかけた瞳で自分の首を両手で絞め上げてきているフアングの顔を見下ろし、その獲物に齧り付く猛獣のような形相を視界に入れて歯を食い縛つた。

「へへへ、どうしたこんなもんか！ 管理局のエースなんだからテメエら？ 殴られてパイオツ揺らしたり転がつてパンチラ見せたりドMセツ○スパイルばかりしてねえで、もつと戦いの方で楽しませろよなあ。こちとら戦争しに来てんだ、根性見せて抗わねえとサクツと殺しちまうぞ？」

——この人……本気の握力で絞めていない……遊ばれて……いる……。

この化物染みた男が本気を出せば女の細首など一瞬で握り潰せるだろう。なのにこうして相手の限界を計るかのようになのはの首の骨を折るか折れないかのチカラ加減で彼女を苦しめて鬨るのは完全に彼女を舐めきっているからに他ならず、お前などいつでも殺せるという傲慢の上で彼女が自分の手の中で藻掻き苦しむ様を楽しんでいるのだろう。

よつて今すぐにとどめを刺してくるわけでは無いと判断したのか、それとも自分の身よりも周囲一帯に転がっている仲間達が心配だったのか、普通の人間ならば首を絞め上げられている事による恐慌状態に陥って何もできない筈の状況でなのは視線だけを動かして周囲を見回してみた。

「——」

「嘘……やろ？ ……ヴィータ達が、フェイトちゃんとなのはちゃんか……みんな……やられてもうた……そんな……」

「気を遣わなくても有り得ない……でしょう……」

「——」

「うゝ、あゝあ……なの……は……」

「アハハハツ、人の心配をしている場合かなあ？ お姉ちゃん優しいねえ、自分の方が



よつぽど死にかけているのにさ♪」

チカラ無く焼け野原に横たわる歴戦のヴォルケンリッター達、絶望的な戦況を目の当たりにして地面に崩れ落ち悲鳴すらも出ないくらいに弱々しく戦慄している様の六課の部隊長、他の同僚達が失神している中で単身押し潰されるような戦場の殺気にギリギリ耐えながらも地に伏せて意識を保っているのが限界な翠髪の新人、重傷の血塗れで倒れ自分の命が危険な状態にも関わらず敵に拘束された自分を心配してくれている一番の親友、その背後に激しく駆動する凶刃を携えてゆつくりとした歩みで迫る敵の猫目の少年。

——シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん、ザフィーラさん、フェイトちゃん、みんな……。

「ぐ……っ!!」

冗談じゃない、お前達みたいな最低な連中に屈して堪るか！　なのはそんな感情を籠めた視線でフアングの眼を射貫くと、奴の表情から獰猛な喜悦が失せていく。

「……気に食わねえなあ。　テメエ、絶望が足りねえ。　これから死ぬ奴の眼をしてねえ」

言葉とは裏腹に彼は喰って掛かるようなのはの眼を興味深そうにまじまじと見つめている。

「非殺傷設定なんて温いモンを使っている管理局員だから自分が魔法戦で死ぬって実感を持ってねえのか？ ……いいや、違うな。コイツの眼はそんなじゃねえ——」

フアングは自分の過去を思い出したかのように——

「——覚えがあるぜ女。 テメエのその眼、まるで昔俺が殺したあのクソ女と同じじゃねえかよ。 その何もかもが自分の思い通りのキレイなモンじゃねえと気が済まねえつてツラあ……」

ぶつぶつと独り言を言うかのように言うフアング、しかしその視線は無数の氷針のように鋭い。

「う——あ……」

それを受けてなのは唐突に全身を硬直させた。 体温を根こそぎ奪われていく感覚に指一本動かせない、まるで残った僅かな生気を奪い尽くされていくかのように……気が付くと彼女の負傷箇所からの流血が蒸発をはじめていた。

「テムエ……まさか——っ!!」

そしてその疑心は確信へと至る——

『戦争なんて無くても人は繋がれるよ』

過去に灼熱の炎の中へと消えて行つた、慈愛の心を胸に宿す“薔薇の少女”の言葉を思い浮かべて。



喜びのような、苛立ちのような、そんな気狂った罵倒を至近距離で受けてなのは思わず表情を引き攣らせた。この男は何を言っているんだ？

「いいなあ、いいぜお前え。そそるぜ犯してえ殺してえ堪んねえっ！引ん剥いて犯して引き裂いて引き巻つて、吊るして晒して嘔み千切つてやらアツ!!」

いったい何に……何に激昂しているんだ。

「屈辱だぜ、冗談じゃねえ許せねえ。裕福でいられた人生を自分から捨てておいて不辛ぶりやがつて、そんで人に殺し合いはダメだとか繋がれるだとか舐めた事をほざいてんじやねえっ!! だったら試してやろうじやねえか、ここでこの女を……次元世界中のテメエと同類の奴等を俺が皆殺しにしてやれば、あの世のテメエはまだ同じ事をほざいていられるのか？なあ、「バーバラ」アア……ツ!!!」

「な——きやあああああつ!!」

その激昂のままにファングはなのはの身体を無造作に空へと放り投げた。突然の解放感に驚き、全身が強引に引つ張り上げられて行く激痛に悲鳴を上げる上空のものを底なしの殺意を乗せて見据え、ファングは獠猛な牙を剥いて狂い笑む。もう容赦は一切無い。

「あくあ、ボク知くらないつと。ファングが「マジ」になつちやつたよ。これハタをしたらミッド丸ごと消えちゃうんじゃないかなあ……」



「な……なんやねん、アレはっ!!?」

「宇……宙……?」

その「孔」から覗く景色は闇に輝く銀河の星々……この星々の全てが超高濃度の魔力の塊であり、どうにもできない絶望感に打ちのめされていたはやと瀕死の重傷で地を這っているフェイトの目がその異常性に惹き付けられる。

「ま……ずい……意識……が……」

無論、無数に浮かぶ雲の間に放物線を描きだしていたなのも出現したその絶大な魔力の気配を察知していたのだが、彼女の意識は既に飛行魔法を展開する事が困難な程に朦朧としていて、それを保つのが精一杯な状態であるが故に身動きが取れずにいたのであった。

劣勢続きの戦闘の疲労とカツツエの猛攻を受けて蓄積したダメージに数分の間首を絞め上げられて呼吸困難に陥っていた事による一時的な意識障害、極めつけは今でも地上のファンングから浴びせられ続けている朱い熱波のような殺意だ。まるでホースから流れ出る赤い血を継続的に浴びせ続けられているかのような悍ましい狂気と万力のプレス機で押し潰されるような圧力を内包する怒気……正直言って強靱な精神を持つなのはじやなかったら既にショック死している事だろう。これだけの害を被って彼女は本当によくここまで耐えたものだと感じに値するが……その奮闘もここまでのよ







「こんなところで終わってまう言うんか？ ……私達の六課が、夢の部隊が、長い時間掛けてようやく始まったって言うんに……こないな仕打ち、あんまりやろ……」

大空の蒼穹を暗黒で侵食して空から墜ちる不屈の少女に振るわれる魔力の塔をどうする事もできずに絶望に泣き崩れ、はやては焼け野原の上に両手を着き、這い蹲ってしまつた……圧倒的質量の魔力刃がなのはに迫っていく……もはやこれまでか……。

「そんなの……嫌……わたしは……まだ……あの時の……男の子に——」

お礼を言っていないと言うのに……飛行魔法を使えずに墜ちて行く感覚、段々と失いゆく意識と戦意、左に視線を向ければ底知れぬ絶望の闇がもう目の前……そんな絶体絶命の危機の中、なのはは八年前に自分の命を救ってくれた美少女のように綺麗な顔をしていた少年の事を想っていた。生まれ故郷の世界の陽だまりに残してきた家族や友達でも今焼け野原の上で蹲っている親友でも瀕死の重傷を負って倒れた彼女の一番の親友でもなく……。

「……助……けて……もう……一度……会いたい……よ……っ!!」

「——世界が氷り漬いてしまえばいい」

瞳の碧から一滴が流れ落ち、その少年との再会を強く切望した刹那——彼女は黎明の光に包まれた。

「……ふえっ!?!」

冷たくて硬い、けれども暖かくて心地が良い。そんな矛盾した感覚に身体を包み込まれたのはは失いかけていた意識を瞬時に覚醒させて思わず気が抜けるような呆けた声を出してしまった。

同時に結晶同士が重なり合うような幻想的な騒音が鳴り響き（擬音にするならば『ガッチイインッ!!』と表現する）、覚醒させた意識と視線を左に向けると眼前まで迫って来ていた極大の魔力刃が丸ごと氷り漬いて氷の塔に変貌しその場に停止していたので、なのはは仰天のあまりに思いきり眼を見開く。

「ふ……ふええええええええええつ!!」

素つ頓狂な情けない声を上げて思わず自分を包んでいる硬い何かに強くしがみ付いてしまう。それはそうだろう、ファンクが振るった魔力刃はEランクの魔力が籠められていたのだ。そんな嘗て世界を滅ぼし続けると共に転生を繰り返していた呪われた魔導書すらも凌駕する災厄がアツサリと氷り漬いてしまったのだから信じられなく思うのも仕方がない……いったい何故と思うと、彼女の耳元に凜々とした声が囁かれる。

「……までよく頑張った。ごめん、また助けるのが遅れてしまったな……」

「——あ……」

その声を耳に入れた瞬間、なのはの眼から流れ出る涙は悲しみから来るものではなくなった。

恐る恐るその顔を見上げてみる。それは昔よりも若干大人びたとはいえ、相変わらず凜々しい美少女のように整った顔立ちで、周りの人間を男女性別関係なく惹きつけるような毅然とした雰囲気纏っている。腰の下まで伸びる艶やかな長髪は雪のように白く女性である自分ですらも羨む程で、自分を優し気に見下ろしているその瞳の色は氷のように透き通るアイスブルー……見た瞬間に解った。見間違える筈もない、紛れも無く今自分を抱きかかえてくれているのは再会を強く望んだ、あの時の少年。

「やっと……やっと……会えた」

八年前と同様にその華奢にして逞しい両腕で横抱きにされながら、なのはは流す涙の質を嬉しさに変える。彼女が切望して已まなかつた黎明との再会は、遂に叶えられたのであった……。

# 戦乙女達を救い上げる刹那の粉雪

「な……んだとっ!? 俺の《ダーインスレイヴ》が、氷つた……!」

東の空に投げ飛ばした管理局のエース・オブ・エースを跡形も残さず仕留めんと自身  
が振るった極大魔力刃が丸ごと氷漬けになってしまった光景を目の当たりにしてフア  
ングは狂喜の絶頂<sup>エクスタシー</sup>を治め、その表情を信じられない程の衝撃を受けたような驚愕に変  
えていた。彼の右腕から伸ばした闇の剣は空の蒼を先の先まで赤黒に塗り潰す程の  
圧倒的質量、そのEXランク級の規格外な攻撃魔法の全てが根本である彼の右腕ごと氷  
の巨塔に変貌してしまったこの事態ははやて達機動六課は当然の事、彼等第二二六強襲  
中隊からして視ても尋常ではないようだ。

「今何所からか湧いて出て来やがったあの白髪のガキがコレをやったつうのか? 有  
り得ねえ、ダーインスレイヴは俺の通常状態での全力の魔法なんだぜ!」

「うっひゃー、これはさすがに驚いたなあ、フアングの魔法そのものが凍らされちゃった  
よ。アハハハッ、凄いや!」

「ふふふ、ああそうだな。予想した通りの上質な客が御到着したようだ!」

「なのはちゃん、助かったんか? ……良かった。良かったんやけど、何なんやあのキ

レイな子。 女の子？ ……それにしてはなのはちゃんをお姫様抱っこしとる姿と雰  
囲気が様になつとる……男の子か？ ……いや、それよりも彼(?)は何処の誰？ いっ  
たい何者やねん？」

最悪の事態を好転させるかもしれない謎の援軍が現れた事で地に泣き崩れていたは  
やてですらも正気に返り、機動六課隊舎跡地に居る意識のある全員が氷の塔が伸びる東  
の空で密かに再会の嬉し涙を流すのはを横抱きに抱えて悠然と立っている来客者の  
少年に視線を集めた。

一見華奢な身体つきに裏社会の組織の執行者を思わせるような前開きのロングコー  
トを身に纏う謎の少年。 戦巫女を連想させるような勇ましい童顔、鮮やかなアイスブ  
ルーの双眸が射貫く者を凍らせるように側の空間を通過する氷の塔の根元で呆気に取  
られているファンングを鋭い視線で見据えている。 その視線に宿る氷の刃のような威  
圧感の間違いなく戦場に立つ戦士のそれだ。 ファンングとヴォルカーンが口端を吊り  
上げる。

「かはっ！ こいつあ面白え、やつとまともに戦えそうな奴が出て来たみてえだな、オイッ  
！」

「ふっ、せっかく【派手な花火】で誘い出したんだ、盛大に歓迎してやるとしようではな  
いか」

強敵に餓えていたフアングが歓喜を上げて右腕の表面を覆う氷の層を自由な左拳で叩き割って動きの制限を解放。それを見計らうかのようにヴォルカーンが部下達に向けて指示を出す。

「貴様ら、戦場の観測はここまでだ。待たせたな。各狙撃兵隊と空襲兵隊は東の空に現れた敵援軍の小僧の迎撃を開始しろ。それ以外の隊は敵の攻撃に備え、隊列を組んで身構えておけ！ 油断はするなよ、奴等はおそらく六課の小娘達とは一線を画す本物の戦士だろう。各自気を引き締めて掛かれっ!!」

「「「「「了解ヤしましたヴォー、少佐殿!!」」」」」

「おおー、みんな気合い入っているねえ。アハハッ、これはボクも負けてられないや

！」

隊長の命に従い第二二六強襲中隊の兵達が集まって空襲を想定した適切な陣形を組み、空戦魔導師達が飛行魔法を発動して東の空のなのはと氷眼の少年に向けて飛び出して行く。ヴォルカーンの隣で愉快そうに笑むカツツエが彼等の戦場に懸ける熱量に負けじとチェーンソーライフルを再駆動させ、その超高速回転をもって朱い光流を纏う異次元の摩擦を持った凶刃が向けられたのは彼の側に瀕死の重傷で倒れ伏し意識を遠退かせたまま野晒しにしてある金色の執務官。

「っ!! 止めるんや！ これ以上私の大切n「黙れ、耳障りだ無能が」——っ!?





「アハハハハハッ！死んじやえええええええつ！！」

そして無情にも振り下ろされる朱い凶刃。　優しき《金色の閃光》フェイト・T・ハラオウンの命運もこれまでか――

「そうはさせるかよっ！！」

刹那、ガギイ“イ”イ“インツ！と奏でられた金属摩擦の狂詩曲ラテンディが金色の閃光の輝きを間一髪で救いだした。　勇ましい少女の声と共に上から割って突き入って来た突撃特化の槍型デバイスによって振り下ろされたカツツエの凶刃はフェイトの身体を引き裂

く事なく阻まれ、刃を削り取る摩擦の火花がカツツエと新手の援軍の少女との間で激しく飛び散っている。まるでぶつけ合う二人の視線を表すかのように。

「およよ?」

「お楽しみのところ悪いが、ちよつと横槍を入れさせてもらったぜ!」

「アハハツ、なーんだまたお客さん? 今回の戦場は賑やかで楽しいよ!」

槍型デバイスの長い柄を手にその不敵な紅い視線を至近距離でカツツエの狂喜にぶつけているのは前開きにして着熟したジャケットに黒いアームガードとレギンスという所謂ボディコン調なバリアジャケットを身み纏った姉御気質を感じさせる二十歳前後くらいの女性であった。羽を休める鳳凰を思わせるような奇抜な紅髪に覆われた頭部には二本の角を横つたヘッドギアを装着しており――

「そりやどーも。けどアタシ達が来たからにはコイツは殺らせねえ――よっ!!」

「のおっ!」

彼女が振るい上げる無双の槍は辻風を巻き上げて朱い摩擦を纏う凶刃を弾き上げる。

なのはのデイバインバスターをも切り裂いた摩擦を押し退ける一迅は尋常ではなく、強烈な突風に手を引かれるかのようにカツツエ自身も弾き上げられた得物の反動を受けて仰け反った。

そこへ更なる援軍が強襲する。

「チャンスだ、後輩ちゃん！」

「これで決める！やあああああーっ！！」

様々なギミックを搭載したトンファア型デバイスを戦槌のように大きく振り上げ、カツエの後ろ右斜め上から裂帛の気合いと共に流星の如く襲来してきたのは、誰もが真面目ながらも快活な第一印象を抱くであろう気が強そうな可憐な美少女だ。白百合の花弁と同じ色の髪を赤いヘアピンでセットしたショートポニーテールを突風に揺り寄せ、落下の勢いをつけて仰け反り体勢のカツエの頭上に振り上げたトンファアを思い切り叩き付ける――

「おおっと、あぶない！」

が、その戦槌のような強烈な一撃がカツエの頭を捉える事なく地面に追突して大爆発が起こったかのようにその地面が爆砕され、六課の跡地にまたしても巨大なクレーターを形成しただけの結果に終わる。何故ならカツエはあの仰け反った体勢で器用に身体に掛かった反動を利用して重心を後方に傾け、そのまま大きく後方に跳び退いて不意打ちを回避したからだ。

「くううう、おっしいな、もう少し勢いが乗っかってさえいればあー！」

左手に持ったクレーターの中心に押し付けている状態のトンファアを地面から上げ、その場にゆらりと立ち上がりながら白百合の少女は心底悔しそうに悪態を吐いている。

確かにカツツエが今の一撃を回避できたのは紙一重の差だったようであり、白百合の少女が立ち上がったってキッ！ と睨みつけた先で余裕の笑みを崩す気配のないカツツエの額からはほんの少しの冷や汗が流れ出ているのが見えた。

「アハハハツ、やるねえ、体勢を崩した時に仕掛ける不意打ちのタイミングはほぼ完璧だったし、相手を一発で仕留めきる攻撃力も十分にある。実際に今のはボクも少しヒヤつとしたよ。ただボクの機転と体捌きの方が上だったみたいだけど♪」

「ムッ！　なんか生意気ね。　年上のお姉さんには敬語使いなさい、そういうのは小さい内に直さないとロクな大人にならないわよ」

「いーもん！　ボクは表面よりも実力なかみで勝負する大人になるからさ♪　それよりもさあ、不意打ちのタイミングはよかったと思うけれど、味方や重傷の救出対象が近くに居る状況で今の火力を叩き付けたのはちよつと迂闊だったんじゃないのー？」

「はい？」

「だって鳥みたいなお姉ちゃんも死にかけてた金髪のお姉ちゃんも君の不意打ちの衝撃波でみくんな吹き飛ばされちゃったみたいだしさ」

「ああ、その事なら心配は無用よ。　狙い通りだし」

「え？」

指摘に対してそれこそが狙い通りだと満面の作り笑いで返す白百合の少女。　その

ざつくばらんな返答を聞いてカツツエは一瞬呆けて白百合の少女が立つクレーターの外れの片隅に視線を移すと、大きめの石炭と化している隊舎の残骸の陰で先程横槍を入れた紅髪の少女が未だに意識が戻らないフェイトを腕に抱えて彼女を呼び覚まそうと必死に呼び掛けているのが視界に入った。

「おい、死ぬな！ 眼を開けてくれ！ 生きるのを諦めるなっ!!」

「う……………?」

生きてくれという誠実な想いが届いたのかフェイトは意識を取り戻し、寝起きのように瞼を半開きにかけて眼前で知らない顔が心配そうに自分の顔を覗き込んでいる事に気付いたようだ。その知らない顔である紅髪の少女が心から安堵した笑みを浮かべる。

「ああ、よかった。 まだ生きているみたいだな」

「……………君……………誰？」

「……………」

意識を取り戻したばかりでまだ臃げなフェイトの声音を耳にした途端に何故か一瞬眉を顰める紅髪の少女。助けたのに不審そうに誰だと言われたのが若干ショックだったのだろうか？ 今はよくわからないがとにかくフェイトの命がまだ現世に繋ぎ止められていた事を喜ぶべきだろう。だが彼女が瀕死の重傷を負っていて今も危険

な状態である事には変わりはない。一刻も早く応急手当をする事が先決だ。

「ほら、これを飲めよ。ウチの隊の魔双剣士秘伝の活力剤だ」

「ん……!？」

「つまりああいう事♪」

「ふーん、成程ね。ボクの体勢を崩した時にはもうあのお姉ちゃんはお姉ちゃんを避難させるように動いていたんだ。アハハッ、これは参ったなあ、一本取られちゃったよ♪」

臆げに疑心の眼を向けてくるフェイトの口内に無理矢理謎の丸薬を放り込み、何処から取り出したペットボトル（10ℓ）の口部を彼女の口に銜えさせて中の水で丸薬を流し込んでいる紅髪の少女を得意気に立てた親指で指してフッフッフ とドヤ顔を向けてくる白百合の少女に対し、カツツエは納得の笑みを浮かべて素直に彼女達を称賛していたが、楽し気に笑いながら小さな後頭部を片手で掻く彼のその仕草からはまだまだ余裕である事実が窺える。現に今の攻防で彼には僅かなダメージすらも与えられないのだからそれも当然だろう。まだまだ彼の純粋な狂喜を崩すには足りないようだ。

……その一方で――

「かはっ、上等だ！ あのガキ、邪魔してくれた礼はキツチリと――!？」

エース・オブ・エースにとどめを刺しに放った必殺の魔法を簡単に無力化してくれた水眼の少年を標的の獲物に定め、次々と東の空へと飛翔して行く第二二六強襲中隊の空襲隊兵達を全員追い越して誰よりも速く獲物に自身の牙を突き立ててやるとフアングは飛行魔法を発動しようとするが、その瞬間に何者かが放った一発の魔弾がフアングの側頭部に直撃する。

「通りすがりのイケメン参上つてな」

「おーおー、クリーンヒット、さっすがー！ そんなスパイアクション映画の主人公みたいなデタラメな撃ち方でよく当てられるよなあ」

「ハッ、当然だろ。 オレ主人公だし」

魔弾を放った犯人はその頭上30m付近に張り巡らせている光の鎖の上に悠然と立ち、誰が見ても不快になるであろう不遜な笑みを浮かべていた。 敵に魔弾が直撃した事で連鎖的に起きた爆発の影響で下方に立ち込めた爆煙を実に爽快そうに見下ろして、手に持つ銃型デバイスの砲口を口許に上げてそこから立ち昇る硝煙をフーツと吹き得意気に恰好を付ける様は如何にも気取った御調子者だ。 頭髪は金色に染めていて、前開きにして着熟している赤い上着のバリアジャケットは右側の袖だけがバツサリと切り取られており、そこに通ざれている剥き出しの右腕には刺青が彫つてある。 その青年の風情は反社会の思想そのものを体現しているかのよう破天荒。

「でもさあ。君、今の魔力弾、非殺傷設定にしないで撃つたでしょ？ 大丈夫なの、ワケありだけど仮にも僕等つて管理局所属の部隊だよな？」

「アホか。あの半裸の超ド級変態野郎はこんなもんで殺せるタマじゃねーよ。要はターゲットが死ななけりゃいいんだ。最終的に結果が上々なら、何をどうしようが問題無えだろ」

「ん〜、そんなものかなあ……」

その型破りな銃技に側の空間を飛行魔法で浮遊して彼と共に空に並ぶ空戦魔導師の小柄の少年もまた、魔弾の着弾地点付近を覆い隠した爆煙を額に右手を当てて眺めてはしゃぐ子供のように感心を露わにしていた。その両手に握られているデバイスはエメラルドに光るルーン文字が刻まれた二振りの剣。それとお揃いの色をした頭髮にはなんとも可愛らしい癖毛が二ヶ所にピヨンと撥ねていて、それが持主のはしやぎ具合を表しているかのようにピヨコピヨコと謎の動きを見せる様はまるで小犬の耳のようで、その童顔と相俟うと彼が男子であるという現実を疑いたくなるくらいに愛らしい。しかし、少年が纏う雰囲気はその愛らしさに反して非情に研ぎ澄まされており、下手をしたら管理局のエース・オブ・エースたるのはすらをも凌駕する“絶対的な制空圏”を感じさせている。敵意を持って彼の間合いに入れば刹那の一瞬の内にその双剣によつて細切れにされてしまう事だろう。



「おのれえ、またしても新手かあああああ——っ！」

「やつろー、とつとと墜ちろおおおお——っ!!」

「「ザツケンナコラー——ッ!!!」」

辺りに爆煙が充満するとそれに紛れて機転を利かせた敵兵達が調子扱いたガキ共に思い知らせてやると高見で見下ろす二人を包囲挟撃するように奇襲を掛けて来た。

数は十……いずれも空戦魔導師で銃剣やアサルトライフル、軍刀などを武装してフェイトの最高飛行速度にも匹敵する亜音速が出ているにも係わらず非情に研鑽された統制をもって少年二人に襲い掛かって行っている様子から察するに、彼等はおそらく十人全てがなのはやフェイトと同じSランクの実力を有している事が窺える。東の空に飛び立とうとする途中の不測の事態に機転を利かせて迎撃ターゲットを変更し即座に連携を組みつつ対応するという兵隊としての練度の高さも素晴らしいが——

「……………ニヤァ♪」

彼等が二人の制空圏を侵した刹那、小柄の少年の口端が吊り上がると同時に彼の双剣がエメラルドに閃く——

「「「「——おおおお……は?」」」」

「「「「スツゾコ——グワ——ッ!」」」」

そのあまりの剣速の疾さで柄より先に存在する筈の剣身が消失したかのような錯覚

が起こり、二閃のエメラルドが空に走った瞬間時間が停止したかのような錯覚を覚え、一拍の間を置いて全方位から迫って来ていた敵兵達全員が四肢を切断されて地に墜ちて行つた。 瞬殺だ。

「《アイゼナツハ流》二閃十殺！ なーんてね♪ えへっ！」

「テメーの魔双剣術も大概デタラメじゃねーか！ それに非殺傷云々とかテメー人の事言えた義理かよオイ？」

手足を失つた敵兵達は落ちた下方で身動きできずに幻肢痛に喘ぎ地をのたうち回っている。 阿鼻叫喚の酷い有り様だ。 破天荒少年が揶揄うようにケラケラと笑いながら指したその様子を眺めてあの惨状を作りだした張本人は何故だか恍惚とした表情を浮かべた。

「えへへへ、今日も僕の《クサナギ》は絶好調だねえ。 あんなにキレイに手足をちよんぱできてるなんて相変わらずの良い切れ味い。 えへへへ、良い気分、もつと斬りたいなあ〜♥」

双剣型デバイス《クサナギ》を持った両手で自分の両頬を挟み込み、クネクネと奇妙な仕草をして敵を斬つた事への喜びを表す小柄の少年。 双剣で斬つた敵が苦しむ姿を目の当たりにして悦ぶとはこの少年魔性の異常者だ。 愛らしい童顔のおかげで可愛らしくも見えるがそれが余計に悍ましく感じさせている。 これにはこの破天荒少

年もさすがに表情を呆れ半分で引き攣らせていた。

「うわあ、こいつホント変態だわ。　　はは、マジ面白れえ奴。　　斬るのってそんなに楽しいのかよ?」

「うん、楽しいよ♪　斬った痕から血がドバーって噴き出るとキレイだしー♪」

「何だよソレ。　お前マジ管理局員向いてねーな!」

「んんん、君も人の事言えないと思うけれど?」

「ハッ、そりゃあ違いねえ。　ところでよ、オレって魚座じゃん?」

「ん?　どうしたのいきなり?」

「今月の星占いにあっただけだよ、どーも魚座は山羊座と相性が良いらしいんだわ。

「お前何座だ?」

「ギザギ座!　なんちゃって♪」

「オイオイ、何ブリザード級のギャクかましてくれちゃってんの!?　ただでさe——」オ

イ、ガキ共——あん?」

空中で二人がくだらない雑談をしている内に何時の間にかやら辺りを覆い尽くしていた爆煙は収まって消失していたようだ。　唐突に不機嫌な声に呼び掛けられた為に雑談を止め、振り向いて見下ろしてみると其処には無傷のファング・イスカンブルグが空でぶざけて合っている二人を若干の苛立ちの形相で睨みつけながら拳をバキボキと鳴

らしている姿があった。

「テメエ等何さつきから人をシカトしてどうでもいい事をペラ回してやがる？　いきなり出てきて気持ちよくラリってんじやねえぞ小僧共が」

優しく語りかけるような声音だが憤る朱い眼光は見逃してくれそうもない。二人は完全に殺意の牙にロツクオンされてしまったようだ。

「おー！　本当に生きてた。　余計な心配しちゃったね」

「だから言っただろ？　この白髪野郎は超ド級の変態野郎だろうし、皮までカルシウムできているんだろーよ」

「え、そうなの？　この人小魚とか好きなのかな」

だがその怪物が向けて来る威圧を浴びても尚、二人が調子を崩す様子はこれっぽっちも窺えない。恐怖を感じる為の神経が壊れているのではないだろうか？　その舐め腐ったような口調はフアングの怒りのボルテージを静かに上昇させる。

「はは、どうやらテメエ等、余程死にてえらしいな？」

「うるせえ、黙れ」

同時に発砲音が鳴り響く。破天荒少年がフアングからの尋常じやない殺気に向けてられても全く躊躇もせず銃型デバイスの砲口を奴に向けて反抗の魔弾を放ったのだ。今度は人体の急所である胸を狙って撃ったようだが、それはターゲットの腕に払われ

て南の海の中へとダイブし巨大な水柱を建造した。

「こつちが話している最中だろうが、口挿むなよ白髪野郎」

「まったく非常識だよねー、もっとカルシウム摂取した方がいいんじゃない?」

「……キヒツ!」

——上等だ、身の程知らずのクソガキ共が。 誰に舐めた口叩きやがったのか今から

その身に直接教え込んでやらア。

とファングが二人の惨殺を心の中で確定して殺意の牙を口から覗かせると——

「舐めるな——戯けがっ!!」

突如として彼等が睨み合う場所の近場で壮烈な爆音が轟くと同時に巨大な炎柱が爆発するように立ち昇った。

そこに炎柱の周囲を旋回し離れ、地に降り立つ一筋の白雷在り。 圧倒的熱量を内包する炎に焼かれ、全身に火傷を負いつつも白銀の電光を纏いて白銀の美しい騎士剣型デバイスをその手に構え、劫炎荒れ狂わす敵將に毅然と向き合う気高き騎士は、白雷の貴公子”を連想するようなプラチナブロンドの髪がよく似合う美青年。

「くっ、読まれていたか……!」

火傷によるひり付いた痛みにも秀麗な顔を歪ませるその、白雷の騎士”の透き通るような碧眼に映る包帯で素顔が隠された敵將は次元王軍ラグナグンド第二二六強襲中隊

隊長ヴォルカーン・フォン・グラナート。

「青二才が、そう容易にこの私を出し抜けると思ったか？」

宙にうねる圧倒的熱量を内包した炎渦を天に巻き上げ、地獄の鬼すらも威圧する笑みで口に銜えたビーフジャーキーを噛み砕く様はまさに炎の魔人。

「あの白髪の小僧がイスカンブルグの魔力刃を氷らせてエースの小娘を救う」という派手なパフォーマンスを上空という全体に目が行き届くような場で披露する事で我らの意識をそつちに向けさせ、その隙に貴様等別動隊が我らに存在を覚られぬように気配を消しつつ迅速に我らの死角を襲撃……まあ悪くはないが、その低度の策では私の目を欺くにはまるで足りんよ」

まるで教え子の不足を指摘する教官のような口振りは余裕の表れだ。管理局側から視ればカツツエとフアングも最強の切り札級の戦力だろうが、彼等の隊長はまた更に別次元の格を有しているという事を嫌と言う程痛感させられる。

それ故に彼の死角を狙った白雷の騎士の騙し打ちは全く功を成さなかった……と言いたいところだが、当のヴォルカーンは蚊に刺されたかのように軽く自身の右上腕部分を左手で摩り出す。その掌には少量ではあるが血が付着していた。

「だがその速さだけは評価してやろう。まさか出し抜きを看破された上でこの私に一撃を掠らせるとはな、誇っていいぞ。まだまだ未熟さが目立つが思った通りエースの

小娘共よりは余程見所はあるようだ。面白い」

「まるで意に介していかないように称賛されても嬉しくありませんよ。寧ろその余裕が腹立たしく思います、侮られているようで」

「それはすまなかつたな。どうも管理局に所属する者を称賛する事など今までに一度たりともなかつた為かこういうのには不慣れでな、なにせ今日まで管理局に所属する魔導師や騎士など取るに足らない雑魚しか居ないだろうという認識を抱いていたのだ。完全に侮っていたわけではないが現実的に彼我の戦力差があるのだから仕方がなからう、許せよ」

まるで悪気が窺えない慙懃無礼な態度で詫びるヴォルカーン。その冷淡で不遜な物言いに対し、飛び出て来た文句は彼と対峙している白雷の騎士の声ではなく――

『ちよつとちよつと！ 先程から黙って聞いていれば随分と上から目線で言ってくれりゃないですか！ 貴方、ひよつとしてその包帯の下に隠している素顔は鉄面皮で出ているんじゃないですか!?!』

どこか機械音の混じる若い女性の声であった。その出所は今も尚白雷の騎士がヴォルカーンに切つ先を向けている白銀の騎士剣型デバイス――

「《ベアトリス》、頼むから急に大声を上げないでくれ、心臓が悪い」

『何を泣き言をほざいているんですか？ 不甲斐無いマイスターですね！ 君がそんな

調子だからあんな「燃やし尽くせええええっ!!」が似合いそうな鋼鉄鬼軍曹に馬鹿にされるんですよ!」

言つた通り、急に大声を上げて慥無礼な態度を崩さない敵に物申した自身が持つデバイスのA-Iに指摘を入れる白雷の騎士であつたが、逆にそれが「彼女」の癪に障つたようであり、自分が構えているデバイスに敵しくガミガミ指摘を返されるというシチュールなやり取りが繰り返されていく……どうやらこの騎士剣型デバイスの《ベアトリス》はなのはのレイジングハートやフェイトのバルディッシュと同じ、A-I人格が魔法の補助を手助けしてくれる「インテリジェントデバイス」のようだ。

「……」

『何ですかその畏まっただんまりな態度は? 乙女ですか? それとも小犬ですか? ライオンを前にしたチワワですかそうですか! 男の癖に情けないですねえ、シヤキつとして下さい! そんなに不安がらなくても大丈夫ですよ。君は騎士の矜持に従つて毅然と私を振るえばそれでいいんです! 何故なら君にはこの「ベルカの赤い雨」の二つ名を持つこの私が——』

持ち主の意見を跳ね除けて緊張した空気を台無しにする猛烈なマシンガントークを繰り返して続ける自分の剣に無言の戸惑いを向ける白雷の騎士。平静を装つてはいるものの、対峙している敵にすらも憐れみの目をされたので勘弁してくれと視線を宙に泳



がせてしまっている……そんな何とも言えないやり取りを遠見感覚で聴いていた破天荒少年と小柄の少年はフアングと一触即発の視線をぶつけ合いながらも愉快そうにニヤついていた。

「ぶぶつ、モルドの奴アホだろ？　自分のデバイスに説教くらうとかさ、マジありえねーし」

「キャハハハ、相変わらず面白いコンビだよねー、モルドとベアトリスはさよ」

「デメエらマジでいい加減にしゃがれ。そんなに死に急ぎたいのなら望み通りに二人纏めて速攻でブツ殺してやるよオツ!!」

そして高見の空から見下ろしながらの愉悦は下から見上げる者の眼には凄まじく愚弄しているようにしか映らない。従ってフアングは我慢の限界を超えて空から見下してふぎげきつっている二人の少年をこの牙で仕留め殺して黙らせてやると叫びつつ、人間離れた跳躍で上空へと跳んだ。放物線を描く軌道で上から二人に飛び掛かる鷹の如く降撃するつもりなのだろう。二人はその空を仰ぎ見やる。

「ははっ、半裸の野郎が上からイケメンと合法シヨタにダイブして来るとか一部の腐ったオネーチャン達が湧いてきそうなシチュエーションっほくてちよつときめえと思わね？」

「うーん、僕そういうのよくわかんないや☆　それより知ってる？」

「あん?」

フアングが殺意を纏い上空からこつちに向かつて落下して来ているにも拘らず、小柄の少年はニコニコと楽しそうに東の空に視線を滑らせた。その視線の先には地上より武装して向かつて来る敵空襲兵隊に対応すべく動き始めだした自分達の隊長とその腕に抱えられている精神沸騰状態なエース・オブ・エースが居る。

「君さつき星占いの話していたよね、山羊座と魚座の相性はバツグンだとか何とか」

「ああ、そういうそんな事言つたな。それがどうした?」

「【ヒュツ君】 って山羊座だったよね、誕生日は12月25日だつて本人が言つてたし」

「マジで!? 何でお前だけアイツからアイツの誕生日教えられてんだよ?」

「え? お前だけつて、ヒュツ君がロストウイングに入った時に自己紹介で言つていたじゃん。君が聞き流して忘れてるだけなんじゃないの?」

「あー、そう言われてみればそうだった気がしないでもねーなあ……で?」

殺戮の赤黒の流星となつて落ちて来るフアングがもうすぐ真上に迫つて来ているというのに雑談を止めないこの二人の肝っ玉の固さには呆れてものも言えない……破天荒少年が雑談の続きを促すと小柄の少年は落下して来る赤黒の流星を見上げつつ双剣を八相に構えて満面の笑みを浮かべ、こう言い残して流星を墜としに翔け出して行く。

「あのエース・オブ・エースのお姉さんがさ、もし魚座だったらロマンチックだと思わない？」

「……アホらし」

くだらなさうに鼻で笑う破天荒少年だったが、その眼は楽しい玩具を見つけた悪戯鬼のように笑っていた。

## 絶望の焼け野原を穿つ黎明の流星

氷の塔が海面に倒れ、天まで昇るような水飛沫をあげて氷の橋が架かる……その道標に完全武装でその上を飛翔する空襲兵隊が撃墜しに向かう目標は高町なのはを腕に抱えて上空に立つ氷眼の少年。

管理局の魔導師ならば余裕でSランクオーバーを取るであろう高位の空戦魔導師の集団が徒党を組み、フェイト・T・ハラオウンの最高飛行速度に匹敵する機動力をもって空を突貫する編隊はまるで彼等が通り過ぎる空道上に存在するあらゆる生物を一瞬で食い荒らして行く紫色の八咫鳥の群れのようなのである。

——うそでしょ、わたしと同等の魔力を感じる魔導師があんなにっ!!

なのはは氷眼の少年の腕の中で飛来してきている敵戦力の強大さを感じ、驚愕に眼を見開いていた。当然だ、質が量を凌駕できるのはあくまでもその質が圧倒的に勝っている場合のみで、質がほぼ同じならば量が勝る方が勝つのは当然の理であり、時空管理局最優の魔導師の称号《エース・オブ・エース》を持つのはですらも自分と同格のSランクオーバーの魔導師三人以上の包囲挟撃を受ければ撃墜は必至なのだから。

「……」

正面から行けば確実に墜とされる。それ程に強大な戦力がもう目前まで迫って来ているにも拘らず、この氷眼の少年は顔色一つ変えずにヴォルカーン達が戦闘を繰り広げている戦場をその氷眼に納めている。

——あんな異常戦力を馬鹿正直に正面から相手になんかしたら一巻の終わりだ、早く逃げないと!!

「あ……あのk——っ!?!」

焦燥に駆られたなのは自分を抱えている氷眼の少年の顔を見上げ、向かって来る敵隊から急ぎ離れるように促そうと今も激しく鳴り続けている胸の鼓動を抑えて口を開こうとするが、それは少年自身の手によって止められてしまった。

——ふ、ふえええっ!?

羞恥熱が高まるあまりに思考回路が沸騰しそうになり、連続して打たれる鼓動の音の間が無くなる程に心拍数も急上昇、なのは自分の唇に後数ミリ近づければ接触してしまうような至近距離にそつと添えられた雪のように白い指先を前に眼を見開き、顔全体を朱く染めて恥じらいの動揺を見せている。動揺のあまりにその指先から視線を逸らして見上げてみれば凜々としたアイスブルーの瞳が彼女の碧い瞳を優しく見つめており、空いた方の手の人差し指が少年の薄紅色をした唇の前に立っていた為胸の鼓動が更に速まってしまう。凜々しい女性にも見紛うような整った顔立ちの美少年が自

分を横抱きにしながら優しい眼で「ジー」とやる仕草が見下ろす光景は年頃の女性の眼には猛毒極まりないだろう、故に不屈の心という強靱なメンタルを持つなのはがタジタジになってしまうのも無理はないと言える。

「よっしやー！俺が一番槍いいーっ！！」

だが桃色空間を形成している場合ではない、こんな事をしている間にもう最前列の敵兵が二人を射程圏内に捉えそうだ。それを察知した氷眼の少年がたじろぐなのはに囁いた。

「口を閉じていろ。舌を噛むぞ」

——え？ちよ——にやあああああああ——っ！！？

訳の分からないまま心の準備が整うのも待つてくれずに容赦なく彼女にバリアジャケットを纏っていても全身が引き千切られてしまいそうな凄まじいGが襲い掛かった。今日まで彼女が十年間空の魔導師として飛んできて今まで見た事がないような超速度雲が流れて行く。

「ぐはあ——っ！！」

その一秒も経たぬ間の刹那、悶絶するような声が入ってきたので眼下に目を向けて見れば銃剣型デバイスを手放して海へと落下して行く紫の軍服を着た兵士が一人。

——えええっ！！ 何あれええええ——っ！！

驚愕が過ぎるあまりに彼女が持つ全マルチタスクが絶叫一色に染まっていた。今落下して行つた兵士が明らかに先程「俺が一番槍いいーっ!!」と叫んでいた敵兵だつたからだ。

「いったい何故と思う間も無く再び彼女に襲い掛かるGと視界を流れて加速して行く雲——

「な、なn——ぐふううっ!!」

「は、速過ぎr——ぶべらっ!!」

「ラウンドシーrr——あべしっ!!」

「イヤーーーッ! グアーーーッ!!」

そして瞬く間に次々と母なる海へと落下して行く第二二六強襲中隊の空戦魔導師達……よく見るとその落下して行つた敵兵達は皆身体の何処かに痛烈な打撃を受けたかのように苦悶の表情をしていた。

これが意味するのはこの刹那の間に敵空襲兵達が何者かによつて強襲されて打撃攻撃を受け、次々と撃墜されていつているという事に他ならないだろう。

「いったい誰が?」という疑問は撃墜された兵士達がその直前に飛行していたであろう位置を逆算し其処に視線を向けてみれば直ぐに解決できた。其処に存在していたのは撃墜点をマークしたかのように所々空中に浮かぶ氷塊でできた複数の足場だ。

そしてその総数は敵兵の撃墜数と比例しており、極めつけにはその全てがなのはを抱えている氷眼の少年の後方に浮かんでいる。詰まる所——

——この人がわたしを抱きかかえながらフェイトちゃんよりもずっと速いスピードで空を跳び回って、Sランクオーバーの敵魔導師達を徒手空拳や蹴りを使つて殴り落としているウウー——ッツ!!?

「怯むなああつ！ 撃つて撃つて撃ちまくれええええ——ッツ!!!」

氷眼の少年の圧倒的速力と近接戦闘技能の高さを目の当たりにした後続の敵兵達は無闇に接近するのは得策ではないと判断したようであり、迅速に遠距離射撃による空間弾幕爆撃殲滅戦法に切り替えてきた。

「にやあああああああああ——ッツ!!!」

エース・オブ・エースの悲鳴が無数の爆音と共に大空に轟き渡つた。

マシンガン、サブマシンガン、アサルトライフル、ショットガン、アンチマテリアル対物ライフル、

マイクロガン、ミニガン、バズーカ砲、バントアーファウスト対戦車擲弾、皆大好きRPG-7、グレネード

ランチャー、ロケットランチャー等々の対魔導師用改造質量兵器はもちろん。射撃魔法、追尾魔法弾、誘導操作魔法弾、炎弾、雷弾、冷弾、飛翔魔力刃、なのはの《エクセ

リオンバスター》にも匹敵する砲撃魔法等々の色取り取りの弾幕が二人の行く道を埋め尽くしていく。極めつけにははやての《フレースヴェルグ》とも遜色がない広域殲滅



砲撃までもが無詠唱で発射されて来る上に、豪華特典として無数の集束魔法ブレイカーが一斉に撃ち放たれて大空を蹂躪していく。

その地獄絵図のような空を見上げ、地上のはやて達はそれぞれ十人十色の驚きを露わにしていた。

「ななな、なのはちやああああんつ?!?」

「そんな、なのhゲホッ!　ゴホッ!!」

「おいおい、安静にしているよ。活力剤で自然治癒力を高めたからといってまだ背中  
の傷は塞がりきっていないねんだぞ、なあ?」

「いいや、大丈夫でしょ。あれアイゼナツハ流の秘薬だし」

「それ……説明になってないですよ」

「うお、すっげ!　空全体が爆心地じゃねえか。小規模の次元震が発生しているみ  
てーだし、ミッドぶつ壊れちまうんじゃないやねえの?　あはははっ!」

「全っ然笑えないわよっ!　もしそうなたらあたし達もタダじゃ済まないじゃない  
!!」

『そうですよ、タダより安いものは無いんですからね!　なのでタダで済むのならタダ  
で済む方を——』

「ベアトリス、頼むからいい加減に黙ってくれ」

地上では援軍に来た五人が地上に残っている第二二六強襲中隊の面々と交戦しながらも連携を駆使して其処らに満身創痕及び戦闘不能状態で転がっていた機動六課の面々を回収。彼女達を一ヶ所に集めてその周りを五人で囲む事で護りを固めていた。「かはははっ！　なんだテメエ等、逃げ回り出しやがったからもうへばったのかと思つたら随分と余裕そうじゃねえかよ？」

「アハハハッ、この状況でよく他の事なんかを気にできるよねー。自分達から進んでチエスで言う チエックメイト 詰み」同然の状況を作つたつていうのに……ひよつとして何か企んでいちゃったりする？」

東側では満身創痕のフェイトと未だに根気よく意識を保ち続けているミクテイーヌを含むFW陣を紅髪の少女と白百合の少女が護つていて、その眼前には第二二六強襲中隊の兵士達が隊列を組み一斉射撃の体勢を取つている。南側では肋骨を五・六本砕かれてノックアウトされたヴァイスを小柄の少年が護つており、その眼前でファングがまだまだ楽しめそうだと牙を見せて笑つている。その対角の北側では全員戦闘不能状態で気を失つているヴォルケンリッター達とリインを破天荒少年が護り、その眼前でカツエがこの状況で雑談に興じている敵対者達に対して呆れた笑いを浮かべつつも何かを期待するかのようなニヤ付いた半目で彼等を見据えている。そして西側ではやてを護っている白雷の騎士の眼前には無論――

「愚か者共が、わざわざ数の利がある相手に対して最も優位を明け渡す陣形を取るとはな」

第二二六強襲中隊の隊長であるヴォルカーンが白雷の騎士達を失望が籠った眼光で射貫き、背中の頭上に強大な魔力を孕む巨大な鉤十字の魔法陣を顕現させていた。彼が放つ威圧感に焼け焦げる鋼鉄のように追い詰めた愚か者共の精神を削ぎ落とす。

「数の利が最も活かされるのは包囲戦だ。加えて言えば戦力に差があれば差がある程にその決着性は決定的なものとなる。オルランドが今言った通り、貴様等はもう完全にチエスで言う『詰み』だ。阿呆共が、そんな足手纏いにしかならぬ小娘共を護つて何になるというのだ」

「……」

ヴォルカーンから蔑みの視線を向けられてはやては反論する事もなく俯いていた。それは現実的に認めざるを得ない事柄なので何も言い返せないのだろう。現に彼女達機動六課はヴォルカーン達第二二六強襲中隊に完膚なきまでに叩きのめされてしまい、こうして何所からともなく救援にやってきた別部隊の少年少女達に護られて現在自分達の為に彼等が窮地に陥ってしまっているのだから、足手纏いと言われても仕方がない。

それを心外に思ったのか、白雷の騎士が厳かな面持ちで言い返す。

「確かに兵法に倣うのならばその通りなのでしょう、戦況を悪化させる要素は例え味方であろうと切り捨てる、なるほど合理的です……しかし局内で『特殊な立場』に置かれている僕等ですが、曲がりなりにも弱きを助ける管理局の部隊で況してや僕は『義』を貴ぶ騎士、たとえ獣の腹の中に飛び込む事になろうとも救える命を見捨てたりしません！」

「ふん、『義』か……私も総帥閣下に『忠義』を誓った身だ、故にそれを否定はせん。……だが大局を見誤つてまでその小娘共を護る価値があるとは思えんな」  
ヴォルカーンは汚物を見るような蔑んだ目ではやて達を一瞥する。

「次元世界の法と秩序の絶対的守護者たる常勝不敗のエース達の栄光を失わせぬ為、その盾となる。成程、調査報告書通りだな、くだらん上に愚かしい。貴重な『聖遺物持ち』をそのような瑣末事の為に使い捨てにすると、つくづく管理局という組織は無脳の塵溜だな。反吐が出る」

「つ!! アンタ、あたし達の事を知っているの!？」

自分達の素性を知っているかのようなヴォルカーンの口振りに対し百合の少女が声を荒げて問い返す。するとヴォルカーンはまず自分の目の前に立つ白雷の騎士を一瞥し、次に小柄の少年、紅髪の少女、白百合の少女、破天荒少年と見定めるように視線を移していく。

「ああ、諜報部の報告書でな。

《戦天使》

《切燕》

《烈槍》

《朝百合》

《破戒狼》

そして

最後に自分の部下達が大规模爆撃を行った影響で隙間が見当たらない程濃厚な爆煙で埋め尽くされてしまっている東の空に視線を移したその瞬間、爆煙の空の一部分に、  
 円形の孔が穿たれた。

「第二秘劍——《彗星爛》っ!!」

孔を突き抜けて飛来した黎明の流星が焼け野原を穿つ。全身を一本の矢として急降斜下し、突き放った切っ先は大地を爆砕——

「「「「「ぐああああああ——っ!!?」「」「」「」」

同時にその着弾地点にて一斉射撃体勢を取っていた第二二六強襲中隊の兵士達に爆砕の衝撃が容赦無く襲い掛かり、TNT爆弾で建築物を爆破するかの如く彼等は纏めて蹴散らされた。

「——それ等を統べる《氷眼》。成程、こうして合間見えてみるとなかなか壯観では

ないか。戦場に立つ意識はともかく、戦闘能力の方は期待できそうだな」

「氷眼……まさか、情報部のファイルにも書いてあった要注意特記戦力!」

「グロースシュタット総帥と同種の『聖遺物持ち』だつて噂の奴か……かはつ、面白え

! 今日には本当に最高の闘争日和だぜっ!!」

流星が地を爆砕した影響で舞い上がった粉塵が霧散していく。形成されたクレイターの上に姿を現した氷眼の少年を上質な得物を見定めるような獰猛な眼光をもつて見据えて破壊の柴竜の爪牙達は不敵に笑い――

「目標を確認した。これより任務遂行の為、敵を無力化する！」

その猛威と正面からぶつかりに行くかの如く、氷眼の少年は威風堂々と高らかにそう告げるのだった。

翼を失いし烏を抱く刹那の粉雪――特務遊撃支援部隊ロストウイング《シルバーガスト小隊》。此処に集結！

彼等のはやて達機動六課を絶体絶命の危機から救う事ができるのか、はたまた彼等も破壊の柴竜の爪牙に敗れ六課の戦乙女達と共に地獄へと堕ちてしまうのか。

さあ、恐怖劇の序章は最高潮だ！

「……あれ？　ところで、なのはちゃんは？」

そして氷眼の腕に抱かれていた筈のなのはの行方は如何に？　全ては彼等を見下ろす蒼き大空が知っている……かもしれない。

# 氷眼が斬る！

第二二六強襲中隊の空襲兵達の猛攻を掻い潜り、氷眼の少年が機動六課の隊舎跡地に参上し仲間達と合流した事によつてはやて達は絶体絶命の危機を脱した。

“これより敵を無力化する”という彼の号令が発せられた事で反撃に転ずる空気だったが、その腕に抱きかかえられていた筈のなのは何時の間にかに何処へと居なくなっていたのだった。

「うにゃああああーっ!! 何で、どうしてこうなったのおおおおーっ!!」

その我らがエース・オブ・エース高町なのはは現在、何故か猛烈な勢いで上昇して行く雲群を視界に入れつつ次々に己に降りかかる不条理な非常を嘆くかのように情けない悲鳴を上げていた。此処は高度一万メートル上空、バリアジャケットを纏つていても超寒いうえに酸素も薄い為に呼吸を行うのも困難だ。たとえなのはのような高ラシクの魔導師であっても、とてもじゃないが人間が活動できる領域ではない。

では何故彼女は今こんな場所に居て謎の絶叫を上げているのか? ……それは数秒前、彼女と彼女を抱きかかえながら敵布陣の突破を試みていた氷眼の少年に向けて敵空

襲兵隊による容赦の無い一斉射砲爆撃弾幕群が二人の視界を埋め尽くそうとした場面での事——

『……悪い、少し手荒かもしれないが、じっとしていてくれ、狙いが狂う』

『へ? ……それって——』

『ふっ!』

『——ちよ? にゃああああああー!?!?!』

弾幕群に襲い掛かられる直前で氷眼の少年は抱きかかえていたのはを突然遙か上空へと遠投したのであった。

つまりは弾幕群を突破する際に被弾による外傷の可能性を考慮し、彼女は一万メートル上空という安全圏へと強制避難させられたという事なのだ——

「もう少し違うやり方は無かったのかな!? わたしの身の安全を考えてくれた事は嬉しいけれどおおおおー!?!」

先程の戦闘で飛行魔法を展開できなくなる程のダメージを負ってしまっている彼女は当然の如くミッドチルダの重力に逆らえずに逆風の影響を受けて身に纏うバリアジャケットのロングスカートと自身のツインテールを上向きに激しく揺らめかせ、理不尽な嘆きの涙を眼から飛び散らせて盛大に不満を無限の大空へとぶちまけるとい歴戦の魔導師として凄く情けない醜態を曝し出している……要するに彼女はスカイダイ





もうダメだと眼を瞑ったその刹那、ドサリッ! という受け止められるような衝撃と共に彼女は再び持ち上げられるような浮遊感を感じると共に冷たくも優しい温もりに包まれていた。

「ふえっ?」

訳がわからずなのは呆けた声を漏らしてしまう。地上に叩き付けられたと思いきや痛みは皆無でその衝撃も軽かった。何故なら彼女の身は今先程自分を遥か上空へと放り投げた氷眼の少年の腕に再び抱きかかえられていて、この現状の理解が追い付かずに困惑したからだ。

「突然乱暴に扱ってすまなかつたな、お前を抱えたままあの弾幕を突破しに行くのは危険だと思ったんだ、許してくれ。怪我は無いか?」

「あ……うん、大丈夫……です……」

それを聞いた氷眼の少年は安堵の色を見せて割れ物を扱うようになのはを優しく地に降ろした。気が付けば敵味方関係無しに周囲の視線を集めていた(全体的には急になのはが上空から落下して来た事による啞然だが、フェイトがなのはの無事に感激の涙

を流していたり、白百合の少女——もとい先程《朝百合》ガウエインと呼ばれた少女が何故だか忌避するような目線をなのに向いていた、破天荒少年改め《破戒狼》ゲオウルグと小柄の少年改め《切燕》スバシダの二人が氷眼の少年となのはの初々しさにニヤニヤしていたり、混乱するあまりにはやてが「親方アアーツ！ 空からなのはちやんがアアーツ!!」などとネタを叫んでいたりと、個々の反応は様々である）ようであり、若干の恥じらいを浮かべつつもなのはは氷眼の少年にモジモジと向き合つてなんとかお礼を述べようとするが――

「あ……あの——むぐ?!」

開きかけた口はそつと突き付けられた雪のように白い人差し指よつて噤ませてしまふ。彼女が硬直して取り巻く空気の熱が下がったのを確認すると彼女の口許から指を離し、氷眼の少年は未だに狼狽が治まりきらないでいるはやて達の奥側に集合したヴォルカーン達三人に氷の刃を突きつけるような戦意の目線を向けると彼等と向かい合うように——傷ついた戦乙女達の前で盾になるように横一列に並んでいるシルバ―ガスト小隊の仲間達へと歩みを向けた。

「自分の仲間と共におとなしくしていてくれ。安心しろ、すぐに終わらせる」

「あ……」

戦場へと赴く少年の背中を引き留めようと伸ばしかけたその手は空虚に触れただけ

で持ち主の豊かな胸元へとチカラ無く引き下げられた。共に戦いたくとも今の自分の体力と魔力は既に限界に達している、故に最早自分達にできる事は彼等の戦いを見守る事のみ……なのははその歯痒さと悔しさを噛み締め、ようやく我に返る事ができた親友達の許へと歩み寄り、彼女達と無事を確かめ合う暇もなく列の中央に迎え入れられて行く氷眼の少年の背中を祈るように見送った。

——お願い、無事に戻って来て……。

列の中央から氷のような鬼気を纏った精悍さで敵三名へと向けてゆつくりと歩み出て行く小隊長の右隣に立っている紅髪——《烈槍》<sup>グングニル</sup>の二つ名を持つ少女が両腕を組んで不敵に笑う。

「機動六課を襲撃した主犯格が三人。標的だけ、隊長」<sup>リーダー</sup>

無邪気な殺意を満面の笑みと共に向けてくる狂獣カツツエ・オルランド、極上の獲物を前にした凶暴な肉食獣のように全身を疼かせて今にも喰い掛かりそうな牙を覗かせているフアング・イスカンブルグ、そしてSSS級のロストロギアすらをも燃やし尽くしてしまう程の圧倒的熱量を内包する劫炎を巻き上げて冷徹な重圧<sup>プレッシャー</sup>を放つ炎の魔人ヴォルカーン・フォン・グラナート……目の前に立つ破壊の柴竜の尖兵達をアイスブルーの瞳に映し、氷眼の少年は自身の瞳の色と同じ輝きを煌かせる刀型アームドデバイス《アングレカム》を右手に静かなる殺意を解き放った。

「――斬る！」

戦巫女のように勇ましくも氷刃の魔鎌を振るう死神の如き冷たさで世界が氷り漬いてしまふような殺意だ。常人ならば背筋が硬直し全身の時が止まってしまつたような停滞感を錯覚してしまうであらうそれは、戦奴達を更なる闘争へと奮い立たせるには十分過ぎた。

「良き殺意だ、礼儀を持つて火葬してやろう、《ハウビッツエ・アインエツシエルング》――  
――ツッ!!」

意外にも最初に攻撃を仕掛けたのは敵の隊長であるヴォルカーンであつた。先程から頭上後方に展開しつばなしであつた鉤十字の魔法陣が砲門のように開き、天地を轟かす凄まじい轟音が鳴り響くと同時に灼熱の火焰榴弾砲が撃ち放たれる。

「いけない、避けてっ!!」

「疾――ッ！」

その火焰榴弾砲にはSランクオーバー相当の破壊力が秘められている事を瞬時に見抜いたなのはが矢面を歩く氷眼の少年に回避するように呼び掛け、判つていふと言わんばかりに少年は歩みを疾走に変えて急加速で駆ける。一直線に飛来して来る火焰榴弾砲をギリギリまで引きつけたタイミングで左前に跳び、速攻で攻勢に出れるように射線ストレスを通り抜けて回避しようとするが――

「無駄な事を——」

地に着弾すると同時に炸裂した爆音によって砲撃主の眩きは掻き消された。同時に摂氏三千度を軽く上回る爆炎の奔流が着弾地点から狙いを付けて放射されるように氷眼の少年の背中に襲い掛かり、容赦なく飲み込むと巨大なドーム状の大爆発が引き起こされる。

「そ、そんな——きゃあああ——っ!!?」

爆発と同時に撒き散らされた熱波が戦場全域に広がり、戦乙女達の柔肌をバリアジャケット越しに甚振り尽くして悲鳴が上がる。辛うじて石炭として形を残していた六課の隊舎の残骸までもが熱風に曝されて一瞬の内に全てが虚しく崩れ去って行き、今も膨張し続けている灼熱のドームをどこか優し気な目で見据えている砲撃主は毅然と嘯いてみせた。

「私の砲がただの魔力榴弾だと思ったかのか? 舐めるな、部下達の弾幕を巧く突破したぐらいい調子に乗るなよ小僧が」

言い終わると同時に様々な方角から顕れた炎柱が次々と灼熱のドームへと突き刺さり、連鎖的に爆音の嵐を轟かしていく。なんとという苛烈な攻勢だろうか、爆心地の側に並び立つシルバースト小隊の面々も猛烈な爆風の凄まじさを直に浴び、顔面の前に両腕を交差させて吹き飛ばされないように耐えている。

「くううつ!!」　ア、アイツなんて砲撃魔法撃ってくるのよ!　爆発の衝撃波だけで吹き飛ばされちやいそう!!」

「ひゃああつ、髪が焼けちゃううう!!」　僕のチャームポイントがへにやへにやにーっ!!」

「うつお、マジかよ?!」　爆発ホーミングとか反則じゃね?」

「加えて空気中の魔力素をリンカーコアに取り込まずに領域内で事象に変換し、何所の空間からも意のままに攻撃魔法を放出するこのレアスキルは……まさか——『うわあ、爆撃した人間に間を置かず空間包囲殲滅魔法を容赦無く浴びせるとか、私の思った通りあの人やつぱり骨の髄まで鋼鉄製の血も涙も無い鬼軍曹だあーっ!!』——ベアトリス、頼むから人が分析している最中に騒がないでくれ……」

「いや、騒がないでくれやないわ!　アンタら何余裕かましとんねん、砲撃くろたのアンタらの隊長なんやろが!」

「あはは!　心配は要らないよ。　アタシらの隊長リーダーの事で怒ってくれるのは嬉しいけど、生憎ウチの隊長は——」

自分達の仲間が容赦の無い敵の猛攻を受けているにも拘らず筋違いな事ばかり言つて心配一つ見せる素振りも窺えないシルバーガスト小隊員達の態度を怒鳴り気味に指摘するはやてに対し心嬉しく感じた烈槍の少女が有めるように言っている途中、彼女達

の直ぐ手前まで肥大化して来ていた灼熱のドームが突然停止したと思えば、なんとガツチィー——ッン! という幻想的な音が鳴り響くと同時にその場で瞬く間に氷結したではないか。

「……………えっ?」

「なあっ?!」

「爆炎が……………氷った?」

その驚愕の光景を目の当たりにして六課の隊長達の眼が見開かれる。そして——  
「……………これぐらいの攻撃でくたばっちゃうようなタマじゃないんだよ」

その氷塊が砕けて内側から弾け飛び、其処には毅然とデバイスを振り切った立ち姿をした氷眼の少年が無傷で健在していたのだった。彼がやられたと思ひ悲痛な表情を浮かべていたなのは強張らせていた顔を緩ませて安堵の溜息を吐いた。

——よかった、なんとか防いだみたいだね。Sランクオーバー級の砲撃魔法を氷結させるなんて凄いや、彼は相当優秀な氷結魔法の使い手みたい……………だと思っただけれど、なんだろう? 彼のチカラからは魔力が全くと言っていい程感じ取れない。いったいどうして……………そういうレアスキルなのかな?

「……………ふっ、やはりな。あのお方と同種の“聖遺物持ち”ならばこの程度の魔法などで葬れる筈がないとは思っていたが、手加減したとはいえこうも容易く私の砲を無力化



してくれるとはな……クッククック、成程、先程奴が部下共の弾幕射砲撃を突破した要因はなにも速力と瞬発力だけではないという事か」

なのはが氷眼の少年のチカラに懸念を抱く中、今まで東の空全体に充満していた爆煙が時間の流れによつて霧散し、凍り付いた第二二六強襲中隊の空襲兵達がその下方の海や地上に落ちて其処らに浮かび或いは転がつている惨状を目にした彼等の隊長がそう呟いて、実に愉快そうに口許を歪ませている。

さて、次はどうするかと頭の中で戦術を構築しようとするが、そこへ好戦的な笑みを浮かべて一步前へと踏み出たのはフアングであった。

「なあ隊長、俺に奴とタイマン張らせてくれよ。さっきの借りを返してえんだ、構わねえだろ？」

「あー！ フアングずるいよ、ボクもヤ」いいだろう、まずは奴の戦闘力でも量ってみようかと思つていたところだったからな。貴様に任せよう、イスカンブルグ」……ぶー」

無視された事に不貞腐れるカツツエを後目に隊長の了承を得たフアングが拳を鳴らして前に出る事で彼と氷眼の少年が対峙する形となる。組織同士の抗争にわざわざ一対一の構図を取る必要性は無いのだが、他の第二二六強襲中隊の面々と同じように他のシルバーガスト小隊員達も二人の対峙に割り込む気配はないようだ。

「ヤアアア……」

凝り固まった首と腕を解しながらフアングの朱い眼光が氷の刃の様に静寂な闘志を秘めたアイスブルーの瞳とぶつかり合う。先程のヴォルカーンの灼熱砲撃の影響がまだ残っているのか砂漠のような熱気が焼け野原の上に陽炎を揺らがせており、互いが発する闘気が観る者に大汗を掻かせるような緊張感を触発させていた。

「さっきは御挨拶だったな小僧、今から挨拶の礼をたつぷりと——ツ!!」

戦闘が開始されたのは意外にもその直後すぐであった。フアングが殺意を向けた瞬間、風切り音と共に氷眼の少年の姿が消失する。首元に感じ取れた微かな冷気を頼りに右腕を咄嗟に振り上げ、アングレカムの刃とジャバウオツクの金具が火花を弾けさせて激突し、直後に波紋のように広がった音破衝ソニックブレイムが戦場に充満していた熱気を纏めて吹き飛ばした。

「くっ、テメエ……!」

「仕留め損なつたか、今ので首を落とすつもりだったんだが……!」

至近距離で狂気の殺意が籠るフアングの三白眼を冷静な驚きの目線で見つめて物騒な呟きを口にする氷眼の少年。敵味方関係無しに全ての視界から姿を見失わせた驚くべき初速もそうだが、管理局員でありながらもデバイスの非殺傷設定を外して初手から相手の首を取りに行くという躊躇の無さにこの場に居る一同は目を見張らせている。相手が話をする最中でも隙あらば容赦なく仕留めに行く姿勢に感心を示したのか冷

徹なヴォルカーンですらも若干の瞠目を露わにする程だ。

——コイツツ！ 俺が放った殺気に自分の殺気を隠して攻撃する意識を悟らされねえように距離を詰めて来やがった！ 首に冷気を感じなかつたら今ので殺られてたぜ……。

「ケッ！ なんだよテメエ、俺の魔法を丸ごと氷らせるような派手な登場をするからエース級の騎士かと思いきやとんでもねえ。完全に暗殺者アサシンスタイルじゃねえ——  
かッ!!」

右腕を引き下げて悪態の吐き終わりと同時にフアングが突き放った左拳はエース級の魔導師・騎士が用いる魔力の全てで動体視力を極限まで高めたとしてもまず捉える事ができない異次元の初速……更にはシグナムやヴィータといった並み居る歴戦の騎士をも一撃で沈め、地殻を容易に砕き地形すらも変貌させる規格外の破壊力が秘められている。

至近距離クロスレンジでそんな攻撃が飛んでくれば一流の魔導師ですら対応できずに一発ノックアウトされるのが当たり前なのだが——

——なっ!? この小僧、俺の股下に滑り込んで躲しやがった！ しかも股下を潜り抜けるタイミングを狙って俺の股間を斬り付けようとしていやがる!!

「チィッ！」



なつたなのは達が目の前で管理局のエースである自分達ですらも認識する事が困難な程に凄まじい攻防を繰り広げている二人の戦闘力に驚きの感情を隠せないでいる。

だがこの程度が彼等の全力だと思つて驚くのはまだ早い。

「ハッ！」

——空間を蹴つて速攻で反転して来やがっただどっ!!

「クソがつー！」

跳弾するかのようになから突つ込んで来た氷眼の少年の反撃をファングは拳を薙ぎ払う事で逆方向の宙へと弾き返す。ところが氷眼の少年は再び空間を跳弾して攻撃の間を置かずに反撃に転じ、ファングが何度拳で打ち払おうともすぐに空間を跳弾する事で反撃の手を緩めず、敵に休む暇を与えない超高速全方位跳弾攻撃をもつてファングを翻弄している。拳で打ち払われた時に発生する強烈な反動を利用しているのか、その反撃速度は徐々に増していき、反撃前に複数回に渡る連続空間跳弾による方向転換や地上を経由するなどのフェイントを織り交ぜる事でファングの意識を磨り減らしていく。

絶えなく弾き返し続けてきた故に集中力が徐々に低下していき、氷眼の少年が振るう超高速の冷刃を何度か打ち払い逃して身体の数ヶ所に小さな斬痕を刻む事を許すようになった頃、彼の超高速全方位跳弾攻撃を破る突破口を見つける為に苛立ちながらも冷



も及ぶ鋭利な礫のような魔力塊を自身の周囲に展開してみせる。無論これはファングの赤黒い魔力を媒体にして展開した魔法であるが故に当然その魔力光も不気味に赤黒く、まるで血を固めて作られた杭の様だ。

「「ひっ!!」」

「な、なんなのよあの魔法?! 血の棘?」

『うわっ、気色悪い! あの手裸白髪ヤンキーは下種でロクでもない人種だとは思っていましたが、使用する魔法まで猛烈に忌諱感を感じるとかあの男救い様がありませんよ! 眼に映しただけで吐き気を催します! でも私、デバイスなので映す眼も吐く口もありませんが!』

——いい加減自分のデバイスに一タツツコミをするのも疲れてきたよ。待機状態にリリリースしてシャットダウンしておこうかな……。

「うわー、キモイね」

「そうか? アタシはブヨブヨしたアメーバっぽいバケモノとかの方がよっぽどキモイと思うんだけどな」

「なんじゃそりゃ? さてはお前、また例の既知感<sup>デジャヴ</sup>ってヤツで視た記憶からモノ言ってるのかよ? 見るモノ全てに未知を感じてそうで楽しそうに見えるけれど、記憶障害つてのも大変なんだな……」

展開されたフアングの魔法の気味の悪さを目の当たりにしてなのは達は忌諱感のあまりに悲鳴を漏らし、シルバークエスト小隊員達も嫌悪感で引き気味になっている。一部が変な感性を持っている為に全く関係の無い事を口走っている者も居るようだが……。

「まあギリギリ合格って事にしといてやろう。お前は俺が喰うに値すると認めてやる」

そんなのお構いなしにフアングは展開した杭の全ての鋭利な棘先を氷眼の少年へと差し向けた。

「誇れや小僧、タイマンでこれ使うのはあの女の時以来だからよお。名乗りな、憶えといてやる」

「必要ない、名前だけとはいえ敵対組織に個人情報を与えるのはデメリットにしかないからな。それに、どうせお前達はここで俺達に倒されて局が管理する無人監獄世界に永久移住するんだ、どちらにしろ意味などない」

「……くくく、あはははははーっ!!」

視界に入れてしまえば胃の中の汚物を全て吐き出しかねない瘴気を発する数百の血の杭を前にしても尚その戦意と冷静さを揺らがせる気配のない氷眼の少年が鷹揚に言った挑発を聞き、身体の内側から込み上げてくる愉快と昂る憤りのあまりにフアング



は狂乱の哄笑を上げ、同時に殺意を乗せた衝撃が広がって砂煙を巻き上げた。面白  
い、この手の獲物は嫌いじゃないと。

「刺し殺せや、《カズイクル・ベイ》イーーーーーッ!!!」

主の号砲に従い、数百の血の杭は氷眼の少年の命を吸い尽くすべく砲弾の如き轟音を  
鳴らし、一斉に直進して行く。枯渴、搾取、略奪——”  
全てを吸い取り奪い尽くす串刺し公”の名を持つファングの魔法に対し、黎明は血塗ら  
れた夜の闇を照らし払う事ができるのか……。

## 神器形成（セカンドブレイク）

『全てを喰らい尽す』というドス黒い怨念に等しい渴望を孕んだ血塗られた杭が機関銃から撃ち出された無数の弾丸の如く空間を貫き喰い荒らして行く。50cm程の密集した間隙で一直線に飛ぶ赤黒い魔力棘の群列が身構える氷眼の少年の華奢な身体を串刺しにせんと殺到した。

「いけない、それに触れちゃダメ！ 避けてっ!!」

十年という長年に亘る魔法戦の経験の勘が働いたのかフアングが放った《カズイクル・ベイ》という魔法から途轍もなく悍ましい何かを感じ取り嫌な予感がしたなのは魔法の標的になっていゝる氷眼の少年に回避するよう必死の形相で呼び掛ける。言われるまでもなく彼は地を蹴つてその場を跳び退き、飛来した杭群の先陣がその後を追う形で焼け野原に突き刺さっていく。

「ハッ、それで躲したつもりかあ？ まだ後続は続いてんだよオオーっ!!」

フアングの言葉通り後に続く群列がうねり曲がる蛇の如く宙を後退する氷眼の少年を追撃。通常ならば飛行スキルを持ち得ない者が回避する事適わぬその状況を彼は先程の超高速全方位攻撃で行使した水の足場を形成し方向転換する事で容易に打破す

るが、その際に魔力杭の一つを右肩に掠らしてしまった。

「っ!？」

瞬間、その右肩に僅かな違和感を感じてアイスブルーの瞳が一瞬揺らぐ……掠っただけだった故に付けられた傷は極小だがその浅瀬に溜まっていた流血は黒に染まっていたのだ。刹那に浮かんだ少年の苦悶を見逃さなかつたファングが悪戯めいた笑みを浮かべた。

「おっと、言い忘れてたぜ。この《カズイクル・ベイ》はな、突き刺したモノを枯れ果てるまで喰らい尽しちゃうんだ。植物だろうと物質だろうと生物だろうと魔法だろうと見境無くなあつ！」

故に全てを搾取る血塗られた杭の前に要塞級の防御力や不沈の耐久力などといったものは無力と化するのだ。わざわざ魔法の性質を説明したのは相手にその恐怖を植え付けて精神的に追い詰める為であり、何故なら狩りとは如何なる手段を使って獲物を追い詰め、仕留めるのを楽しむ要素こそがその醍醐味なのだから。

「くっ!」

縦横無尽に空間を跳躍し向かって来る杭の群列を揺さぶりつつファングに接近しようとして試みるが、地に刺さったまま残留していた杭がファングの殺意に従って其処から再び射出されて来る。どうやらこの魔法はなのはのアクセルシューターと同じように

誘導操作制御ができるようであり、更には障害に触れても残留させられる高度な持続性まで兼ね揃えているようだ。

「うゝ——がアゝアゝ——オーツ!!」

それでも四方八方から雨霰の如く次々と飛来して来る杭を並外れた観察眼と反射神経を駆使して致命的な接触だけは避け続けていたが、絶えなく続く猛攻を捌いている内にととうとう一瞬の隙を生じさせてしまい一筋の赤黒い刺閃が氷眼の少年の左脇腹を抉る。直後に彼は空気中の水分を凝固させて作り出した氷のナイフで生気を奪われ腐り落ちてゆく肉を躊躇する事もなく切り落とししたが故に腐食が臓物まで及ぶ事はなかったがその焼けるような激痛はとても声を抑えきれるものではない。焼け野原に降り立ち天に響いた少年の悲痛の絶叫を爽快に心地の良いBGMとして聴き入れたフアングが陶醉を露わにして叫ぶ。

「痛えか？ 痛えだろ！ 嬉し涙流せやオラアアオーツ!!」

狂喜乱舞の怒号が上がると共に宙を飛び交い空間を赤黒く蹂躪する無数の魔力棘は横幅に広がるような隊形を組み、激痛で動きが少々鈍った氷眼の少年に向けて一斉に突き貫して行く。

「あれは『フアランクス・シフト』!? まずいつ!!」

人間の身体の大きさでは中を縫う事が不可能な間隙の狭さで大気に蜂の巣を穿つこ

の突撃隊形はフェイトが口に出した驚愕の通りまさに広範囲密集突撃陣だ。横に広がる楔状の無差別絨毯攻撃からはどんなに素早く動けようとも逃れきる事はまず不可能だろう。

「♪ ははっ、これはマジで圧巻じゃあないか！ でも赤グロの雨とか、あのヤローのセンスは相当歪んでるねえ。華が感じられねーしよ」

「うん、まるでイナゴの大群が向かって来ているみたいだね。マズそう……」

「いや、お前アレ食う気あるのかよ!? さすがのオレもその感性はイカレてると断言するぜ、なあ?」

「常識人のあたしに同意を求めないでください、宇宙人の感性は理解できませんので」

『私は「ベアトリス、モードリリース……」ちよっ!? 何をするんですかモルド! 私はま……だ——』

「アカン、どうにかせえへんとあのキレイな男の子は蜂の巣やで!」

「逃げて、お願いっ!!」

氷眼万事休すか? そんな絶体絶命の危機的状況を前にして酷く焦燥に駆られだす六課の隊長達とは裏腹にその前に並ぶシルバーガスト小隊員達はこんな状況の中でも余裕そうだ。

これは決して彼等が楽観的なわけではない、彼等「聖遺物持ち」にとつてこの程度の

戦況など窮地の内に入らないからだ。

「……」

視界いっぱいに降り注ぎ殺到して来る血染めの杭の前面に無言で立ち氷眼の少年は  
瞼を閉じて意識を静めた。全てを喰らい尽す呪詛を相手に防御など無意味。間隙  
の狭い広範囲絨毯攻撃故に回避する事も適わず、剣と魔法すらも貪り尽くしてしまう事  
だろう。

故にこの危機を打ち破るのに必要なのは魔法より遥かに上の“格”を持つチカラだ。

「かつて黄昏を司つた女神の抱擁すらも永遠には成れぬ刹那であつた。——」

白く艶やかな長髪を海から来る潮風で揺らし、「人」を失つた少年はその身に宿す聖なる遺物の「格」を引き上げる狂詩を詠う。

「——久遠の果て、永劫かと思われた黄昏が終わりを告げ、世界に生きる人々が慈愛を失おうとも——」

まるで世界の時が止まつたかのようだ。彼が詠う間、殺到して来る無数の杭が永遠の刹那に氷らされたかのように停滞している。

「——明けぬ夜など無い。いつの日かきつと、虚空に浮かぶ氷海の果てに、輝く未来への黎明が必ず訪れる事だろう。——」

詠に呼応するかのように彼の右手に握られたデバイスが引き上げられる「格」に従い形を変えていく……身に宿す聖なる遺物に合わせ、彼がイメージする「神器」の形へと。

「——ああ、なんて世界は美しい。夜空に煌く星々の輝きが、私達に不屈の勇気を与えてくれる。——」

間もなく詩は詠い終わり、それと共に少年の宇宙はまた一つ神の領域へと近づくのだ。

「——故に現在に進もう、絶望の闇夜を照らす未来への黎明を迎える為にも。——」

アツシヤー イエツラー  
活動から形成へと。

セカンドブレイク  
「——神器形成——」

その刹那、世界は再び動きだし。無数の血染めの杭が詠い終えた少年ごと焼け野原を穿ち、地を喰らい尽した。

「嫌ああああああああああああああああああ——っ!!!」

刹那に少年の無事を祈っていた不屈の少女の悲鳴が焼け野原に響き渡り——

「ヒヤッハー!! 殺<sup>ヒト</sup>ったアア——ッ!!」

奴を仕留めたと勝利の喜声をあげるファング。だがそれらは次の瞬間に一切合切が駆逐される事となる。何故なら——



「——フィンブル・ギア・インビジブル《虚空なる黎明の刃器》 ツツツ!!!」  
地と少年を喰らい血染めの棘野原と化した筈の一带が瞬く間に凍土となったのだから。

「あ……あ……?」

「なんや……ねん……私……夢でも見とるんか……?」

「綺麗……」

開いた口が塞がらないとはこの事か……六課の隊長達は突如として眼前に広がった氷原を目の当たりにして唾然とせざるを得ず、陽の光に反射して輝くその光景に見とれて動揺と茫然を入り混じらせた感情に当てられて放心している。

「な……なんだア？ あの小僧いったい何をしやがった！」

「うっそ、フアングのカズイクル・ベイがみんな氷つちやつたよ！ ちよつと有り得くない？ 【搾取】の魔法効果で氷結なんか吸い取つちやう筈なのに」

唐突に顛れた荒唐無稽な事象に敵側もまた困惑を露わにしていた。何の冗談だコレは？ 無数の血染めの杭が敵ごと広範囲の地を突き穿つたと思つた瞬間にその範囲の全て氷結したと？ ありえない、<sup>カ</sup>全てを吸い取り奪い尽くす串刺し公<sup>イ</sup>の名を冠するこの魔法は貫いた全てを根こそぎ喰らい尽す筈だ。そんな氷結スキルなどで――

「この莫迦者共が！ 聖遺物持ち<sup>エイワイヒカイト</sup>が用いる『E デバイス』の機能特性の記憶を

その螺子が外れた頭から忘却したのか！」

狼狽するフアングとカツツエの無様を見兼ねて敵側で唯一この不可解な事象の理由を看破していたヴォルカーンがそう叱咤を飛ばすと二人はハッ！ と我に返った。

目の前に広がった氷原の理<sup>ことわり</sup>を悟つたが為<sup>ため</sup>に。

「Eデバイス……まさかつ!!」

「自身に宿る聖遺物の『格』を昇華させる《セフィロトシステム》——!?!」

そう二人が呟いた刹那、周囲に動揺を齎していた氷原に亀裂が走り幻想的な音を立てて砕け散った。

砕けて宙に舞う無数の氷片。威風堂々とした鬼気を纏いてその中央に立っているのは無論、より上の『位階』に至った氷眼の少年であった。血染めの杭に全身を貫かれた筈なのに目立った外傷は全く見られず、その無事な姿を確認した彼の仲間達はまるで最初から分かっていたと言うかのように表情を綻ばせる。

「やつと《神器形成》セカンドブレイクを解放しましたか。正直少し心配しましたよ」

「嘘付け、お前ベアトリスの騒がしさに鬱陶しがっていた以外はずっと平静だったじゃんかよ……まあ、そういうアタシも信じてたけどな♪」

「バーカ! アイツがそう簡単に殺られる訳ねーだろ。つーかあんな白髪のつぽに後れを取るような三下だったんならそもそもオレはアイツを隊長どころか同じ小隊に誘ってすらいなかったぜ」

「うんうん! それでこそ僕が何時か斬りたいと思っているヒュツ君だよ! あの氷山のように冷たくて鋭い殺気……ああん、堪らないよお〜♥」

「またドン引き発作に身悶えているアルはこの際放置するとしてと……アレがあの人

《セカンドブレイク神器形成》か。初めて見たけれど、こう内に宿る聖遺物から漲って来る神気がゴワアアアッ！　っていう感じでとにかく凄まじいわね。形成されたあの神器の形も異様だし、あの人自身が発している氷の剣のように鋭い威圧もパワーアップしていて凄く気圧されるっていうか胸が高鳴るっていうか……とにかく言葉で言い表せない程凄い形成だわ！　さすがはあたし達の隊長と言うべきか、あのシリーズの聖遺物保持者よね！　

自分達の隊長が内に眠るチカラを解放したのを見て少しハイになっているようで、おかしなテンションを口走っているのが二人程いるが、それも仕方がないだろう。彼等の期待の視線を一身に集める氷眼の少年の右手は分厚い氷で固められており、その手に握るように固定されているのは氷そのもので形造られた刀の柄であった。その上部に視線を遣ると柄と同様に彫刻されたような氷の鏢が乗っているのだが、その先が朝百合の少女が発言した通りに異様な有り様なのだ。

——何だ、あの聖遺物は？　刀身が無い氷の刀……だと……!?

口には出さないが氷眼の少年が形成した新たな武装を目の当たりにしたヴォルカーンがその異様さに内心で瞠目する。氷眼の少年の右腕に“融合”している無刀身の氷刀……いや、そもそも本当にアレは刀なのか？　鏢の先が虚空であるが故に刃の形状が認識できない、乃至真実に“虚空”なのだろうか……？　少年の生存を確認した事で

心からの安堵を表に出していた不屈の少女もまた少年の異様な得物を凝視して訝しんでいる。

——傷一つ無く生きていくてたのは良かったけれど……なんだろう、あの凄く強大で不思議なチカラを感じるデバイスは。さつきまであの人が持っていた刀型のデバイスが形態を変えた姿？ たぶんそうなんだろうけど、それにしておかしい。異能そのものをデバイスに組み込むなんて少なくとも管理局の技術力ではまだ実現できていないし……いったいあの人の——彼等が持っているチカラは何なの？

視線を転じてみれば側で戦いの行方を一緒に見守っている親友二人も同じ疑問を抱いているようだ。彼女達はまだ知らない、この広大な次元世界には魔法以上の強大なチカラが存在している事に。

霊山のような静寂さを感じさせながらも神々しく溢れる出る蒼い神気……その淡い光輝を全身に纏い形成した刃無き氷の刃器を毅然と構える氷眼の少年の立ち姿は清冷さを感じさせながらも視る者総てを圧倒する荘厳さを感じさせる。まるで長きにわたる暁闇（あやみくら）に黎明の光を齎す蒼白の夜叉。

「キヒツ！ いい重圧だ。面白れえ、ようやく本気で戦り合う気になったみたいだなあ。いいぞ、さあ、もつと俺を楽しませてみるおっ!!」

氷眼の少年の身体の奥底から漲る闘志と並々ならぬ鬼気。それに礼を尽くすかの

ように対峙する戦奴の戦意も最高に高められ、狂喜の咆哮が天地を揺るがす。清冷なる氷刃の戦意と搾取する血牙の殺意、二つの闘志が闘ぎ合い緊張が暴風となつて戦場を蹂躪する。

「ああ、望むところだ。貴様を——」

そろそろ恐怖劇の序章グランギニョルの幕を下ろすでしょう……さあ——

「——斬るっ!!」

翼を折られた戦乙女達の無念と悲しみに満ちたこの戦場に終止符ヒリオドを打てっ！

## 明の軌跡

最大級の戦意を胸に互いに牙を持って踏み出した二人は管理局のエース達の意識を置き去りにして高次元の戦いへと翔け抜ける。

「え——ツツ!？」

「あ……………れ……………?」

「なん……………やと……………!!?」

《神器形成》で身に宿る聖なる遺物のチカラを形として顕現させた氷眼の少年と最高潮の闘争意欲を前面に表したファングが地を蹴った瞬間に彼等を見失った事に六課の隊長三人はその美しく可憐な面を硬直させて言葉を失ってしまう。彼女達の視界が映している光景は凄絶という言葉ではとての足りない程に圧巻で神妙不可思議な景色であった。

氷眼の少年とファングが音速を凌駕する初速で疾駆した瞬間にその音破衝の影響で嵐のように巻き上がった焼け野原の砂煙が戦場を覆い、それが何が原因で発生したか不明な非常に奇天烈で凄まじい轟音と衝撃が戦場中を縦横無尽に乱爆して蹴散らされていくという魔法戦の常識を崩壊させる規格外な戦闘風景を前に彼女達は開いた口が塞

がらないでいる。

——ユーノ君と出会って魔法のチカラを手にしたあの日から十年間、わたしは多くの戦いに身を投じた事で数えきれない程の戦闘を見て感じてそれなりに経験を得てきたけれど——

こんなケタ外れな戦闘は今までに見た事も経験した事も無い……戦う両者があまりにも疾過ぎて苛烈過ぎて目で追うどころか彼女が十年間磨き続けてきた空間意識を張り巡らせても彼等を捉える事ができない。

時空管理局が誇る不屈のエース・オブ・エース、高町なのはは誰もが認める天才魔導師で戦闘の慧眼にも非常に優れている。空の戦いに赴くにおいて最も重要な空間認識能力に至っては少なくとも表面化されている管理局内の魔導師の中では他の追従を許さないだろう。……だがそんな彼女の洞察力をもつても認識不能な戦闘を繰り広げる氷眼の少年とフアングの戦闘次元は管理世界においてあまりにも常軌を逸し過ぎていた。

「第五秘剣——《かがりびばな篝火花》ッ!!」

そんな超高次元の戦場の中で遂に拮抗していた二人に大きな動きが起きた。フアングが放った鎌鼬現象を纏わせる程に鋭く殺人的な回し蹴りを身を限界まで屈めて回避した事で生じた隙の刹那を氷眼は見逃す愚行を犯さない。突き上げるように繰り



出された虚空の氷刃は無数の点撃と成り隙を見せた相手の身体に豪雨の如く殺到し、その全てが人体の急所を突き破りに行っている。額、両目、眉間、顎、首、上腕骨関節、手首、上腕三頭筋、心臓、鳩尾、金的、大腿、脛、アキレス腱、e t c、e t c——寸分の狂いも無く的確に狙い放たれたそれは惨殺技能特化の五月雨突きである。

「グググッ!? グオオオオオオオオッ!!」

そんな殺伐とした不可視の突きの豪雨をフアングは尋常ではない反射速度で空回ったアンバランスな体勢を無理矢理捻り、回りざまに防御に回した裏拳を皮切りに戦場の野獣の勘に任せたジャバウオックを嵌める拳の応酬で全ての点撃を一撃も打ち洩らさずに打ち払い、弾ける衝撃によって無数の火花が二人の間に咲き乱れた。

反動で両者は身を剥がされて宙へと舞う——それにより生じた僅かな合間にフアングは《篝火》を打ち払った直後に両拳に違和感を感じた故に眼で直接その状態を確認してみると、嵌めているジャバウオックごと両方の拳が凍傷により固められていた為に眼を見開き屈辱に舌を打つ。

——クソが! あのガキの聖遺物、やっぱりちやんと刀身あるじゃねえかよ!!

眉間を寄せて苛立ちを露わにするフアング。氷眼の少年の右手に「融合」して形成された《フィンブル・ギア・インヒジブル虚空なる黎明の刃器》は見た目通りの無刀身ではなく視覚化されていないだけだ。

——くらった感じだと絶対零度の冷気で構成された不可視の絶氷刀つてところだな、氷点下百度でも凍り付く事は無え俺のジャバウオックが凍らされてやがるのがその証拠だ。おまけに見えねえから初見だと得物の長さや形状を判別するのに手を煩わさせられて心理的に警戒するようになるから、迂闊に攻められなくなるってわけかよ。ハッ、くだらねえ！

氷眼の少年の聖遺物の特性を自己的に分析したファンングは刹那の間に打ち合った感覚に基づいて導き出したその内容を取るに足らないと内心で一蹴すると全身を翻して空中で反転、飛行魔法を発動し怒号と共に宙を翔け回り出す。

「ぞけてんじやねえぞクソガキがあつ！ この俺がそんなくだらねえ玩具なんかにはビビると思つてんのかアア——ツ!!」

不規則な軌道で飛翔しながら再び《カズイクル・ベイ》を展開して撃ち放った。

「……」

その先で宙に形成した氷の足場を乗り継いで空中を跳躍移動する氷眼の少年は意外な事に再び自分の命を喰らい尽そうと飛来して来ようとする無数の血染めの杭を前にして立ち止まった。

——ツ!!? あの小僧、どういうつもりだ? まさか諦めておとなしく串刺しなるってんじやねえだろうな?

気が抜けるようにだらしなく刃器を引き下げて全てを喰らい尽す杭群を前に立ち往生する敵を目の当たりにしてフアングは不可解に思う。【搾取】の魔法効果を持つカズィクル・ベイの前には防御・耐久など無意味だからだ。

「……フツ！」

「っ!!」

しかし直後に表した少年の微笑と、それと共に彼の右手の刃器が淡い蒼光を帯び始めたのを目にした事で察してしまう。奴は戦いを諦めたのではない、向かって来るカズィクル・ベイを聖遺物のチカラをもって全て蹴散らす腹積もりなのだ。

「大空を走れ——《極<sup>オーロラ・ストラッシュ</sup>北の空道》ツ!!」

技名と静かなる闘気を発し、前方に払い上げるようにして刃器が振るわれた瞬間に氷結が撃ち放たれた。まるでなのはとはやての出身世界の最北端の空に発生する極光のカーテン現象の如き色彩に輝く氷結が激流のように直進して血染めの杭群を余さず飲み込み、蒼穹に輝きの氷空道が一直線上に敷かれて行き、この光景に一瞬の度肝を抜かれていたフアングにそのまま押し迫って行く。そこで今まで二人の戦闘速度を捉えられないでいたなのはがようやくやく戦闘状況を呑み込む事ができた。

「っ!!? フェイトちゃん、はやてちゃん、上だよっ!!」

「なっ!!? いつの間にあんなところまで！」

「それよりもなんやねんアレは!? あの男の子が右手のデバイスを振るうて放った氷がまるで砲撃魔法のように!」

空を見上げて飛び込んで来た光景に驚愕を隠せない六課の隊長達……認識できなかったが故に気付かなかったのだ、戦況は既に陸戦から空戦に移行していた事にも、眼前に並ぶシルバーガスト小隊員全員とその先に立つヴォルカーンとカツツエの視線は戦闘中の二人をしつかりと追っていた事にも。

「チイツ、クソがつ!!」

フアングが舌打ちと悪態を吐きながら凄まじく押し寄せて来る氷結の激流を回避する。《極北の空道》が先程の《篝火》のような剣技ではないと知ったうえでこの行動を選択したのだ。

「《神器形成》セカンドブレイク以上の聖遺物に対して通常の魔法は無効だ。たとえばSSSランクの攻撃

魔法を撃ち込もうが『格』の違いはどうにもならん」

「ぐうっ!」

悠々とビーフジャーキーを齧りながらヴォルカーンが何でもないかのようにぼやくとフアングが何の突拍子もなく突然感じた痛みに表情を顰めさせていた。氷眼の少年が放った《極北の空道》を回避した直後に何らかの鋭利な物体がフアングの左膝を斬り付けたのだ。

——な、何なんだ今のは？ 突然俺の左脚を刃物みてえな何かが——ッ！！  
「——ぐあああつ!!」

今度は背中に痛烈な斬撃痕が刻まれた。大きく縦に開いた裂傷は確かに今フアングは何らかによつて切断系統の害を受けたという事実が如実に表されている証だ。しかし——

「ぢイイツ！ またかつ!!」

彼に斬痕という害を齎している原因の正体が解らない……否、視認できないと言つた方が正しいか……フアングは訳も判らず次々と身体中に刻まれていく斬痕とその痛みと違和感を感じた。

——妙だ、付けられた傷から血が流れ出て来ねえ。それに斬られた痛みというのは部分的に集中して焼かれるような感覚の筈だ、なのにまるでギンツギンに冷やされた針がブツ刺さつたかのような感じがするぜ……。

そう、これではまるで凄まじく冷たい物を素手で触れた為に霜焼けになつた様な。「間違いない、これは凍傷だ……やつてくれたなガキイツ!!」

自分の身体を斬り刻んでいる犯人を察したフアングは憤りに満ちた朱い眼光でその犯人を射貫いた。その視界に納めたのはまるで鞭を振るうかのような動作で氷の刃器を振り上げている氷眼の少年の姿だった。

「チイツ、そういう事かっ!!」

刃器が振り下ろされるのを視認するとフアングはこれまでに培ってきた戦場の勘が働いたのか咄嗟にその場から退避する。そこで氷眼の少年が刃器にスナツプを利かせると経った今フアングの側を通過しようとしていた不可視の刃が急に方向を変えてフアングの頬に掠らせて行った。それで付いた切り傷からも流血は見られない。

——ただ見えねえってだけじゃなく、その形状も自由自在に変えられるってか?!

唐突だがヴォルケンリッターの将、八神シグナムの愛剣レヴァンティンには《シユラングフェオルム》という形態がある。剣の刀身を複数の刃節に分け、それら全てを撓るワイヤーで通す事で実現する蛇のような伸縮湾曲を变幻自在に操り相手を翻弄し斬り刻む「蛇腹剣」……ただでさえ不規則な動きをして対応し難いそれがもし視認不可になったとするならば、それ程までに厄介な武装はなかなか存在しないだろう。

まったく《虚空なる黎明の刃器》とはよく名付けたものだ。ただ刀身が視認不可というだけならば攻撃を受ける事で全長と形状を、融合している右腕の動作を観察する事で攻撃角度と性質を理解する事は歴戦の達人ならば不可能ではないだろうが、その上でその不可視の刀身の形状が持主の意志次第で変化するなど対峙する相手にとつて艱難辛苦極まりなく、例えどんな戦闘のプロフェッショナルであろうとも苦戦は免れないであろう……まあ、その圧倒的優位性を有する分その性質故に使い手に相当な技量が要求

される武装ではあるが――

「ぐっ！……このガキイ、ネチネチとしやらくせんだよオオオオオオーツ！！」

氷眼の少年は不可視の連結刃をまるで見えているかのように巧みに振るい距離が離れているフアングを見事に翻弄してじわじわと消耗させている。彼は恐らくこの《虚空なる黎明の刃器》を使い熟せるようになる為に相当な鍛練を積んだのだろう。

不規則な上に不可視という予測不能な攪乱攻撃に一方的な守勢を強いられざるを得ず、無様に翻弄されてダメージを蓄積していく戦況に苛立ちを募らせたフアングは我慢できず、斬り刻まれ続ける自分の身体の配慮を度外視して氷眼の少年に捨て身の突撃を開始。視認できないからどうした？ 小ダメージなんざ幾らもらおうが構うものか！

「こんなセコイ小細工で、俺を殺れると思つてんじやねエエエエエエエー……っ！！」

不可視の連結刃に無防備な全身を斬り刻まれて血潮を飛び散らせながらも減速せず、にレールガンの如き雷速で正面突破、まさに神風特攻だ。血濡れの魔弾となったフアングが迎え撃つ体勢に構え直した氷眼の少年を貫いた瞬間に閃光が炸裂し、二人の戦いは再び六課の隊長達の意識を置き去りにして超高速戦闘へと移行した。

二条の光となって空を翔け抜け疾風怒濤の打ち合いの衝風で雲を引き裂く。

両手を組んだハンマー落としてフアングが氷眼の少年を焼け野原に叩き落せば地を激震させて地割れが起こり大量の粉塵が戦場全体を覆う。

それを切り裂く血染めの杭が豪雨となって降り注ぎ、地に接触する前にその全てが残らず氷柱と化す。

流星となつて焼け野原へと落下するフアングと凍り付いた地割れから砲弾の如く飛び出した氷眼の少年が無数の氷塊が舞い上がる中で衝突し爆発するような衝撃波が空間ごと舞う氷塊を纏めて大空の塵へと還す。

縦横無尽に地を駆けまわる二つの暴風が戦場を蹂躪する。

フアングが地殻すらも砕き割る拳を神速で繰り出せば氷眼の少年は更に素早い身の熟して伸びて来た腕に跳び乗りそのまま強烈な膝蹴りを御見舞いする。

氷眼の少年が巧なフェイントを用いて隙を突こうとするならばフアングは長年培った戦場の勘をもってカウンターを浴びせる。

刹那の間に戦場に荒れ狂う轟音、爆風、暴風、閃光、地響き、地割れ、衝撃波、氷結、血染めの杭……まさに二人の戦いは本格的な天変地異を巻き起こしていた。

「信じられない……こんな人間同士の戦いじゃ……」

「なんや、生でド○ゴンボールでも観とる気分やないか……ホンマに漫画やあるまいし……」



その圧倒的に現実離れをした光景を前にして六課の隊長達は現実を疑った。フェイトは怯えるように瞳孔を震えさせ、はやては故郷の世界のバトル漫画を連想して絶句している。シルバーガスト小隊の五人に目を向けてみると入隊して日が浅いであろう朝百合の少女のみが引き気味に表情を引き攣らせているもの。他は日常茶飯事の騒動を見るかのように平然としている。敵のヴォルカーンとカツツエに至ってはまるで楽しくスポーツ観戦でもしているかのような態度だ。

「凄い、魔導師が行える最大戦闘レベルを明らかに超越している……」

そしてなのははこの認識困難な程の高次元戦闘をその碧い眼にしつかりと焼き付けていた……もし自分が彼等と戦うとしたらどうするかと思いを馳せながら。

——スピードは言わずもがな、技と魔法の威力だつてわたし達Sランク魔導師を大幅に上回っている。二人がどういう戦術で立ち回っているのかわかんなくて疾はやすぎて解らないし、冷たい眼をしたあの男の子のチカラに至っては正体不明……ダメだ、現在いまのわたしの実力じゃ例えコンディションが万全だったとしてもこの戦いに割って入れればその瞬間にミンチになっちゃうっていうのが分かる……。

彼女は他人に護られるままでいる事を良しとしない突撃思考の正義感を持つてはいるが、教導官として一流の魔導師として自身の実力を過信するあまりに戦闘難度を見誤り無謀にも其処に身を投じる愚行を犯すなどという愚か者では断じてない。魔導師



そろそろ戦いも佳境だ。最早神速すらも超え周囲の地面が爆砕する規模の暴風膜を覆わせるフアングの亜光速の突きを氷眼の少年は上体を地に頭が着きそうになる程後ろに反らして紙一重に躲し、そのまま相手の拳圧と体重移動を利用して地を滑り身を屈めた体勢でS字の軌跡を大きく描いて素早く変則的に後退。更にはその勢いを殺さずに跳び上がり、爆砕されて宙に飛び散った地面の土塊を足場に加速してフアングの懐に飛び込んだ。

「斬るツツ!!」

そしてとどめを刺すべく一瞬の迷いもなくフアングの首目掛けて氷の刃器を振り抜いた。約0・5秒の神速機動カウンターだ。敵は今拳を突き出した体勢のまま一瞬の硬直を露わにしている。振るう刀身は不可視のエグゼキューションナイズソード(切っ先が丸い斬首用の剣)、それが弧を描いて敵の首元に吸い込まれていく。

——終わりだ、ラグナガンドの尖兵!

その体勢では躲せないだろうと勝利を確信したその刹那——

「……キヒッ!」

狂気の牙が煌いた。

「だからその低度で——」

同時にフアングは踏み出していた片脚にチカラを籠めて奥へと跳躍し出し、上体と首



れ狂う砂嵐を周囲に巻き取り、雷光纏いて氷眼の少年へと一直線に落ちて来る。

「なああつ!! アレはザフィーラをこないな酷い姿にしおった魔法ツツ!!」

「あいつ、いつの間にあんなどころに!!?」

まるで大気圏外まで身丈を貫く巨人が振り下ろした鉄拳のようだ。あるいは全てを滅ぼし破壊し尽くす暴星……そんな規格外の魔力を経った今感じ取ったフェイト達もその存在をようやく認知する事ができた。

「ただだけだよアイツ、魔力にモノを言わせた暴力じゃないか」

「ああ、脳筋過ぎてなんの面白味もねーしな。シンプル・イズ・ベストなんて言うけどよ、『基礎に忠実』なのと『単調バカ』とじゃまるつきり違いだろ? ……まあ結局のところ、どっちも自分で工夫してねーわけだし、オレにとっちゃあどっちもどっちだけだな」

「いやどうでもいいですよ。それよりもコレ今すぐあたし達も加勢した方がよくないですか? 視た感じあの魔法SSランクオーバーの魔力は余裕で籠められていますよ。地面に直撃したらたぶんこの辺り一帯の地区は吹っ飛んじやうでしようし——」

「うん、気持ちには分かるよ。すごく斬り甲斐がありそうな魔法だしね」

「——そうそう、こう落ちる前にドカッ! と殴ってドツカーン! と破壊したら超ツエキサイティング!! ——って違うわよ! そうじゃなくて!!」

最低でも機動六課の戦力中最硬の防御力を誇るザファイラを一撃で沈める程の威力がある事が実証されているファングの《ヴァロン・シュトライク》が空中から地上に放たれて来る光景を、恐慌と忌々しい感情が入り混じった眼で見上げるフェイト達の前ではこんな時でも動じる気配を見せていない氷眼の仲間達がどこかズレている会話をしている緊張感を感じさせず――

「アハハッ、ファングの奴久々に歯応えのある相手と戦り合えて最高にハイになっているねえ！ 《カズイクル・ベイ》を破った上に全力全開の《ヴァロン・シュトライク》まで撃たせるなんて、あの女の子みたいにキレイな顔をしたお兄ちゃん相当だよ！ アハッ、いいなあ、ボクも戦<sup>や</sup>り合いたいなあ」

「フツ、確かに氷眼の実力は報告書で見た以上に上等だった。だが幾ら総帥閣下と同種の聖遺物持ちが相手とはいえ神器形成低度に苦戦するとは、破壊の柴竜の爪牙としてイスカンブルもまだまだ未熟極まりないな。《セフィロトシステム》によって引き上げられた『位階』を真に理解してさえいれば奴も巧く立ち回れるものを、アレでは結果が解り切っているではないか。あの莫迦者が……」

離れた対面に立つカツツエとヴォルカーンは目の前でファングと互角以上に互り合っている氷眼の少年を称賛しつつもそれに対してそれぞれ別の考え事を呟いている。

そしてなのは――

——な、なんて凄まじい魔法なの!? 感じ取れる魔力量から少なく見積もってもわたしの全力全開を遥かに上回っている! 例え今構想段階のあのリミットブレイクを最大まで使用したとしても今フアングって人が撃ち放ったあの魔法には到底及ばないだろうし、あんなのが地上に直撃したら——

「——心配する必要はいらないさ」

「ふえ?」

グツと拳を握り締めながら落ちて来ている暴星を睨みつける彼女の心中を察したらしく、緊張感の無い仲間達の会話から一人外れていた白雷の騎士がその心中を慮るように唐突と囁いてきたが為になのはは思わずと呆気に取られた声を出してしまう。その可愛らしくも戯けた声おどを聴いて白雷の騎士は愉快そうにクスリと微笑してから言った。

「彼はその視界に納める万象を氷結地獄ニフルヘイムへと墮とし裁く執行人《氷眼》アレストケレイシア。彼ならば必ずあの暴星の落下を阻止すると確信できます。ですからどうか安心してください」

女性としてこの世に生を受けた誰もが見惚れるような貴公子の微笑みを浮かべ、揺るがぬ信頼の眼差しは矢面に立って勇ましく刃器を振り下げる氷眼の小隊長へと向けられている。

「なるほど大した魔法だ、お前は魔導師として相当な天賦の才に恵まれているんだな。

魔法の才に嫌われてこの世に生を受けた俺では恐らくは一生を費やしたとしてもその域には届かないだろう……」

天の主より授かりし魔力というチカラ、魔導師の世界は世に生まれた時に持ち得たその量によって征く道が決まると言っても過言ではない。より多くの魔力を有して生まれた者は未来の空へと羽ばたく翼を持ち輝ける星となる、逆に乏しい魔力しか持ち得なかつた者は空に飛び行く鳥達を雨でぬかるむ泥土の上で見上げ届かぬ手を伸ばして惨めに泣く事しかできぬ憐れな家畜でしかない。無論この運命が絶対というわけではないが、少なくともこれまでの管理世界の歴史において、魔力が乏しき者が武をもつて英雄になつた”などという事例が載っている記述など時空管理局は一切確認していない。

「持つて生まれた魔力がほぼ無いに等しいにも拘らず俺は物心ついた時から時空管理局という組織の裏で戦い続けてきた。魔導師が存在の頂点に立つこの世界で戦い抜く為には魔法の才が必要にも限らず、俺は優れた魔法の才なんて持つていなくてな」

水眼は最低の家畜であつた……正しくはその頃は水眼ではなかつたのだが……。

「当然最初の頃は人の足を引き周りから侮蔑と嫌悪の眼で見られ、相応の苛みや粛清も受けた。戦場では己のチカラ不足故に死に掛けるなんて日常茶飯事で、いつ何時果てたとしても別段に変ではなかつたな」



魔力という翼を持たずにぬかるむ泥土の上を這いずり回る中で苦しみに喘ぎ続けて今まで生きてきた。何で自分がこんな目にと思つた事は一度や二度ではない。それ程にはこの少年は長い事理不尽で劣悪な環境に身を置き続けてきた闇の過去がある。

だが――

「それでも俺は曾て、手に入れた大切な存在を護りたい」と願い、戦い続けた。己の才の無さに嘆いている暇などない。至らない分はあらゆる武術を磨きそれに合つた体技を身に付ける事で補い、実戦と失敗を通して戦術を学び、理不尽という壁を越えるチカラを形振り構わず我武者羅に身に付けた」

それでも彼は必死に生き抜き今、此処に居る。

間近に迫つた暴星を静かなる決意と闘志を秘めたアイスブルーの瞳に映し、膨大な「神氣」と「闘氣」……そして「身に僅かに宿る極少の魔力」が刃器の上に収束していき虚空に光りの刀身を形造つていく。

「だがそれで事足りる程魔導師の世界は甘くない。ではどうする、この身に宿る極小の魔力をどう使えば空に届く？俺は考えに考え抜いて――これに至つた」

《虚空なる黎明の刃器》の刀身として経つた今顕現せしそれは夜明けの日の出を連想させる白き輝きを放つ光のツヴァイハンダーであつた。主の身の丈を凌ぐ長刃、その圧倒的存在感を目の当たりにして彼を深くは知らない破壊の柴竜の爪牙三人と六課の隊

長三人は驚愕のあまりに目を見開いた。

「なっ!？」

「ほう」

「おおーっ!」

「綺麗……それに冷たいのに不思議と温くて、安心する」

「魔力刃? でもこの魔力量は……?」

「なんや、けつたいな剣やなあ。 ついつい見とれてしまうやないか……」

途方もない修羅の道を駆け抜けてきた美しき雪夜叉の全身全霊の輝きを放つ靈劍に全ての視線が釘付けにされている。 生存本能リミッターを外し形振り構わず限界まで絞り出した少年自身を持つ闘気・膂力・魔力——全てのチカラを刃の形に集約する故に日に一度しか放てぬ真正正銘全力全開の必殺劍……その銘も——

「第七秘劍——《香雪蘭》」

寒く厳しい冬を乗り越え、暖かな春の訪れに咲く鮮やかな香雪蘭フリーズアの名を冠する輝きの靈劍……右手の氷刃器に顕現せしそれを後方に引き絞り、氷の柄に左手を添えると目前に迫った暴星をアイスブルーの瞳に捉えて地を蹴った。

地上に近づくに連れて発せられて来る風圧だけでも地上の表面を抉り取る圧倒的暴力の塊を相手に堂々と正面から挑み掛かりに行くのは無謀極まりない愚行と言える



煙が消失し、焼け野原に埋まる氷塊の側で小規模のクレーターの中心に横倒れになっているファンングの姿が一同の目に曝された。その狂気の朱い眼はしっかりと閉ざされておられ、起き上がる気配を感じない……勝った——

「倒………した？」

「これ………やったん、か？」

だがフェイトとはやて、そのセリフはこの場面で言つてはならない禁句だ。フラグ

「うゝ、うう………痛え………」

「「っ!!」」

これは何の冗談だ？ 致命的な一撃を受けておきながらもフアングは呻き声を鳴らしてのそりと起き上がったのだ。六課の隊長達の眼がそんな絶望的光景を目の当たりにして千切れてしまいそうな程に見開かれる。この悪夢はまだ続くというのか？

「急所を外されたか。意外にしぶとい」

「ああ、あの局面でお前が仕留め損ねるなんてな……」

「さすがはあの次元王軍ラグナガンドの尖兵といったところでしょうか。分隊長たった一人でも一筋縄ではいかないようですね」

一方でシルバーガスト小隊が並び立つ中央に空から降り立った氷眼の少年もまた自身の必殺剣で倒しきれなかったフアングに対して冷静な驚きを漏らしており、両隣に立っている裂槍の少女と白雷の騎士がそれに同感している。敵の正体を少なからず知っているであろう彼等もさすがにこれは予想外だったようだ。

「痛え、痛えな……くくくく——」

極限の緊張が高まる中、獲物を狩りに行く直前の肉食獣のように怖ろしく冷静な雰囲気纏ってその場に立ち上がったフアングが褐色の肌を曝した自身の胸元に刻まれた横一閃の断裂痕から流れ出ている赤い液体を手で拭い取り、その意味を実感して不気味に笑い出した。ああ、俺は今斬られて死に掛けたのか。この鉄が焼けるような激痛



きるだろうが……」

敵達が何やら意味深な会話をしている中で気が済むまで笑い続けたフアングは哄笑を止めるとギロリと氷眼の少年等に横目を向き、これまでに無い程に禍々しくドス黒い狂気と魔力を放出した……そして――

「《恋人よ、血肉を捧げろ。死骸を曝せ》」

その魔法の言葉を口にした途端……唐突として昼の空に漆黒の帳が降り出した――

「——《まじんじやばく魔人蛇縛》——きゆうきゆうによりつりよう急急如律令っ！」

刹那、唐突なる不可解な事象は連続して起こる……天から響くような男性の声が聴こえて来ると同時にフアングの足下に「太極図のような陣」が出現。その外枠から這い出るように飛び出した禍々しい闇を纏いし複数の蛇が彼の四肢胴体に絡み付き、管理局が知り得ていない謎のチカラで人の領分を破壊して内に秘めたリンカーコアを魔人の核に変換しようとする働きを封じ込め、動きを止めた。昼の空に降りかけていた闇夜の帳もまたそれに伴って急速に退いて消える。

「……えっ!？」

「なっ!?!？」

「っ、次から次へといったい何なんや!？」

「……」

「おいおい! アイツいったい今何しようとしたんだ? 一瞬気味の悪い夜になりかけて……」

「そ、それもそうですけど、それよりもいきなり発動してあの男を拘束したあの蛇の術式はいったい何なのよ!？」

「なんか胡散臭そうな野郎の声がした途端に白髪野郎に蛇が絡み付いて野郎の動きが封じられたな。野郎が直前に何かしようとしてたみたいだったが、それも蛇に絡み付か



れた瞬間にまるでそれが吸い取られたみたいに止まりやがったし、何がなんだか訳わからんねえなオイ」

「うん、なんだかくねくねしてて気持ち悪いね、あのへびさん」

「いや蛇は通常でもくねくねしていると思うのですが……あの『太極の陣』……もしや——『ああつ、やつとセツトアップできましたあ！ まったくいきなりシャットダウンするだなんて酷いじゃないですかモルド！ マイスターの起動無しにAIが自力でセツトアップするのがどれ程大変か解りますか？ 見てください、しなくていい無理をした所為で私のピチピチボデイがこんなに——つて、うわっ!? 何なんですかあの気味の悪い蛇は!!』——ベアトリスウー——ツ!!!」

不可解にして未知の事象の連続を前にこの場に居る管理局勢は理解が追い付かず、大いに動揺してしまいざわめきだす。

「ぐおおつ、クソが！ いいところを、邪魔してんじゃねえよっ!!」

「アハハハハッ、フアングの奴、蛇なんか切り札の発動を止められてあんなにイライラと。ぶぶっ！ ダサー☆」

「今の声、それにこの『太極術』は……まさか!」

突然発動された術に身を拘束されたフアングは元より、カッツエとヴォルカーンもまたそれぞれその異常を前にリアクションを見せていた。

「——ふむ、上手く鎮静化できたようだな。部下の監視と状況判断はしつかりするべきだ、幾ら主に命じられておらぬからといって、あまり管理局の前でその域を見せるべきではないぞ——グラナート少佐」

「「「「「つ!!?」「」」」」」

再び同じ男性の声が聴こえてきたかと思うと近場にフアングの動きを封じたのと同じ「太極の陣」が出現し、そこへ何者かが数人転移されて来た。

「「「「「んなどころに《特務小隊》のお出ましとはな……」」」」」

そこに姿を現したのはまるで陰陽師の様な束帯衣装姿で静謐ながら奇妙な雰囲気纏っている男性を筆頭にした異様な四人組であった。

ヴォルカーンが《特務小隊》と称する彼等はいったい? ……ただ一つ解るのは、リリカルな戦乙女達に最悪の悪夢を見せた破壊の柴竜の爪牙達との初戦は彼等の参上をもつて幕が下りるといふ事。

果たしてその幕はどう下ろされるのだろうか? そして翼を折られてしまった戦乙女達の悪夢の先に待ち受けている運命とは?

## 第二二六強襲中隊、無念の撤退。そして恐怖劇の序章の終演へ……。

次元世界の法の中心たる時空管理局と、出自不明の謎の反逆組織次元王軍ラグナガン  
ド。

「双方チカラを収め、武器を引け。逆らおうとしよう者は我が『式神』<sup>しきがみ</sup>の獄蛇がそのチカラと身動きを封じるぞ。先の事など考えず敵対組織の主力を前に過剰なチカラを行使しようとした其処の粗暴な愚か者の様にな」

数多の脅威を打ち破る希望となる筈だった管理局のエース部隊、古代遺物管理部機動六課が試験稼働初日にしてラグナガンDの尖兵である第二二六強襲中隊に活動拠点である隊舎を襲撃され、壊滅的打撃を受けてしまうといった衝撃展開から開戦した、表向き初邂逅となる両組織の初戦は、第二二六強襲中隊長のヴォルカーンが『<sup>ソニデルアインハイト</sup>特務小隊』と呼称する異様な風貌をした四人組の参上・仲裁により終息されたのであった。

「クソがア！ テメエら、これはいったいどういふつもりだアツ！」

「私からも聞かせていただきたい。何故貴方方が此処に？ 貴方方特務小隊はグロースシユタット総帥閣下の命が下りた場合を除き、優秀な人材の獲得を主に軍務を全うし

ている筈ではないのですか——御門大佐殿」

禍々しい闇を纏った複数の蛇に全身を捕縛されて身動きが取れる様子のないファングの憤慨の叫びに重ねるようにしてヴォルカーンが四人組のリーダーらしき束帯姿の男に慇懃な言葉で不信ではないのかと尋ねた。彼の敬意を払うような態度と口にした階級から察するに、どうやら束帯姿の男はヴォルカーンよりも上の権限を持っているようだが、その身に纏う雰囲気は厳格さが微塵も感じられず妖し気で、本当に軍属なのかと疑いたくなる。

「決まっているだろう。そのグロースシュタット卿の命が下つたからに他ならんよ」  
そう素っ気無く言つて氷眼の少年等シルバーガスト小隊の面々とその背中で警戒に息を詰まらせているのは達六課の隊長陣を一人一人興味深そうに視線を転じていく金目黒瞳の双眸を例えるならば暗闇の森の中を自由気ままに這いまわる蛇と言つたところだろうか。身体中に絡み付くような視線を向けられた際になのは達三人と朝百合の少女は「「「ひっ!?!」」」と背筋を凍らせている。

恐らくは束帯姿の男の部下であろう特務小隊の他三名がその有り様を見てそれぞれ三者三様のリアクションをしているのを見ると、彼等の組織内でもこの男の印象はこうなのだろう。白衣を纏い緋袴を穿いた巫女装束姿をした黒髪の女性はなのは達の心情を察して同情するように嘆息し、中華風の拳法着を着たいかにも戦鬪的で硬派な雰囲気

気の青年はやれやれと片掌で面を覆い隠し、蛙の頭部を模したミリタリーヘルメットを被り甚平の上にラグナガンドの軍服の上着を着た幼い容姿の少年はゲラゲラニヤニヤと生意気な笑みを浮かべている。

そして緊張と警戒を露わにして身構える管理局勢を一通り視回し終えると束帯姿の男は軽率な薄ら笑いを浮かべながらまずは挨拶をと彼等に一礼軽く頭を下げて言った。

「お初にお目にかかる。私は次元王軍ラグナガンド《第七特務小隊》を率いる席を穢す

《御門九霄》みかどきゅうしょうという者だ。以後お見知りおいてもらいたい」

素性を明かすとその隣に彼——九霄の部下達が並び立ちその後にくよくよに次々と名を明かしていく。

「初めまして。御門大佐の隊の副官を勤めさせていただいている《賀茂桔梗》かものきぎょうといいいます。御門大佐が大変失礼な目で見た所為で不快な思いをさせてしまい、特に若い女性

の皆様は申し訳ございません」

「《バオ・フェン》だ。第七特務小隊の“モンク兵長”に勤めている。……まあ、兵長と言っても我らは四人のみの部隊故に意味の為さなない肩書だが……」

「オレッチは“空兵長”の《ジャオ・ズウ》だツチ！ オレッチ達特務小隊はグロースシュタット総帥直々に選ばれた少数精鋭部隊なんだツチよ！ 管理局の三下共よ、頭が高い！ 控えおろくツチ！」

「此度我らは軍の長たるグロースシュタット卿の命によりこの戦場を収め、貴殿ら時空管理局が法の下に統治する全管理世界に武力をもつて侵攻すると貴殿らに『宣戦布告』の意を伝えるべく参上した次第だ。理解されよ」

最後に九霄が戦鬪を仲裁した目的について述べて締めるとその意味を逸早く理解したはやてが「な、なんやて!!」とどよめきを発し、それを皮切りに九霄等第七特務小隊の四人を除くこの場の全員がざわめきだした。

「宣戦布告……だど? それはいつたいどロ」どういう事だ、御門ツ!!」

「宣戦布告」の意味は当然理解しているともしも言葉自体が漠然としすぎていて突拍子が無い故に度し難く、氷眼の少年が九霄にその動機の提示を求めようとすが、その声はヴォルカーンが発した九霄へ問い詰める大声によつて掻き消されてしまう。

「私は別に気にしないのだが、階級が上の者に向かつてその聞き方はないだろうグラナート少佐よ。して何かね?」

「宣戦布告をするのはいいとしましょう、広報から我々強襲中隊にも通達がありましたのでな。しかし、『総帥閣下が我らの戦いを仲裁するように命じた』とはどういう事なのですか!? 我ら第二二六強襲中隊がこの戦場に赴いたのもグロースシュタット閣下の命による任です。故にこれでは命を下された閣下の意図に矛盾が生じてしまう。

納得いくご説明をして頂けますか、御門大佐?」

確かに彼の疑問は尤もだ、機動六課を潰せと命じた張本人がその戦いを仲裁するように他の隊を喚けるなんて意図が矛盾している。

その問いに九霄がやれやれと軽く困ったような顔を繕っていると、まるで見計らったかのように機動六課隊舎跡地の空に巨大な空間モニターが展開された。

『その説明は私がしよう』

唐突な展開の連続にこの場に居る管理局勢一同はそれぞれ六課隊長陣とシルバークエスト小隊で大小の差異はあれど動揺を隠せない。声に釣られて見上げた空間モニターに映し出された人物は堅物を絵に描いたような刈り上げショートヘアでビシツとしたスーツ姿のナイスミドルな中年男性だ。強張った顔付きで隊舎跡地に集う一同を見下ろしているこの男性は――

「こつ、これは、《ターゲルン・ボルマン》准将閣下!？」

『突然戦闘を止めてすまないなグラナート。グロースシュタット総帥閣下は先程いつもの発作で本部を留守にされたのでな……故に閣下が御戻りになるまでの間、軍の総司令代理を任された私がこの場を引き継ぐ。お前達《第二二六強襲中隊》は隊を纏めて御門達と共にミッドチルダより引き揚げ、本格的な開戦に備えて準備を進めろ。任務はそれで終了だ』

「し、しかし准将閣下――」

『これは総帥閣下が本部を空ける前に下された命だ。今回の命の真意についてお前達には『最前線戦略拠点』で話す。今は命に従ってくれ』

「くっ……了解ヤしましたヴォー准将閣下ルヘア・ブリガーデゲネラル！」

敵軍総司令代理のボルマンによつて作戦終了が告げられた事でヴォルカーン達第二二六強襲中隊は否応なしにミッドチルダから撤退する事になり、もう何も残っていない焼け野原と化した六課の隊舎跡地や近場の海に散らばっている戦闘不能の隊員達を衛生兵隊に拾わせて纏め、彼等は次元跳躍転移陣を発動させて迅速にこの場から去つて行く……。

「かはっ、覚えていろよ氷眼の小僧、この借りは次の戦場で必ず返す。散々俺をコケにしてくれた破戒狼の小僧と切燕のチビガキもなアツ!!」

「アハハハハ！ ちよつと物足りなかつたけれど、なかなか楽しめたよ！ 機動六課のお姉ちゃん達ー！ 次はちゃんとバラバラにして殺してあげるからねー♪」

足下の転移陣が発する光に包まれながら第二二六強襲中隊員達は一人、また一人とこの場から姿を消して何所かへと転移していく。恐らくはボルマンが言っていた『最前線戦略拠点』にしろが、残念ながら転移先を追える設備がこの場に無い為その世界・場所を特定する事は不可能だ。仮にあったとしてもラグナガンドの技術力は現時点では未知数、管理局程巨大な組織に戦争を仕掛けようとするような連中が素直に戦略



拠点の一つを特定させてくれるとは思えない。

「次元王軍ラグナガンド……第二二六強襲中隊……」

「…………ふんっ」

ギリイイーツ！ 隊の殿を務めるように最後に転移して行くヴォルカーンの嘲笑する鼻鳴らしを見送り、はやては心底忌々しく表情を歪ませて歯茎から流血する程強く歯を噛み締めた。

——アンタ等は絶対に許さへんで。 例え今はチカラが及ばなくたって、いつかは必ずブチのめしたるわ！ 私達の夢の部隊をようも潰してくれた借り、殺されたグリフィス君達の仇、いつかは必ず……ツツ!!

憎しみで握り震える拳に血が滲む、食い縛った眼から流れ出る悲哀の涙が止まってくれない。

「では、時空管理局のエース及び未来に羽ばたく翼を奪われし烏の諸君、縁があればいずれ戦場で相見えるでしょう。ではさらばだ」

そして九霄ら第七特務小隊の四人が第二二六強襲中隊の後に続くように次元跳躍転移符で転移陣を敷き、光の中へと消えてこの世界よりどこかへと転移して行く。 役目を終えた転移陣が無数の燐光となって消滅し、夕焼けの黄昏へと変わりつつある空へと舞い上がって行くのを見上げてはやては強く誓った。 次は負けない、

第二二六強襲中隊は機動六課がいつか必ず倒す……と。

「アハハハ、なーんか僕達あのカルシウムさんに完全に目を付けられちゃったみたいだね☆」

「気にするなよ、次会ったら問答無用でブツ倒せばいいだけだろ？ ……で？ 特務小隊なんていかにも超変態っぽそうな部隊を使ってまで白髪野郎共を撤退させた理由、オレ達には今すぐに説明してくれるんだよなあ？ 大量の胃薬のお世話になつてそんなラグナガンドの総司令代理さんよお」

この戦場からラグナガンドの尖兵達が一人残らず引き揚げて行つた事で残る外敵存在は夕陽の黄昏に染まった上空に浮き出た巨大空間モニターの中からなのは達管理局勢を見下ろしている敵軍総司令の代理人、ターデルン・ボルマンのみだ。破戒狼の少年がヘラヘラと苦笑いをしている切燕の少年に軽く論ずるとニヒルな笑みを浮かべながら映像のボルマンを見上げて彼に尖兵達を撤退させた理由の説明を促した。

幾ら氷眼の少年が第二二六強襲中隊の主戦力の一人であろうフアングを追い詰めていたとはいえ、あの時点で劣勢だったフアングはまだ「奥の手」らしきチカラを残している素振りがあつた上、仮に彼がやられたとしてもカツツエとヴォルカーンという強力な後続だつて居ただけだから、戦況が芳しくなくなつたと判断して撤退させたという線は考え難い。ヴォルカーンは「機動六課を潰せと軍のトップから命令されたから襲撃

しに来た」と簡潔に説明していたのだが、この襲撃戦には何か敵の別の思惑があると考えた方が妥当だろう。

『急かさなくてもいい、今回の件についてはちゃんと説明はさせてもらおう。その話を円滑に進める為にグラナート達にはこの場を即刻に引き揚げてもらったのだからな』

意外な事にボルマンは敵に今回の六課襲撃に関する真の意図を説明する事を渋る素振りもない淡々とした口で話し出した。

『まずは挨拶させてもらおう。私は次元王軍ラグナガンドの作戦参謀長を務めている《ターデルン・ボルマン》という者だ。先程聴いたと思うが軍総司令を勤める総帥閣下が多忙で本部を留守にしている故に現時点では私とその代理をさせていただいている。

以後よろしく頼む』

突然襲撃を仕掛けて来た反乱組織の司令代理とはいえ軍人、形式上の挨拶はしつかりと果たすようだ。となれば管理世界の正式な司法軍人として、例え腸が煮えるような怒りを無理矢理抑えてでも冷静に返さなければ面子に掛かりかねない。機動六課の部隊長であるはやてはこの場に居る全員を代表するように前に出た。

「初めましてやな。わたしは時空管理局特別捜査官の《八神はやて》……アンタ等が今日襲撃して虫ケラのように潰してくれた《古代遺物管理部機動六課》の総部隊長や」

『これは御丁寧に』

「随分な挨拶やないか、私の部隊を滅茶苦茶にしてくれたってのに組織のトップが顔も見せずに代理人を寄越すやなんて」

『勘違いをするな、別にその事について謝罪をするつもりで話しているのではない。』

確かに敵対する組織に宣戦するのに軍の長が出られないのは申し訳ないとは思っているが……先程言った通り、総帥閣下は現在多忙で本部を留守にs「いや、さつきヴォルカーンって奴と会話してた時に“いつもの発作で居ねー”とかなんとか言ってただろ？」……はああ』

破戒狼の少年に言い訳を指摘されたボルマンが堅い頭を片手で抑えて重い溜息を吐くのを見てこの場の一同は「本当にこの人は大量の胃薬にお世話になっていそうだな」と先程言った破戒狼の少年の皮肉に同意を重ねた。　　どうやらラグナガンドの総帥とは色んな意味で部下を困らせている変人奇人のようだ。

「貴様達のくだらない内情などどうでもいい。そろそろ本題に入ってくれないか、このまま話が逸れ続けたらいつまでも收拾がつかなくなりそうだからな」

と、氷眼の少年が冷静な口調で話の軌道を修正する。　　確かにこのままだとグダグダ

になっていつまでも進まないだろうし、そろそろこの悲劇の恐怖劇の序章の真意を明かす時しよう。

『それは御尤もだ。　　確か第二二六強襲中隊を撤退させた理由だったな……：単刀直入に

言うところの六課襲撃が――

――管理局に宣戦布告する前の「デモンストレーション」だからだ。貴様達管理局のエースが我々にとつて取るに足らない存在であるという事実を、貴様達の支配圏である管理世界全域に知らしめる為の……な』

「……ええ？」

今明かされたラグナガンドの衝撃の策略に思わず愕然と硬直してしまうのは達。

裏で、果たしてその全貌とは？ 未来へと羽ばたく翼を折られた戦乙女達の悲劇の戦いの  
裏で、いったい何が動いていたというのだろうか……。

遙か無限の宙（そら）へ！ 破壊の柴竜、管理局へ宣戦布

告！！

「デモンストレーション」……や……て……!!?」

ラグナガンドによる機動六課襲撃の真相を聞いてはやては衝撃を受けたように表情を強張らせた。その内容があまりにも不可解であったが為に彼女の瞳孔は小刻みに震えて映像に映るボルマンに焦点を合わせる事ができずに輪郭が二重にブレて見える。

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

「『デモンストレーション』って、それはいったいどういう意味だっ!!」

身体の芯から震えてくる動揺に続く言葉が出せないはやてを補助するべくなのはとフェイトも前に出て来てはやての両脇に並び立ち、愉悦も弁解もする気配もない硬い無表情で見下ろしてきているボルマンに二人はその真相の説明を求めた。

『デモンストレーション』とは勢力・技能・性能などの有能さを示したい相手に対しそれが現実である事を実演して見せて強く印象付けさせる行為を意味する。戦争目的のデモンストレーションでそれが先程の襲撃戦となると、恐らくは管理局の名だたるエース級が集められた精鋭部隊である機動六課を蹂躪してみせる事で局全体の士気を

大幅に下げさせようとしたのだろう。

確かに六課には総合SSランク魔導師である部隊長のはやてをはじめとして、夜天の主の守護騎士であるヴォルケンリッター達に過去数年で数多くの検挙数を挙げている名執務官のフェイト、そして数々の難事件を解決してきた不屈のエース・オブ・エースであるのはなど、いずれも管理局の主戦力が一堂に集められている異常と言える（少なくとも時空管理局という組織内に限定すれば）最精鋭部隊である。故にそんな彼女達が手も足も出する事なく蹂躪されたとなると、管理局はラグナガンドの戦力の強大さに恐れ慄き局全体の士気が駄々下がりになってしまいうだろうという想像は容易につく。

しかしその効果を發揮するには示す対象に直接伝える事ができて初めて達成されるものだ。時空管理局程の巨大な組織ならば自分達の不利益になる事柄を下に伝わらせないように隠蔽する事など容易に可能だろう。

なのでただ強襲部隊を送ってなのは達を蹂躪したところで局全体の士気に限定するならば影響は少ない筈だ。下から来る真実を追求する声に対して口を閉じておけばその証拠材料と成り兼ねない戦いの爪痕をロストロギアの暴走だのなんだの言い訳する事ができる。

故にこの襲撃戦を管理局への深刻な打撃とさせるならば――

『サー！ たった今緊急回線で三者からの通信が繋がりました！ 至急モニターに投



影します!」

襲撃の目的を究明する姿勢で事を構えているとまるでこのタイミングを見計らったかのようにフェイトの手に持つバルディッシュの核が唐突に点滅しだし、男性的な機械音が自分の主にそう伝えて来た。すると間を置かず迅速になのは達三人の眼前に通信回線の小空間モニターが三つ展開された。

『なのは! フェイト! はやて!』

『よかった、ようやく繋がったわ』

『はやて! 高町一尉にハラオウン執務官もなんとか無事……とは言い難そうですが、なんとか生きていますようですね。 よかった……』

「クロノ君!」

「リンディ母さんも!」

「カリムまで……」

その三つの空間モニターにそれぞれ映し出された三者はいずれも六課の隊長達に縁が深く、聡明な存在感を確かに感じさせているのだが、一人の例外なく急かすような焦燥を浮かべている。

フェイトの義兄にしてXV級次元航行艦《クラウディア》艦長の《クロノ・ハラオウン》提督、その実母でフェイトの義母にして本局の総務統括官を勤める《リンディ・ハ

ラオウン》、そしてはやての友人であり管理世界に浸透している《聖王教会》騎士団騎士であると同時に名目上だが管理局の理事官の席に身を置いている《カリム・グラシア》——モニター越しではあるものの機動六課設立を大いに助力した後見人の三名が今此処に顔を揃えたのであったが、その焦燥と額から流れ出ている冷汗から察するに穏やかな用件で通信を繋げてきたのではないだろう。

「い、いったいどないしたんや三人共？ 皆そないに血相を変えて」

『大変だ、深刻な事態になった！ 先程からどこからか何者かにこちらの通信回線が乗っ取られたらしく、君達の隊舎が襲撃者の巨大な魔力刃に破壊される映像が強制的に全モニターに映し出された為に艦隊中が機能不全に陥ってしまっているんだ！』

「な……なんやてええっ?!?」

『本局の通信回線も多次元ネット回線も同じ状況だわ。おまけに一般のテレビ放送にまで貴女達と襲撃者の戦闘が放送されてしまって、貴女達がやられかけた場面になったあたりから事情説明を求める連絡が管理世界中から殺到して後を絶たないの。おかげで職員達はその対応に追われてしまって、本局中もうてんやわんや』

『それでその、たった今宣戦布告の話がされたところで管理世界中が大パニックに陥ってしまつて、教会騎士団の方でも総力を揚げて事態の対応にあたっている状況なのです。既に至る世界で事故が多発して死者も出てしまっているわ！』

「そ、それって……」

「管理世界中の通信放送が……」

「ラグナガンドの連中によって……ジャツク掌握されたっていうんかいなっ!!?」

三人の後見人から齎された衝撃の事態になのは達三人は青ざめた。敵の六課襲撃の真の狙いはコレだったのだ。管理世界全ての通信放送を乗っ取り、管理局の絶対的エースとして管理世界中に名を馳せているのは達を僅か一個中隊で圧倒・蹂躪する映像をリアルタイムで全管理世界に放送する事で管理世界中を恐慌状態に陥らせ、管理局の信用を地に墮とすという、襲撃前にはもう既に仕組まれていた企てだ。

なのは達機動六課は管理世界においてあまりにも信賴的で高名な魔導師の集団であったが、為にまんまと利用されてしまったのだという事だ、次元王軍ラグナガンドという侵略者達が管理世界に侵攻を始める際に時空管理局に与える痛恨の初撃として……。

『聞けえっ！ 時空管理局の統治と守護という微温湯に浸かり、戦火を排する法に身の安全を委ね、自らは何もせず墮落を謳歌し続ける事を良しとする管理世界の民衆共よ!!』

ラグナガンドの襲撃の目論見を知って既に畏に嵌められていた事に愕然と戦慄するのは達を見て策は成ったと確信したボルマンは今こそ好機とばかりに片腕を盛大に高く掲げ、全管理世界に向けて高らかに演説を開始した。

『諸君らが絶対無敵と信頼を寄せる管理局のエースの小娘共が集いし部隊は、見ての通り我が破壊の柴竜の爪牙によって無力にも容易く没した！ 諸君らの守護者など我が軍のチカラの前には塵芥にも劣るといふ事実が白日の下に晒されたのだ!!』

不屈のエース・オブ・エース、心優しき金色の閃光、歩くロストロギア夜天の主が一堂に集結した時空管理局最強の精鋭部隊、機動六課は次元王軍ラグナグンドという未知の侵略組織によって手も足も出せずに敗北を喫したという衝撃的絶望の事実は奴等に掌握された全ての通信放送を通して管理世界全域に余すことなく伝わり、管理局の統治と法に日常を護られて生活している管理世界の住人達を恐怖と絶望に陥れて狂乱に墮としていく。

何処へ行くかも判らずに逃げ惑い出す女子供、何かの間違いだと立ち尽くす老人、事の真相を求めて通信端末機で管理局の情報課に抗議の連絡を入れる大企業の社長、自分達が忌々しく思う管理局のエース達が更に上のチカラに屈し潰された事に「ザマアツ！」と狂喜乱舞し始める弱小次元犯罪組織、平和は終わったと気を狂わせて暴動を起す二一ト。時空管理局の絶対的な守護と法の下に平和が約束されていた管理世界は瞬く間に混乱の渦へと堕ちていく。

『諸君らの平穩の日々は今日という日をもって終わりだ……これより我が次元王軍ラグナグンドは時空管理局が統治する管理世界への侵攻を開始する!!』

次元世界全ての映像越しに高く掲げられていたボルマンの腕がチカラ強く振り下ろされると同時にラグナグランドによる時空管理局への宣戦布告が為されたのだった。

『我らが管理局に要求するのは無論、管理世界の統治権の譲渡！我らが《次元王》の理想とする世界を創造する為に、戦火の中に散り征く魂はその礎いしずえとさせてもらおう！！』

「そ、そんな……」

「ふざけるな、何を勝手な事を……ッ!!」

「チツ、あの戦争狂共め……」

なのはやフェイト、烈槍の少女がボルマンの過激な言い振る舞いに背德的な思想を感じて動揺し悪態を吐いている。どうやら空間映像越しに演説中のボルマン及びにラグナグランドの構成員達は皆“次元王”と称される何者かに狂信的な忠誠心を抱き長としているようだ——

『その《次元王》たる我が軍の偉大なる長——《ラプス・グロースシュタット》総帥閣下は現在、多忙故に軍本部を留守にされている為、その間の軍総司令代理を任されているこの私、《ターデルン・ボルマン》が》恐れ多くも代役として宣戦布告を務めさせて頂いたが……本部を空けられる前、グロースシュタット総帥閣下より諸君ら管理世界の全民衆へのメッセージを預かっている。最後となるが、心して聴くといいつ!!』

その《次元王》がどの様な人物なのかは今此処で明かしてもらえない……ボルマンがそう言い放つと黄昏に染まった空に浮かぶ巨大空間モニターに映っていた彼の姿が消えて画面の中が薄暗い玉座の間の様な場所に切り替わる……その刹那、映像越しの玉座に座する男から発せられて来た異次元の威圧感に機動六課隊舎跡地に立つ戦士達は心の臓を貫かれるような衝撃を覚えた。

「「「「「——ツツツツ!!!!「「「「「」

玉座の背に幻視するは宙そらと破壊を司る紫の竜、座する半裸の肉体は無駄が存在しない人体の黄金比、竜の牙が画面を粉微塵に突き破つて来る錯覚を見させられるようなこの世のモノとは思えない程絶大な重プレッシャー圧は人間が生み出した数字では表しきれない程果てしなく重く、まるで戦神か何かを持つ黄金の槍の矛先を首元に突き付けられたかのようにその存在を認識してしまった総ては戦々恐々と立ち尽くしてしまう。首から上は陰に遮られていて視認できそうにないのが幸運だろうか、もしその男の全身を総て認識してしまつたら矮小な人間の魂は砕け散つていたかもしれない。生物の本能が告げる、この男の存在は尋常では断じてないと。

『次元の海の法と守護を司る時空管理局の戦士達……並びに平和を愛する管理世界の民達よ——』

陰の中に浮かぶ口元は常に不敵な笑みを造り、声が映像内の薄暗い玉座の間と外の黄

昏の大空に響き渡った瞬間に管理世界中の総ての生物がその声に惹き込まれた。民衆の狂乱はその一声によって荒波が氷漬くかのように鎮静し、事の鎮圧に動いていた管理局員達もまた氷の針で地に縫い留められるかのように足を止めてしまふ。

『——俺はラグナガンド軍総帥のラプス・グロースシュタット！ 皆からは《次元王》と称されて呼ばれている、至高天の先を目指す者だッ!!』

“声にはチカラが宿る”と俗に言うが、この男の声に内包された覇気は逆らう者を地中深くの地獄に墮とす魔王の如き圧力とは一線を画していた。寧ろその例えとは逆にこの世の総ての存在を遥か高みの宙そらへと引き上げるかのような引力を感じさせる。翼をはためかせて彼と共にどこまでも飛翔して行きたい、彼が行き着く空の果ての至高天を後に続いて行きこの眼に収めてみたいと——

『至高の高みとは自らの翼をもつて飛翔し続けて征く無限の宙そらッ！ 理想の世界を願う求めるならば他に任せず己で勝ち取ってみせるがいい!!』

だがその声に引き上げられた先は至高天という樂園とは断じて違う。それは何処まで飛翔して征ったとしても終わりの極点が存在しない無限天獄に他ならず、太陽に焼かれ、天元を突破し、至高天を突き抜けても尚高く飛翔し続けて征く終わりになき空路を旅する運命。

『俺は総ての高みへの意志を肯定する！ 故に総ては己が理想を叶える為に争え!!』

魅せられて飛び出したら最後、もう自分の意志では戻れないだろう。何故ならその意志はもう既に果て無き永劫の宙へと飛翔して征く竜に囚われているから。

『愛、夢、平和、富、名声、チカラ、探求、世界征服……より高き理想を求めんと手を伸ばす意志は何であれ貴く輝かしいものだが、世の皆が続べからず同一の理想を願う事など有り得はしない、故に異なる人同士は理想を求め征く道を相容れさせる事などできぬ……故に戦争を！ 譲れぬが故に勝利を！ 命を燃やし鉄風雷火の三千世界を翔け抜けろッツ!!』

他人を思いやるが故に妥協する墮落など許さない、叶えたい理想があるのなら激突する他人を蹴落としてでも飛翔しろ。

『黄金の戦火に抱かれ、共に遙か理想の高みへと、身が砕け散るまで競い合おう——』《オオ  
イナル黎明》を指してツツ!!』

『総てを無限の宙へと引き上げる』、それこそが次元王ラプス・グロースシユタットの覇道。

『果て無き永劫の宙』は此処に在り！ 次元の海の法と平和を守護する管理局の戦士達よ、並びに今こそ己が理想を叶えんが為に立ち上がらんとする強者達よ。願わくば互いの悲願を懸けた戦場にて相見え、磨き上げた矛を交えて共に魂を限界まで凌ぎ合える決日があらん事を!!』



譲れぬからぶつかり合う。その不屈の意志が戦争への引き金となるのだ!

『我が軍に勝利を! 管理世界の戦士達よ、いずれ戦場でまた会おう! さらばだ!!』  
ジーク・ラグナガンド アフ・グライダーゼン

これにて時空管理局と次元王軍ラグナガンドの初戦は終幕! 組んでいた両腕を解き、チカラ強く握った右拳を突き出したラグナガンドの首領は次元世界中に破壊の柴竜の威光を示すように盛大に宣戦布告を締め括ったのだった。

破壊の柴竜の脅威が一時的に過ぎ去った後に残ったのは焼け野原に漂う静寂な微風だけであった……。

空を支配していた巨大な空間モニターが役目を終えて消失した事で何もかもが焼失してしまつた南駐屯地A73区画に悲愴な黄昏が照り付けて来ている。海は沈んで行く夕陽で水平線が黄金色の麦畑のように輝いていて海岸線に響く小波の静謐さ加減が、なのは達の周囲一面に広がる殺風景の無情な切なさをこれでもかと演出していた。「何も……できへんかつた……うぐつ……私は……理不尽な運命に立ち向かつて行く為に……大切なものを護る為に……うぐつ……機動六課を……創つたというんに……ううっ！」

チカラ及ばず奪われた悔しさとどうしようもない哀しさに打ちのめされ、その場に両手を着いて這い蹲り、強く食い縛つた両脛から溢れ出る悔し涙と共にはやては行き場のない泣き言をととても堪える事ができずに吐露していた。長い時間をかけて彼方此方から支援を貰つてきた事でやつとの思いで設立できた念願の夢の部隊は始動したその日に簡単に叩き潰され、皆の未来への希望が詰まつた隊舎は襲撃者の魔法によつて跡形も残らず焼き崩され荒野と化し、共に降りかかる脅威に立ち向かつて行く筈だったグリフィスをはじめとする仲間達の命は無情にも襲撃者達によつて奪われて逝つてしまつた……完敗だ、過去に“PT事件”や“闇の書事件”といった数々の難事件を解決してきた管理世界の英雄たる戦乙女達は破壊の柴竜の爪牙に完全な敗北を喫したのだ。

「どんなに強大な敵が来ようともみんなが一緒なら大丈夫やと信じておつた……なのは

ちゃんが……フェイトちゃんが……ヴィータ等私の自慢の家族達が……そして私が……一緒に今までの困難を乗り越えて来た信頼できるみんなが集まったこの機動六課なら……誰にも負けないと……護れると……信じておったのに……うう……うわあああああああああー……っ!!」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

『はやて……』

『……』

『世界はいつだってこんな筈じゃなかった事ばかりだ……そんな事は昔から解っていたつもりだったが、こんな……あまりにも……ッ!!』

焼け野原に蹲って悲しみに泣き崩れたはやてを見て彼女と同じ想いを抱く同志達は胸が締め付けられるような悲痛に心を苛ませている。手も足も出ずに負けて大切な多くを奪われてしまったのは彼女達が弱かったからではない、敵があまりにも強大過ぎた……しかし次元世界の法を統べる司法組織の者としてそれを犯罪組織に後れを取った言い訳にする事など許されない。この大失態で六課の部隊長であるはやてには多大な責任が背負わされる事となるだろう。将来有望な若手を引き抜いた各部署や部隊設立反対派、そして襲撃戦による余波の被害に遭った付近の住民達からの糾弾が飛ん

で来る事も覚悟しなければならぬ。何よりもこれでは殉職してしまったグリフィス達が浮かばれない故に、それがなんとも不憫でならなかった。

「あくあ、こりやあ派手にやられちまったなあ、オイ」

「うん、新部隊の隊舎は大規模の改築工事をして最新の設備を取り揃えてるって噂を聞いたけれど、もう跡形も残っていないから確かめようがないや。あくあ、どんなのだから一度見学してみたかったんだけどなく、残念……」

そんな悲壮感漂う場が形成された中で空気の読めない《破戒狼》<sup>ゲオルグ</sup>と《切燕》<sup>スパーダ</sup>の二人がなんとも情緒の無い事を口にする。幸い彼等ははやて達から離れた位置に居た為に彼女達には聞こえなかったようだが、代わりに側に立つ朝百合の少女と白雷の騎士から批難の視線が向けられた。

「ちよつと二人共!? こんな時になんて事を言うのよつ!!」

「その発言は失言が過ぎますよ。悲しみに暮れている場合ではないのはわかりますが、言葉を選んでください」

『そうですよ！ほんつとこの二人はデリカシーが無いんですから、気を付けてください。繊細な女の子の心は傷付きやすいガラスの工芸品なんですからね！次言ったらこの切っ先でその汚らわしい股にぶら下がったモノをブツ刺しますよ!!』

「へいへい、わかりましたよつと」

「えっへへ、ゴメンネ☆」

デバイスにまで咎められた空気の読めない男二人は反省の色もなく謝罪する。内心を隠す姿勢も見せない何所吹く風の二人にシルバーガスト小隊内において比較的常識的な感性を持つている二人が本当に解っているのかというジト目を向ける一方、氷眼の少年と烈槍の少女は辺りの惨状を見回して今回の襲撃での被害状況の大凡を分析していた。

「ひでえなこりゃあ、規模がデカ過ぎる。この南駐屯地A73区画にはもう雑草一つ残っていないねー上に先の先の区画までラグナガンドの奴等が放った破壊魔法でブツ壊されていやがる。この分だと六課以外にも確実に多くの被害が行っているだろうな……」

「ああ……そうだな……」

烈槍の少女の推測を聞いて氷眼の少年は上の空で頷いた。少年は何かを深く考え込んでいるあまりに意識の焦点が合っていないフラ付いた様子だ、その為烈槍の少女はサバサバした性格故か自身の奇抜な紅い頭髪を片手で掻きながら飄々と言った。

「ラグナガンドの総帥、予想以上のバケモンだったよな……」

「……ああ」

「さすがのアタシもビビっちゃったぜ、なにせモニター越しの記録映像であの気当たり

「だしな。格の次元が違い過ぎるっつーか、心のハートが氷らされるっつーか……今のアタシ達じゃ到底敵う気がしねえ……」

「……」

「あの男……お前と同じ『黎明シリーズ』の聖遺物持ちだって、あの包帯ヤローが口にしていたけどよ……深く気にすんなよ？」

「どうやら氷眼の少年が何を考え込んでいるのかはお見通しだったようだ。記録映像越しで顔も陰に隠れていたというのにその圧倒的な存在感を全管理世界に示してみせた『次元王』グロースシユタット……映像越しにも拘わらずにその存在感から来る異次元の重圧と発した声を耳にしただけで無限の大空を燃やす太陽の灼熱に自身を焼かれる幻視をしてしまう、遙か宙から見下ろす破竜を連想させるケタ違いの怪物……もし直接奴と対峙していたらと思うと言葉にならない。奴は次元世界全ての生物と比べても明らかに存在が超越し過ぎている。」

「アタシだって記憶障害の所為で管理世界に次元漂流して来た前に居た世界の事なんてまるで憶えちゃいねえのが不安だ。偶になんらかで昔の記憶らしい何かが頭ん中に鬱陶しくデジャヴるし、さつきもあのフェイトって金髪の声を聴いた瞬間に知らねえ誰かの顔がチラついたりもした。管理世界に漂流する以前のアタシが何者で誰と何所で何をしていたかなんぞ知らねーけど、アタシはアタシだ。だからさ——」

そう言つて気さくな笑みを浮かべ、烈槍の少女は片腕を氷眼の少年の首の後ろにまわしてグイッと引き寄せる。

「もつと気楽に構えて行こうぜ！ そりやあ、常在戦場忘れるべからず」つてえのも大事だろーけど、気を張り過ぎてもしようがねーだろ、隊長？」

そう言つてフレンドリーにじやれ付く姿は微笑ましく、豊満な胸脇に頭を抱えられて鬱陶しそうにむくれ顔をした少年が女顔の為に傍から見たら仲の良い姉妹のように見えるだろう。口振りからして彼女も相当複雑な事情を抱えているだろうに、その気丈

な振舞いはまさに良き姉のような温かな抱擁感があり、少年はアイスブルーの眼を恥ずかしそうに半開きにしながらもその安心感に元気づけられて少しだが不安を緩和できたようだ。その証拠にむくれていた顔にはいつの間にか微笑を浮かばせていて、もう大丈夫だから放してと言わんばかりに首に回されている腕を振りほどいた。

「気を遣つてくれなくても大丈夫だ、歳が近いお前に子供扱いされる程俺の心は弱くない」

「ふくん、そう言つてる割には顔が朱くなつてているじゃないか。なんだ照れているのか？ かわいくな、ウチの隊長さんはさよ」

身動きがとれるようになった氷眼の少年は再びジト目になってニヤニヤと悪戯の笑みを自分に向けてきている烈槍の少女に強がってみせるが、照れ隠しが下手である故に

簡単に見破られて擲掬われ、余計に羞恥心を煽られた少年は更に頬を濃い朱に染めて平静を装いながらもこの場から隊ごと退散する意を顕す。

「……行こう、任務は終わりだ」

「んー、それはいいんだけどさ。お前、あのエース・オブ・エースの子には何か言っつかないのか？」

少し遠目で悲愴に暮れているのは達を背にスタスタと他の小隊メンバーが集まって談笑している場に歩き出して行こうとすると、烈槍の少女に呼び止められて一旦足を止める。彼女の言っている意味が理解できなかった為に少年は背を向けたまま肩を竦めて聞いた。

「どうしてだ？ 任務を達成したなら長居はせずに速やかに帰還するのが基本だろう」

「そうだけどさ。お前あの子と昔馴染みなんだろう？ さっきもやけにいい雰囲気だったみたいだし。彼女が今あんなにしょぼくれた顔してるってのに、お前は少しも彼女を元氣付けようとしねーで帰っちまうのかな？」

そう聞き返されると少年は言葉を詰まらせた。言ってきた内容の内の数ヶ所があまりにも的外れだったからだ。

「……アイツとは昔馴染みでも恋人同士でもない、ただ前に居た部署での任務の一環で一時、俺が護衛する対象だった事があっただけ。元氣付けるにしても部外者の俺



がどうこう言ったところで仕方がないだろう、そつとしておいてやれ。この場において俺達にできる事はもうなにも残ってはいない」

冷淡にそう答え終えると止めていた足を再び進めだして行く。冷たいように感じるかもしれないがこれでも気を遣っているのだ、何故ならば彼女達の積み上げて来たモノの重さは彼女達に深く関わりを持つ同志にしか解らない、故にその同志でもない自分に彼女達に語る資格は無い。「何も知らない君に何が解る、知った風な口を利くな」と余計に傷付けて追い返されるのがオチだろう……「解つたならもう行くぞ」と背後の烈槍の少女に促しつつ歩みを進めようとしたその時、背後から彼女とは別の少女の声に再び呼び止められた。

「ま……待ってー!」

意外な第三者の声に思わず進めていた足を再び止めて振り返る少年、すると其処に必死な形相をして叙情的な碧い瞳をこちらに向けて来ていたのは——

「行かないで……今度こそちゃんとお礼を、言わせてくださいっ!!」

無論、管理局のエース・オブ・エースにして氷眼の少年が八年前に命を救った不屈の心を持つ少女——高町なのではあつた……。

## 任務完了、帰還する！

ラグナガンドの尖兵達にチカラ及ばず敗北を喫してしまった機動六課の戦乙女達。

「ひぐつ……グリフィス君……皆、ゴメンな……仇は絶対に……う”つ、う”あ”ああ……んぐ……う”う、ぐずつ……」

なのはとフェイト、周囲に展開された通信用空間モニター越しに映し出されている六課の後見人三名がその遣りきれない気持ちを共有するように、多くの大切を奪われた深い悲しみに苛まれ泣き崩れているはやてを慈悲と悲愴に満ちた眼で見守り気を消沈させていたが……しばらくしてなのはがふと横を振り向き、その視線の先で襲撃者達を撃退してくれた氷眼の少年らが自分達に何も告げずこの場を去ろうとしていたのを偶然にも目撃する。

「なのは、行つて」

「フェイトちゃん？ でも……」

『はやての事は私達が看ておきますから、高町一尉は彼等を引き留めておいてください』  
「あの人達はラグナガンドの奴等を知っている風だった。彼等が局の何所の部隊に所

属しているのかも不明だし、この場で彼等を事情聴取する必要は十分にある……なのは

は雪色の髪をした彼に色々とお礼だつて言いたいんでしょ？」

フェイトとカリムにこの場に遠慮せず行くよう後押しされたなのは「ごめんフェイトちゃん。すいません皆さん。はやてちゃんの事はお願います！」と謝罪を告げて氷眼の少年の背中を引き留める為に駆け出して行く。背中で空間モニター越しのクロノが『彼等は……まさか』と何やら意味深な小言を呟いているようだが、それを気にする猶予はない。

「ま……待って！」

回復した分の魔力をフル稼働させて身体強化魔法を施した脚力をもって全力全開で突っ走り、彼女は去ろうとする氷眼の少年の背中に向けて必死に声をかけて呼び止める。後ろ直ぐを着いて来ていた烈槍の少女と共にこちらを振り返って歩みを止めてくれた自分の命の恩人である彼に、なのはは八年間胸に秘め続けた想いを全部ぶつけてやる勢いのままに言った。

「行かないで……今度こそちゃんとお礼を、言わせてくださいっ!!」

数メートルの距離を挟んで立ち止まり、激しく息を切らした必死の形相で懇願してきた彼女を見て氷眼の少年は一瞬の驚きを表情に浮かべるが、相手にそれを認識する間と与えず冷静な顔付きに戻す。隣に寄った烈槍の少女があたかも自分の言った通り

だっただろうと澄ました笑みを向けてきているのを流し、少年は怪訝なアイスブルーの

瞳で不屈の少女を見つめ、不可解な感情を孕ませた口で訊く。

「何を言っている？」

救援に対する感謝を示す意味での礼ならば納得だが、今度こそとはどういう意味だか理解できない。「短い疑問の言葉に含まれたその訴えを持ち前のコミュニケーション能力の高さで即座に理解したなのはまず初めて出会ったあの日の事を相手に思い出してもらおう為に語りだした。

「覚えていますか？ 八年前、吹雪が激しく吹き荒れていた世界でアンノウンの奇襲によつて傷ついて死にそうになって、もうわたしはダメなのだろうかと生きるのを諦めかけたその時に、消えそうになつたわたしの命を、冷たくて優しい眼をした雪の精のように綺麗な男の子——君が現れて助けてくれた、あの時の事を……」

まるで恋焦がれた思い出を語るかのように聞き返してきた内容を聴き入れ、氷眼の少年は「あの時か……」と記憶の引き出しから内容に該当するものを引っ張り出して短く呟くとなのは幼さが残る顔にまるで春の花が咲き乱れるかのような微笑みが浮かび上がる。

「やっぱり、やっぱり君だったんだね！ 見間違ひなんかじゃなかった……わたし、ずっとあの時のお礼がしたくて、もう一度会いたくてあれから八年間、必死に君の事を探し続けていたの。なかなか手掛かりが見つからなくても諦めずに根気よく探し続けられ

ば、いつか必ずまた君と再会できると信じて……本当に……本当にまた君に会えた！  
会えてよかつたよお……っ!!」

再会の嬉しさのあまりに大きな碧い瞳を潤ませて心喜ばしく表情を綻ばせるのは。春の花々のように可憐な彼女の笑顔を向けられた少年は平静を保ちながらも内心少し照れくさそうに一瞬だけ相手の視線から目を逸らしている。ホント常人には気付けない刹那の一瞬のみの動作だったのだが――

『おいおいなんだよ、そんなファンタジー恋愛モノみてーな事してやがったなんて聞いてないぞくお前え♪ 昔雪の中に颯爽と現れて自分の命を救ってくれた名前も知らない男が愛しくて愛しくて仕方がなく、また会う為に八年間も探し続けていたなんて凄え一途だよなあ。 いや、ウチの隊長様も隅に置けないなく、コノコノオく♪  
につひひく!』

「黙れ」

冷静沈着でいつもクール振っている隊長の珍しいデレを見逃す事など一切しなかった烈槍の少女がわざわざ念話を使って挿揄ってきて横肘でウリウリと脇腹を小突き鬱陶しくニヤニヤを向けてくる為に氷眼の少年は内心イラツときたらしく無愛想に冷たく一言言つて黙らせた。 長年探し続けていた想い人(?)と再会できた事に喜び恍惚とした微笑みを溢しつつ陶然たる眼差しを向けて来ているのはに悟られないような

小言で……。

「あの時も含めてさつきも、二度も危ないところを助けてくれて本当にありがとう。君に救われたお蔭で、わたしは今、生きています!」

ずっと待ち焦がれていたんだこの瞬間を、というようになのは溜め込んでいた逸る気持ち吐き出すよう命の恩人の少年へ向けて感謝のお礼を伝えていく。

「この御恩は絶対に一生忘れません。それでそのう、何か君にお礼がしたいっていうか……え〜つとお……」

「礼は不要だ、気にしなくていい。結局のところお前達を襲撃し此処等周囲一帯に甚大な被害を齎したラグナガンドの尖兵共は取り逃がしてしまっただうえに奴等の企みを看破する事ができず、管理世界全体を波瀾と恐慌に陥れてしまう最悪の宣戦布告を実行するのを奴等に許してしまった……」  
「襲撃者の撃退」という救援任務達成条件の最低ラインはクリアしたが、この失態は本局・地上、問わず局全体の信用を墮としめ修正困難の深刻な打撃を齎してしまっただのは確実と言える。それを踏まえると撃退の功績よりも失態に対する責任の方が遥かに大きい、上からの糾弾は免れないだろうな」  
「で、でもそれは……」

お礼の申し出を拒否され、明確な理由を付けて返ってきた指摘に言葉を詰まらせてしまふのは。確かに今回、敵の襲撃によるのは達本局のトップエースが多数人員に

組み込まれていた最精鋭部隊、機動六課の完全敗北と新暦開闢期以来行われた事は一度もなかった全次元世界規模の戦争の開始を告げる宣戦布告が入念に仕組まれた策略によつて全管理世界に知れ渡らせてしまったが為に管理世界は今この時も大混乱に陥つてしまつている。故に生きているのならば敗北によつて失つたものに悲嘆し、後悔に暮れてこんな何も無くなつた焼け野原にいつまでも立ち尽くしている場合ではないだろう。

「お前も胆に銘じておくといい、戦いの道の終点に誰も祝福される最高の結末など用意されてはいない。戦いとは異なる理想を追い求める者同士が対立して潰し合う行為であるが故に必ずその戦いに関わつた何者かが不幸を被つてしまうから……」世界の中の人々総てが例外なく幸福の笑顔でいられる完璧な世界“なんてあり得ないんだ”

なのははそれを否定する言葉を返す事ができなかった。魔法のチカラを手にしたばかりの世間知らずの幼女だった頃の彼女ならば「そんなの絶対に違うよ！」とハッキリ言い返していたかもしれないが、あれから十年間彼女は管理局に入局して以来本局のエースとしての任務を通し次元世界中の情勢を視て回り、様々な人の中に蔓延る悪意と業や能力の無い者に世知辛い世界の危うい部分を知つてしまった。特に内紛などの人と人が傷つけ合う争い事に関しては互いに掲げる主張が重く相容れない事柄が多過ぎてどうしようもない場合が殆どだった。幾らどこまでも暗く深淵の常闇のような

辛い運命に打ち勝つていく為日々戦いの研鑽を積もうとも、世界中の人々総てが抱く理想が異なっている限り必ずどこかで衝突が起きてしまい、争い合う事で必ず誰かは抱いていた理想を失ってしまう。それこそが人の「不幸」なのだから……故に戦いの果てに誰にとつても最高の結末などあり得ない。

「とにかくラグナガンドによつて管理局に宣戦布告がされてしまった以上、奴等との抗争はもう避けられない。礼は有難く思うけれど今は馴れ合っている場合じゃないというのは判るだろう？悪いが此処でいつまでも油を売っている訳にはいかない」

気が付くと何時の間にか氷眼の少年の仲間達が全員彼の許に集合していた。流石にもう帰つてしまふ雰囲気だ。このまま彼等を帰らせてしまつては自分を送り出してくれたフェイト達の意を無下にする事になってしまう、なのは慌てて彼等を引き留めようと上手い言葉を必死に口から絞り出そうとする……しかし——

「悪いんだけど、アタシ等も忙しいからさ。あのフェイトつて奴によろしく言つてくれよ！　じゃーなー！——」

「え？　ちよ、ちよつと——」

「任務完了、帰還する！」

彼女が引き留める口実を口に出すよりも先に氷眼の少年が毅然と撤退の号令を発した事でシルバーガスト小隊全員がシュツ！　という音と共にこの場から姿を消して



行つたのだつた。

「——あ……」

まるでN I N J Aの如く瞬間移動のような目にも映らぬ疾さで去つて行つてしまつた自分の命の恩人である少年が一瞬前まで立つていた場所に向けて手を伸ばしたまま硬直するなのは……引き留めは失敗に終わつた。それで彼女が思わず漏らしてしまつた気の抜けた声は何もかもが破壊し尽くされた機動六課の隊舎跡地の焼け野原に虚しく木霊した。

「……せめて名前くらい、教えてほしかったなあ……」

親友と部隊の後見人に託された事を果たせなかつた気まずさと自分の命の恩人と親しくなる事ができなかつた虚しさに耐え切れず、なのははその場で愕然と落胆するのだった。

こうして希望の未来の大空に羽ばたく翼を折られてしまつた戦乙女達——《古代遺物管理部機動六課》と組織の業を背負い翼を奪われた烏達——《特務遊撃支援部隊ロストウイング》の初邂逅は終わった……しかし、掛け替えのない大切な多くを奪われて失つた悲しみに暮れる戦乙女達は今は知る由も無かつた。近い将来に自分達の危機を救つてくれた部隊の者達と再会を果たし、互いに手を取り合つて絶望の未来に立ち向かつて行く運命なのだという事を……。

「——かくして、数多の次元の海にその名を轟かす英雄であった少女達は、破壊の柴竜の爪牙によって希望の翼をへし折られてしまい、寸分の光も見当たらない底知れぬ絶望の深淵へと堕ちて往くのであった……と」

敵の強大過ぎる暴力の前に成す術もなく大切なものを奪われ、深い悲しみに苛まれて途方に暮れる悲劇のヒロイン達……そんな彼女らを襲撃戦の爪痕が届いていない離れ

た見晴らし台の上から異様な雰囲気醸し出す二人組が見下ろしていた。

望遠鏡などの遠視道具の類は所持していない、読唇術なんて使っていない、それどころか視力強化魔法すらも全く用いない肉眼の遠視で10km以上距離が離れた機動六課隊舎跡地上の悲惨な状況をこの二人は完璧に把握していた。

「私が描く《総イナル黎明》への恐怖劇の序章……最高には程遠いかもだが、初の試みにしては悪くはない出来だったと思うよ」

「……」

二人組の内一人は次元王軍ラグナガンドの第二二六強襲中隊が機動六課を襲撃して来るほんの直前、世界の時間概念を停止させるという神掛かったチカラを使ってなのの前に姿を現していた謎の美女——《トリスメギストス》である。

何が愉快なのか滑稽なのか、何もかもが無くなった寂寥感漂う焼け野原の上で砕けた硝子工芸品の様に惨めな悲愁を晒すなのは達を見遣りながら彼女は真意の読めない不毛な笑みを浮かべており、隣で彼女の見ている景色と同じ様子を不機嫌そうに窺っていたオレンジ色の長髪をした少女が不快を覚えたらしく、無言の視線をトリスメギストスに向ける。

「宙に愛され、生まれながら英雄の才を有する。他の追隨を許さぬ圧倒的魔導潜在能力をもって降りかかる脅威の悉くを打ち破り、他の悲しみに共有しようとする慈愛と拒

絶に立ち向かう勇敢な意志で数々の悲劇を救済し、空に舞えば墜とされる事は無く勝利を絶対のものとする無敵の英雄として数多の次元の海の頂点の魔導師としてその名を轟かしてきた希望と栄光の魔法少女——」

本来なら有り得なかつた未知の光景を愉悦が浮かび上がった双眸に映し、トリスメギストスはまるで実験後のモルモットを眺めて実験結果に満足する科学者のような優悦な笑みを浮かべている。

「——そんな彼女達が一堂に集結し、来たる絶望の未来を打ち破るべく結成した魔法少女達の夢の部隊、機動六課。多くの期待と描いた理想の未来に望む夢を背に部隊を始動させたその日、何の前触れもなく突如として未だ嘗てない程の理不尽極まりのない強大な敵戦力によって襲撃を受け、その圧倒的暴力の前にチカラ及ばず蹂躪し尽くされた末に完敗。それによって大切だったものの多くを失い、あのように嘆き悲しむ事となつてしまった……ふふふ、実に面白いな。世界に愛されこの世に生を受けた主人公のような少女達が自分達がチカラを結束させれば世の平和を乱す総ての害悪を打倒できると妄信した挙句、自分等よりも強大なチカラを有する敵戦力に蹂躪された末、惨めにも破壊し尽くされた自分等の部隊舎の跡地に這い蹲り悲嘆する結果になつてしまうとは……くつくつく、これはなんたる因果応報か」

実験の為に様々な毒薬を投与して苦しんだモルモットの事などどうでもいい、傷心して

悲みに暮れている少女達をそんな利己的な感情を孕んだ眼で見ても悦に浸るとはこの女、最悪の人格破綻者であるようだ。人の人格を見抜ける優れた慧眼を持つのはが彼女の存在を「不毛」と感じていたのも納得がいく。

「今まで信じ続けていた魔法と絆のチカラがAMFのような対魔法でも魔法を無力化するような魔導師殺しでもない、自分達の潜在能力だけを幾ら研磨したところで到底敵わないような純粋な戦力の前に敗北し、今まで築き上げてきた最強という自負を粉々に打ち砕かれたあの少女達が絶望という深淵に堕ちた未来には、いったいどのような結末が待ち受けているのやら……ふふふ、実に興味深くは思わないか？　なあカスケイド、否——ティアナよ」

そこでトリスメギストスは隣で怪訝な視線を送ってきている元管理世界出身の同行者に管理世界において異常戦力とされるだろう機動六課が侵略組織の尖兵達によってアツサリと蹂躪されて敗北した現実をどういった感情で受け止めているのか気になり、その視線に面白がるような眼を合わせて訊いてみた。

「別に。　どうだっていいですよ、そんな事……」

返されてきたのは欠片の興味も無い事を訴える実に素っ気の無い返事であった。下流に向かって流れ落ちて行く連滝カスケイドのように『未来に光の空を求める程、地の闇の底へと堕ち征く』という《魔名》と呪いを植え付けられている《ティアナ・ランスター》カ

スケイド》にとって自分が過去に住んでいた世界の英雄がフルボッコにされて地に墜とされたのを見たところで、返した言葉の通りどうでもいい事柄だからだ。

「おやおや、ふふ、人が口にした事を非難するような眼を向ける割には、随分と冷たいじゃないか」

「『副首領』の言った事には同感ですよ、ただその物言いと貴方の薄ら笑いがキモかったです……まあ、あんな戦争狂人外軍団によつて完膚なきまでに叩き潰された挙句、自分達に依存レベルの信頼を寄せている全管理世界の管理局員や一般住人等に敗戦の無様を生中継で曝されるという苦渋を舐めさせられた機動六課には同情はしますが、でもそれがいったいどうしたというのでしょう？」

ティアナは馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの辛辣な態度で肩を竦める。

「負けてトップエースのプライドが傷つけられたから何？ 散々苦勞して起ち上げた部隊が初日で潰されたから何なの？ 大して接点の少ない部下が何人も死んだ？ 自分達が信じていたチカラが全く通用しなかった？ 敵の策略に嵌められて地に這い蹲っている自分達の無様な醜態を全世界に曝された？ ……どれもくだらないわね。その低度の顛落なんか絶望の内に入らないわよ」

「……ふふふ、そうか。この世界の君はそうだったのだったな」

冷徹なコメントでラグナガンドの尖兵に敗北した機動六課に対する評価を当然な風

に述べるティアナ。 トリスメギストスは「本来の彼女」と「目の前の彼女」を比較して奇妙な可笑しさを覚えながらも納得の笑みを露わにする。

この世界の正史——【叙情的な魔法少女の英雄譚】であつたなら、《ティアナ・ランスター》という少女は本来、現在のミクティーン・ベクターの立ち位置に身を置いた配役で物語が進む筈だつた。 魔導師として圧倒的才能を誇る機動六課の前線メンバーと

比較してあまりにも凡小な才しか持たない自分に葛藤を抱きながら時に上司と擦れ違い、時に仲間と協力し合つて徐々に魔導師として成長していく彼女の本来の物語は視る者の多くを元氣付けさせる魅力的な輝きを感じさせていたのだが、しかし——

「相変わらず貴方の言っている事は訳が解らなくて理解不能ですね。 六年前に唯一の肉親である兄が殺害されて天涯孤独となつた時に初めて会つた時も貴方は不可解な発言が目立つ印象でしたが、最近の貴方は特に意味不明な発言をする事が多くなっている気がしますし、騎士団を留守にしてフラツと何所かへと居なくなる事も年々多くなっているじゃないですか」

——今だつて《聖十字円卓》の誰にも留守にするのを告げないで出て行つた副首領を偶然見かけたから氣になつて後を付けて来たんだし……。

この生真面目さは正史通りではあるものの、彼女の人生は過去にこのトリスメギストスに出会つた事で正しい道を大きく逸れてしまつたようだ。 正史だとバリアジャ

ケツト展開時のなのはの様に長い髪を可愛らしいツインテールに纏めていたが、艶やかなストリートに下ろした事でとても引き締められた雰囲気醸し出している。身に纏っている黒の線を裾付近に走らせた白い外套は彼女の言う「騎士団」の制服なのだろうか。右肩の辺りにある白銀色の十字架を模った留め金なんとも聖騎士を思わせる。

「未だに騎士団の首領の席である第一位だつて空席のままなんですから、副首領である貴方が自重してくれないと「首領代行」が心労で逝つてしまいますよ」

「それは問題ないだろう。片想いのまま別れた昔の男にいつまでも未練がましく、生き汚いあの「終焉の巫女」殿が多少のストレスを患つた程度でヴァルハラに召されて逝くとは到底思えん。そうでなければ聖十字円卓の首領の席を穢せる者が覚醒する。目星が立つまでの代行人などあの者に任せたりはしないさ。故に私は心置きなく「錬成陣」の準備に着手する事ができている。計画実行の日は近いぞ、カスケイド」

「……」

ティアナは人使いが荒い癖に自由人な副首領に呆れて額を片掌で押さえた。しかし嘆息する事は無く、片腕で陰に隠した表情には「そう、ようやくなのね……」という長く待ち兼ねた色が浮かび上がっている。

彼女達には「成し遂げるべき悲願」があり、その為ならば他者の犠牲をも厭わない、



例え仲間同士で殺し合う事になろうとも……感傷に耽っていると突然彼女達の近くの空間が歪みだし、転移陣が出現。ティアナが纏っている物と同じデザインの外套を纏った男が二人、其処に転移されて来た。

「ティア、こんなところに来ていたのか。随分と探したよ」

「律……」

一人は長身で黒髪の優男。聖十字円卓において《ザイフリート・ニーベルンゲン》の魔名で呼ばれている。本名は《櫻井律さくらいりつ》という。高町なのは「や、八神はやて」と似たようなニュアンスをしていて、その手には彼の背丈よりも巨大な黒塗りの大剣が携えられている。ティアナとは随分親しい関係にあるようで、転移して来るや彼女に真っ先に掛けた声には相手への思い遣りを感じられた。

「トリスメギストス、貴様こんなところにカスケイドを連れて何をやっている？ 貴様  
が動くといつもロクな事にならないのだから、おとなしく「城」に籠っている。大事な  
集會時、毎度神出鬼没な貴様を探し出すのは毎度面倒だからな」

真紅の切れ眼でトリスメギストスを鬱陶しそうに睨みつけているもう一人は《シツク  
ザール・テスタロッツサールーク・ジ・アビス》。鋭い剣のように威圧的な雰囲気  
で近寄り難い男だが、良く整った金色の長髪と乙女のように白い肌というギャップ要素がこの手  
の人間によく視られる根暗なイメージを割と感せずせない。フェイトのミドルネー

ムである。『テスタロツサ』が名に含まれている事から、彼はフェイトに何か関係があったりする人物なのだろうか？

この場に集まりしトリスメギストス、ティアナ、律、シツクザールの四人……彼等が『ドライツエーン・ヴァイスリッター白夜十三騎士団』。己が渴望を為すべく白銀の聖十字の下に集い、その身に聖なる遺物と魔の呪いを宿した十三の超人……否、魔人集団。穢れ無き聖なる白夜に遣わされし使徒である。

「ふふ、失敬だな。私が頻繁に『城』を留守にする機会が多いのは私自身自覚はしているが、崇高な計画を成そうとするには念入りの準備が必要不可欠なんだ。その延長線上で発生する些末事なぞ、こういつた物に付き物と言つても過言ではない些細な障害に過ぎないだろう？ 君達が無駄に感じているその労力も計画実行の為の必要経費だと思いたまえ。故に、悪いが君の要望に応じてやるつもりは欠片もないのだよルーク。私は引き籠もりニートなどという劣等人種になどなるつもりはないんだもん♪」

そんな返事を気味悪くニヤけながら豊満な胸を張つて言つたトリスメギストスをウザツたく感じたシツクザールはキレ気味になつて盛大に文句を打ち返した。

「何が『もん♪』だ貴様。忘れたとは言わせんぞ？ 前の活動報告集會時、貴様は聖十字円卓の出席をすっぱかし第61管理世界の霊脈調査とかいう名目でその世界の生態系を無意味に混沌なものへと変えていただろうが」

「ああ……あの時は本当に大変だったよね。お蔭で管理局の自然保護隊に副首領の所業がバレないよう、騎士団総出で情報隠蔽工作をするハメになっちゃって、あはは……」

「もうあんなくならない事で無駄な労力を浪費するハメになるのは二度とゴメンだわ。

ちよつとは自重してくださいよ副首領？ “錬成陣”の準備ができるまで管理局や

聖王教会に私達の存在を感付かれるような行為はなるべく避けるよう私達に命じたのは、他でもない貴方自身でしょうに。言い出しつぺの貴方が計画に支障をきたすようなマネをしてどうするんですか、まったく……」

律とティアナが間髪入れずに追撃を加えてもマイペースな副首領は飄々と何所吹く風で柳のように受け流し「ふふふ」と薄ら笑いを浮かべるだけしかない。本当にイラツと来る副首領だ。

「それはそうとティア、先程母さん…… “首領代行”から招集が掛かった。至急僕らと共に “城”へ」

しかし彼等はこんな事をしている暇があつて来た訳ではない。律がティアナにそう伝えると此処に転移して来るのに使用した転移陣を足下に再び展開し、ティアナは伝えられた事に領いて転移陣の内に入ろうと近づき……入る直前で唐突に足を止め、背中を向けたままトリスメギストスに言い忘れていたと冷え切った口調で話す。

「全ての次元世界も、ここから見える焼け地の上で見苦しく泣いている管理局の負け犬

の天才達も、同志である私達ですら、貴方にとつては自分が思い描いたシナリオを演出する為の舞台装置に過ぎないのでしよう。別にそれについて今更どう言うつもりもありません……しかし、軽挙妄動が過ぎて我々の計画に支障をきたすのであれば……」

「それは無用な心配というものだよカスケイド。《黎明計画》の完遂は私の求めて已まない理想をこの手にする為に重要必須な要素なのだというのは君も既に把握しているだろう?」

不毛な愉悅の仮面を被つていて何を考えているのか不可解極まりない存在であるこのトリスメギストスにも「成し遂げたい目標」というものはあるらしい。故に彼女は自分の行動で自分の理想への道を塞いでしまうようなヘマをするなど絶対に有り得ないと断言する。他人にはどんなにふざけて見えていても彼女の行為行動の総ては彼女自身が思い描いた理想の舞台を動かす為に必要な仕込みなのだから……。

「ならこれ以上は何も言いませんが、先程も言った通りちよつとは自重してくださいね。私にも絶対に成し遂げたい『悲願と復讐』があるんですから……」

ティアナが念入りに釘を刺す事ように言いたい事を言い終えると転移陣が起動準備完了を示す眩い光を発し、彼女が一步その内側に足を踏み入れると同時に光が勢いよく天まで昇り出す。

「……フンッ！」

遙か先の焼け野原の上に両手で這い蹲りながら惨めに泣き続ける部隊長の両肩を抱いて手厚く慰めている心優しい金色の執務官の姿をふと視界に入れたシツクザールがその無様を蔑むかのように鼻を鳴らしたのを最後に天まで昇りきつた光が転移陣内に立った三人の魔人の姿を覆い隠して消滅……跡にはもう三人の姿と気配はこの世界の何処にも見当たらなかった。

そして見晴らし台の上にはトリスメギストス一人だけが残る。

「……ふふっ、『負け犬の天才』か……自分が仕組んでおいて何だが、不思議なものだな。ティアナ・ランスタール、まさか君が高町なのは達に対してそのような感想を吐き捨てるとは……ふふふ、とてもおもしろいじゃないか。これだから人の価値観を弄るのはやめられんよ、くくく……」

普通なら恐らくは有り得ないであろう未知の事象を感じ、益々愉悦を覚えて思わず愉し気な微笑を浮かべてしまうトリスメギストス。

正史においては機動六課という天才の枠組み内に身を置き、隔絶した能力差に嫉妬の念を抱きながらも雲の上の存在であるのは達に憧れと信頼を抱いていたあの自称凡人の秀才魔導師少女が、ちよつとした運命の擦れ違いが起こった事で価値観を変えて彼女達の事を『負け犬』呼ばわりするとは、何という皮肉だ。

トリスメギストスの出す奇妙な笑い声が木霊する中、一吹きの清涼な微風が齎された。同志達を見送った彼女の艶やかなポニーテールを小さく揺らしてそれが通過して行くと、彼女は肩を竦めて益々可笑しそうに笑い出した。

「くふ、ふふふ、ふはははははは！　しかし私に対して『少しは自重しろ』とは、くくく、なんともまあ難儀な事を要求してくれるじやあないか、カスケイド。何せ私が過去に邂逅して一目に惹かれ、堪らず《黎明の神器》を贈与した六名の内、二人もこの場でその成長ぶりを拝見する事ができたのだから、己の内底より湧き上がる濃熱な歓喜を堪えて打ち震えるなど言う方が、土台無理な話だろう？　ふふふ……」

ああ、愚直に遙か宙そらの那由他の先へと無限に飛翔する事を至高に掲げる雄々しき破壊の柴竜の君よ……。

「初の邂逅より実に『約七十五年ぶり』といったところか。　ふふふ……遥か高みへの飛翔を誉れとする底なしの意欲、視る者総てを例外なく宙へと惹き上げる威光、その明星の如き不屈の輝き……あの刻より相も変わらぬようだなによりだ。　安心したぞ、我が生涯最初にして最後の友、『破壊の柴竜殿』よ」

ああ、私に初めて『恋』という感情を抱かせてくれた雪上に根強く咲く愛しき白の香雪蘭フリーズアよ……。

「なんと勇ましく美しい成長を遂げていたものだ。　夜叉のような鋭き意志を感じさせ

つつも戦巫女の如き玲瓏とした佇まい、洗練に磨き上げられた流麗な体技、『美しい世界が醜く変化してしまわぬよう氷の中に留めてしまいたい』という純粹で真摯な渴望。

陳腐な表現だがどれも素晴らしいの一言に尽きる。ああ、残酷な吹雪荒れ狂う白銀の世界に咲いてしまった儂き一輪の花よ、君が放つ黎明の輝きを目にする度にどうして私はこんなにも強く惹かれてしまうのだろうか？——ああ、胸が熱い、君を想うと脳髓が溶けてしまうようだ。うふふふ……」

貴方達こそこの舞台の主演だ！ さあ至高に近しき役者達よ、涙を流して踊り狂うがいい、《総イナル黎明》への恐怖劇はまだ始まったばかりなのだから……そして彼女はいつの間にやら総ての多次元宇宙の中心に存在する「座」に居た。

「さて、これにて序幕は終了だ。破壊の柴竜の君よ、儂き白の香雪蘭よ、未だ出番は先で舞台上上がるその刻を待つ四つの黎明よ。果たして君達の誰が《総イナル黎明》に至り、この「座」に覇道を届かせる事ができるのだろうか？ ふふふ、愉しみだ」

彼女によって狂わされた叙情的な戦乙女達の英雄譚。破壊の柴竜の爪牙によって深く傷付き、深淵の底に墮とされた絶望を前に戦乙女達は再び立ち上げられるのか？

「正史の英雄達も含め、舞台上立つ全ての役者達に祝福あれ。君達の働きには期待してしているぞ。——私に「理想の結末」を見せてくれ」

全ては「氷眼の少年」と「未来に羽ばたく翼を奪われし鳥」——《ロストウィング》と

の再会に懸かっている事だろう。　“座”に座る美しくも不毛な创作者は、自分が求めて已まない理想の結末を夢想して遊覧施設に遊びに行く前日の幼子のようにウキウキと表情を綻ばせていた……。

……次元王軍ラグナバンド第二二六強襲中隊の襲撃によって機動六課が壊滅させられた悪夢の初戦から丁度日を跨ぐ頃、とある無人世界某所にて。

『夜分遅くに失礼します、マクラウド特務遊撃支援部隊長殿』





だろう。

通信モニター越しのクロノが呆れるかのように一度嘆息をすると、デイビットは笑うのを一度止めて執務机に投げ出していた両脚を下ろし、何を察したのかモニターに映るクロノと面倒臭そうに向き合った。

「で? こんな夜遅く俺に連絡をよこしたって事は、表では請負できねえ厄介事でも依頼したいんだろ? 局の厄介者が集まる俺の部隊——《ロストウイング》によ」

『……はい』

肯定の意を示す返事をしたクロノの表情は大変気まずそうになっていた。デイビットが言うように、《ロストウイング》とは色々と訳アリな事情を抱えている。

『デイビットさん。 本日の……今はもう前日になってしまいましたが、夕刻にあった事件の内容は既にご存知ですよね?』

「ああ、起ち上げられたばかりのエリート部隊……確か《古代遺物管理部機動六課》だったか? そいつ等が突然何所から湧いて出て来た謎の侵略組織に襲撃されて潰されちまって、その謎の侵略組織が管理局に宣戦布告してきたんだろ? 管理世界を繋ぐ次元ネットを纏めてジャックされたんだ、そこまでやりやあ流石にこのド田舎無人世界にだって情報が行き届くだろうよ」

『しかしデイビットさん……いえ、マクラウド特務遊撃支援部隊長殿』

クロノは真剣な眼をして言う。

『惚けているようですが、貴方は敵の襲撃時、通信回線を介してロストウイングの最精鋭小隊に機動六課への救援命令を出しましたね？ 襲撃して来た敵組織の正体を知った上で……』

「……ああ、そうだが」

誤魔化しは効かないなどと察し、デイビットはクロノが指摘してきた内容を肯定する。どうやって知ったかなんて局の各部隊が保有する通信回線使用の履歴を確認すればいいだけだ。

『やっぱり、機動六課の窮地を救い、本局所属のエース級魔導師のチカラを遥かに超えてきた規格外な襲撃者達と互角に渡り合っていたあの小隊は貴方の部下達でしたか……』  
自分の推測が正しかった事を確認し終えるとクロノは一度意を決したかのように深く頷く……そして呼吸を整え、無理を承知でその口からデイビット——ロストウイングへの依頼を切り出したのであった。

『デイビットさん、折り入って依頼……いや、お願いがあります。——』

——敵の襲撃によって壊滅した機動六課の隊員達をしばらくの間、ロストウイングで預かって頂けないでしょうか？』

序章後編、『翼を折られた戦乙女達は喪失の翼（ロストウイング）へとその身を墮とす』

希望の翼を折られた戦乙女達は絶望の淵を彷徨う

「——部隊人員の損害四十二名。隊舎全焼及びその敷地を含むミッドチルダ南駐屯地A73区画とその周辺区域約200kmの焦土化。更にはその先の区域・市街地にまで被害を及ぼし、管理局員・一般住人合わせて約七十万人が死亡、約三百万人が重軽傷を負う。挙句これらの被害を及ぼした襲撃犯……いや、反逆者共には無様にも蹂躪を許し完敗を喫したうえ、奴等に掌握された通信放送にその醜態を全管理世界に晒した事により管理世界全体を恐慌状態に陥らせる、と……」

広く真っ白な密室の中央に設置されている一つの机を半円に囲い見下ろす形で存在している高めの壇上の席……そこから中央の机の前に立たされている女性局員に向けて非常に厳しい、或いは嘲るような視線を集めている本局所属の高官達——

「……成程、これはこれは、改めて内容を纏めてみると随分と取り返しのつかない大失態を犯してくれたじゃないか。ええ——八神はやて二等陸佐？」

その中央の机の前に立つはやてに正面から向き合い見下ろす形で壇上の中央に座る男性局員——恐らくは議長であろう人物が事の内容を口頭で纏め終えると今述べた内容が正しいのかどうかを嫌味を含む形ではやてに確認してくる。

「……はっ」

はやてはそれを俯いたまま覇気無く肯定する。彼女は今現在精神が相当磨耗してしまっている状態にあり、眼に生気が宿っていない、まるで生ける屍のように暗く沈んだ雰囲気を感じさせていた。

此処は時空管理局本局内の一角に存在する査問会議室だ。次元王軍ラグナバンドが管理局に向けて宣戦布告を表明してから一夜が明けた日の夕刻、機動六課の部隊長である八神はやては地上たる第1管理世界ミッドチルダに多大な被害を及ぼしてしまった襲撃戦での完全敗北の全責任を背負い、本局からの査問会の招集に応じて今此処で本局上層部の高官達に襲撃者に敗北し敵を取り逃がしてしまった部隊の失態について詰問をされている。失態を犯した彼女らの処遇をどうするのかを決定する為だ。

通常ならば犯罪者及び組織に敗北した場合の処分については本局からの書面が送られて来る程度の事後処理で済まされるもののだが……機動六課が喫してしまった敗戦の影響は管理局にとつてそれではとても済まされない程の大規模な損害を及ぼしてしまっていた。

「君も既に知っているとでは思うだろうが、昨日その反逆組織……確か「ラグナバンド」だったか？ 奴等が管理世界全ての通信放送を乗っ取って行った管理局への宣戦布告とデモンストレーションとやらの影響を受けて管理世界中の一般住民達が不安と恐怖に晒されていて暴動を起こす者も多く、我々の管理が全てに行き届かない程に秩序が乱れに乱れた状況にある」

「……」

「君が設立した一年限りの試験稼働部隊——古代遺物管理部機動六課は現在のエース・オブ・エースである高町一等空尉をはじめとした本局の主力と言えるトップエースや優秀な成績を得て陸士訓練校を卒業し将来を有望視されている若手が集まった最精鋭部隊、所謂事実上の管理局最高戦力であるわけだがそれ故に法と秩序を乱し揺るがす不屈きな犯罪者や反逆者共に後れを取る事など許されはしない……何故だかは君も判っているだろうか？」

まさか忘れたわけではないだろうな？　そう議長の鋭い視線が圧力を掛けて訴えて来る。

「勿論……です。時空管理局は次元世界の法と秩序を統括し平和を維持できるように日々統制管理を行う正義の船……局に勤める魔導師は次元世界に住む人々と平和の守護者であり、故に中でも取り分け優秀で精強な魔導師である「エース」は不朽にして最強

の守護者であり続けねばならないが為、法と秩序に仇なす悪に後れを取り、墜とされる事は絶対に有ってはならない……何故なら最強の魔導戦闘能力をもって他を圧倒し勝利を絶対のものにできる無敵のエース達は他の局員達の模倣であり、また人々の希望でもある。故にエースが墜ちない限り次元世界の法と秩序は揺るぐ事はない……エースが敗れない限り人々は安心を失わずに日々の日常を平和に過ごす事ができるのだから……です」

気まずい雰囲気の中、はやては議長が投げ掛けた問いに途切れ途切れの口調で言い辛そうに答え切る。すると議長は更にはやてに向ける視線を鋭くしてくる。

「その通りだ。管理局のエースが最強である事は次元世界の秩序と平和を護り続ける為の重要な要素なのだよ。今の君達はその内容と実に矛盾しているとは思われないかね？」

その視線にははやてに対する明らかな卑しめが孕まれている。何も言い返せない気鬱に沈黙し非常に辛そうに俯くはやてを取り囲んでいる壇上の席から彼女を見下ろしている高官達も全員が彼女の無様を嘲笑うかのような侮蔑を孕む歪んだ眼をしていた。

「今現在我々の管理下にある世界の住民達がラグナバンドとかいう反逆組織の脅威に怯え、自分達が過ごしていた日常が戦争によって壊されてしまう危機に不安と恐怖を覚え



大混乱に陥ってしまったている混沌とした状況なのも、その大混乱により管理世界各地で暴動が相次いでいる所為で全管理世界の管理体制が壊滅状態になり未だに回復しないでのいるのも、反逆者共の宣戦布告の影響で局全体の局員の士気が極限まで落ちてしまっているのも、全て——」

……もういい、やめてくれ。

「分かつていますっ！　全て……全て私達機動六課が……襲撃してきたラグナガンドの強襲部隊を相手に手も足も出さず圧倒され……無様な敗北を喫してしまったからに他なりませんっ!!」

これ以上聴くのは耐え切れないとはやては議長の小言を遮るように議題の結論を叩き付けた。

「部隊稼働の初日だからといって周辺区域の警戒を怠り、その所為で敵の襲撃を未然に防ぐ事ができず局員として将来有望な部隊の人員の多くを失わせてしまい。更には敵中隊長とその配下の魔導師による大規模破壊魔法の行使をまんまと許してしまった所為で隊舎を設けさせてもらった駐屯地周辺の基地や街が被害が往き、七十万人もの罪の無い命が犠牲に……うう……ぐすっ」

頭を深々と下げて悔い嘆く彼女の眼からは心から懺悔しているのを証明するかのよううに悲哀の雫が零れている。

「私達はそんな許されざる最悪な襲撃者達に無様にも後れを取って敗北した挙句、襲撃者達の企てた策略にまんまと嵌められてしまい……絶対には曝してはならないエースの敗北を……守護するべき管理世界の人々に見せしめにされ……ぐす……管理世界中が……戦争の恐怖に……うう……ごめんさない……ごめんな……さい……っ!!」

泣いて謝ったところで戦争が起きなくなる訳でも世界中の不安と混乱が治まる訳でもない。自分達の失態を懺悔するように謝罪を言い終えたはやてを見て議長は慨嘆混じりに呆れ嘆息する。

「八神二佐、君はまだ若い。失敗して嘆きたい年頃なのは我々として理解しているが、事態は深刻を極めているのだ」

そう、機動六課が襲撃してきたラグナガンドの第二二六強襲中隊に敗北した事実が管理世界中に知れ渡った事で深刻な損害を被ってしまったのは、なにも一般住民達の信頼と日常だけではない。

「機動六課を地上に設立する事を了承したのはかの《伝説の三提督》が賛同していた事もあるが、それ以上に機動六課という主力級の精鋭部隊の制御を本局が直接行使でき、且つ部隊の活動の際に想定外の非常事態が発生した場合我々の信頼や利益が冒されぬよう即部隊を解散したとしても損失が皆無な人員構成にすると、君が約束したからだ」

機動六課はなのはやフェイト等トップエース級の前線指揮官が人員に組み込まれて

いる事が目立っているが、その他の人員は万が一失態を冒して部隊を解隊したとしても損失が少ないよう、新人・若手の局員ばかりで構成されていた。この人員構成なら普通、今回のようなのは達が犯罪組織に敗北する事態になったとしてもその情報が地上部隊やメディアに知れてしまう前に部隊を解隊して本局の信頼と利益に深刻なダメージが行かないようにできる筈なのだが――

「だが、結果はどうだ。ラグナガンドとかいう反逆者共のデモンストレーションとやらで我々の回線を含む管理世界全域の通信放送が全て乗っ取られ、君達が奴等に後れを取り完敗を喫する無様をリアルタイム映像で全ての管理世界に曝してしまった為に、我々管理局が次元世界の平和と民間の安全を約束するという絶対的信頼が今、揺らぎに揺れて崩壊寸前のところまでいつている事を、君ももう察せているだろう!」

「仰る通りです……」

「まったく、どうしてくれるのかね? エース・オブ・エースである高町一尉を筆頭に局の最精鋭が揃ってにおいて何所の馬の骨か知らない襲撃者共に後れを取った事が敵の策略によって本局・地上問わず局全体にも公にされた所為で局員達の士気が下がりに下がってしまったって、情けない事にこの一晩で既に局が抱える魔導師や騎士の内約数百人が臆病風に吹かれて辞表を提出する始末だ! ただでさえ管理局の魔導師や騎士は人手不足だというのに、この体たらくでは碌に反逆者共を迎え撃つ準備もできんわ!」

「返す言葉ありません……」

「それから昨晚、地上本部統括の《レジアス・ゲイズ》中將が通信回線を通じて我々に機動六課の即解隊を要求する声と六課の部隊長である君に地上の損害責任を追及する連絡が入ってきている。——『地上を預かる儂に黙って本局の部隊を設置しおっただけ

でなく、ラグナガンドなどという反逆組織に襲撃を許したうえ、敗北するなどという無様な体たらくを働きおった所為で遙か昔から儂等地上部隊が大切に守ってきた地上を反逆者共の蹂躪によって破壊された挙句、儂等地上部隊の数少ない貴重な人材資源とミツドの住民達の多くの命が損なわれてしまった。これは地上わしらの尊厳を最大以上に侵した許しがたい侮辱に他ならん！ 故にこれ以降、本局所属貴の魔導師様は二度と儂等の地上で好き勝手するでないぞ！ もしこの言いつけを破つたりしたなら貴様等、もう二度とミツドの土を踏む事は叶わんと思え!!』——とかいう喧しい戯言まで残してな」

「……」

止まらなく次々と投げつけられて来る六課の失態に対しての叱責の数々を受け、はやてはもう言葉が出なくなる程に精神的に参ってしまった。遙か古の時代から多くの人々を苦しめ続け、数々の世界を滅ぼしてきた魔導書の呪いに耐え続けられる程屈強な精神力を持っている彼女がこの程度の事でここまで酷く打ちのめされてしまっているのだから、昨日の六課壊滅は余程ショックだったのだろう。無理もない、四年前

からの夢であった自分の部隊がやっとの思いで始動した経ったの数刻で敵に襲撃されて壊滅し、共に降りかかる困難を生きて乗り越えていくと誓っていた部下達の多くが志半ばで命を絶たれ、絶対に護つてみせると思っていたチカラ無き人々を護る事は叶わず、拳句には揃えば敵などいないと信じていた家族と親友達が襲撃者の理不尽なまでの戦力を前にして手も足も出ずまるで矮小な虫ケラを踏み潰すかの如くいとも容易く敗北してしまったのだから……。

「まったく、だから私は反対だったんだ。 幾ら総合SSランクの魔導師だからといってまだ成人すらしていない子供などに一部隊の指揮が務まる筈がないだろうと！」

気が付けば議長の叱責に続く形で暗く俯いているはやてに蔑みの視線を集めていた高官達が悲観するような罵り声をあげている。

「あれだけ優秀な人材を他から引き抜いておいて情けない！ 恥を知れ!!」

「将来有望な人材資源をよくもまあ……この損失は我々にとつて大きな痛手だぞ」

「三提督方のお気に入りだからといって調子に乗った罰だな、うん」

「失望した、機動六課を地上に設立する為に費用をどれだけ消費したのか解っているのか？」

「彼女らの失態でレジアスをはじめとする地上連中も大分付け上がってきているな。

今のところ奴等は地上の混乱と本部に押しかけて来るマスコミの対応に忙殺されてい

るようだから、今の内に我々の優位を巻き返す算段を……」

「ざわざわと聞くに堪えないはやて達への罵詈雑言や戦争を前にしてやっている場合ではない政治戦略の考察などがタダツ広い真つ白な査問会議室に飛び交つて酷く鬱陶しい。確かに機動六課が犯した失態は管理局にとつて無視し難い痛手となつた、故に六課の部隊長せきにんしやであるはやてに責任を追及する事は避けられないのは分かるが、この高官共ときたら人を謀る事しかできないで何時も能力や地位の高い者に胡麻を挿る癖に自分達の保身が危ぶまれそうな場合はこうやつて一貯前に文句を垂れる。果たして無能はどちらなのやら……。」

「静粛にー」

お約束に倣い議長が木槌で机を叩く打音で高官達の口を止めさせる。一応この場合はテンプレ査問会……まあ六課の敗北責任を追及する軍法会議のようなものであつて、裁判ではないのだが……。

「コホンツッ！ 聴いての通り、君達機動六課が犯した失態の余波は管理局、延いては管理世界全体に深刻な事態を齎した。この責任は重大だ、故に君達には“相応の処分”を下さねばならないが……何か言いたい事はあるかね、八神二佐？」

有無を言わさぬ多人数の視線が眼下の自分に集められ、罪悪感を凄まじく増長させられるこの状況はまるで裁判長に判決を言い渡される直前の被告人のような重い気分を

味わされる。だがその判決を言い渡される前にどうしても言わなければならぬ事がある。

「確かにおつしやる通り、私達が犯してしまった失態は次元世界の秩序に大きな亀裂を生じさせてしまいました。エースと呼ばれながらも戦争を求めような狂人集団などに無様にも敗北を喫してしまつた事で多くの人々の命が犠牲となつてしまい、戦争が始まつてしまふという恐怖と不安が管理世界中の人々の心に植え付けられてしまつた事で情勢が混沌としてしまつた事には、正直情けなく思い、申し訳ない気持ちでいっぱいです……—」

心苦しい想いを議長達に重く吐露していくはやては「—ですが!」と唐突に俯いていた頭をチカラ強く上げた。これだけはここで絶対に言つておかなければならない。「私の部下達は襲撃者達に全力を挙げて勇敢に立ち向かいました! それに比べて私はリミッターの解除申請が下りない事を理由にしてただ部下達が地に倒れていくのをみつともなく泣いて見ている事しかできませんでした! なので今回の失態の責任は全て私のみにあると言つても過言ではありません!」

—だからお願いや。どうか……どうか私の大切な家族と友達にだけは!

「全責任は私一人が背負います! これからずっと先未来永劫死ぬまで無償奉仕でも、戦争に最前線投入されても構いません!!」

それが部隊を預かる長としての責任というものだ……覚悟を決めた少女の眼差しを受け取った議長がはやてへの処分を言い渡す。

「では、『古代遺物管理部機動六課』課長及び総部隊長、八神はやて二等陸佐」。管理世界全域に損害を齎した昨日の失態に対する処分として君の「佐官階級の剥奪」、並びに「本局への無期限無償奉仕」を義務と定め、これから先君は本局の命を最優先として活動する事。……また、部隊設立申請時に提示した条件と地上本部統括のレジアス・ゲイズ中將の要求に従い、「古代遺物管理部機動六課は一週以内の期間をもって解散」とする！」

これにて査問会は閉会となった。大切な人達の立場と信頼を護る為に八神はやてという一人の少女の人生が犠牲になったという残酷で無情な結果を残して……。



「——勇敢なる魂よ。どうか安らかに眠りたまえ……エイメン」

翌日、此処第6管理世界《テレビジア》の聖王教会支部葬儀場にて、次元王軍ラグナガンド第二二六強襲中隊による六課襲撃によって犠牲となつたグリフィス・ロウラン二等陸尉（二階級特進）をはじめとする六課局員等——計四十二名の葬儀・告別式が執り行われた。

僧衣を身に着けた紫色の頭髮をしている枯れ木のような印象の聖王教師による死者の魂を天に送る為の読経が終わり、棺桶に入れられた殉職者達の遺体が式に参列した彼等の肉親・知人達の涙に見送られながら火葬されていく……。

「母より先に逝つてしまふなんて、親不孝な息子だよ……」

参列者の中にはグリフィスの母にあたる《レティ・ロウラン》提督の姿もあり、母である自分より先に天へと昇つて行つてしまった大切な息子が遺骨（グリフィスの身体は敵の対戦車擲弾パンツァーファウストによつて跡形もなく木っ端微塵になつた為にはやてが拾つた片腕だけだが）へと変わり果てていく様を、聡明な眼に涙を浮かばせて別れの祈りを捧げている。

やがて火葬は済み、神妙な悲しみに包まれながら六課の殉職者達の遺骨は教会支部の

はずれにある《希望の丘》<sup>ホープ・オブ・ヒル</sup>の上に存在する管理局員の殉職者を供養する目的として設置されている墓地へと埋葬された。

「部隊長である私が不甲斐無いばかりに、希望と幸福に満ち溢れていた筈だった貴方達の未来が秩序に背く不屈きな者達によつて不幸にも奪われてしまふ結果となつてしまい、今も申し訳なきで大変心苦しく思っています。今後はこのような悲しい犠牲を生まないよう私達管理局員一同はより一層の研鑽を積み重ね、無念に散つて逝つた貴方達に恥じないよう次元世界の平和を脅かす者達から必ずチカラの無い人々を護りきり、輝く希望の未来を掴み取つてみせます。だからどうか……安心して天国へと行つてください——」

六課の殉職者達の遺骨が埋葬された十字架群の前にはやてが六課の生き残りを代表して彼等への送別を述べ、その背後には首にガーゼを巻いたなのはや全身包帯姿のフェイトをはじめとする六課の生き残り達が神妙な表情をして並び立つて黙祷をする。皆志半ばにして無念にも別れを告げる事となつた仲間達が安らかに天へと昇つて逝けるよう悲壮感を滲ませながらも真剣に彼等の冥福を祈る。

「——親愛なる同志一同の旅の無事を心から祈っています……一同、敬礼ッ！」

はやてが送別の言葉を述べ終え、右手を額に持ち上げつつ振り返らず背後に並ぶ部下達にそう号令を言い放つと、この場に立つ一同は部隊長に倣うようにビシッ！ と一斉

に敬礼を取った事で送別は終了。はやてが今後の活動については後日改めて連絡を入れると皆に告げると、この場は解散となった。

「レティ提督、哀しそうにしていたね……」

葬儀は終わったというのに別れがまだ惜しいのか、なのはとフェイトは『グリフィス・ロウラン二等陸尉、此処に眠る』と字が彫られた十字架の前に残り、二人並んで再び祈りを捧げている。

「無理もないよ、自分のたった一人の子供が亡くなっちゃったんだもん」

「うん、だけどあの人はとても強いよ。葬儀中は悲愴な表情をしていたけれど、葬儀が済んでグリフィスが埋められたこの十字架に葬花を添え終えたら——」

『次元世界の危機だっというのに、多くの部下を預かる提督がいつまでも気落ちしちゃうられない』

「——って言って、毅然と気持ちを切り替えて本局へとトンボ返りして行っちゃったし……凄いやね」

「うん、そうだね。負けて失ったものについてまでも未練を捨てきれないでいるわたし達と違って……」

あの敗北は失ったものが多過ぎた。護るべき人々の命と生活、積み上げてきたトツプエースとしての尊厳、希望の未来を護っていく為の部隊、そして襲撃戦で亡くなって

逝った四十二名もの同志達……それらを思うととてもじゃないが悔やみきれない。魔導師として十年のキャリアを積んできたベテランであつてもこの二人はまだ成人にも満たない少女なのだから。

「先日の襲撃戦でわたし達を救ってくれたあの冷たい眼をした男の子達が去つて行つた後、比較的軽傷だつたわたしとはやてちゃんは一晚の検査入院で済んで、F Wのみんなは幸いにも気絶してただけだつたからその日の夜には無事に目を覚ましたつて聞いた……でもヴィーたちやん達やヴァイス君は命の危険に係わる程の重体で本局の緊急治療棟に搬送されて、一晚の手術の結果なんとかみんな無事に峠を越える事ができて意識も取り戻したみたいだけど、それでも怪我が酷すぎる為に今も病院で療養中。フェイトちゃんも背中に重傷を負っていたから病院で応急手術を受ける事になつたけれど、病院に着いて医師の人に背中の傷を診せてみた時には何故かその傷はほぼ塞がりかけていたんだつたよね？」

「うん、たぶんあの氷眼の男の子が率いて来ていた救援部隊の一人が一度敵にやられて気絶した私を介抱してくれて、その時に飲まされた薬が効いたんじゃないかと思ふけれど……」

『おい、死ぬな！ 眼を開けてくれ！ 生きるのを諦めるなっ!!』

「……全てを突き貫くような槍型のデバイスと紅い炎を纏う鳥のような髪が印象的で、

とても綺麗で逞しい感じがした女性だったなあ……」

襲撃者の一人であるカツツエ・オルランドに不覚を取ってしまった事で背中に致命的な裂傷を負って倒れ、絶体絶命の危機となった自分の命を救ってくれた恩人の事を思い浮かべてフェイトは「それに比べて自分は……」と助けられてしまった己の不甲斐無さに意気消沈をする……それはなのはとて同じ気持ちだろう。管理局に入局してから大変優秀な実績を収めて局内最優の魔導師を示す《エース・オブ・エース》の称号を貰った事で多くの人々から羨望と尊敬を集め、その信頼に応えようと今まで研鑽に研鑽を重ね彼女はその才能とチカラを磨き上げて大いに振るってきた。それでもつてその称号に恥じない成果を今まで上げてきたつもりだったが……。

「ねえねえ。あの人つて戦技教導隊の高町一等空尉じゃない？」

「あ、ほんとだ。どの面下げてこんなところに居るのつて感じ」

「この間ラグナバンドつて侵略者共にテレビに放送が乗っ取られた事で映されたアイツの戦闘見たか？ フルボッコだったぜ」

「〃無敵で不屈のエース〃だなんて詐欺もいいところだったよな。あゝあ、オレあの人みたいな最強の魔導師になりたいつて尊敬していたのにな。正直言つてあれ見て幻滅した」

「いつも『どんなに厳しい状況になったとしても諦めないで、諦めなければどんな困難で

も必ず乗り越えていけるから」って言ってるさ、馬鹿じゃないのって思ったわ。 所詮魔導師の世界は魔法の才能が全てなのさ」

「自分がオーバースランクの天才だからって調子抜きすぎワロス！ んで自分より更に高い能力を持った犯罪者にフルボッコにされるとか、それなんて因果応報!？」 無敵のエース・オブ・エース”、プギヤ☆

「……」

二人の後ろを通りかかった局員達がなのはの姿を見て彼女をデイスるような物言い  
を本人に聴こえるようにワザとらしくほざきながら通り過ぎて行き、なのはは祈りの体  
勢のまま複雑な気持ちを抱きながら沈黙を露わにする。 たった一度の敗北でなんと  
いう掌返しのだろうか、六課壊滅前まで他の局員達は依存し過ぎた程なのはの存在を持  
ち上げていたというのに……。

——そうか、フェイトちゃん達が例外なだけで殆どのみんなはわたしの「魔法の才能  
が優秀だったから」着いて来てくれてただけだよ……。

なのはは祈る体勢を止めて「ギャハハハ！」と人を蔑むような下品な笑いを響かせな  
がら過ぎ去っていく局員達の背中に心寂しそうに目を向けてみる……無論、その視線を  
気にして彼女に振り向く者など誰一人としていない。 全てという訳ではないが皆高  
町なのはは絶対に墜ちない無敵のエースなんだという都合のいい思い込みをしていた

から大それた称賛を彼女に向けていたに過ぎず、故に一度墜ちたなら勝手に失望して勝手に見限っていく。

「……『無敵の存在』なんて、この世に居る筈も——」

そう思わず口にした瞬間、なのはの脳裏に過ぎつたのは六課襲撃戦の結末となったあのラグナガンドによる管理局への宣戦布告——

『俺は総ての高みへの意志を肯定する！ 故に総ては己が理想を叶える為に争え!!』

「——……」

ラグナガンド軍総帥《ラプス・グロースシュタット》……記録映像越しだというのに暗い空間の玉座に座っていた無限の宙そらを思わせるような計り知れない存在感を放っていた《次元王》……世界が絶対無敵の存在を求めているというのなら、あの男が配下の者達に次元の王と大いに称賛されているのも納得できる。それ程までにあの男の存在は底が知れないどころか異次元のものであった。

「……わたし達、勝てるのかな……」

あんな存在が率いる強大過ぎる軍レギオンを相手に次元世界を護りきれえるのか？ ……そう思うと暗い不安が心を侵食して酷く愕然となってしまう。

「なのは……」

いつに無く弱気になってしまっている親友が気になってフェイトも祈るのを止めて

いた。

「次元の王が手綱を握り遙か高みに飛翔し続ける破壊の柴竜の群勢……奴等は『紫雷の大魔導師』や『壊れた魔導書の闇』といったなのは達が過去に対峙してその度に乗り越えてきた並み居る強敵達が霞んでしまうレベルの化物軍団である事は間違いないだろう。 たったの一部隊と一度交戦した経験で力量を量ってみただけでも月とスツポンどころか恒星と小蠅にすら感じられた。

『《恋人よ、血肉を捧げろ。 死骸を曝せ》』

「……」

しかもまだまだ奴等は本気の底を見せていないような感じだった。為に六課を跡形も残さず破壊し尽くしたあの第二二六強襲中隊だけですらも今のままではまるで勝てる気がしない。 それでいて奴等の長である底知れぬチカラを秘めた遙か高みの次元王を打倒せねば次元世界に未来はないというのだから、本当に気が遠くなる……あれこれ考えていると不安に不安が重なってしまい、敗戦ムードを漂わせるように気を重くしている。

「……こちら貴方達。 いけませんよ、やるべき勤めを果たし終えた魂達が安らかに眠るこの神聖な場において、そんな人を蔑むような暴言を吐くとは何事ですか！」

「あん？ なんだよアンタ？」



眼鏡を掛けた紫色の頭髮の聖王牧師が先程なのはを侮辱する会話をして通り過ぎた局員達に注意を呼び掛けているのが二人の視界に入る。

——あの人は、今日の葬儀で魂送りの読経を読む導師をやってくれていた牧師さん……？

「どんなに有能に生まれたとしても人は必ずしも完全な存在ではありません。人である限りは多かれ少なかれ一度の人生において失敗をしないなんて事はありえない……そしてそれは《エース・オブ・エース》と称されている彼女にだって同じ事が言えるでしょう。確かに強大な魔力を生まれながらにして有し、英雄的に秀でた才を持つている彼女に信頼を寄せていれば全ての世界は安泰だろうと思ってしまうのも無理はありません。しかし次元の海は果てしなく広く、故に優れた者の上には更に優れた者が存在している。それを知っても尚自分よりも強大なチカラを有する相手に対し果敢に立ち向かって行くだなんて、そうそう容易に出来る事ではないでしょうに……」

確かに負けてはしまったけれど機動六課の戦乙女達は護るべき世界を護る為に勇敢に戦った。そんな彼女達に対して期待外れだったと失望し、不敬にも侮蔑して嘲笑うなど筋違いもいいところだ。

「いいですか、持てる尽力を尽くして成すべき事をやった人を侮辱するなど人としてやってはいけない恥ずべき行いです。貴方達もチカラ無き人々を護る義務を背負つ

た人間ならば、人前で軽挙な言動や振る舞いをするのは控えるべきじゃないでしょうか。違いますか?」

「……チツ、くだらねー。付き合っていられるか」

真摯に正論をもつて咎められた局員達は気分を悪くしてこの場から去って行く……そんな無礼極まりない集団の背中を牧師は「やれやれ、最近の若者達ときたら、仕方ないですねえ……」と呟きながら困った表情で見送ると、自分の背中に歩み寄つて来ていたのはとフェイトの存在に気付いて振り返り、柔和な笑みで二人に応対してみせる。「これはこれは、可憐で美しいお嬢さん方。大変見苦しいところを見せてしまったみたいで申し訳ない」

人が良さそうな雰囲気と心からの思い遣りが感じられる声音を向けられて思わず戸惑つてしまう二人。

「い、いえ。全然大丈夫です。寧ろわたしの事を庇っていただいたみたいで、こちらの方こそ申し訳ないというか……」

「おや? では貴女があな管理局の『不屈のエース・オブ・エース』と称されている高町なのは一等空尉なのでしうか」

「は、はい! この度は志半ばで亡くなってしまったわたし達の大切な仲間達を天に送り届ける葬儀で導師を務めて頂き、本当にありがとうございます!」

そう言つて慌てるように頭を下げるのは。

「いえいえ、聖なる王に仕える身として当然の仕事をしたままでです。寧ろ貴女の方こそ先日は御立派でした。苦渋を飲むような悲惨な結末になつてはしまいましたが、貴女方がミッドチルダの人々を護る為に勇敢に戦つてくれたのだというのは十分に理解していますよ。その高潔な気概、正義への信念、誠に素晴らしい」

素直な態度で称賛をしてくれるのは大変嬉しく思うのだがその結末に大切なもの多くを失つてしまつた手前、喜びの感情を表に出すわけにはいかない。

「失礼ですが牧師様。お名前を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

それと名前も知らない人間に馴れ馴れしく話をするのも失礼というものだろう。

そう思ったフェイトが目の前の牧師に貴方の名前を教えてほしいと訊ねてみると牧師は佇まいを正し掛けている眼鏡を右手の人差し指と中指でクイツと上げ、恭しく名乗りだした。

「これは失礼。私は聖王教会テレジア支部に勤めてさせていただいている《ヴァレリア・トリファ》と申します。しがたない牧師ですが、よろしければ以後もお見知りおきください、勇敢なエースのお嬢さん方」

その柔和な微笑みの裏にあるのは真実の親愛か？ それとも無限の欲望か？ この出会いが翼を折られた戦乙女達の未来に何を齎すのか、今はまだ知る由も無い……。

絶望の底に墮ちた六課を救うクロノの秘策は傍若無人で  
危険な大男？ ロストウィングの部隊長、来る！

清浄なる白一色の一室……心身共に汚れの全てが浄化されるようなこの空間に置か  
れているベッドの上に暖かな陽の光が射し、騎士の身に刻まれた敗北の傷を癒す。

「……アタシ達……負けたんだな……」

幼い小さな身体中に痛々しく白い包帯を巻き着けた鉄槌の騎士が清潔な白いシーツ  
を怯える子供のように抱きしめて弱々しく無情な現実を実感していた。

此処はミッドチルダ北部《ベルカ自治領》にある医療院の入院患者を療養させる用途  
で設置されている部屋の一つだ。屈辱の惨敗を喫してしまったあの戦いの後に本局  
の緊急治療棟に搬送されて手術を受け、なんとか全員一命を取留める事ができたヴォル  
ケンリッター達はより療養できる施設環境に身を置いて身体と心を休める必要があつ  
た為に今朝方この病院に身を移していたのだった。

「情けねえ。無様すぎるにも程があるだろ。アタシ達ヴォルケンリッターが揃いも  
揃っておいて一矢報いる事すらできずに成す術もなくあんな奴等にやられちゃうなん  
てよお……。アタシ達の夢を壊してはやてを泣かせたアイツ等を……アタシ達は

……クソツタレッツ！」

戦いに惨敗した事実を自覚して心の底から湧き上がってくる怒りと悔しさのあまりに自分が身を倒しているベッドの鉄柵に行き場のない悲嘆を叩き付けてしまおう  
ヴィータ。

「何が単騎戦必勝のベルカの騎士だ、フルボッコだったじゃねえか！ 絶対に負けられない戦いでこんな無様な体たらくを晒しておいてよくまあ、そんな大層な肩書きを名乗れたもんだぜツ！ クソ、クソオオツ！！」

心の底から吐き出された悲憤によつて僻みに僻みましたヴィータの表情からはその嘆きと悔しさが如何に大きなものを察せられる。「二対一の戦いにおいてベルカの騎士に敗北は存在しない」、そんな古の戦場を生き延びた騎士の驕りきつた信条など完膚無きまでに踏み潰すかのように彼女達は呆気なく地に叩き伏せられてしまったのだ。

「もうやめろヴィータ。 敗戦の屈辱を嘆いたところで傷付けられた我らの誇りを更に貶す事になるだけだ」

みつともなく癩癩を上げたヴィータを咎めるように冷静な声でそう言ってきたのは彼女の隣のベッドの背凭れに起こした上体を支えさせてリハビリ用のハンドグリップを握っていた烈火の将シグナムである。 彼女もまた全身包帯姿の重傷で、特に倒される際にフアングの剛拳をモ口に叩き込まれた側頭部には幾重にも冷却ガーゼが施され

ていてどれだけ彼女が痛烈な一撃を受けてしまったのかを理解させられる。魔導書を持つ主の命が消えない限り不死身であるデータプログラム体だったからよかったもの、もし彼女が生身の人間だったのなら間違ひなく即死していた事だろう。

「あんだよシグナム? はやての夢だった六課があんな奴等にブツ潰されて無様に這い蹲らされて、てめえは悔しゅうなかつたのかよっ!!」

「ふざけるな、そんな訳が無いだろう! 私だつてな——」

八つ当たりのようにやるせない痼癩を投げつけられてシグナムの脳裏に過ぎつたのは焼け野原の上に無様に倒された自分をサングラス越しに嘲笑するような目で見下す、悍ましくも未だ嘗て感じた事のない量の魔力を有していた白髪アウフ・ヴィーターゼンの怪物——

『へっ! あばよケルツェウアイフ蠟燭女。こんなカスが将とか、噂の闇の書の騎士も大した事無えな。期待して損したぜっ!』

「——倒すべき敵に刃を届かせる事も叶わず拳一つで無様に地に沈み、部隊の大切な仲間達の命を奪つた敵を斬り伏せろという主の命を果たす事ができず、拳句に我らがこの胸に刻んだ騎士の誇りをあのような下賤な者共などに踏み躪られるという、決して有つてはならぬ最悪の醜態を親愛なる主はやての目の前で無様にも晒してしまつておいても尚、こうして今生き恥を晒している。このような恥辱、まるで糞水を浴びせられたような屈辱……悔やまない筈が……平気でいられる筈が……あるものか……っ!!」

大切な主が流した嘆きの涙を払拭する事ができずに無様にも一撃で敵に倒されたチカラ足らずな自分への怒りが手に握るハンドグリップを握り潰した。あの戦いで無念が烈火の将の心の内に怨嗟と憤りを象徴するかのようなドス黒い炎を揺らがせている。夜天の守護騎士の将としてあの惨敗を思い彼女の内心が平常でいられる筈などありえない。

「許されるのならば今すぐにもこの場で己の腹を切り裂いて詫びとしたいところだ！……だがなヴィータ。敗北を喫して大切なモノや誇りを失った苦しみに最も心を痛め、重い責任を背負い、屈辱に耐えているのは我らでも他でもない、六課の部隊長である主はやてなんだぞ!!」

「あ……」

それでも、例え騎士としてどれ程の生き恥を晒そうとも死に逃げる事など許されない。何故ならば敗北によって守るべき多くのものを奪われた事で自分の大切な主に申し掛かった悲しみと苦しみは今自分達が心の内に抱いている屈辱など比較する事もおこがましい程に重いに違いないからだ。

「我らより先に意識を取り戻していたリインの話によると主はやては昨日六課の総部隊長として、あの襲撃戦においての敗戦責任を問われ本局上層部の査問会に掛けられたらしい。結果は主はやてが持つ【佐官階級の剥奪】と【一週間以内に六課を解散させ

「る事」だそうだ……」

「っ!!?」

衝撃的な処分の内容を聴いてヴィータは眼を見開き絶句するしかなかった。どうしてこんな事になってしまったんだ、自分達はただ大切なものを護ろうと必死で戦っただけなのに……上層部が下してきた無情なる仕打ちに小さな騎士の身体の内に沸々と怒りが沸き上がってくる。

「なんだよそれ……ふざけんよっ!! アタシ達はミッドを護る為に全力を挙げて敵と戦ったっていうのに、なんでそんなふざけた処分をされなくちゃいけないんだっ!!」

憤慨するあまりにヴィータはベッドを下りて隣のベッドの背凭れに上体を支えさせているシグナムの両肩に掴み掛かった。

「はやてがいったい何をしたって言うんだよ？ アイツは管理局の出撃体勢が遅すぎるからって、次元世界中の人間の危機を速攻で救いに行けるように六課を設立したんだぞ！ それなのにアイツ等ツツ!!」

「……」

「あのファングっていう白髪ヤンキーに負けたからか？ じゃあアタシ達が手も足も出なかつたあのバケモノ魔導師を相手にして管理局の誰なら勝ってたって言うんだよ!!」  
次元の狭間にあるような安全な本局に居て偉そうに文句を言ってくるんだったら今度



はテメエらが戦つて「いい加減にするがいいヴィータよ。将に当たるのは筋違いというものだぞ」——あんつ？」

上層部に対するヴィータの八つ当たりをシグナムが至近距離で聴き入れつつ何も言えず無言でいると、経つた今この部屋に入室してきた守護獣形態のザフィーラから横槍が入った事でヴィータの暴走が治まった。直後に彼女は正気を取り戻し、バツが悪そうにシグナムの両肩から手を放す。

「ザフィーラ、それにシヤマルも……」

「ヴィータちゃん、病院で騒いじやだめよ。敵にまるで歯が立たなくやられたのが辛くて悔しいのは私達だって同じ、けれどもそれでむしゃくしゃして家族に暴力を振るったりなんかしたら、それこそはやてちゃんを悲しませる事になっちゃうわ」

駄々をこねる子供に言い聞かせるようなシヤマルの指摘にヴィータは「……チツ！」と気分を害した態度で舌打ちをするが、それは自分が不条理を働いた事を理解している故の気持ちの切り替えだ。自分だけではなく皆が辛い思いを抱えて心が締め付けられる苦しさを我慢しているのは彼女だって解っている。眼元と口以外が包帯に覆われてミイラ男ならぬミイラ狼のような見るに堪えない恰好のザフィーラ、外面は一見何ともなく見えるが戦いでカッツェに背中を大きく斬り裂かれた為に今身に纏っている病衣の内の身体は包帯がきつく何重にも巻かれている為にとても無事とはいえない

シャマル……こうして見ると本当に皆こっぴどくやられてしまったものだ。

「わかっている。 わかっているだよ、そんな事は……けどき。 はやては闇の書の呪いを  
乗り越えて、自分の足で歩けるようになってから今までアタシ達が背負うべき罪を一緒  
に背負って、チカラの無い人が虐げられるような理不尽な世界を変える為にこれでもか  
というくらいに頑張って上にのし上がって積み上げて、色んな奴等の助けを借りながら  
も夢へと踏み出す為の部隊をやつとの思いで創る事ができたっていうのにつ……  
それがたつた一度負けたっていうだけで……クソッ!!」

全て壊されてしまった。 自分達の大切な主が夢の為に今まで苦勞して必死に積み  
上げてきたモノが、希望の未来へと羽ばたく筈だった部隊が、突然何処からか襲撃して  
きた破壊の柴竜の爪牙によって、理不尽なまでに……。

「悔やまれるが、今は受け入れるしかない。 そもそも地上に我らのような戦力を集中  
させた本部直轄の部隊を設立して活動する事自体が危うい橋ではあったが故、下手を打  
てばこうなってしまう事を我らの主は全て覚悟した上で事を進めていたのだ」

「それ故に主はやては今、六課の部隊長として失態の責務を全うし、謝罪と糾弾という苦  
行を勞しくその身一つで受け持っている。 我らがラグナガンドなどという下賤な獣  
の集団などに不覚を取ったばかりに……な……っ!」

ザフィーラもシグナムも己の唇を噛み切りたい思いでいっばいだろう、護ると誓った

ものを護れずに大切な主に辛い苦行をさせる羽目に遭わせてしまふだなんて自分達は守護騎士失格だと……だが彼女等の主は酷く打ちのめされながらも理不尽な現実と向き合い、今も戦っている。そう思うと落ち込んでなどいられない。

「……フツ、遙か古の存在である我らが現代に生きて成せる事など、もはや後世の者達にベルカの騎士としての誇りと矜持の何たるかを我らの騎士道をその目に焼き付けさせる事で伝えてゆく事ぐらいだろうと思つてはいたが、その誇りと矜持を踏み躪るような不屈な脅威が現れたとなると、そんな悠長な事など言つてはいられないな」

「ああ、アタシ達ももつと強くなつてやろうぜ。古代ベルカの時代の頃、騎士として全盛期だった自分達自身よりも、アタシ達がまるで歯が立たなかつたあのフアングとかいうギガ強え白髪ヤンキーよりも、何よりアタシ達の大切なはやてやなのは達を絶対に護つてやる為に、今度こそそなっ!!」

暗かつた表情から決意を浮かばせるように切り替え、強く拳を握り締めてみせた烈火の将と鉄槌の騎士の決意に同意を示して湖の騎士と盾の守護獣もそれに頷いた。それが例え根拠の視えない強がりだったとしても、過去に魔導書の闇の呪縛を解き放つた最後の夜天の主が……八神はやてが絶望に堕とされない限りは、雲の守護騎士達は何度でも立ち上がつてみせるのだ。

「よしっ！… んじゃあ辛気臭えのも……までだ。まずは早いところははやてを手伝う為

にとつとと身体を回復させねーとな……ところでよシヤマル、今はやては何をしていんのか知っているか？」

「あら？ そういえば言っていないなかったわね。今さっき連絡があったのだけど、はやてちゃんなら今クロノ提督から呼び出しを受けたみたいで、なのはちゃんとフェイトちゃんと一緒にベルカ自治領の聖王教会本部に——」

《聖王教会》——それは約三百年前の“古代ベルカ”の時代に勃発していた戦争を終戦

に導いた立役者で《聖王》と呼ばれていた英雄《オリヴィエ・セーゲブレヒト》を信仰の対象として祀り上げている次元世界最大規模の宗教団体である。因みに聖王オリヴィエは女性であり、決してどこかの身分を偽って他国で放蕩するスチャラカ演奏家とは別人なのであるという事を追記しておこう。

「失礼します」

なのはとフェイトは葬儀の後に知り合ったトリファ牧師と束の間の世間話に興じた後に牧師に別れを告げ、はやてに連れられて此処第一管理世界ミッドチルダ北部の「ベルカ自治領」にある聖王教会本部へとやって来ていた。

「はじめまして、機動六課所属の高町なのはは一等空尉であります！」

「同じく、フェイト・T・ハラウン執務官です」

壁全体が網目の窓で外から日の光を取り込む造りになっていて明るく風情のある空間の応接室へと通されたなのは達。

「ふふっ、そういえばお二方と直接会うのはこれが初めてですね。はじめまして、聖王教会、教会騎士団騎士の《カリム・グラシア》です」

入室し敬礼すると共に仕事モードの堅い面持ちと口調で初対面の自己紹介をしてきたのはとフェイトに対して二人を暖かな雰囲気で迎えたのは機動六課設立の後見人の一人でもある聖王騎士カリムである。彼女とはラグナガンドの宣戦布告時に緊急

回線で面識を得ているが、直接的に知り合ったのはこれが初めてである為、より丁寧に挨拶を交わしたのだった。

「それではどうぞ奥のテーブルへ。先にお見えになつて御二人も待ちわびてますよ」

そう言つて応接室の奥に置かれたどう見てもティータイム用には見えない白く洒落た円形のテーブルへとカリムに案内された三人は彼女達が歩いて来た出入り口から見て奥の席に座つている堅物そうな黒髪の好青年とフワツとした紫色の髪と緩やかそうな笑顔が印象的な青年という、異色の組み合わせの局員二名と対面する。

「先日の襲撃事件の時に通信越しに顔を合わせてはいるが、こうして直接会うのは久しぶりだな。高町一等空尉、フェイト執務官」

「はい。そうですね、クロノ提督」

「ええ、ちよつとお久しぶりです」

黒髪の好青年の方はなのは達をこの場へと呼び出したクロノ・ハラオウン提督。一方紫色の髪の青年は――

「それで、大変失礼ですが……そちらの方は？」

「ふふふ、御二方ははじめましてですね。私はリンディ・ハラオウン総務統括官の秘書を務めさせていただいている《ルヴェル・クルーガー》と申します。この場へは敵勢

力の管理世界への宣戦布告の影響で荒れ出してしまわれた世界状況の対応に追われている為は大変お忙しく身動きを取る事が難しい立場にあるリンディ様の代理として参上しました。ふふふ、若輩者でございませうが、どうか今後もよろしくお願い致します」

「こ、これはご丁寧に」

「よ、よろしくお願ひします」

彼等と対面の席に着いて挨拶をするのはとフェイトはどこかぎこちがない。二人共真面目な性分故、初対面であるカリムとルヴェルに失礼のないよう気を遣っているのだろう。それを見兼ねたカリムは二人に助け舟を出した。

「ふふつ。二人共そう堅くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」

「と、騎士カリムも仰せだ」

「せやな。二人共普段通りに喋ってええで」

クロノとはやてからも援護射撃を貰ったなら降参するしかない。なのはとフェイトは緊張を崩し、口を緩めて改める。

この直後にフェイトがクロノに笑顔を向けて「お兄ちゃん、元気だった？」と気の抜けた発言してきた為にクロノが恥ずかしさのあまり珍しく赤面するというちよつとしたハプニングがあつた事は割愛するとして、そろそろ本題に入るとしよう。

機動六課の隊長陣と代理人を含めた六課設立の後見人がこの場に集められたのは、管理局において過剰と言える程の戦力を集めた機動六課の設立が認められた真の理由について……そして襲撃者撃退に失敗した事により管理局と管理世界に甚大な被害を出してしまった責任として上層部より一週間以内の解散を言い渡されてしまった、彼女達の今後についての話し合いをする為であった。

機動六課の設立はこの場に居るクロノとカリム、そして現在は世界恐慌の対応に追われている為にこの場に来られず多忙でいるリンデイを後見人に置く事で成り立たせる事ができたのだが、その裏にはかの「伝説の三提督」によって最終的な後押しがあった事が決め手となった為に上層部が折れたのだという話があった。

「何でそこまでして……」

「それは私のレアスキル——プロフェーティン・シュリフテン《予言者の著書》が関係しています」

カリムのレアスキルはその名が示す通り「未来の出来事の予言を札に書き記す能力」だ。それは最短で半年、最長で数年先の出来事を予言する事が可能らしいのだが、いかんせん「優れた能力には大きなデメリットがある」というのはお約束。札に予言を書き記す事ができるのは年に一度だけであり、また書き記される文字が「古代ベル力語」であるが故に解釈が難しいのだ。この能力はカリム曰く——

「まあ、よく当たる占い、程度のものですけど」



だそうで、「私のレアスキルがそう言っている！」という風に何処ぞの防衛隊に所属している自称実力派エリート様が使うような戦闘予測も未来予想も何時でも手軽にできる使い勝手の良い予知能力ではない。

だがそれで彼女の事を要らない子と決めつけてしまうのは大きな間違いだ。彼女の予言は100%当たる……訳ではないのだが、言った通りかなりの確率で的中するらしく、本局の長官や航空部隊の将官クラスなどといった管理局の中核を担うような人達も一度は彼女の予言に目を通すという。(因みに地上部隊の方は実質のトップであるレジアス中将が高ランク魔導師やレアスキルといった存在を毛嫌いしている為、一度だつて見に来る事は無い)

「そして、そんなカリム様の予言に数年前から『ある事件』について書き出され始めたらしいですね」

ルヴェルが穏やかな雰囲気を潜めた険しい表情でカリムにそう問うと、それに応えるように彼女は真剣な面持ちで周囲の空間に漂わせていた札の内の一枚を手を取った。するとその札が彼女の手の中で急に純白の光を発し、光が治まると『真つ白な表紙を持つ一冊の本』へと変化していた。

「え、ええーっ!?!」

「その表紙のタイトル……『白の史書』って読むんですか……?」

札に記された予言を読み上げるのかと思っていたのはその唐突な変化を見て驚きの声を上げ、変化して形となった本の表紙に古代ベルカ語で記されているタイトル名を訝しく凝視したフェイトが自信なくタイトルを読み上げてみる。カリムの予言について詳しく知っている筈のはやとクロノが神妙な沈黙で彼女の手にある白い本を見ながら困ったように唸っているのを見ると、これが大変不可解な事象であるという事を悟れるだろう。

「タイトルの下に【④】という番号も記されているようですが、これは……」

「ええ。私の予言者の著書がこのように変化した事は未だ嘗てないのです……先日六課襲撃の件も含め、この多次元世界に嘗てない程の由々しき事態が起きていると視て間違いないでしょう」

ルヴェルが疑問を口にする则ちカリムが手に持った「白の史書④」のページを開いて唸し気に次元世界に計り知れない程巨大な危機が訪れようとしていると断言し、書に記された予言を真剣な声で読み上げた。

#### \*白の史書④

古い結晶と無限の欲望が交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼が甦る。

死者達は踊り、中つ大地の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船

は砕け落ちる。

「そ、それって……!?!」

「そう、恐らくは『ロストロギアを切っ掛けに始まる地上本部の壊滅』と、『管理局システム崩壊』……」

「六課の活動は表向きレリックをはじめとした高ランクのロストロギアの回収と独立性の高い少数部隊としての実験。だが真の狙いは地上で発生した事態や未知の敵に対して本局の主力が到着するまでの時間稼ぎを可能とする精鋭部隊……だったんだが……」

「その未知の敵の出現が予想よりも早く、そしてあまりにも強大過ぎた……という訳だね……」

齎されてしまった事態の巨大さ故に意気消沈せざるを得ない一同……突然地上に襲撃してきて管理局のエースが集う六課を中隊規模程度で容易く壊滅させる事が可能な程の強大な戦力を有している《次元王軍ラグナバンド》という敵はあまりにも大き過ぎる。特に《次元王》を名乗る正体不明にして記録映像越しですら存在の次元そのものが他者と掛け離れ過ぎていると感じられたあの敵軍の長——《ラプス・グロースシュタット》と直接対峙するかと考えるだけでも息の根が止まりそうになる。

「それからその……大変言い難いのですが……」

そして気の重くなるような重圧に更なる追い打ちを掛けるかのように、カリムが気ま  
ずそうな表情をしながら懐から何かを取り出して見せる……それは【白の史書①】と表  
紙にタイトルが記されている新たな予言書であつた。

「ちよっ!?! カリム、なんやねんそれはっ!!」

「本日午前、スクライア司書長が《無限書庫》の整理をしている最中に偶然発見したらし  
く、それを先程私が預かつた物がコレです」

「ユーノ君が……それには何と書かれているんですか?」

恐る恐るなのはに書の内容を訊ねられたカリムが無言で頷くと、息を呑んでページを  
開き読み上げ出す。

### \*白の史書①

水星の創作者によつて物語の開演を告げられし時、本来の道筋は破壊され、無限の宙よ  
り破壊の柴竜が爪牙をもつて数多の海へと舞い降りる。

破壊の柴竜は爪牙を振るい、数多の海の守護者たる戦乙女の翼を容赦なく抉り取ると、  
それを見せしめとして数多の海を守る法の船に向け咆哮をあげるその時をもつて全て  
の星々を巻き込む激動の時代が幕を開ける。

その衝撃過ぎる内容はこの場に居る全員を大いに驚愕させ、動揺するあまりに少女達の口から漏れたどよめきが室内中を反響する。

「な……なああああ——ッ?!」

「この内容って、どう考えても……!!」

「『破壊の柴竜』……ラグナガンドの……エンブレム軍章ッ!!」

カリムの予言者の著書で書き記される予言と同じく内容を解釈するのが難しい書き方がされてはいるものの、この場に居る一同全員がカリムが読み上げた史書の内容に対して同様の解釈を思い浮かべていた。

「はい。恐らくは先日の六課壊滅と次元王軍ラグナガンドによる管理局への宣戦布告……その出来事そのものを書き記したものと視て間違いないと思われます」

「『水星の創作者』や『本来の道筋』とかはよく解らないが、なのはの言った通り『破壊の柴竜』は六課を襲撃して壊滅させたラグナガンド軍の軍章を示しているのだろうな」

「そしてその解釈が正しいとするなら『爪牙』とは六課を襲撃した第二二六強襲中隊。『数多の海』は我々も【海】と呼称する事があるので次元世界を指すのでしよう。」

従って『守護者』は管理局に所属する魔導師や騎士……」

「んでもって『戦乙女』は内容の流れからして私ら機動六課の事やろな。今更やけど六課の前線部隊員の構成はエリオとザフィーラを除いて皆女性やなあ……」

「最後に書き記されている『激動の時代』は皆の解釈が合っていると仮定して考えると、これから始まる管理局とラグナガンドの戦争の事を言っているんだろうね……」

皆で史書に記述された内容を詳しく解釈しようとすればするほど、その解釈の事実性が深まっていく。どうやらこれは本当に先日六課壊滅とラグナガンドの宣戦布告、そしてそれを切っ掛けに始まる戦争が起きる事を書き記しているようである……フェイトは憎々し気に心底悔やみ、机の上に重い拳をドンツ！と叩きつけた。

「くっ！ ユーノに文句を言うのは筋違いなのは分かっているけれど、どうしてもっと早くこの本を発見できなかったんだ!? 今更こんな過ぎてしまった出来事を書いてある本が見つかったところで何の意味も——」

……その時——

「いや、その小汚え本には凄え重要な利用価値があるんだぜ。だからドブかなんかにでも捨てやがったりしたら、幾らパツキンで巨乳のキレーなネエチャンだろーとマジでブツ殺すからな——とっ!!」

そんな愕然とした空気の中で突如として乱暴臭い男性の言葉が聴こえてくると、クロノ達が座っている側の奥にある窓壁が猛烈な爆発音と共に粉碎された。

「ふ、ふえええーっ!!」

「な、なんやねん? なんかいきなり壁が爆発しおつたで!」

「まさか、また敵の襲撃!?!」

突然の奇想天外に六課の隊長三人娘は奇声を上げて立ち上がり、待機形態のデバイスを握つて警戒態勢を取る。クロノ達後見人組は表面上は慌てる素振りを薄くしているものの、内心動揺はしているようで席を立ち上がる反応に挙動不審の震えが見え隠れしているようだ。

「いったい何が起きた? 事故か? 敵襲か? 全員が緊張を露わにしながら粉碎された壁の大穴を凝視していると室内に充満した粉塵煙が治まり、空いた大穴の付近の床に倒れて目を回しているおかつば頭の女性教会騎士と大穴から太々しく煙草を吸いながら室内に入つて来たノースリーブシャツ姿の大男がその姿を現したのだった。

「シヤ、シヤシヤシヤシヤ——シャツハ!?!」

「ぎやあゝあゝ ああっ!?! マツチヨなオツチャンの姿をしたター○ネーターやあああああーっ!!」

カリムが床でノックダウンしているおかつば頭の女性教会騎士を見て驚愕しつつその女性教会騎士の名を動揺に震えるように叫んだ。彼女はカリムの補佐役である《シヤツハ・ヌエラ》。シグナムにも匹敵する実力を持った彼女がやられてしまつてい

る事態が起きるなど普通ではなく、はやてが陽陰に黒く塗りつぶされている威圧感たつぷりの敵つい顔で煙草の煙を「フシュー、フシュー」と口から吹かしている大男に恐怖し阿鼻叫喚……そんな混沌とした中でクロノが何やら悩ましそうに頭を抱えているが、この事態はともじやないが尋常に見えず、なのはとフェイトは何時でもセットアップできるように臨戦態勢で謎の大男の前に毅然と立ち警告する。

「動かないで下さい！ 貴方はいったい何者なんですか？」

「【教会施設の破壊】に【教会関係者への攻撃】……貴方のやった事は管理局法と照らし合わせるまでもなく重罪だ！ まさかこれだけの事をしておいて一般人だという訳ではないでしょう？ 何所の素性を明かしなさい！」

煙草を口に銜えながらヤ○ザのように威圧的な大男の視線を怯まず押し返すかのようにな真つ向から対立する意志を二人のエースはぶつけている。もう負けない、これ以上大切な何かを奪われてたまるか！ そんな真つ直ぐな強い想いを身に受け止めて大男は何が愉快なのか、好奇心混じりの凶悪な笑みを敵つい顔に浮かべてみせた。

「へっ！ 可愛らしい顔して覚悟が決まったイイ面をするじゃねえか！ こういう才能に溢れたお利口さん共は普通、その才能で何でもできちまうから他人に対して慢心丸出して向かって来るモンなんだが、意識を読み取って視たところそんな気配は微塵も無えようだな。 うん、なかなかイイじゃんお前ら」



「何を訳の解らない事をツ！」

「こんなにおもしろえ嬢ちゃん達なら、異次元の戦争バカ共と上層部のウ○コ共に潰されるのが惜しいと思うのも納得がいったぜ。——

——んで、ウチの部隊で預かるのはこの嬢ちゃん達でイイんだな？ ええ、クロノ提督よお」

一触即発だった空気がその大男の衝撃的な発言によってピシリッ！ と凍り付いた……数秒の間を置いて一同の視線がやれやれと苦悩するように肩を竦めるクロノへと注がれる。

「どど、どういう事やねんクロノ君!? どう見ても「ヤ」の付く危ない人達のボスみたいなこの怖くい人相しとるオツチャンが私らを預かるって……何でこないな状況でそんな話が出てくるつちゅーねん?」

「どうか今この人ウチの部隊って言っていたけれど、まさかこんな教会施設を破壊して壁から部屋に入って来るような危険人物が部隊を任せられる程、位の高い管理局員だつて言うの!?!」

動揺と疑心に困惑するはやてとフェイトから投げつけられた疑問にクロノは気疲れしたかのように一度嘆息すると、大男の眼前に立って臨戦態勢でいるのはとフェイトの横に来て壁の大穴から射す陽の逆光を背に太々しく煙草を吹かしている大男を――

「まったく、来るのが遅過ぎますよ “マクラウド特務遊撃支援部隊長” 殿? 貴方の遅刻癖は昔からそうでしたけれど、少しは治そうとする努力をしてください」

呆れるような細目を向けつつ困った知人を注意するかのように出迎えた。

……はい? 風紀や規律に五月蠅く堅物で有名なクロノ提督がこんな如何にもセメントで固めた人間を何人か海にでも沈めていそうな大男に対して普通に話し掛けた?  
全く予想外な彼の対応を見てこの場に居る一同は固まった。

「がははは! いやゝスマンスマン。ちよつと人生という道に迷っちゃってなあ」

「年中行き当たりばったりで過ごしている貴方が人生に迷う事なんてあるんですかね?」

それに仮にも管理局員が民間建築物を破壊してどうするんですか？ 後、大体理由に見当は付きませうけれど、何故騎士シヤツハが其処に倒れているんですか？」

「あん？ そりゃあ何事も真つ直ぐ行つた方が目的地に着くのが速えんだし……道を塞ぐ邪魔な障害物を破壊して歩いてたら教会前でそのパツツンシスターに絡まれた。んでスゲー口五月蠅くて面倒だったから上手くO★HA★NA★SHIをつけて此処に通してもらつた。ただそれだけの事だ、どこも問題無えだろ？」

「大アリです！ 局員でも勝手に物を壊せば損害責任は生じますし、賠償払えるんですか？」

「後でウチのバカ共に直させるから大丈夫じゃね？」

無茶苦茶だ……どうしようもない傍若無人つぷりを遺憾なく発揮してくる大男に今度は盛大に溜息を吐くクロノ。何でこんな危険人物全開の男と何気なく会話できるのだろうかという不審な視線が周りから集められている事によやく気付いて「ハッ！」と我に返ると、彼は「コホンツ！」と一回咳を払って一旦心を落ち着かせる。そして側に立つなのはとフェイトに言った。

「二人共警戒を解いてかまわないよ、この人は僕が呼んだんだ。敗戦によつて上層部や地上から糾弾され、解隊を余儀なくされてしまった機動六課を、裏で生かしてもらふ為の秘策としてな」

それはあまりにも唐突で驚かしく、とても怪訝過ぎる話だった為になのは達は益々困惑してしまふ。そんな彼女達を和ませようとしたのか、彼が存続の危機に陥った六課を救ってくれる人物だという大男が室内の一同ににこやかな笑みを向けてフレンドリーな態度でもって自己紹介をしてみせた。

「てなわけで、ども。一局員の《デイビット・マクラウド》でつす。《特務遊撃支援部隊ロストウィング》という名の管理局のチンピラ問題児共を集めた底辺部隊をムチとブレイカーでしごきながら引つ張ってやっている総部隊長なんてものをやってまゝす。

夜☆露☆死☆苦☆！」

「それ、メツチャ理不尽な拷問やんけ！ アメはっ!？」

すかさず発せられたはやてのツツコミの冴え渡りにこの先の不安を一層に感じるなのは達なのであった……。

ようこそ、ロストウイングの隊舎（アジト）へ!!

《特務遊撃支援部隊ロストウイング》——約十数年前から時空管理局の特例部隊として非公式に立ち上げられたその部隊は「海」「空」「陸」のどれにも属しておらず、その活動は一般には公にされていない。局内でも一部の高官しか彼等の存在を把握しておらず、故に噂程度の都市伝説——“幻の部隊”とされているが、その実彼等は組織の裏で日夜次元世界中を駆け巡り部隊活動をしている。

彼等の仕事は遊撃支援部隊の名を冠する通り他からの依頼要請による請負任務で、事捜査や次元犯罪組織の検挙などを行う捜査官や執務官の護衛といった局内公務活動の支援から戦地に赴く武装隊への援軍、更には俗に地方の警務隊が勤務中に一般から請け負う仕事に部類されている「人探し」や「ペットの捜索」など実に幅広く、所謂“何でもやる万事屋”のような仕事を部隊規模で執り行っていると言ったところだ。

ロストウイングの人員構成は部隊の存在自体が都市伝説となっただけあって、その誰もが不明瞭な人物像で軒並みブツ飛んでいると噂され——

曰く、その部隊には魔導師能力査定における最低保有魔力値以下と認定された最弱の

Fランクでありながらも請け負った任務達成率は常に100%の規格外過ぎるエースの存在がある。

曰く、その部隊は戦技教導隊の教導理念を真つ向から否定した為、その反発行為の制裁教育指導の下に行われた多対一の模擬戦で誰もが本局の優秀なエースとされる教導隊の教官達を開始僅か数秒の内に全員を地に撃ち墜とすという驚愕的な伝説を打ち立てた直後に表舞台から姿を消した《教官潰し》の転属先で、彼が部隊の戦術教官を務めているらしい。

曰く、その部隊唯一のデバイス技師は魔力を持たない非魔導師でも高ランクの魔法を使用する事が可能となる次元世界初の魔力駆動炉搭載型デバイスの開発をやつてのける程の超天才デバイスマスターなのだという。

曰く、その部隊にはなんでも管理局が抱える砲撃魔導師の中でも最高峰とされている現エース・オブ・エース高町なのはの最大火力を遥かに凌駕した超火力砲撃魔法を撃ち、隣接する大国十個程度を一度に跡形も残さず消滅させて滅ぼしてしまう人外砲撃魔導師が所属している。

曰く、その部隊は生前古代ベルカ以前の古き時代、不平等な生まれによる格差社会に深い怨恨を抱いて国の王族や貴族に対して辻斬りを繰り返した末路に斬首刑に処された悪鬼に憑り付かれているイカれた凶人集団。

……などなど、どれも人が聞いたら俄かに信じ難く思つて首を傾げてしまふであろう荒唐無稽な話ばかりで、それが真実なのかどうかは当人達に直接関わりを持つて確かめるしかない。

「——で、このメチャクチャな自然の山中に貴方の部隊であるロストウイングの隊舎がある……と？」

集団の先頭を行くデイビットにそう訝し気に問いかけたのは生い茂る森の山道を微妙に息を切らせながら登っている最中のフェイトであった。

「ああ、そうだ。此処に来る前に全員に配つてやった『しおり』にもそう書いてあるだろ？　ちゃんと読んでおけよな、俺がせっかく徹夜して作つたんだから」

言われて胸ポケットからピンク色のクレヨンでウサギさんが描かれている表紙の紙束を取り出して「ろすとういんぐへ行こうのしおり」とミミズがのたうち回つて爆散したかのような汚い字で書いてある表紙のタイトルを見た途端に、フェイトの表情に言葉が出ないような明らかな不安が浮かびあがった。こんな真面目に言っているのか疑わしい態度のこの人に着いて行つて本当に大丈夫なのだろうかと彼女は嘆息する。

「しおりって小学生の遠足じゃないんですから……それに聞いたのはこんな辺境の無人世界にあるような訳の解らない自然環境で辺鄙な場所に管理局の部隊の拠点が本当に

存在するのかと疑っているからです。 見てください!」

彼女は登る足を一度止め、登って来た山道の下方に眼を向けてデイビットに現在後続の置かれている状況の混沌さを理解するように促してみる。 デイビットが言葉に釣られるようにフエイトが目を向けた下方に首を向けてみると――

「ぎやあああーっ!!? ペシャンコになるーっ!! タスケテーっ!!」

六課の通信士である《アルト・クラリエッタ》と《ルキノ・リリエ》が仲良く並びながら必死に背中を追って来ている巨大な岩球から逃走し――

「スバルスバル? ちよつと親友に気を遣って橋になつてくださいよ。 ボクが君の背中を渡つて崖を越えますから」

「ちよつ、待つてよミク!? この下マグマがグツグツいつてるんだけどおーっ!!」

人間一人程度の幅のある溪の前でスバルとミクティーンが溪の向こう側にどう渡るので揉めていて――

「わああ、見て見てエリオ君。 管理世界の絶滅危惧種に指定されている『ジャイアント・トードー』だよ! 前に自然保護隊に居た時に保護対象生物の記録データベースの写真で姿は知っていたけれど、まさかこんなところで出会えるだなんて『ヒュツ、パツクン!』」

「キャ……キャロオオーっ!!?」



「キュルウウー……ッ!!」

突然地面の中から出現した巨大なカエルに見惚れてキャロが目を輝かせ、その隙にその巨大カエルが長い舌でキャロの身体を巻き取り頭から飲み込んでしまった為にエリオとその頭に乗っかっているキャロの使役竜であるボストンバグサイズのチビ竜——

「あわわわっ!? 滑る滑るうう! なんてこんな山中に「アントリオン」がいるんですかああああーっ!?」

砂漠地帯にしか生息しない筈の蟻地獄の怪物のような形容をした大型魔法生物によつて砂上に造られたすり鉢状の捕獲罠トラップに嵌まってしまったシャーリーが砂の中に引きずり込まれてたまるかと滑りやすい砂の斜面から上がって罠から脱出する為に必死に足掻いていて——

「あー気分悪いー。 やっぱ病み上がりでこんな急斜面の山なんかを登るのはキツイかな……やべ、なんか気が遠くなってきたぜ……死ぬ」

「同感だ……親愛なる我が主よ、どうやら我らはここまでのようです。 後の事は——」

「ヴィーたちやんとザフィーラ!? その沼、毒だから迂闊に入っちゃだめよおおおーっ!!」

「こんな山道ぐらいでだらしが無いぞヴァイス? 貴様それでも男か、シャキつとしろ

!

「痛たたつ！ ちょよ、シグナムの姉さん!? 俺、貴女達と違つて生身の人間だから！ まだあの白髪ヤローにやられた怪我は全然治つてねえから！」

明かに毒である紫色の沼のド真ん中でブツ倒れそうになるヴィータとザフィーラ、それを目の当たりにして二人に必死な大声で呼び掛けるシャマル。斜め四十五度の急斜面を駆け上がつて行こうとするシグナムがバテバテで全身包帯姿のヴァイスを鼓舞しつつも彼が痛がるのをお構いなしに無理矢理片腕を引つ張り、ヴァイスはあまりの理不尽な扱われ方に悲鳴をあげている……などといった阿鼻叫喚の地獄絵図が渾沌と展開されている光景がそこにはあつた。

彼等が壮絶に悲惨な目に遭つている更には下の方でははやとリインが何故か雪と熱帯雨に同時に降られて、あたわたと困惑と焦燥を浮かべつつ必死に斜面を文字通り顔面蒼白になりながら登つてきたものだから、もう笑うしかないだろう。

「わぷつ!! い、いったいどうなつとんねん、この山は!?」

「自然環境も生態系も気候までメチャクチャですう〜!」

悪戦苦闘しながら機動六課一行が現在登山に挑戦している山は無数の世界が隣接する管理世界群の辺境にひっそりと存在している無人世界《リル布斯》の北極端の大陸の中央部に聳え立っている、標高約9000m超を誇るとされている《メルクーリア連峰》

であり、その山中の環境を説明するならば極端に言うとは渾沌過ぎで理解不能の二言に尽きる。

世界の北極端の位置にある場所にも拘らず何故か平時温暖な気候を維持しており、かと思いきや急に寒冷が入ってきて雪が降った、と思つたらいきなり熱帯に急変化して熱帯雨が降り始める……といった感じで、山の天気は変化しやすいと言うには度が過ぎた異常を超える変態気象。生態系も絶滅危惧種やSランクの危険度で手配されている超弩級の魔法生物が其処らに跋扈している所為で荒れ模様。自然環境や地形に至つては一度入り込んだら二度と出て来られないような複雑な森域があつたり、雪原地帯と砂漠地帯が並んで存在していたり、変態気象の所為で削りに削られた斜面は崩れ落ちて断崖絶壁となつている場所も多く、少なくとも人が徒歩で登つて行くには超過酷な道程となるのは確實と言える。

そしてこの山の最大の特徴を挙げるならば、この場が多次元世界中の靈脈レイラインが集約された特異点であるが故にこのメルクーリア連峰を含む大陸全土に特殊な磁場が発生している、魔力を使用する一切合切の要素が全く機能しなくなるようなのだ。

「きゅう……」

それ故に飛行魔法はおろか身体強化魔法すらも使い物にならず、彼女達はこの山を自力で登らなければならなかつたのである。故に元々は運動オンチであつたなのはに

至ってははやて達よりも更に下の方で体力が底を尽いてしまい、上の方と比べて比較的  
に緩やかな斜面の上で見事にダウンしていたのであった。

「おいおい、あの嬢ちゃんって確か体育系全開で有名な超暑苦しくて年中世界温暖化の  
原因だってネタにされているような戦技教導隊でビシビシとしごかれてきた叩き上げ  
の教導官ってクチじやなかったの？」

「はあ……この十年間鍛え続けてきて以前の運動オンチはある程度改善されたんだけど  
ね。身体強化魔法無しだとこの過酷な山道はまだダメだったか……マクラウド特務  
遊撃支援部隊長、ちよつと行つて来ます」

そう一言断りを入れてフエイトは早々にダウンした親友を助け起こしに、来た山道を  
逆走して駆け下りて行く……やれやれ、前途多難だな。逆走の道中で幼き竜召喚士を  
口に銜えていたジャイアントトードを怒りの親バカモード全開で蹴り倒して行くその  
背を眺めながらデイビットは側頭部をポリポリと掻きつつ嘆息するように呟いた。

「クロノから聞いちやいたが、魔法が使えねえとなるとここまで酷えとは……いや、ま  
いったねえ。こりやあ向こうに着いたらガンマの奴にコイツらの訓練は基礎身体能  
力向上の方を特にキツくシゴいてやるように言っておかねーとな」

先日の襲撃戦を辛くも生き残れたというのに機動六課前線メンバーは不幸な事に次  
の行き先で地獄の修練（？）をさせられる事が確定したのだった……。

先日管理局に宣戦布告を宣言した次元王軍ラグナガンドの策略によって奴等の戦力的優位性を管理世界に示すデモンストレーションに利用された事により、第二二六強襲中隊の襲撃で完膚無きままに叩き潰されたのは達機動六課は戦いの深い爪痕によって深刻な被害を受けた地上からもエース部隊の完敗で士気と信用的利益に深刻な打撃を受けた本局からも信頼を失ってしまった……その結果、六課は本局の上層部からの圧力により部隊の解隊を余儀なくされてしまい、活動拠点も失ってしまったが為に部隊を

存続する事は絶望的となつてしまつていた。

しかし彼女達のチカラと次元世界の平和への想いを信頼していたクロノ・ハラオウン提督は例え上層部の決定に逆らう事となつたとしても彼女達を見捨てたりはしなかつたのだ。クロノは襲撃戦時に六課の救援に駆けつけて来て彼女達の命を救い、襲撃者たるラグナガンドの尖兵達を相手に互角の戦いを繰り広げて奴等を撤退させた、氷眼の少年ら《シルバークエスト小隊》が底知れぬ絶望の淵に堕ちてしまつた六課を救い上げてくれる希望の光になるかもしれないと考え、藁にも縋る思いを胸に彼等の痕跡を探つた。そして行き着いたのは昔の自分の恩師であつた男——《デイビット・マクラウド》が率いる特務部隊であつた。

その部隊——《特務遊撃支援部隊ロストウィング》は【海】【空】【陸】のどれにも属していない特例の部隊であり、故に局からの支援も無く辺境の無人世界に拠点を構えて部隊活動を行っている為、本局の目は行き届きずらく、本局所属の提督として不謹慎な考えだが世界恐慌の対応と戦争開戦の準備で局全体が非常に忙しい事態となつている今なら彼等に交渉して拠点を借りる事で、表向きに六課を解隊した事にして六課の人員をひっそりと其処に送り込む事で、裏で六課の活動を存続させる事ができるかもしれない……。

部隊長が信頼できる昔の知り合いという事も都合が良く、クロノは極秘の特殊通信回

線を通してデイビットに交渉を持ち掛けた。「そちらの仕事の手伝いを彼女達にさせる代わりに、機動六課にそちらの拠点を共同で使用させてほしい」という条件を付けて……。

「到着〜つと」

想像を遥かに超えて色々な意味で険しかった山道をなんとか登りきったなのは達は、ブツ倒れそうになりながら辿り着く事のできたロストウイングの隊舎の前で息を整え、その全容を息切れた苦悶の表情をしながら見上げる。

「な……何、此処？」

しかしそれは本当に管理世界の法の中心である時空管理局が保有する部隊の活動拠点なのだろうかと一目で疑念を抱いてしまう程に草臥れた建物であったので機動六課の一同は全員目を丸くする程、呆気にとられてしまう。

「ボツロ!!」

「なんか幽霊が出そうな雰囲気だね……」

激しい吹雪が吹き荒れる非常に厳しい環境の中にデカデカと佇む石造りの砦……その壁面の至る所には崩れ落ちている箇所も少なくはなく、まるで過去の籠城戦で陥落したのをそのまま放置した幽霊屋敷のような不気味な異様が目の前に聳え立っている。

脆そうな壁面の劣化に比例して眼前に見える正門は堅牢そうな巨大な鋼鉄の二枚扉

が外部からの侵入を阻んでいて、漆黒の重圧が場内を侵そうとする如何なる外敵をも跳ね除ける印象を抱かせるが、肝心の外壁がこのザマではその役割に価値などなく、寧ろ建物の外観の不気味さをより際立たせている。

正門の上と砦の屋上に聳え立っている旗に施されているロゴマークはロストウィングの部隊章エンブレムだろうか？ 人を守る大盾に二つの杭で両翼を縫い付けられた鳥の紋様は破壊の柴竜の爪牙に翼を折られたばかりの戦乙女達の心深くに付けられた傷痕に差し障る事この上ない毒であつた。

「ママママ——」

「ん？ どうした？ ここまできてホームシックにママが恋しくなつたのか八神二佐？」

「——ちやうわ！ 私の両親はとつくの昔に他界しとるつちゅーねん！」

「あ、すまん。 お前この前、異世界の戦争バカ共に負けたから一尉に降格されたんだっけか？」

「普通謝んのはソツチちやうやろが!?! それよかマクラウド部隊長、此処つてホンマにロストウィングの隊舎なんか？ 敷地は六課の隊舎よか三倍以上の広さはあるようやが、なんやこの砦穴だらけでボロ過ぎて、人が住んどる感じが全ツ然せえへんで!?!」

目の前に佇むボロ砦の不気味さに震えながらもエセ関西人やがみんのツツコミの冴えは衰え知らずだ。 それ程にこれから暫くの間このクソ環境の中のボロ砦で生活し





よ」

「……隊舎の事をボロクソに言われた事、やっぱり凄く根に持っている……っ!!?」

振り向いてヤ○ザのような形相で怖ろし過ぎる事を理不尽に言ってくるデイビットの威圧感に全員眼を白くして異を唱えるように叫んだ。

確かに彼女達が聖王教会での集まりの時にクロノが持ちかけてきた提案を呑んで本局の医療機関を使つて二日の急ピッチで前線メンバー全員を負傷を完治させ、この傍若無人の化身に連れられてこんな辺境のド田舎世界の更に辺境の大陸に聳え立っている意味不明な過酷さの超高い山の頂上付近まで昇つて来てまでこんな辺鄙なところに来たのは、無論この場所ならば機動六課としての活動を存続できると言うクロノの気遣いと期待に応える為、なによりも彼が繋いでくれた一筋の細い光の道を活かし折られてしまった希望の翼を取り戻す為に戦い続ける為になのだが——

「デメエらしい加減にガタガタ抜かしてんじやねえ……っ!! そんなんであの異世界から来た戦争狂チート軍団に勝てると思つてやがんのか? ああん!」

おふざけ半分だった態度を一変させて発せられたデイビットの怒号によつて、不服ばかりを垂れていたなのは達はその身の毛がよだつ程の気迫とぶつけられた正論に身を竦めてピタリと黙り、ロストウィングの部隊長から発せられてくる黒い鬼気から感じ取

れる得体の知れない恐怖に息を呑む。

「ここから先は十年前にテメエらが解決してきた『PT事件』や『闇の書事件』なんか比べるのも馬鹿馬鹿しくなるぐれーには次元のケタがまるで違えレベルなんだと自覚しろ。俺が言うのも難だろーが、この中に居るバカ共は全員真正銘どつかしら頭のネジがブツ飛んでるイカレ野郎軍団だぜ？ 今までに培ってきただろーお利口さんエリートの気構えで通用すると思つてんじゃねえよ」

吹き荒れていた吹雪を吹き飛ばし、大気を揺るがす程のデイビットの威圧……その迫力には「白の史書①」にも書き記されていた、これから先の『激動の時代』での戦いが想像を絶する程に過酷で険しいものになるという事を凄絶に感じさせられた。

——そうだ、わたし達は強くなる為に此処に来たんだ。もう負けない為に、二度と失わない為に……！

ラグナガンドの魔導師ヴォルカーン・フォン・グラナート率いる第二二六強襲中隊によつて六課が壊滅させられた際に自分達の絶体絶命の窮地を救い、ヴォルカーンの配下であるSSSランクオーバー級の規格外ファング・イスカンブルグと互角の戦いを繰り広げた高次元の実力を持つ謎の雪髪氷眼の美少年を筆頭とした所属部署不明の少数精鋭《シルバーガスト小隊》……その彼等実はデイビットの部下——ロストウィング所属なのだという事をクロノの口から聞かされ、その時になのは達の決意は固まった。

先日まで最強だと信じて疑わなかった魔法よりも遙かに強力なチカラを行使して高次元の戦闘力を発揮する氷眼の少年達 “聖遺物持ち” ……彼等のような実力者達と手と結ぶ事ができれば、自分達が魔導師として今までに打ち倒してきた強敵等とは比較にもならない程に埒外な戦力を保有しているラグナグンド軍に対抗できるかもしれない。彼等の側に居ればヴォルカーンやファングのようなラグナグンドの化物魔導師達と戦える強さを手に入れられる……少なくともそのヒントを掴めるかもしれない。

——クロノ君が絶望の闇の中に見出してくれた希望の未来への僅かな可能性の光……絶対に無駄にはできへんしな。この前聖王教会に集まった時の話によると、このヤ○ザみたいにめつちや怖いオッチャン達——ロストウィングには六課が襲撃された時に私達のピンチを救ってくれおった女の子みたいに可愛い顔をしたキレイな白髪の男の子達をはじめ、私らのようなエース級の魔導師に匹敵する、或いはそれ以上の腕利きの実力者が多く所属しているらしい……その話が本当なら明らかに部隊の “戦力保有制限” をブツちぎっているやろし、いったいどんな裏技を使つてと疑問に思うところがあるんやけど、彼等と協力関係を築ければラグナグンドの連中に対抗する為の戦力になる事間違いなしや!

——それに彼等は六課が襲撃される前からラグナグンドの情報を掴んでいたみたいだし、その事について彼等から提供してもらえれば、その情報を基にこれから先奴等と

相対した時の対策を立てる事ができる。次元世界の何所かに六冊散らばっている。マクラウド特務遊撃支援部隊長が言っていた《白の史書》に書き記されていた事が本当にこれから先の未来で起こる出来事なのかどうかも気になるし、聞き忘れないようにあとで全部追及しないと。

なのはもはやてもフエイトもそれぞれ秘めた想いを胸に気が引き締まる。

「……」

「? ……スバル、どうしたんですか? なんだかさつきから暗い顔をしていますか」  
「え? ……あ、うん。 何でもないよミク。 大丈夫だから……」

スバルの表情に若干の陰が見え隠れしているような気もするが、彼女に気を遣って声をかけたミクティーンもエリオもキャロもヴィータもシグナムもシヤマルもザフィーラもリインもシャリーもヴァイスもアルトもルキノも、少ないながらもこの場に来た六課の面々は全員先を戦う覚悟を決めたようだ。 残念ながらこれからはやて達に着いて行くと機動六課への残留を志願してこの場に立っているのは今名前を挙げた僅かな人員のみで、他の生き残った人員は皆先日第二二六強襲中隊による襲撃においてなのは達エースが敗北した事実がトラウマとなってしまうたが為に臆病風に吹かれた、又は襲撃による六課崩壊で重傷を負ってしまった為に現在も病院で養生中、などの理由で部隊の残留を敢え無く辞退せざるを得なかった……彼等の無念をも背負い、不屈の戦



# 出会って早々に一触即発？ 飛び立つ翼をもがれた鳥達

隊舎の中に足を踏み入れると其処には人格者な優等局員で部隊が構成されている機動六課一同にとって異様極まる風景が広がっていた。

「テンメ、この爆弾サイコパス女がッ！ よくもオレが後で食べようと楽しみに取っておいたチョコレートパフェを入れておいた冷凍庫を爆破しやがって、絶対に許さねえ！ ヤッロ、ブツ殺してヤラアアアアアアッ!!」

「アツハハハハ！ そりやあゴメンナサーイ♪ つい先日改良したばかりの時限式爆弾タイムボムの威力の程を試したくなつちまってなあ、テヘペロツ☆」

「おっ？ いいアングルで乳揺れゲツト！ グへへへ、D・Dの奴まくたおっぱいのサイズが上がったな？ どれどれ、ちよつとばかりその成長の程を味見して……」

「オイ、リゼルッ！ お前さつき訓練場に運べ言うた機材、いったい全体何所に置いて来とんねん!? 何をどう聴き間違えたら水が入ったまんまの風呂の中に機械の類を放り込むって解釈になるんや？ お蔭で三十万ミラも溜めて買った機材が台無しやんか！ どうしてくれんねん、このドアホウツ!!」

「ひいひいッ!? ごめんなさいごめんなさいガンマさん！ ボクが一生をかけてでも弁





絶叫する。それは当然の如く当たり前の反応だ。

迷彩柄の見せブラに同色のホットパンツというパンクな恰好をした少女が悪戯な笑みを向けてきながら愉快そうに逃げ回るのを、いかにもTHE・不良なリーゼントの青年が目映すも痛々しい釘バットを怒髪天に振り回して石造りのボロい壁やエントランス内に置かれた家財道具などを破壊しながら追い駆け回している。

その背後でフェイトのそれにも匹敵するかもしれないパンクな少女の豊満なバストが運動の激しさに合わせて弾み揺れているのを、身に着けているワイシャツのボタンを全開にして口から涎を垂らしながらビデオオキヤメラに収めていた金髪の男性がいかかわしく表情をニヤけさせて両手をワキワキさせながら少女の背後に忍び寄ろうとしている。

エントランスの奥ではそんな騒ぎなど気にも留める余裕もなく、目付きの悪い黒髪の少年に拳銃型デバイスの銃口を過激に突き付けられながらガミガミと怒鳴られているメイド服を着た愛らしい小柄な美少女がテンパりながら草臥れた木製の机の上に広いおでこを勢いよくガンガンと打ち付けて謝罪の限りを尽くしている。

隊舎がボロい所為で大きく崩れた孔が空いている端の壁付近では我関せずと騒ぎを柳に流しつつ、時代遅れ風味なガングロ肌をした青年と目に見えて汚れたノースリーブシャツを着ているエリオと同年代くらいの幼い風貌の少年が常識人には解読不能な言

語を使つて談笑に花を咲かせている。

二階に上がる階段付近では明らかに身の丈のサイズが合っていないダボダボの白衣を纏った童顔の少年がポワポワとした無感情な表情をしながらひたすらにポゴステイツクでホッピングしているのを隣に聳えるように立つ偉丈に筋肉質な大柄な体軀の青年(?) がさり気無く落ち着き払った口調で戒めている。

リーゼントの青年とパンクな少女の乱闘騒ぎを周囲のギャラリー達がまるでお祭り騒ぎのように煽り立てている。

……何だコレは? こんなゴロツキの溜まり場みたいにかバカ騒ぎに興じている連中が皆、特務遊撃支援部隊ロストウイングの部隊員達——次元世界の法と秩序を司り、そして守護する時空管理局の一員だとも言うのか?

「マ、マクラウド部隊長、もしかしてこの人達が貴方の部下なんか? 彼等は隊舎のエントランスホールに陣取っていったい何を——」

「すうく、ふー……」

「——つて、あんさん!? 何呑気に目の前の乱闘騒ぎを見物しながら煙草なんか吸つとんねん! ここの部隊長なら止めんかい!!」

部隊内で喧騒が起きるなど普通組織的に部隊の汚点となってしまうのは言うまでもなく、部隊員達を統率する部隊長は部隊の体裁を整える責任を背負っているが故にこの

様な身内の不屈きは普通咎めて叱るべきなのだが、此処の部隊長たるデイビットはそんな責任なぞ知らぬような顔で喫煙しながら部下達のバカ騒ぎをじくつと眺めて立ち呆けていた為にエセ関西人やがみんのツツコミがまたしても炸裂してしまう。

「チョコレートパフェとボロ冷凍庫の仇イツ!!」

「あーもうっ、男の癖に未練がましい! いい加減に鬱陶しいから、これでもくらえっ!!」

その直後、パンクな少女が豊満に押し上げた見せブラから取り出して投げつけた手榴弾バイナッブルが怒り狂うリーゼントの青年が振り回す釘バットによって打ち返され、それがあろう事かデイビットと六課一同の真横に流れて側の壁に直撃。

「「んぎやあああああっ?!」」

それによって破裂した爆風が理不尽にもその付近に立っていたヴィータとシヤマルとヴァイスの身体を床に転がした。

「ヴィータ!? シヤマルッ! ヴァイスウウーッ!!」

「——って、質量兵器?!」

あまりにも不条理な被害に巻き込まれた仲間達を目の当たりにしてフェイトがコミカルな悲鳴をあげている隣でなのは仲間達に被害を齎した手榴弾に驚愕を露わにしている。手榴弾が直撃した壁はその爆撃によって外の雪景色が覗ける大孔が見事に

開通してしまい、ただでさえ空調設備が雑であるロストウィングの隊舎のエントランスホールに外の猛烈な寒気が入り込んで来て寒いったらありやあしない。これには流石のデイビットもムカツとして少し蟬谷に青筋を浮かばせる。

「お前らええ加減にうっさいわ!? こっちは今このドマヌケメイドがやってしもうた深刻な機材の損失をどう埋めるべきかを討議しとる大事な話の最中やねん! せやからちったあ静かにせえやあああつ!!」

「んなの知るかつ! 部外者は黙ってやがれへッポコガンマン野郎!!」

「な・ん・や・と、この童貞ヤンキーがツ!!」

「テメツ!? オレが気にしているk——つて違うつ! 誰が童貞だ? あ“あ”つ、ゴラアアアアアツ!!」

「ハツ! 余所見してていいのかよビスマルク? その隙に爆殺しちまうぞ? 手癖の悪い後ろのセクハラ大王諸共な」

「んげえつ? 何故バレット——んぎやああ——!!」

「かつかつか! 其処には地雷埋めといたんだよヴァーカ! 残念だったなあ、アタイのダイナマイトおっぱい揉めなくて♪」

「つてアホか——っ!? お前も隊舎内に地雷なんか仕掛けとるんやないわボケエツ!!」





「ウチの経費は自腹で賄ってんだから、部隊の物は大切にしろとあれ程言っただろーが？ 壊した物の修理代や破損させた隊舎アツトの修繕費はタダじゃねえんだ。ちつとは丁重に扱いやがれ、この馬鹿共がっ！」

そんな彼女の内心のツツコミなど全く聞こえていないこの空前絶後の傍若無人ときたら、理不尽にも崩壊させた床に転げ落とした自分の部下達に向かつて自分がやった行動を棚に上げた説教を無自覚に偉そうに吐き捨てている始末なのだから、なのは達は呆れ果てて「あははは……」と苦笑いをするしかない。彼女達は改めてとんでもない人に着いて来てしまったなと後悔した。

「びよーん！……おかえり部隊ホス長」

数秒の静寂が過ぎ去った後、二階の通路に退避していた白衣の少年が改造ポゴスティックに乗ってデイビットの側に跳び降りて来て彼を出迎える言葉を紡いだ。それを合図に崩壊した床に転げ落ちたロストウィングの部隊員達が其処らに散乱した瓦礫の下から何事も無かったかのような元気な姿で一斉に飛び出て来る。

「ボス!? なんや、帰っていったんかいな！」

「デイビットさん！ ミッドでの用事、お疲れしやしたツ!!」

自分達の部隊長を次々と出迎えていくその顔触れは全員が活き活きとした良い笑顔であり、あれ程の理不尽な傍若無人でありながらもデイビットは随分と部下達に慕われ

ているようだ。あの人付き合いする人間を厳しく選んでいそうなクソ真面目な性格のクロノですらも信頼を寄せている人物なのだから、悪い人間ではない事ぐらい解つてはいたが。

「ボス! 地上の奴等がナメたマネしてこなかったか? もし居たら教えてくれ、今度この前アタイが改良したC-4爆弾でソイツを所属している部隊ごと爆殺して来るからさよ!」

「ボス、地上の女局員に巨乳美女はどれだけ居ました? 写真とか隠し撮りしてたりしない?」

「そんな事よりも美味しい食い物の方が大事でガス! だからボス、今度の休みに激安で食えるレストランに連れて行って欲しいでガスよ!」

「おかえリンゴ!」

「すいません部隊長。俺がもつとしつかりしてさえいれば貴方が戻って来る前にこの大馬鹿共の騒動を鎮圧してやったのですが、結果はこのザマで……面目ありません!」

「あ、そういうえば皆が使うサーチャーに追加する“遠隔サルベージ機能”のインストールがそろそろ完了する……てなわけで後はよろしく。ぴよんっ!」

「ああっ!! デデ、デクスターさん何所へ!? ……あうう」

「ボス!」



「お勤めご苦労様でした、ボスッ！」

それにしてもこの慕われっぷりは呆気にとられるだろう。まるでエサに群がる鳩のようにこの場のロストウイングの面々が続々と彼の周りに集合して意気揚々と出迎えて来る。

そんな見た目に寄らず上司想いなカワイイ部下達に温かい出迎えを受けた当のデイビットは――

「がははっ、そうかそうか！ お前らそんなに俺の帰りが待ち遠しくて寂しかったのか！ がはははは！ ――でもうるせえ、黙れ」

と嬉しみの笑顔をフェイントに入れた直後に表情を一変させてヤ○ザのようにドスの効いた一喝を叩きつけてきた為に全員即座に土下座の姿勢をとった。

「……「すいませんでしたっ!!」「……」

そのあまりにも統率されたロストウイングの練度になのはドン引きだった。

騒ぎを取めるとデイビットはこの場に居る部下達を整列させ、彼等に今日からなのは達機動六課の主要メンバーに隊舎を間借りさせる事と、その対価として部隊の仕事を暫く彼女達にも手伝わせる旨をぶつきらぼうに伝えていく。

「――てな訳で、今日からこの嬢ちゃん達が俺達の仲間に加わる事になった。本局や

地上のエリートだからって特別扱いせず、此処の流儀に従って平等に接してやれ。

なんなら此処の先輩として死なねー程度にシゴいてやっても構わねえから、お前ら仲良くやれよ」

「「「「了解です、部隊長!!」」」」」

紹介が終わると荒々しく破壊され尽くした殺風景のエントランスホールにロストウイング部隊員達の毅然とした返事が響き渡る。此処に足を踏み入れて一番に目にした彼等の粗暴さ加減から組織として、規則正しい規律なんて知らない野蠻そうな人達」という第一印象を抱いていたのは達だったが、デイビットの頼みに確かな信頼が籠った声を皆活気良く揃えて返してきた様子を見て若干驚きだった。

『ちよつと意外だったかな。 てつきりこんな急に私達みたいなのが押し掛けて来て、これから一緒に仕事と生活を共にするだなんて唐突に聞かされたりなんかしたら嫌な顔一つぐらいいはされるかもと思ってたんだけど……』

『せやな。 自分で言うのも難やと思うけど、私らは曲りなりにも管理局のエリート美少女魔導師の集まりなんやし、こないな辺境のド田舎無人世界なんかにみずぼらしい拠点を置いて、超異常で最悪な環境の山の頂上なんかで劣悪なビンボー生活を送つとるよ。うな人達からは嫉妬や奇異の眼で見られるやろなと、最初はなかなか受け入れて貰えへんかもと思うとつたんやが、なんや、予想に反して歓迎ムードやないか? 要らん心

配やったかなあ』

『美少女魔導師って、はやてちゃん……でも確かにそうかもね。さつきみたいな騒ぎを普段からやっているみたいなのが心配だけど、そこは彼等と知り合っていく上で追々O★H A★N A★S H Iするとして、この感じならみんなと仲良くやっていけそうな気がするからよかつたよ』

ロストウイングの面々が意外にもスムーズに歓迎してくれそうな感じだったので六課の隊長三人が念話を使用してお互いの心境を確認し合う。三人共、やはり管理局内でエリート扱いを受けている順風満帆な自分達と、此処の劣悪過ぎる環境に身を置いて部隊経費も出ないような厳しい貧困生活を送りつつひっそりと部隊活動を行っているロストウイングとでは、とても馬が合わないかもしれないと内心で不安を募らせていたようだ。

才能社会である魔導師の仕事上、実際に先天的に魔力量を多く生まれ持った者はより多くの実績を残しやすく、局内で早々に高い地位に就ける可能性が高いのが管理局の現状で、なのは達も局に勤めて十年のキャリアを持つベテランではあるが、魔導師として初心者頃からエース級の魔力を持っていた彼女達は九歳という幼い頃にかの有名な“PT事件”や“闇の書事件”といった、当時の本局のエースを集める事ができたとしても解決困難な難事件を解決する立役者となる事ができて、士官学校のカリキュラムも







いるらしいから『夜天の魔導書』の主だっけ？　なんでも本局の統括官や提督、聖王教会騎士などのお偉いさんへのコネが相当広く、保護観察処分を受けた身でありながらも入局経った数年という異例の速さで佐官階級への昇格を成し遂げた総合SSの超高ランク魔導師で、『歩くロストロギア』だなんて物騒な仇名で呼ばれて畏怖されているんだってなあ？　アツハハツ！」

獯猛な肉食獣が極上の獲物を発見したかのように吊り上げた口の隙間から鋭い犬歯を覗かせて隠そうともしないパンクな少女の発した哄笑には明らかに相手を侮辱する色が孕まれている。獅子の鬣のように逆立たせた焰色の長髪は燃え盛る爆炎のようで、はやて達を快く歓迎する感じは微塵もなく、寧ろその笑みは今すぐにも牙を剥いて跳び掛かって来そうな獯猛さを感じさせている。

「てめえッ！」

「下がってください、主はやて！」

「貴方、いったい何を!？」

「ワオオオーッ！」

彼女が醸し出す獯猛さは自分達の主に危害を齎して来る危険性があると瞬時に悟り、はやての守護騎士達が咄嗟に動いて主の周囲を守護するように固めてみせる。相手の雰囲気を経った先程デイビットが自分達を紹介した時に見せていた良さそうな感じ

とは一変してこちらを黽つてくるような嘲り様を前面に表していたからだ。それをもう隠す必要はないと言わんばかりに自分達の主を身を盾にして危険から護りに出て来た忠義の守護騎士達の事を感じて表面を取り繕った挑発的な視線で見遣ったパンクな少女が鼻で笑う。

「はっ、主様への侮辱は許さないってか? 別に取って食おうという訳じゃないんだからそんなに殺気立つなよ夜天の守護騎士さん達よ。単騎戦常勝不敗のベルカの騎士様達の殺気なんて向けられたらアタイ、怖ろしさのあまりにチビツて思わず自爆しちゃいそうだ。周囲3kmを巻き込んでな、アツハハハハッ!」

ヴィータ達歴戦の騎士に睨みを利かされているというのにちつとも精神が堪える様子も見せず自分の顔を片掌で覆い天井を見上げる恰好で不快な爆笑を響かせる様は相手を嘲笑しているのが明らかで、ヴィータ達の險相を益々厳しくする。

彼女達の主たるはやては侮辱を受けた憤りに掴み掛かりに出そうな守護騎士達を制して前に出る。初見の相手への印象操作の為に<sup>ベルクナ</sup>おちやらけさせていた態度を消し、相手の腹を探る時に使う仮面を表情に貼りつけて相手の真意を量ろうというのだ。

「怖がつているようには全然見えへんよその笑い方じゃあ。別に誤魔化さんでもええで、どうやらデイビット部隊長の前では上司の機嫌を損ねへんように本音を隠しておつたようやな、アンタらは私達の事を全然歓迎しておらへん事ぐらいその豹変っぷりを見



れば一目で解るわ。あまり舐めんなや」

「あ、あ、っ!? ヤんのかクソアマ! 調子くれてんじやねえぞゴラツ!!」

機動六課の部隊長の堂々とした啖呵を受けて当然ながら他のロストウイングの面々も六課側に敵意を向けてくる。やはり辺境の無人世界に拠点を置くような最低部隊に配属された劣等局員である彼等はその達のようなエリート局員等が仲間になる事を良しとするには相当な抵抗があったみたいだ。一触即発の雰囲気です。ロストウイングの面々とその矢面に立つ八神一家は互いに睨み合う。

「み、みんな落ち着いて。確かにお互い初対面だし、すぐに信用し合うのは難しいかもしれないけれど、これから協力し合って戦いと生活を共にしていけばそのうち——」

なんとかこの場を収めようと八神一家の後ろで事の成り行きをハラハラと見守っていたフェイトが勇気を出して両陣営の間に割り込んで行こうとする……だがこの砦は魔境だ。彼女は自分の背後に魔の手が迫って来ている事にも気づかずに、まんまとその上半身をびっちり縛り纏う訓練用のトレーニングシャツの胸元をこれでもかと思つて突き上げて豊かに実らせた二つの大きな果実をその魔の手が……ムツニユウウウ♥

「——ひゃあんっ♥……えっ?」

唐突に齎された乳房を鷲掴みにされる感覚とそれによって自身の胸に迸った性的快楽に思わず扇情的な喘ぎ声を漏らしたフェイトは息を呑んで恐る恐る自分の胸元に視

線を落としてみる。

「ツツツ!!」

自身の胸に感じた違和感の正体を視界全体に映すと石化するかのように全身を硬直させて眼を見開き絶句してしまうフェイト。この十年で収束魔法級と局の男性達から称される程に膨らんだ彼女の巨イナル双丘オチが男性的にゴツゴツした白い手によって掬い上げられるように儂掴みにされている……痴漢セハラだ。

「ぎゃああああああああああああ!!」

次の瞬間エントランスホール中に甲高い悲鳴が轟き渡った。一触即発だった場の重い空気はその悲鳴によって吹き飛ばされ、突然何事かと一同の視線が一斉に今悲鳴をあげたフェイトに向けられる。

「あつ、あんつ♥ 止めつ、んんつ! ああん♥」

「グツフフ♪ 十分以上のボリューム、シャツの上からでもモチモチな触感う〜。

これは噂以上に極上なおっぱいだ♥」

「嫌つ、嫌ああつ!」

気が付くとフェイトの豊満な身体は欲情塗れのふしだらな笑みを浮かべる金髪の男によつて背後から抱き寄せられていて、その両手が性的な魅力に満ち溢れているフェイトの豊満な両乳房をシャツ越しにネットリといやらしく揉み回しているではないか。

普段は凛々しくて美しいライトニング分隊長の淫らかな格好を目の当たりにした六課一同の眼が点になり、ロストウィングの面々が「さつそくやりやがったのか……」とフェイトに堂々とセクハラを行っている男に軽蔑を通り越した諦めの眼をして天井を仰いだ。特にフェイトの一番の親友であるのはと養子であるエリオとキャロ、そしておっぱいソムリエとして局内に名を馳せているはやてはこの状況を目の当たりにして黙ってはいられない。

「フェツ、フェイトちゃんっ!!」

「フェイトさんっ!!」?

「なななっ、何をしとるんやあの男はあっ!? ふざけるんやない、フェイトちゃんのおっぱいは私の物や!」

「いや、主はやて。 テスタロツサの胸はテスタロツサの物でしょう……」

「あ、貴方!? いったい何をsんああん♥」

「ん、クンカクンカ、ホント甘くて良い匂いだなあ♪ オレが今までに抱いた女の中でも一二を争う事が確定するくらいに柔らかかなこの抱き心地……グフフフ、イイじゃんイイじゃん。 さすがは“管理局内のエッチな身体をした美女トップ10”で毎回必ず五位以内にランクインするって評判のフェイト・T・ハラオウン執務官だぜ。 まさかこんなところで噂のエロ執務官の極上のナイスバディーをこうして堪能できるとは



ンが床に落ちて大人の色気溢れる黒色の下着ショーツに包まれたムツチリと柔らかな丸みを帯びた肉付きの良い桃尻が外気に露呈する。直後に男の右手でその尻をペロ〜ン♥と撫で上げられた瞬間に身の毛がよだつ程の性的嫌触感が電流のように身体を駆け上がった為にフェイトは豊満な胸を反らしてしまう程に竦み上がったしまい、扇情的な怯え声を漏らしてしまう。

「ひっ?!」

「グフフ、イイ反応するじゃねえか♥ こんなにイイ身体をした女を男が放っておく訳もねえだろう? いったい今までにこのおっぱいで魅了した男を何人ベッドの上で相手にしてきたんだ、ん?」

「んああっ♥ してない! 男の人とセツ〇スなんて、一度もした事なんかないよおっ!!」

「何? 一度も男とヤった事が無え!!? おいおい冗談だろ? こんなイイ身体してんのに未経験なんざ勿体ねえぜネエチャンよお。だからさあ、今夜オレの部屋に来ねえか? うんとキモチイイ体験させてやるからよお♪」

「嫌っ! 嫌あああああーっ!! 放しっ、放してええええっ!!」

「グへへへへ〜♥」

猛烈に抵抗して嫌がるフェイトだがその悲鳴はセクハラ男にとって甘美なBGMに

しかならず、益々彼の官能的快感を刺激するだけであつた。淫らに緩み切つた笑みを浮かべさせながら濃厚に柔らかなフェイトの豊満な乳房や桃尻を触り放題に揉んでは堪能する事を継続して止めようとはせず、ここまできたら最早セクハラを逸脱した猥褻行為と視ていいだろう。

「いい加減にしなさい……」

故に十年も昔から共に切磋琢磨して絆を深めてきた一番の親友を……否、例えそうでなかつても嫁に行く年頃の女性を人前で辱めるような最低極まりない行為に堂々と及ぶような女の敵を、数多の次元の司法を統括する時空管理局のエースとして、一人の恋する乙女(?)として、正義感の塊のように生きるこの女——高町なのはが許す筈もない。

彼女は絶対零度の怒りを纏い、常人なら一目視界に入れただけで全身を固まらせてしまいそうな威圧感を放つ陰を眼元に落として首に下げている自身の愛機の待機形態を手に取つた……瞬間——

「——なっ?!?!」

その一瞬の内に突如として横から銃器類の発砲音が鳴ると弾丸そのものの速度で飛来してきた鈍色の魔力弾が彼女の左手に握られた不屈の心を象徴するデバイスの待機形態である朱い珠に着弾して、なんと彼女の長年の愛機をその手より弾き飛ばしてし

まったのだ。

「少し冷静になれや高町なのは。こないなボロツボロな建物の中なんかでドンパチやったら天井が崩落しよって皆生き埋めになるさかい。空戦魔導師ならそないな事ぐらい予測できてナンボなモンやろが」

自分に呼び掛けてきた横からの声に驚愕を禁じ得ないエース・オブ・エース……いや、この場合は本局武装隊戦技教導隊所属の名教導官の高町一等空尉と呼ぶべきだろう。

呼び掛けてきた声の方に視線を転じてみればその視線の奥で拳銃型のストレージデバイスを一丁腰のホルスターから抜き、この僅かコンマの一瞬の間にセットアップしようとしていたなのはの手に取られた小さな朱い珠を寸分の狂いもなく狙い撃つてみせた黒髪吊り眼の少年がその右手に垂らしてグリップを握った拳銃型デバイスの銃口に煙を上げさせつつ、物理的に切断できそうな程にキツく尖らせた切れ目をこちらに向けながらコツコツと歩いて来る姿が目映る。

——何で……何で「彼」がロストウイングにツッ!!?

戦技教導隊の教導官であるが故になのはは知っていた、このぶつきらぼうなガンナーの事。

「お前もセクハラはええ加減にして、とつとと放さんかいっ!!」

「グへへへ、キモチイェ——ぶつつ!!」

「きゆう〜……」

「フェイトちゃん!」

金髪のセクハラ男から唐突に解放されたフェイトの身体を咄嗟になのはが駆け寄って床に倒れないよう抱き留めた。目にも映らぬ早撃ちで吊り眼の少年が銃型デバイスより放った魔力弾がしつこく乳房や尻を愛撫される性的刺激から必死に逃れようと乱暴に喘ぎながら激しく左右に揺らしていたフェイトの頭部の真横を絶妙に通してセクハラ男の顔面へと見事に命中させたのだ。

「ななな、なあああつ!? あつ、あのエセ関西弁キャラで私と被つとる男。いい、今いったい何したんや!!?」

「構えて撃つまでの動作が早過ぎて全然見えなかつたですう〜!」

「ああ! 一瞬あの吊り眼ヤローの銃を持つてる腕がブレたと思つたら、まるでDVDの場面を数秒程度飛ばしたみてえに、次の瞬間にはその銃口がああ痴漢ヤローに向けられていただけじゃなく、もう既に発射された魔力弾がフェイトの顔の横スレスレを抜けて痴漢ヤローのスケベ面にブチ当てていやがった!」

「アイツ、なんつつう人外染みた早撃ち……するんだよ!? とつくに前線から退いた俺の眼じゃあ動きがまるで捉えられねえ……姉さんは判りました?」

「い、いや……み、見得なかつた、この烈火の将の眼にも……ッ!」



その銃を構える動作速度と射撃の精密精度ははやてのような高ランク魔導師やリインのような超高性能A1、ヴァイスのような元航空隊のスナイパーやヴィータとシグナムのような歴戦の騎士に至るまで、その眼に捉える事が叶わず総じて驚愕を隠せず皆唾然と表情を硬直させてしまっている。今吊り眼の少年がやってみせた銃撃スキルはそれ程までに並外れている戦技だったのだ。

「不屈のエース・オブ・エース」〔若手最優の空戦魔導師〕〔戦術の切り札〕と随分な異名の数々を持つておきながら相変わらずそないな体たらく……まったく情けなさ過ぎで見られてくれへんわ、高町教導官さまよお。そんなんやから異世界の中隊規模程度の尖兵共なんかに後れを取ったりするんやで。ちと弛んどるんとちやう？」

身体を火照らせて激しく吐息を連続させながら意識を朦朧とさせるフェイトを床で介抱するなのはの眼前に近寄って立ち、君が此処に居る事が自分は不機嫌ですという悪感情を隠そうともしない威圧的に厳しい視線で彼女を突き刺しながら淡々と吐き捨てるように皮肉をぶつけてくるこの吊り眼の少年の存在を前にしてなのはは戦慄を隠せない。あの不屈のエース・オブ・エースが、管理局の白い悪魔が、まるで百獣の獅子の威圧を前にして怯える小兎のように、眼前の相手を瞳孔が開いてしまいそうな程にその碧い瞳を揺らがせて見上げ、動揺に身を震わせているとはどうした事か？

彼はいつたい何者なんだ？ 機動六課一同の注目が奇異な存在を見るような感情を

帯びて怯えるスターズ分隊長を不快そうな眼で見下している吊り眼の少年へと自然に集められ、その素性は過去に彼と知り合いになった素振りをもせている戦技教導官殿が直接その震えた口で一同に明かすのだった。

「元1424航空隊所属の異端児《ガンマ・ウエスト》空曹……通称『教官潰し』の《早撃ちガンマ》……ッ!!」

「今は『アンタと同じ一尉』やで。その悪魔的なまでに正義感が籠った眼でゴツゴツ睨んで来る人も相変わらずやなあ、高町なのは……せやけどもそれだけでアンタらを口ストウイングの仲間と認める訳にはアカンで。社交辞令として『挨拶』ぐらいしつかりとすべきとちやうか?」

「……」

極限の空気の中でなのはとガンマは互いに鞘から抜き放たれようとする寸前の刃の如き戦意を鋭い視線に乗せて衝突させている、対立は避けられない雰囲気ガビンツビンだ。いったい過去に二人に何があったというのだろうか?

「機動六課全員、ちよつと表に出て面ア貸せや。『飛び立つ翼をもがれた鳥』共が集まるこの部隊の厳しさ、その弛みきつたエロい身体にたつぷりと叩き込んだる。覚悟しいやッ!!」

互いの意地と誇りを懸けて機動六課とロストウイングは今、激突する! 果たしてそ

の  
行  
方  
は  
ッ  
!?

## 激突! 機動六課VSロストウィング

顔を合わせていきなり隊舎のエントランスホールを陣取っていたロストウィングの部隊員達から喧嘩を売られたなのは達機動六課一同は隊舎の裏側に広がっている摸擬戦場へと連れて来られ、眼前で反抗心丸出しのチンピラの如き厳つい視線で睨みつけてきているロストウィングの面々とそれぞれの得物を携えて向かい合っていた。

「デメエ等みてえな運よく他人より魔力を多く持つて産まれたからってだけで本局に手厚く優遇されて、ぬくぬくと調子付いている女共がロストウィングの仲間になるだあ? デイビットさんにどんな媚の売り方をしたのかは知らねえが……ロストウィングの一員として認めて欲しければ、デイビットさんの一番の部下であるこの漢の中の漢——《ビスマルク・ヴォーア》様を實力で認めさせてみなあつ!」

「幾ら部隊長の頼みやとはいえ、此処の流儀は絶対や。則ち【常在戦場】……故に先天的に備わっておった強大な魔力が自分にはあるからそれを頼りに戦えるつつうだけの軟弱者なんざロストウィングには要らへんし、況してや位の高い権力者共に媚売つて後ろ盾になつてもらわへんと部隊一つまともに運用できへんような優遇された環境に甘ったれた連中なんぞにとてもワイらの背中は預けられへんなあ?」

蟬谷に青筋を浮かばせながらサングラス越しのメンチ切りで挑発してくるリーゼントヤンキースタイルの青年——ビスマルクやなのは達への不信感をたつぷりと孕ませた目線で突き刺すように厳しい指摘を投げつけてくるガンマの敵意剥き出しの態度と言葉からも判るように、本局のエリート部隊である機動六課は彼等ロストウィングの部隊員達に良くない偏見で認識されているようで、なのは達が自分達の仲間に加わる事に不満を抱き、忌避的な敵意を彼女達に向けて来ているのだという事は火を見るよりも明らかだろう。クロノの計らいで表向きではもう昨日の内に六課は解散された事になつてはいるものの、彼女達が局よりエース・ストライカー級の待遇で他の局員より優遇されている魔導師の集まりである事実は変わりなく、「翼をもがれた鳥」などと自称するような此処の劣等局員達との隔たりはどうしようもないくらいに巨大なもので、当然それはそう簡単に取り払えるものではない。

「ほほう、これはまた随分と私らの内情に詳しいやないの？ 六課設立の動機についてはまだ地上本部のお偉いさん達にも公開しとらへんかったのに……それ、もしかしてマクラウド部隊長にでも聞いたんか？」

「ブツブツ、はっずれ☆ 生憎アタイ達にはお偉いさん達のコネなんか頼らずとも、自分達の足のみで駆け回って築いてきた情報網があるのさ！ アンタらの部隊の戦力保有制限をブツちぎった戦力は能力限定リミッターを科す事で無理矢理保有制限規定内の総戦力数

値に納めた事でグレーゾーンの稼働が認められてたつて事だつて知っているんだぜ。

本局の支援に甘んじて戦つてきた生温い根性のエース共とは訳が違うんだよヴァーカッ!

「んだとおつ!」

はやての問いに対してこちらを侮つてくるような言葉使いで返答してきたパンクな少女——《デトナ・ディカプリオ（通称「D・D」と呼称されている）》の挑発的な態度が癪に障つたヴィータが相手に掴み掛かりに行くように一歩前に足を踏み出し、憤る感情を表に出して吐く。

「六課を設立する為にはやてがどれだけの覚悟と想いを持つて尽力してきたのかを知りもしないクセに、このヤロウツ!!」

グチャツ……とても抑えられない怒りを吐き出して前に出した小さな右足を無造作に雑草が生えた地面に踏みつけた瞬間そんな柔らかで粘性の高い何かを潰したかのような音がする。

——ん? 何だこの、悍ましい汚物か何かを踏んじまったかような靴底のねっちよりとした嫌な感触は?

果てしなく嫌な予感がしてサーッと顔を不安の青色に染めながら恐る恐る草叢に踏みしめた右脚を避けてみる。するとその足下にはヴィータの右脚に履いている靴跡

状に形を崩れさせた茶色の腐臭物が……。

「んげええー……っ!!?」

「ぎやははははっ! 何がすかこの赤チビ女? マジギレしといて犬のウ○コ踏んでや  
ゝんの! プークスクスクス! マジダセエガスウ☆」

「ぐぎぎぎぎ……ッ!!」

其処ら中に雑草が生い茂っている程に杜撰な整備……いや、そもそも整備すらまとも  
にしているのかも疑わしく漠然とタダッ広いだけの模擬戦場に無造作に落ちていた犬  
の糞を盛大に踏んでしまい思わずコミカルに発狂してしまった自分の事を指さして眼  
から涙を盛大に飛び散らせながら大声で爆笑して馬鹿にしてくる汚い格好の少年を睨  
みつけて悔しそうに歯軋るしかない、みつともない事この上ない鉄槌の騎士。

「馬鹿やってないで、早く始めろー!」

「その生意気な本局のエース共をとつとプツンしてやれ!」

「ここから六課のネエチャン達のエロケツ眺め続けたってちよつとシコれる程度のオカ  
ズにしかならねえんだしよく? そろそろいい加減に模擬戦を始めてそのネエチャ  
ン達のパイオツが激しい動きや魔力ダメージとかで激エロに揺れまくるのを見せやが  
れえ〜!」

「「「「「ブー!」」」」」

そうこうしている内に背後に聳え立つクソボロな隊舎の二階の外周通路や屋上に騒ぎを聞きつけて野次馬根性で集まって来ていたロストウィングの人員達から下品なブーイングが飛んできた。確かにこのまま間抜け面で睨み合っても埒が明かない。そもそもなのは達がこの場に連れて来られたのは彼女達がロストウィングの仲間になるに値する価値があるのかどうかを模擬戦を行い試す為なのだから、こうしても仕方がない。

「とにかくこの部隊のモットーは【常在戦場】さかい。此処では局の規律や常識なんて

もんは通用せえへん、**“実力”**と**“どんなに不条理な目に遭ってもヘコタレへンド根性”**と**“理不尽の中を生き抜く覚悟”**が全てや——其処の**パツキン**で**デカパイ**な姉ちゃん**がさつき**この性欲の権化に**デカパイ**揉みしだかれてもうたみたいに、ハンパな覚悟しかあらへん奴等はヤク中と殺される以外なら何をされても文句は通らへん**つつう掟**や**!**」

「**デカパツ!?**」

ドヤ顔で言ってきたガンマの**デカパイ**発言に**ビシツ**と指差された当の**デカパイ**はガンマの隣でニヤニヤと執拗に自分の豊満な胸元へ熱視線を送ってきている金髪のチャラ男——《**シャル・フォーゲル**》に先程堂々とやられたセクハラ行為を思い出されて猛烈な性的羞恥感に全身を翻られた為に、熟れ過ぎたトマトの如く赤面して咄嗟に胸を両



腕で隠し、抗議の驚嘆をあげようとするものの、羞恥のあまりに声を詰まらせてしまった挙句にその胸は豊満であるが故にその細腕では隠しきれない……確かに彼女がデカパイであるというのはこの場に居る全員満場一致の見解だが、仮にも時空管理局という司法組織の枠組みにある部隊が内部の異性的なセクハラ行為を黙認しているのはどう考えてもおかしい。況してや管理局員が局内の規則を集団で蔑ろにしている部隊など、外にその存在が知れてしまえば管理局の面子を最悪に貶め兼ねない事この上ないであろう問題児軍団にも程がある。

『ふざけていますね。こんな見た限り社会不適合者同然な人達がなんで管理局の部隊として存在しているんでしょうか?』

『それはわたしも疑問に思っているよ、でも……』

先日の襲撃戦に駆けつけて六課を全滅の危機から救った氷眼の少年等《シルバーガスト小隊》もこのロストウイングの所属なのだど部隊長であるデイビットは言っていた。

ミクティーン又から感じた疑問を上司に問うような念話を受けてなのはが背後の野次馬達の中を遠視魔法で探し視ても彼等の姿がないのは恐らく何らかしらの任務に出ているのだろう。明らかに思考が常人と掛け離れていた《破戒狼<sup>ゲオルグ</sup>》と《切燕<sup>スパーダ</sup>》はともかくとして、氷眼の少年等には良識があるように感じた。故に彼等が誇りを持って所属しているというこの部隊がどういう意図で管理局に存在しているのかという疑問を氷

解させる為には――

『たぶんそれは彼等と戦ってみれば解るとわたしは思うよ。 此処の人達がわたし達の事を気に食わなく思っているのは確かなんだろうけれど、言ってきた事から察するに部隊に見合った実力と覚悟があるのなら仲間として認めてくれるって事なんだと解りできるから、それはつまり彼等は異常なまでに“実力主義”を貫いているという事になるんじゃないかな?』

『せやな。 部隊のモットーが【常在戦場】やなんてただのチンピラ集団では考えられへんやろし、なんでも有りな無法集団と言うても違法薬物と殺人の禁止は厳守しとるらしい。 辺り、管理局員として越えてはならへん一線だけは越えへんよう自重しとるようや。

せやから彼等の事を下劣極まりない最低な人間の集まりやと判断するんは、一度ぶつかり合ってみてからでも遅くはあらへんな。 クロノ君が本局と地上の眼から逃れて活動を続ける為の六課の隠れ活動拠点として此処を紹介してくれたっていう信頼もある事やし……よしっ! ならいっちょやったるか、みんな!!』

はやてが念話を通じてなのは達六課の前線メンバー全員を鼓舞するとその言葉を受け取った全員が士気を高めさせつつ賛同の意を返してくる。 ロストウィングの面々と向き合う腹は括った。

「つまりなんや、私ら機動六課がロストウィングの掟に通用する実力と覚悟がある事を

見せれば、私らが此処で活動する事を認めてくれるつちゆう事でええんやな？」

「ああ。少なくとも部隊長がアンタ等を連れて来おつた事に納得できるチカラを持つとって、それを証明する事ができたんなら、馴れ合いはともかく仕事仲間としては認めたるわ」

「ロストウイング魂に誓つて、漢に二言は無え！ 遠慮しねえで掛かつて来やがれつ!!」  
 『セツトアップ！』煽り立てるようなはやての問いにガンマとビスマルクが受けて立つよう肯定の意で返した直後、この場に立つた魔導師全員が戦意を高揚させて一斉にデバイスを起動！ 魔導師の戦闘服であるバリアジャケットを身に纏い、それぞれの得物を手に相手と向かい合つて並び立つ！

「ルールは【特別団体戦形式】を使うで！ 模擬戦は管理局の規定通り『降参』か『非殺傷設定使用を厳守した魔力ダメージによるノックダウン』で勝敗を決する！ 対戦決めは一戦の度にそつちから一人、前に名乗り出てワイらの中から対戦者を一人指名。

ソイツと指名した奴はこの模擬戦場のフィールド全体を使って戦い、勝敗が着いたんなら次にそつちの戦う奴が名乗り出てまたワイらの中から対戦者を指名する。そんでそつちの戦える全員が勝敗関係なく一戦ずつ済むまでそれを繰り返したら終了や！

ええか？」

ガンマが鋭い不敵を表情に浮かべつつ模擬戦のルール説明をすると先程まで気を悪

くして引つ込んでいたヴィータが粹に口端を吊り上がらせて前に出て来る。いつも通り真紅のゴスロリ調の騎士甲冑をセツトアップ時に展開したおかげで先程うっかりと踏んでしまった犬の糞が裏に付着した靴が疑似空間に蔵われて一時的に消えた為に調子を取り戻したのだろう。その幼い顔付きには余裕の笑みすらも浮かんでいる。

「へえ、こつちが選んでいいなんて随分と気前がイイじゃねーか。後悔すんなよ?」

「へっへくんガス! お前らみたいな魔力量の多さだけが取り柄の本局のエース共なんて、オレ達に掛かれれば誰が相手だろうと楽勝に決まっているでガス! だから遠慮しないで誰でも好きな人を選びたまえ☆」

カチンツ! 汚い格好の少年の余裕ぶつた態度にヴィータは苛立ち、早くも余裕の笑みが崩されそうになる。

「へ……へっ、自分の持っているエリートアタシ等に対する偏見だけでそう決めつけるなんざ、ド素人丸出しの戦闘分析力だな。アタシ等は自分達の正義と信念を貫き、どんな強大な脅威が来ても大切なモノを護つてやる為に日夜年中と魔法戦の戦技戦術を磨き続けているんだ。それすらも見抜けねえんじや、程度が知れるんだよチビガキ!」

「あ・ん・で・ガスとおおおっ!? お前だつて生意気なガキじゃねーか、この――」

——ウ○コ女アツ!!」

ブチイイー——ツ!! その女性に対する侮辱千万を耳に入れた瞬間に見た目の幼さ通りの沸点の低さが弱点の鉄槌の騎士は己の内にある堪忍袋の何かを切断する。みるみる内に頭をやかんの如く沸騰させ、ヴィータの精神内にある憤怒の火山が大噴火する。

「テンメエ……ブツ潰すツツ!!」

それはある意味先日の襲撃戦でシグナムとザファイラがファング・イスカンプルグに倒された時以上の憤怒であった。先程彼女が犬の糞を踏んだからという陳腐で歳相

応に稚拙な理由ではあるが、女子にとつて向けられればとても我慢ならない屈辱的な侮辱を、あろう事か百年以上も古の時代より夜天の守護騎士としての誇り高さを胸に数多の戦場を翔け抜けてきた自分に向かつて物怖じの欠片もなく吐き捨ててくるとは良い度胸だ。 ヴィータは馬鹿にされた事に対する怒りを孕んだ蒼眼と先日コテの襲撃戦で核ごと破壊されてしまった長年グラーフアイゼンの相棒の修理の目処が立つまでの間に合わせとしてシャーリーが整備して渡してくれた“戦槌型アームドデバイス”を生意気な笑みと共に敵対心丸出しな眼で睨みつけてきている件の少年へと指し向けて堂々と言い放つ。

「いいぜ、なら六課側こっちの一番槍はこの鉄槌の騎士ヴィータ様が出てやるよ! 指名するのはアタシに対して生意気な口を利いてくれたテメエだ、汚ねえチビガキ! 二度と生意気な口を叩けなくなるくらいに徹底的にブツ潰してやるから覚悟しやがれっ!!」

「ムツカー! ツー! オレは汚ねえチビガキじゃねえでガス! 特務遊撃支援部隊ロストウィング《トライダガー小隊》副隊長、《曼珠沙華まんじゆしゃげ》の《ロツキー・マオ》様だ! よおーく覚えとけでガス、こおのウ○コ女アツ!!」

かくして、邂逅早々に互いの立場にある隔たりとその確執が原因で衝突する事となつた機動六課陣営とロストウィング陣営による団体模擬戦はヴィータV S ロツキーの対戦カードで始まるのだった。

長年その小さな手で振るい続け、数多の戦場に赴いて数多くの敵を薙ぎ払ってきた

ヴォルケンリッターの《鉄槌の騎士》を象徴する相棒グラーファイゼンがその手に無い今、全力とは程遠い戦闘力しか出せないであろうヴェータは果たして未知の実力を秘めたロツキーとどう戦うのだろうか？　そしてロツキー等ロストウィングの魔導師達の実力は如何に!?

己の矜持（プライド）を懸けた勝負。 ヴィータVSロッ

キー！

『この《鉄槌の騎士》ヴィータと鉄ブラフアイゼンの伯爵に壊せねえモノは存在しねえっ!!』

古代ベルカの時代に製作された「夜天の魔導書」にプログラムされた守護騎士の一人であり、夜天の魔導書の最後の主となった気丈で心優しい少女を心底大切な家族として現代いまを生きる彼女がその矜持を心から渴望するようになったのは何時の事だっただろうか……。

魔導書の守護騎士プログラムとして古の時代の戦乱の中でただただ魔導書に選ばれた主に仕える忠実な下僕としてひたすらに鉄槌を振るい続け、主の敵を屠り戦場に屍山血河しざんけつがを築いてゆく事が生き甲斐だった時か？ 魔導書が次々と人の手に渡り代わり醜い欲望に塗れた者が主となってしまった為、世界と共に破滅しては転生を繰り返す悲しき闇へと変えられてしまった魔導書と共に世界を破壊する為だけの道具と成り果てた時か？

長き刻を得て破滅と転生を繰り返した末、魔法とは無縁の世界で幼くして両親を亡くし天涯孤独の身となって毎日一人心寂しく生きていた心優しい少女が主となり、彼女が



道具としてではなく掛け替えのない家族として自分達を迎え入れてくれた事で初めて  
 “護りたいと思う大切な心”を手に入れられた時か？ その大切な家族となった心優  
 しい少女が破滅の闇に蝕まれた魔導書に選ばれてしまったが為、その闇の呪いに身体を  
 蝕まれて死へと向かつてゆく絶望を何としても阻止してやる為、他人を傷付けては  
 いけない”という少女との約束を心苦しく破つてまでも運命に抗つてやろうと誓い、生  
 まれて初めて自らの意志に従い動き出した時か？ 大切な家族を救おうと他人を傷つ  
 ける自分達の行動を間違いだと咎める白い魔導師の少女が執念深く何度も諦めずに自  
 分に向き合いつつかつて来た為、お互いが心に抱いた信念を衝突させ合った戦いの時  
 か？

それとも白い魔導師の少女達との戦いの末に互いに分かり合う事ができて、現世に顕  
 現した破滅ナハトツァールの闇を彼女達と共に手を取り合つて戦い倒滅させた事でようやく古の時代  
 より数多くの悲しい犠牲者を出しながら世界を破滅させ続けてきた魔導書の闇を払う  
 事ができ、【夜天の魔導書】が復活を遂げて護りたい大切な家族である心優しい少女を破  
 滅の闇の呪いから解き放つという心からの望みが叶った聖なる夜の日の時だろうか？

……いや、確かに破滅の闇の呪いを解き放ち、夜天の魔導書の復活と共に掛け替えの  
 ない大切な最後の主を死の運命から救ったと同時にこの先の未来に共に立ち塞がって  
 くる“壁”を乗り越えて行く為に、生涯共に切磋琢磨しながら数々の戦いへと挑んで行

く事となる白い魔導師の少女等多くの仲間達を得られたあの日こそが彼女達ヴォルケンリッターにとつて、真に人としての生が始まった、夜天の守護騎士としての新たな門出の日と言えるのは間違いではないが……。

『なのはあああああーっ!! 何所だ、何処に居る!? 返事をしてくれっ!!』

八神ヴィータが自分のチカラに無力を感じたのは彼女が生まれて初めて掛け替えのない大切なモノを得てから約二年の月日が流れた頃、とある無人世界での任務に管理局の魔導師として赴いた時の事であった。年中吹雪が降り続く純白で過酷な環境の中、正体不明のアンノウン達と交戦しつつ二年前の戦いで何度もぶつかり合った白い魔導師の少女——高町なのはと共に視界の悪い空を翔け回っている途中、その吹雪による視界の悪さが原因となり、なのはと逸れてしまった事があったのだ。ヴィータは吹雪という悪天候の空を翔け、逸れてしまったなのはの名を大声で呼び叫びながら必死に捜索し、辿り着いた地で彼女が目にしたのは雪上に散らばる凍結状態でバラバラに破壊されたアンノウンと思わしき機械兵器の残骸とその付近の白を不自然に染めていた血の赤であった。

『な……なのは……?』

年中吹雪に覆われているような過酷な環境の無人世界に違法航行してまでやって来るような人間など余程の理由が無い限り存在しないだろう、故にこの場の地表を覆う雪

の白を赤く染めた血を流した人間の正体は側でスクラップになっている機械兵器を討伐しにやってきた自分達管理局員の内の誰かであると絞られるが為、気が付けばヴィータは最悪の事態を想像してしまい茫然と積雪の上に立ち尽くしていた。

ちよつとした成り行きでなのはに近接戦闘の立ち回り方を教えた事があつた時に、戦い方を人に教えるのが上手だと思つたから”という突拍子のない理由で彼女が自分に教官の資格を取る事を勧めてきた為に、持つていて損は無いだらうと簡単な教官資格の試験を受けて合格したその日からというもの、同じ教官資格を持つていたなのはと事ある度にこうして任務を共にする事が多くなつていた。故になのはと接する機会が格段に増えた為に自分が彼女の事を大切な家族である心温かな少女とは別に掛け替えない友人として認識するまで絆を育むのにそう長い時間は掛からなかつた。

困つている他人が居たのなら自分の危険を顧みず救いに行つてしまふ突撃思考で危なつかしいバカヤロウだけれども、それ故にとても良い奴であるこの友人の事は任務でよく一緒になる事の多い、腐れ縁の自分が護つてやらなければならないと思つていた。しかし現実は無情だ。幸いなのは自分が此処へ来る数分前に謎の氷眼の少年によつて救助されていて、近隣の管理世界の病院へと緊急搬送された事実をその場で本隊から受け取つた念話通信で知つた事で即座に遂行中の任務から離脱する事を決め、なのはが搬送された病院へと急行した時に緊急手術室で目の当りにした彼女の悲痛過ぎる

姿は今も自分の記憶に深く刻み込まれていて忘れられない。

『なんだよ……コレ……アタシが付いていて、どうしてこうなっちゃったんだよ……ッ!!?』

手術台の上に寝かされ、素肌の色が殆ど見えない程に包帯が巻き付けられて無数のチューブと人工呼吸器に繋がれた友人の変わり果てた姿に鉄槌の騎士ヴィータは己の無力を噛み締める事となった。

見ず知らずの他人によつて掛け替えのない大切な友人の命は救われ、担当の医師から魔導師として再起困難だろうと宣告されていたにも拘わらず苦難のリハビリを不屈の意志で必死に乗り切った事でその友人は再び魔導師として見事に復帰する事ができたのだが、この一件においてヴィータは何もできなかった事を激しく後悔し、この出来事以来、彼女は自分の大切な者達を傷付けようとするモノは《鉄槌の騎士》の矜持と長年共に戦場を戦い抜いて来た相棒グラーフアイゼンに懸けて必ず全て破壊してやると誓ったのだ。

——『護る為に総てを叩き潰して破壊する』——それがあの日にアタシが胸に抱いた渴望だ！ だから例え今は相棒アイゼンがこの手に無くなったって、もう二度とはやてやなのは達を誰にも墜とさせはしねえっ!! だからアタシはもう絶対に——

「——誰が相手だろうが負ける訳にはいかねえんだああああーっ!!!」

裂帛の叫びを伴って振るい掛かったヴィータの戦槌型アームドバイスがそれを迎

え撃つ様に突き放ってきたロツキーの拳に嵌められた鉄甲型アームドデバイス——  
《テイエンデー天地》と激しい火花を散らして打ち突け合い、鈍い金属打撃音を鳴らして互いに弾かれる。

バトルフィールドの外野に下がった機動六課・ロストウイング両陣営が見守る中、団体模擬戦の幕を上げる八神ヴィータVSロツキー・マオの対戦が始まった。開始直後から先手必勝と言わんばかりに己の小さな全身を砲弾に変えて飛ばすかのように真っ向からの飛翔突撃を初撃早々に敢行し、先程自分に礼儀の欠片もない罵詈雑言を散々浴びせてきやがった生意気なクソガキの捻じ曲がった根性を即刻叩き直してくれろと縦回転の遠心力をつけた打ち下ろしの一撃を御見舞いしてやったが、結果はご覧の通り相打ちになったが故に歴戦の鉄槌の騎士は得物に小さく細い片腕を引かれながら表情を驚愕に引き攣らせた。

——ちよつ、マジかよ!?! 幾ら相棒アイゼンより硬度の低い戦槌だからと言ったって、何気ない感じでこのクソガキが突き出して来た拳如きが、手加減無し of 全力で打ち掛かってやったアタシの《テートリヒ・シユラーク》と互角の威力だとおっ!!

ヴィータはその幼い身体ながらもヴォルケンリッター……いや、機動六課随一の打撃攻撃力を誇っている。例え鉄槌の騎士の象徴たる相棒デバイスのグラーファイゼン以外の慣れない得物で一撃を振るったとしても、そう容易に並居る魔導師や騎士が彼女の腕力に

正面から打ち勝てはしないだろう。 体格差なんてものは所詮、身体強化魔法で理不尽に易々と凌駕可能なのが管理世界の魔法使いなのだ、況してやヴィータは幼い見た目でも【夜天の魔導書】にインストールされたデータプログラムが実体化した人外的存在で、例えば身体強化魔法を使用しなくても通常の人間の男性よりも遥かに腕力が強い……だというのに互いに打ち付けた得物を弾き合った反動で一瞬体勢を仰け反らせる彼女の眼前で同様に小さな全身を一瞬仰け反らせているロストウィングの少年魔導師は機動六課F W陣のメンバーの一人である赤髪の少年騎士と歳が然程離れていないだろう本物の幼子おさなこだというにも拘らず、鉄槌の騎士ヴィータと互角の威力で相打ってみせたと、いう衝撃的な初撃の結果には外野でヴィータの応援をし始めようとしていた機動六課陣営も驚愕を禁じ得ない。

「なあっ!? 嘘やろ? あのヴィータが真っ向から打ち合っついておいて、体勢を仰け反らせておりよる!」

「でも打ち負けた訳じゃない! 怯むなヴィータツ!!」  
「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

そんな事は言われるまでもないと、ヴィータは後ろに仰け反った体勢に逆らわず気合いと共に反動をつけて全身を素早く一回転、仰け反りの隙を巧みに埋めてみせると同時に次撃の鉄槌を半円状の軌道に描いて振るい、こちらよりも大きく体勢の修正が遅れた

ままでいる無防備状態な相手の脇腹に叩き込もうとする。しかしあちらも大きく仰け反った体勢を利用する事を考えていたようで、そのまま芸術的なバク転を披露しつつ華麗に後退してヴィータの攻撃を避けてみせたロッキーは――

「んなウ○コが付いてそんなバッチイハンマーなんか自分の顔面でくらつておけガスッ！」

そんな罵倒を吐き捨てながら目の前を空振ったハンマーヘッドをカウンターのアツパーでヴィータの顔面目掛けて殴り飛ばしたが、無論ヴィータはそんなでマヌケにも自分の振るった得物に自滅させられるような三流騎士ではない。彼女は唐突に方向を変えられて自分の顔面に戻ってきた戦槌を「ふっ！」っと首を傾けてやり過ぎ、その反動の勢いを殺さずに三度全身を流れるように回転させて三度目の槌撃を迅速に返してみせた。

想定外の攻撃結果となったとしても逆にそれを利用して隙を見せずに次なる連撃へと繋げるヴィータの巧みな近接戦闘技術……流石は古代ベルカより夜天の主の守護騎士として数多の戦場に身を投じてきた歴戦のヴォルケンリッター、《鉄槌の騎士》だと称賛に値する腕前だ。堪らずロッキーはその場から咄嗟に後方へと跳び退き、ヴィータの反撃を肩に掠らせて危なげに距離を取った。

「ぐぬぬぬ、ちよつと油断したでガス。うっかり犬のウ○コ踏むような大ドジ女のク

セに生意気なああ！」

「へっへっへっ、場数が違うんだよ場数が！ アタシと互角の攻撃力で打ち合ったのは褒めてやるが、連撃の繋げ方が全然甘えな。 そんなんでアタシに勝とうなんざ百年早いんだよヴァーカ!!」

今の攻防についての駄目出しをされると共にアツカンベー！ とヴィータから幼い姿に違わぬ稚拙な挑発を受けてロッキーは心底屈辱を噛み締めるように歯を軋らせながら相手を憎たらしく睨み付けずにはいられないでいる。まるでそれは見たまんまに近所の子供同士による幼稚な罵り合いのような風景で、外野の大人達はやれやれと呆れるか微笑ましく思い含み笑いに興じる、或いは苛立ちを募らせるばかりだ。

「ゴリアアツ！ 何ガキのママゴトみてえな戦いしてんだよロッキー！ 遊んでねえでとっとと『アレ』使つてそのゴスロリハンマー娘を早いとこフルボッコにして終わらせやがれつてんだ!!」

対戦は始まったばかりだというのに短気過ぎるピスマルクがサングラス越しに眼を血走らせて腑抜けた戦いをしているロッキーに本気を出せと恫喝を浴びせてくる。それを聞いた途端にロッキーは何が気に入らないのか不満に苛立った視線を外野の仲間達に向けた。

「オレに『アレ』を使えだ？ 冗談じゃねえでガス！ オレは最初から生まれ持った才



能なんか頼ったりしねえ！　こんな生まれつき他より高かっただけのチカラを周りにひけらかして人に認められて、それでいて上からの好待遇を当然のように受け取ってウハウハしてやがるような、根性の曲がった本局のエース共なんかとは違うんだよつ！！」

その言葉は彼の内の領域の奥底に座す本能からの叫びに感じられた。最初はヴィータの攻撃力に食い下がってきた相手の未知の実力に一時の不安を覚えたが、開幕の攻防にヴィータが打ち勝ち、こちらが優勢を得た事で歓喜に活気付いていたのは達機動六課陣営がロツキーの叫びを聴いて思わず動揺してしまい、その歓喜を波が退くように鎮めてしまう。

「な、何やねんいったい？　あの子が今言った内容に色々とツツコミたい所はあるんやけど……」

「『アレ』を使いたくないって、何の事だろう。　最初から生まれ持った才能？　才能に頼ったりしない？　どういう事？」

「あの子の今の言葉、なんだか何かに凄く悔しい思いをして片意地を張っているように感じ取れるような……」

六課の隊長三人娘が言った疑問に同意するように彼女達の部下達も首を縦に上下させて頷いている。　『アレ』という何かを使用して戦う事を執拗に拒否したいらしい

ロッキーの拒絶反応は尋常ではない嫌悪の感情を放っていた。 “アレ” というのは、なにやらロッキーの “生まれ持った才能” に関する要素らしいが……。

「生まれ持った才能……もしかして「レアスキル」!？」

そのヒントから思い至った答えをなのはが口にした一瞬、ヴィータと睨み合った膠着状態のロッキーの背筋が強張った。 どうやら当たりのようだ。 仕方がないと不機嫌な表情を見せたガンマが不躰な口調でなのは達に語り出す。

「ああ、その通りやで、ロッキーは先天的にごつつええ強力なレアスキルを持つとる。

あのクソガキは此処に配属されるずっと前に居たところで、先天的才能至上主義のアホ共の胸糞悪さをイヤと言う程見たらしくてなあ。 あんな生まれ持った才能だけしか

取り柄が無い癖にそれだけを鼻に掛けて上に媚売り、大した努力もしとらんのに最初から持っていただけの才能を絶対と思いがって、汚い自尊心で無才凡人を低脳と蔑み、

才能という名の理不尽な暴力でそれ等を嘲笑いながら足蹴にしとるような連中と一緒にされたくあらへんと思うとるようで、あまりそのレアスキルを人前で使いたがらへんをや、あのド半人前のガキは。 才能に “頼り切る” んと “使わず腐らせる” ンは別モンやろが、ドアホウ……」

話を聞いてなのは達は複雑そうな表情を作って黙り込んでしまう。 才能社会と言える魔導師業の上下関係は魔導師個人が先天的に有している魔力量の高さと優秀なレ

アスキルを持つているかどうかでほぼランク付けが決定すると言ってもいいだろう。実際になのは等エースと呼ばれる魔導師達は皆例外無く高魔力量レアスキル持ちであり、他の魔導師や騎士の局員と比較しても明らかに優遇度が高く昇進もしやすくなっているのが現状だ。地上本部の統括を任されているレジアス・ゲイズ中将などの例外もあるが、基本的に低ランク魔導師や非魔導師局員達は管理局の花形たるエースストライカー級の下でひもじい思いをしている者が多く、またエースと呼ばれる程の才能を持つて魔導師を志した者達の中には己の才能の高さに胡坐をかいて自尊心のままに身を振る舞ってしまったている人間も少なくはない。よって管理世界の魔導師達は高ランクと低ランクとで立場が分かれ、間に大きな溝が出来てしまうのも自然の理と云うものであろう。

その影響による互いへの弊害は今も改善される兆しは見られず、水面下での醜い組み合いが日々絶えない。それ故にロツキーのような自我意識の強い魔導師は置かれる環境次第で本来のチカラを発揮しなくなるという場合が希少なながらもあるのだ。

「なるほどな。つまりテメエはこのアタシを相手にしといて本気を出したくねえって事かよ?」

だがヴィータはロツキーの事情を聴いても同情する気配はなく、寧ろ不愉快そうに腕

を組んで苛立ちの表情を表に出していた。そんな理由でこの《鉄槌の騎士》を相手に全力を出す事を躊躇するだなんて騎士に対する侮辱もいいところだ、もう我慢ならぬ。怒気を孕んだ鋭い視線で目の前の我儘なクソガキを睨み付け、そろそろ戦闘再開するぞと小さな身から溢れ出す闘気と魔力を漲らせて戦槌を構える。

「それでガス、オレは『アイツ等』とは違うんだ。オレは自分で手に入れたチカラだけで才能に恵まれた奴等をブツ倒してやるんでガス！自分の意志で師事したシヨールの下で七年間鍛え抜いた拳と必死に磨き上げてきた、この——《ロンフォン流天鳥拳》でツ!!」

それは相手方も同様の姿勢であつた。両腕を両翼のように広げて左膝を上げる変則的な片足立ちという「地上から飛び立とうとする鷲」のような構え……ロッキーはまるで功夫映画に影響されたかのようなポーズを取って闘志に猛るヴィータを射貫くように見遣っている。実際にロッキーが今身に纏っているバリアジャケットもまた黒いラインを走らせた黄色いジャージのような装いである為に益々そう見えてしまうが、幼い歳の所為で周りから観た印象は馬子にも衣裳だ。

「疾——ツ!!」

「っ!!?」

しかしその暖かい目で見守りたくなるような印象は、次の一瞬で外野から集まってい

た数多くの視線からロッキーの姿が唐突に音も無く消失した事によつて霧散する事となった。それは約10mの間を挟んで彼と向かい合っていたヴィータも例外ではなく、突然相手を見失つた事態に彼女は歴戦の直感で身の危険を察し、魔力障壁を全身に纏うフィールドタイプのベルカ式防御魔法——《パンツァーガイスト》を展開。

「——ホアアアア——ッ!!」

「ぐ——ああッ!!」

刹那、彼女の鳩尾に痛烈な正拳突きが突き刺さつた。腹部に奔る、猛スピードで走つて来たダンプカーに衝突されたかと錯覚する程の衝撃とたつた今視界いっぱいに見えたロッキーの気合い面に困惑と苦悶を入り混じらせた表情を浮かべ、耐え切れずに口から胃液を吐き出すと同時に全身を“くの字”に曲げさせられて後方直線状に勢いよく吹つ飛ばされて行く鉄槌の騎士。

——なっ!?! ヤロー、今何しやがった? アタシの空間意識を“すり抜けて”接近して来やがった……だとおッ!!

吹つ飛ばされながらも経つた今起こつた事象に驚愕を隠せないヴィータ。超人レベルに身体能力を魔力で上昇させられる事のできる魔導師にとっては10mなんて距離を一瞬で詰めてやる事ぐらい造作も無い事なのだが、彼女が驚愕している理由は相手がこちらの張り巡らせている空間意識に一瞬も捉まる事なく接近して来た為に、拳を

鳩尾に打ち込まれるまで相手の存在を微かにすら認識する事ができなかったからである。モロに入った拳の衝撃もパンツァーガイストで軽減してこの威力、並ではない！

「フオオアチヨオウツ！」

「がああ ああつ!!」

そしてまたしても存在を察知させる事なく何時の間にか飛ばされた先の軌道上に高速で回り込んで来たロッキーの肘打ちによつて後ろから頸部に強烈な殴打を受けてしまい、一瞬意識を飛ばされそうになる。歴戦の騎士の意地でなんとかギリギリ意識を保てたものの、あまりに威力のある一撃を打ち込まれた為にその反動でヴィータの幼い顔面が地表に叩き付けられてしまい、そのまま地表を凄まじい速度で削り滑って行く。

———まただ。またあのヤローの動きを捉えられねえ。

顔面を地面に突っ込まされて地表を掘り進まされている恰好のまま、相手が回り込んで来た追撃をまた感知する事ができなかった為に、ヴィータは継続的に顔面を襲つてくる摩擦熱の激痛に耐えながらも益々不可解と疑問を心に募らせていく……だが悩んでいる暇はない、今の彼女は頭隠して尻隠さずだ。地上に出したままの無防備状態の小さな身体を追って容赦なく後方から跳び掛かって来るロッキー。

「まだまだアアーツ、でガスツ！ ウウウウ、アチヨオオオオオオアーツ!!!」  
「クソツ！」

地上に出ている自分の首から下の小さな身体に狙いを付けて、まるで地上を這う獲物へと驚が脚の鋭い鉤爪で上空から襲い掛かるかのように、相手が肩の上から両腕を振り下ろすフォームで鋭く五指を立てた両手を裂帛の気合いと共に猛烈な勢いで叩き付けて来るのを、ヴィータは咄嗟に地表に接して滑走させられている顔面から魔力を放出する事によつて爆発的な反発力を発生させ、その反動を使い一気に自身を空中へと押し上げた事で相手の追撃を紙一重で回避する。直後に直前まで彼女の身体があつた地表が凄まじい破碎音と共に爆ぜ砕ける光景を錐揉み状に軌道を描いて空中に投げ出されながら見下ろし、ヴィータは激しく息を吐きつつ表情に苦難の色を浮かべる。

「ぜえ、ぜえっ！ ……さ、さすがに今のはかなり大雑把な動作だったからか、攻撃して来るのが読めて助かったけど。はあ、はあっ！ ……いい、いったい何がどうなつてんだ!? 最後の一撃以外、あのクソガキが攻撃してくる時の動作が全く読めねえ！」

数秒前まで自分の頭が滑走していた場所に形成された直径約15mのクレーターの上に立ち上がつてこちらを見上げ、「へっ、どうだでガス？ まだまだオレのチカラはこんなものじゃないでガスよ！」と生意気にもニヤニヤしたドヤ顔を向けてきているロッキーに、ヴィータは空中に身を縫い付けて苛立ちと困惑を混同した視線を向ける。

レアスキルを使用した感じはしなかった。と言うか、あれだけ使わずに勝つと壮語しておきながら、直ぐにその誓いを破り捨てるなど、幾ら相手が世間に無知であろう幼

い歳頃の少年であるとはいえ、恥じらい外聞知らずにも程があるというものだろう。

誇り高い守護騎士たる彼女が視たところ、ロストウイングの連中は表向き粗暴な輩の集まりだが、個人や部隊としての矜持プライドに高い誇りを持っていると感じられた。でなければあくだこくだ言つてヴィータ達をこんな団体摸擬戦なんかで試そうとしたりせず、問答無用にチンピラの如く集団でリンチにして来る筈だろうし、己の持つレアスキル才能云々についても大して拘つた認識・価値観を持つたりして自己嫌悪せず、我が物顔のままに振る舞つてくる事だろう。しかし、少なくともこのロッキー・マオという少年に限つてはそうではない、それは彼が見上げて向けて来ている翡翠色の瞳の奥からビリビリと感じ取れる強固な意志が鮮烈に語りかけて来ているのだから。

「なるほどな。 テメエの努力で得たチカラが半端じゃない事は理解した。 でも結局、持つているチカラを使わねーで勝つてやる” って言う事はだ。 アタシを……このヴォルケンリッターの《鉄槌の騎士》ヴィータ様を一对一で相手において全力を出さずに倒してやるって、嘗めた事をほざいてきてやがる事には変わりねえ！」

だが、相手が誇りある戦士だから何だと言うんだ？ 戦士としての矜持に誇りを持つているのが自分達だけだと思ふな！

「へっ、いいぜ。 だったらテメエが使う事を頑なに拒否つてやがるそのレアスキル、テメエ自身の意志で鍛えあげたつうそのナントカ鳥拳つていう訳の分からねえ拳法を



アタシが完膚なきまでに見切つてやつて、無理矢理にでも使わせてやるから、覚悟しやがれ！ この石頭デツカチがつ!!」

古代ベルカ時代の戦場を生きた騎士の誇りに懸けて、あの生意気で頑固な少年の全力を絶対に引きずり出してやる!! ヴイータはその誓いを胸に、小さな手に戦槌を強く握り締めて相手が待ち構えるクレーター上に狙いを定めて弾丸の如くその身を地上へと突貫させて行くのであった。



撃を響かせて壮絶に打ち合いながらバトルフィールド内を息もつかせず激しく縦横無尽に動き回っている《鉄槌の騎士》と《曼珠沙華》に野次を飛ばした。

「ゴラアア、テメエら！ こっちの被害考えやがれバツキヤロオオーツ!!」

「あゝん、もう砂だらけえゝ！」

「うゝ、ロッキーの奴酷ピー。 おかげで僕の眼と耳がグロッキーだつちゅーの。 えんがちよ」

「ヴィータ副隊長、これはいくらなんでも、ちよつと派手に暴れ過ぎだと思えます……」

「フリード、大丈夫？」

「キユクウウゝ……」

「おいおい、フィールド外側に積もっていた雪まで巻き込んで飛んで来やがった湿り気の所為で、アタイの手持ちの爆薬が全部湿気つちまったよ。 あゝあ、今ので駄目になつたコレら、<sup>プラマ</sup>闇市でも滅多に流れて来ねーんだよなあ……」

鮮烈に互いの得物をぶつけ合っているバトルフィールド内の二人には気にも留められずに虚しく模擬戦場に木霊していく両陣営の嘆き声は災難だったあの一言に尽きる切なさを感じさせる。 数秒に亘って砂嵐に颯られた所為で皆の身に着けている衣服は乱れ、大量の砂を被つた身体でその場にチカラ無くへたり込む皆の姿と、その背後の隊舎から聴こえて来ている野次馬達の爆笑も相俟って、何とも言えないシユールな空気

が流れている。

「にやははは。この前にあんな事があつたばかりで、グラーフアイゼンも敵に壊されちやつたから、正直心配していたんだけど、調子を落としてはいないみたいだね、ヴィータちゃん」

「ああ、そうだな。グラーフ本アイゼン得物が手元に無いにも拘らず、ヴィータはよくやつている。それでこそ夜天の主の守護騎士たる我らヴォルケンリッターの《鉄槌の騎士》だ」

「シャーリーが徹夜で整備してヴィータに渡した間に合わせのアームドデバイスも突貫で用意した割には、なかなかの威力が出ているね。ヴィータの腕力で打ち突けた反動にも、今のところは問題もなく耐えられているようだし、やるじゃないの」

「そ、そうですか？ 正直に白状すると、実はあの子デバイスにヴィータ副隊長の魔法データをインストールしている最中にうっかりちよつと居眠りしちゃいました、極小ながらも精度に誤差が出ていたもので、出来に多少の不安もあつたんですけれど。あの調子なら問題は無さそうだし、よかったです♪」

スターズ副隊長の調子が行き過ぎていて呆れはしているものの、しかし相手の認識できない攻撃動作に翻弄されながらも持ち前の根性を武器に耐え切り、相棒アイゼンの修理が済むまでの間の合わせの得物としてシャーリーから渡された戦槌型アームドデバイスを振

るって豪快にやり返している、水を得た魚のように調子良く戦っている彼女の姿を眺めていると、なのは達は心からの安堵の声を漏らさずを得ないようだ。それはヴィータが此処に来る前日まで底深く暗い何かの負い目を背負ったような非常に辛気臭い雰囲気をしていたが故であろう。

先日のラグナガンド軍の第二二六強襲中隊によって六課が襲撃された時、ヴィータは敵部隊の分隊長であるSSS級に規格外の魔導師のファング・イスカンブルグを前にして、何一つ敵に報いれる事無く無様に地の土を付けられてしまった。リミットブレイクも融合機とのユニゾンも新しい秘策であったフェイトとの必殺コンビネーションも、彼女の全てを懸けて挑み掛かった結果は敵にまともなダメージ一つ付けられずに完敗。

夜天の魔導書の守護騎士プログラムとして古の時代に創られた時から共にずっと今まで戦場の空を翔け抜けてきた愛グラーファイゼン機も非常に負荷の掛かる無茶な戦い方をした為に核ごと砕け散ってしまい、騎士として散々過ぎる敗北を喫してしまった。その結果として彼女が守護騎士として仕えている大切な主であり、掛け替えのない家族でもあるはやての夢であった彼女の部隊は敗戦責任に応じた厳しい処分が下された事により稼働初日にして無情にも取り潰されてしまい、六課の部隊長であるはやては本局の上層部の高官達に敗戦責任を糾弾されて厳しいペナルティーを背負わされてしまった。新人達もロングアーチの非戦闘員等も自分以外の守護騎士等もフェイトもなのはも、心も身

体もみんなみんな深く傷付けられた。はやての補佐を務める筈だった青年に至っては無惨にも敵の襲撃の犠牲者となってこの世から旅立って逝ってしまった……。

——みんなアタシの所為だ。アタシが弱っちくて無力なガキ同然のチカラしか持っていないから、“絶対に護つてやる”なんて偉そうに吠えておいて、はやてもなのはもみんなみんな大切な誰一人護れずに傷付けられて、それで大事にしていたモノをいっぱい失つちまって、みつともなく泣き喚いた挙句に、こんな辺境の世界の最低部隊になんかに来るハメになつちまつたんだ！ だからもう、弱いまま何も護れない無力のガキのままにいるなんてイヤだツ!!

「テメエみたいな周りの視線を気にして本気一回見せる事すらも躊躇してやがるような腰抜けヤローなんか——」

脳天に落とされた強烈なかかと落としを受け、これもド根性で耐え抜き鉄槌の打ち払いで相手を追い返すと、度重なる近接格闘戦で極限までに近接意識への集中力が高まっていたヴィータは遂に今まで意識に捉える事ができずにいたロツキーの挙動を己の認識の内に捉えたのであつた。

「な………にいつ!!」

縮地を使った高速移動で背後に回り込んで来たロツキーの上段回し蹴りを人間の限界反射速度とされている0.1秒で振り返つた鉄槌の一振りで打ち落としてみせた



暴風のような衝撃波に全身を煽られて心の底から悔しそうに叫び上げながら、危な気に両足を地面に擦り付けて靴底を削る事でスタイリツシユにブレーキを掛けるロツキー。しかしその時既に眼前にはヴィータが追撃で打ち放った鉄球——《シュワルベフリーゲン》が飛来してきていた為にロツキーは魔力風を放出させる右腕をもつて咄嗟に薙ぎ払う。だがヴィータのシュワルベフリーゲンは古代ベルカ式に数少ない誘導操作を可能とする遠距離攻撃魔法であり、薙ぎ払った鉄球が鮮やかな放物線を宙に描いて戻つて来る。

「ええいつ、鬱陶しいでガスー！」

それにイラツとしたロツキーは地滑りで靴底を削りつつ派手に砂煙を巻き上げて後退していく勢いを減速させ続けながら、再び飛来した鉄球を地に殴り落として埋没させる事で相手の誘導操作を無力化する事に成功する。だがしかし、これくらいで歴戦の騎士の攻勢は止められはしない。

「まだまだだあああああああああああつ!!」

鉄球を叩き落した大振りの右ブロー直後にできる隙を狙い、ヴィータが撃ち出された弾丸の如く風を貫いてロツキーの真正面に突撃飛翔して来る。

——ちいつ! 連続攻撃でオレに反撃する隙を与えないつもりでガスか!?

「舐めんなでガス!!」



だがロッキーだつて負けてはいない。小さな全身を猛回転させて遠心の破壊力を上乗せさせた戦槌を手に振るい掛かつて来た小さな騎士の威勢に負けてたまるかと吼え返し、右腕を左下方に振り切つた勢いを殺さずそのまま右脚を軸に素早く回し蹴りを繰り出した。大きな隙を埋める巧みな左脚高速回転蹴りと猛烈な遠心力が乗つた鉄槌が正面衝突し、両者の間に巨大な火花が弾けた。

「くっ——うおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

「痛つてえつ——でりやああああああああああああああつ!!!」

互いの渾身の一撃は全く互角の威力だつた故に相殺となつたが、当然その結果として両者の小さな身体に強烈な反動が還つてくる。しかし、近接格闘戦スベシヤリストの達人である二人にとってはこの程度、反動に逆らわず全身を捻り体勢の崩壊を華麗に修正してみせるという卓越した体捌きによつて即座に続く連撃に繋げていく。二人の甲高い雄叫びと同時に鉄槌と鉄拳が連続して打ち合わされる金属打撃音が模擬戦場中に轟いていき、地滑りと飛翔の慣性でバトルフィールド上を平行移動しながら二人は激しく打ち合い、突風を伴つた猛烈な衝撃波を撒き散らして周囲の空気と砂を吹き飛ばしていく。

「ロンフォン流天鳥拳秘儀——《嘴撃無双》すいげきむそうでガスウウウーッ!!」

猛禽類の鋭き嘴の如く、ロッキーが超高速で次々と繰り出してくる鋭利な指突の驟雨サークルシールドに対し、ヴィータは手に握る戦槌の長い柄をまるで棒術のように操り回転させた丸盾

で防ぐ防ぐ！ まるで吹き荒れる嵐のような白熱した近接攻防戦を繰り広げる二人に外野の両陣営は息を吞んで目が離せない、その後ろの隊舎で観戦している野次馬達も同様だ。

「凄い。 夜天の魔導書の守護騎士で大昔からの戦闘経験が豊富なヴィータちゃんは当然だけど、相手の子もヴィータちゃんに全く引けを取っていない！」

「僕とそんなに変わらない歳に見えるのに、あのヴィータ副隊長とあんなに互角に打ち合えるだなんて……」

「か〜っ！ ホンマ次元世界にはまだまだ凄い子も居るもんやなあ。 私等も昔は魔導師の天才児として、周りからは時空管理局の「キ〇キの美少女世代」だなんて呼ばれておった事もあったけどなあ、フエイトちゃん」

「いや、されてないからそんな超次元バスケット漫画の人外中学生バスケットプレイヤー五人組のような呼ばれ方なんて。 しかもさり気無く「美少女」を追加しないでよ、はやて……」

「んん〜、《ロンフォン流天鳥拳》ねえ……あのさスバル、あれって君の使う《シューティングアーツ》とはまた違った系統の格闘術なのかい？」

「……え？ ……あ、うん、そうだね。 あんな変則的な構えを取る格闘術なんて、アタシまるで聞いた事なんてないし……うん……」

「スバルさん? ……」

六課側は歴戦の騎士であるヴィータを相手にエリオと然程変わらない幼い年齢であるにも拘らず互角の近接戦闘を繰り広げているロッキーの実力に驚きを隠せないでいるようだ。確かになのはの言う通り、古の時代より戦場に生きてきた夜天の魔導書の守護騎士であるヴィータは彼女と同じ存在である夜天の守護騎士三名を除いて誰よりも場数を踏んでいる。故にそんな近接戦闘の達人と呼べる相手に、歳の数が二桁にやつと届いたような幼子わきゃなが真つ向から互角に打ち合っているというこの光景は、誰が観たとしてもなかなか驚愕的と言えるだろう。まあ、十年前に起きた「闇の書事件」において当時九歳、しかも魔導師歴がまだ一年にも到達していない初心者であったのはあのヴィータを撃墜寸前まで追い込んだ事もあったが……。

「そんなゴスロリ幼女相手に何手こずつてやがるんだロッキー! もつと気合いを入れて戦いやがれ!!」

「あくあ、ロッキーってばみそつかすに押されているジャン、ゲロゲロ。ホント持つて生まれた才能とかあく、自分で鍛え上げたチカラとかあく、ロストウイングらにそんなイ子ぶりつ子したこだわりなんか必要無いでしょうにいく? えんがちよ」

「そう言つてやるなよ。男は誰しも意地プライドつていう厄介な性サガを持つているもんだ。そう簡単に決めた矜持を曲げられはしないさ……」

「さあそれはどうかねえ？ アタイは女だから男の意地なんてモノ、知った事じやないけどさ、さつきまで馬鹿にしていた相手に本気を出せずに負けるとか、そっちの方がよっぽど恥ずかしいと思うんだよね。そうなりそうになつてまで詰まらない意地を優先する価値があるとは、アタイは思えないんだけど？」

一方でロストウイング側は、「レアスキルは使わない」という自分が科した制約を頑なに守つて本気を出さず、自業自得に攻めあぐねているロッキーに対して非難、もしくは仕方なく思い呆れる反応を取っていた。

上からの支援は一切貰えず、辺境の無人世界に施設環境最悪のオンボロ砦しか隊舎として構えさせてもらえない上、部隊に貰える仕事の代いたいは【海】や【陸】がやった取りこぼしを人知れぬ陰で処理するという内容のまるでゴミ処理作業のようなものや、ロストウイングの存在を知る数少ない一部の一般人から寄せられて来る小間使いに等しいパツとしない依頼程度であるという、最底辺に冷遇された扱いを受けている彼等にとつて、上と下からの信頼が厚く非常に優遇された待遇を受けているのは達エリート局員等の存在は確かに妬ましく目障りに思っているだろう。しかし彼等は管理局の日陰者ではあるが魔導師としては決して低辺などではなく、寧ろ今現在進行形で管理局の正規の武装隊員の中でもトップクラスの實力を誇っている騎士のヴィータと互角の戦いを繰り広げているロッキーを見れば理解できるように、皆が色々と規格外な

ステータス  
技能才能を持つている有能な人材ばかりの過剰大と断言できる戦力が集められた超精鋭軍団。故に高ランクの魔法やレアスキルを堂々と揮う行為自体は否定してなどいない。

「同感やな。ワイ等ロストウイングは実力と実績が全ての実力主義さかい。あのド阿呆、それをもう忘れてもうた訳じゃあるまい。まったく、つまらへん価値観に囚われおつてからに……」

過去を割り切れない気持ちがあるのは皆理解している。だがガンマが鋭い双眸を細め、互角だったのが今段々と相手に押されはじめてきた為に若干焦燥の色を顔に浮かばせだした仲間の幼き少年武闘家の様を厳しい視線で見遣りつつそう呟いているように、最低辺であるからこそ持てる総てを使い死力を尽くして何が何でも勝利をもぎ取りにくのが地を這いずる失翼の鳥の在り方というものだ。戦いに負けたとしてもまた立ち上がって再び挑めばいい？ 馬鹿を言え、戦場においての敗北は討ち死にが常であり、余程のご都合主義でも起きない限りは次などありはしない。

「見た感じ《識陰歩》ももう九割くらいあのゴスロリハンマー娘に見切られとるみたいやなあ……ふっ、そらそうか。高町とかが相手なら始終フルボッコでイケたんやろが、近接戦闘を主軸とする『古代ベルカ式』の使い手——しかも百戦錬磨の夜天の守護騎士相手やと流石に分が悪いやろし、しゃーないわな」

「……………どういう事？」

「なんだかどさくさに澄ました笑みで心にもない事を言われたような気がしたのが遠目を向けてガンマに聞く。」

「確かにヴィータちゃんは大昔からシグナムさん達と一緒に守護騎士として戦ってきた経験がもの凄くいっぱい有って、感と見切りに冴えている。けれどわたしだって動体視力と空間認識能力には自信があるよ。仮にも最優<sup>エース、オブ、エース</sup>の魔導師の称号を貰っているわけだし、空のエースを任せられた身として最低限の感知感覚技能は持ち合わせているつもり……………でも何でだろう？ これだけ離れている距離で人の動きをしばらく観察していれば、わたしは大抵の速度の動きは見慣れると自負しているのに、あのロツキーって子の動き方の殆どは今だって把握できない。それなのに最初はあの子の動きに完全に翻弄されていたヴィータちゃんが、今はもうあの子が移動した先に先回りできるまでに、あの子の動きを把握しきれちゃっているみたいだから、君が言った事が真実だっていうのは判るんだけど……………」

「バトルフィールド内に視線を戻せば不意を突いて背後に回り込んで来たロツキーの腹部にヴィータが戦槌型デバイスの長い柄を巧みに翻し回して打ち払うカウンター攻撃を見事に決めてる姿が目映る。どうしても納得がいかないと訝しく首を捻るなのは。彼女の視界にはロツキーの戦う姿は彼が疾駆する度に見失っていて、空の工

ースとして高く研ぎ澄まされた空間意識を張り巡らせても疾駆する彼を全然捉える事ができていない。にも拘らず彼と至近距離で打ち合っているヴィータは、もうほぼ完全に相手の動きを把握できているみたいだ。

——いったいこれはどういう事なの？ ヴィータちゃんが「直感に任せて見切っている」んだつたら納得がいくけれど、相手の動きに合わせてあれだけ正確に先回りするには、幾ら古代の騎士で戦闘経験豊富なヴィータちゃんでも殆ど不可能に等しい。あれはどう見たって眼で相手の動きを捉えきれている人の動きだ。純粹な動体視力ならわたしだってそんなにヴィータちゃんに負けていないと思う、なのにどうして……。

「わからへんか高町？ そら当たり前や。ロッキーの《識陰歩》は言わば《抜き足》と呼ばれとる相手の「覚醒の無意識」に己の存在を滑り込ませるつつう、「ウチのエース」が使つとる歩法術を応用した手品でなあ。せやから「近接戦クロスレンジの視界」に意識が慣れとる騎士や武術家として達人と呼ばれとる人種ならアレを見切るんにそんな時間は要らへんやろが、空間意識を限界まで広げて戦う事に特化したミッド式の空戦魔導師、それも射砲撃型に關して言うたら例えどんな天才やろとあの動きを捉え切れるようになるんは最低でも二年は特訓する必要があるんやで」

やれやれと肩を竦めながらガンマが教えてきた疑問の種明かしになのはだけでなくフェイトやミクティーヌといった六課のミッド式魔法の使い手達は皆瞳目を露わにし

てしまう。つまり空間意識を広く持てば持つ程にあの少年武闘家の動きを把握する事が難しくなると言うのだ。

「人間は五感で認識できた情報を無意識に分けて優先順位を付けたりするんだと。アタイら魔導師は並列思考マルチタスクが使えたりするが、思考する脳が二つ三つに増えたりする訳じゃないだろう？ 結局のところ詰め込み過ぎるとオーバーヒートしちまうんだ。

だから、どーでもいいと判断した情報は捨てる」のが懸命だつて訳さ。その空白に他人が呼吸を合わせて自分の意識を放り込んだりするとあゝら不思議!?! その存在情報は捨てた無意識に隠れてしまつて認識できなくなつたとさつ!」

「説明を聴いた感じやと、要するに視覚誘導ミスアレイクションテクニクニクの発展板といつたところみたいやな。自分に向かつて猛スピードで突っ込んで来とる車にハッ! と視線を向けた時に、道端に転がつとる小さな石ころが幾つあるか? なんて数えとる場合やあらへんもんね。とりあえず納得できたわ」

ガンマからリレーのバトンを受け取るようにD・Dがノリノリで説明を引き継ぎ、聴く耳を立てていたはやてが話を纏めてウンウンと納得する。なのは達も複雑そうに思いつながらもしぶしぶだが納得できたようだ。

因みに《抜き足》と《識陰歩》の違いは「覚醒の無意識」に滑り込ませられる対象の数であり、前者の技術を改良した後者の方が圧倒的に多いが故に、ロッキーが《識陰歩》



を使用する度に彼の姿を覗いていた全員が一人残らず技の影響を受けている。外野で観戦するなのがロッキーの疾駆を認識できないでいたのはこの為であった。

「おらおらあああつ！ さっきの威勢は何処行つた？ 拳が鈍いんだよオオオオオオオー！ ツ！！」

そして厄介な《識陰歩》を見切つたのならもうヴィータの独壇場だ。頭上から落ちて来たロッキーの跳躍かかと落としを戦槌のフルスイングで相手ごと上空に打ち返すと、好機と言わんばかりにデバイスの形態を変形させる。

「しめたー アイゼン——は、今手元に無えんだつた……とりあえず《ラケーテンフォルム》ツ！！」

一瞬しよんぼりしてから気を取り直して戦槌から今使用したカートリッジの葉莖を数発程排出させると、そのまま鉄槌を肩の後ろに勢いよく振り上げながらそう言い放ち、ヴィータの全身からカートリッジの使用によって爆発的に高まった紅い魔力が溢れ出して輝きを発する。その輝きは小さな手に握られている長い柄を伝って鉄槌を瞬く間に覆い尽くし、ハンマーヘッドが大威力突撃攻撃用の強襲形態へと姿を変えていく。片方がロケット噴射口に、もう片方が鋭利なスパイクに。彼女が立っている周囲の砂上が魔力の迸りに応じて連鎖爆発。天に聳え立った砂塔の中に姿を現したのは、鈍色に煌く鋭利な先端を持つ推進鉄槌を威風堂々と肩に担いだ《鉄槌の騎士》の風格そ



## 陀羅尼摩利支天

……ロツキー・マオという少年の存在価値は彼が運良く生まれ持っていた優秀な才能<sup>レアスキル</sup>だけであつた。

『凄いわロツキーちゃんのレアスキル!』

『ああ! ……こんなに優秀な才能を持つて生まれてくれたなんて、流石は僕達が産んだ息子だ。ロツキーは将来きつと管理局でトップエース級のエリート魔導師になつてくれるに違いない!』

両親からの称賛をそのまま自分自身の存在への称賛なんだと真に受けるお調子者幼児であつたロツキーは最初、その称賛を素直に喜んでいた。ロツキーはそのわかりやすい性格故に両親に褒められたレアスキルを友人や知り合いに披露自慢して回り、調子に乗つて自分の住む町に屯つていた近所迷惑な不良集団をそのレアスキルを使つて退治してみせたりして、あつと言う間に町の皆から称賛と羨望を集めていた。

その脚光を浴びて将来を期待される優越感<sup>レアスキル</sup>は堪らなく気持ち良く、天に舞い上がる気分は最高に甘露な御菓子であつたのだが……。

『成績オールE? それは残念だつたわねロツキーちゃん。でも大丈夫よ、塾の成績

が悪くつたつて、あなたのレアスキルは優秀無敵なんですもの。 ロッキーちゃんの輝かしい将来は約束されているわ〜』

『痛つつ〜！ 負けたあぁーっ！ やっぱ凄く強いな、そのレアスキルはさ！ 勝てる気がしないよ』

『ほんとほんと〜。 ロッキー君は勉強も運動も魔法も他全部み〜んなしよばいけど、そのレアスキルだけで最強だね〜』

『割った壺の弁償？ 君は町で噂のレアスキル持ちの天才でしょう？ いいよいいよ、君の素晴らしい才能を活かす将来の経歴をこんな事なんかで傷付けたりしたら、儂が町の皆に責められてしまう。 どうしてもと言うのなら出世払いという事にしといてくれないかい』

その称賛を聴いている内に彼は思った。

——みんなオレのレアスキルの事ばかり褒める……じゃあ “それ以外” は？ オレが褒められるところって……それだけ？

少年は気付いた……気付いてしまった……気付かなければ自分にスポットライトが集められていると勘違いしたまま、ヒーローを気取っていられたのに……。

——レアスキルなんて何の努力もなく最初から運よく持っていただけの物じゃん！

じゃあオレ自身は？ オレ自身には何の価値があるの？

ただの寶石の入れ物……周りはその中身の寶石レアスキルに魅了されていただけで、入れ物ロッキの方には見向きもしていなかった。しかもその寶石は自分で手に入れた物ではなく、ただ最初から運よく持っていただけの物……故にロッキ・マオという存在は寶石の入れ物としての価値しかなく、それを感じた瞬間に自分に浴びせられて来る脚光はただただ虚しいだけのものと成り果てた。

——皆、頼むからいい加減にオレを見てくれよ？ そんななんも話さない石ころレアスキルなんか見てないでさあ……。

それからロッキは「自分の存在価値」を求めるようになった。荒廃した再開発地区に屯っていた大規模な不良グループにレアスキル無しで喧嘩を吹っ掛けて袋叩きにされたり、言葉使いを悪くして語尾に『——でガス』と変な特徴を付けて喋ってみたりに、《ロンフォン流天鳥拳》などという知る人ぞ知らないマイナーな格闘流派に手を出してみたり、勉強も運動も魔法も尽力を尽くして周りの目を「自分」に惹こうととにかく必死に何でも頑張った。何でもいいから『【自分】を見てほしい』……その渴望ねがいのままに……。

『何故レアスキルを使わなかったんだロッキー！ 今日管理局本局主催の一般参加式魔法戦技披露宴で行われた体験模擬戦。あのレアスキルを使っていれば確実に勝てただろう！』

『で、でもそれじゃあ、オレの今までの努力が無駄になるじゃないでガスか!? オレは毎日毎日、ロンフオンシシヨアの元でたくさんたくさん武術の修行をしているっていうのに、それを活かせないんじゃない意味が……』

『……もういいわ。 出て行きなさい! せつかく生まれ持った才能を無駄にして約束された輝かしい将来を棒に振るおうとするだなんて、心底見損なったわ!!』

『そ、そんな……オレはただ……オレの努力を……オレが自分で鍛えたチカラを……オレ自身の事を——』

皆に……ちゃんと見てほしかっただけなのに……その両親からの拒絶は当時たったの六歳だったロツキーの未成熟な心に消えない損傷を与えるには十分であった。

このような経緯があつてロツキー・マオは両親に見捨てられ、暫くロンフオン流の道場で住み込みの鍛練に明け暮れたその二年後に彼の価値観を決定付けた。ある胸糞な出来事を通して特務遊撃支援部隊ロストウィングにその身柄を拾われたのだ。

「オレを……オレを……ツツ」

「うおおおおおつ、これでブツ潰れるオオオーツツ!!」

雲を貫いて文字通りロケットの如くハンマーヘッドのブースターを最大火力で吹かせて地上から一直線に飛翔してやって来たヴィータが情緒不安定に無防備なロツキーの懐に自身の小さな身体を振り入れさせる。ロケットブースターの推進力で振り回



《ラケーテンハンマー》のピックに「くの字」に全身を折れ曲がらせたままのロツキの腹部を刺し付けたままジャイアントスイングの要領でチカラいっぱい五回転程振り回す事で遠心力を更に加え——

「カートリッジ、リロード！ フルドライブ、《ギガントフォルム》ウウウウウウッ!!」  
人間なら肩が壊れてしまうくらいに長い柄を後上に振り被ると同時に再びカートリッジを、今度は二発使用する。更に膨張した魔力が得物に注ぎ込まれてその形状が再び変化……及び、巨きく質量が肥大化した。横幅半径約30m超はある角柱状の巨大鉄槌、それに伴って長い柄も伸長化している。ハンマーヘッドの片側打面に貼り付いたロツキの小さな全身はもはやその巨大な面積に納まり切らずに全身の前面がその広い面積に非常にコミカルな恰好でベツタリと貼り付けられている。この巨大な威容、まさに巨人ギガントハンマーの鉄槌!

「これでとどめだあああああああッ!!」

その巨体を振り抜き出しながら、ヴィータは張り裂けんばかりの裂帛と共に流星の如く地上へと急速降下して行く。小さな紅い騎士に柄を引かれて巨大な質量が天より落下する。

「轟天爆砕——」

紅い流星が地上へと降り注ぐ、騎士を侮辱した痴れ者を巨人の鉄槌で地ごと粉碎せんが



為に――

「――《ギガントシユラク》ウウウウウウウウーッッッッ!!」

粉碎するべき者を貼りつけた面を地に、巨大な質量をヴィータが幼い顔付きを変貌に歪ませる程にありつただけのチカラを入れて振り下ろして叩き付け、天地を激震させる轟音を盛大に鳴り響かせた。

「「「「「きやあああーッッッ!!」」」」」

火山の大噴火の如き激震と轟音、そして爆発するように舞い上がり広大な模擬戦場全体を丸ごと覆い尽くした大量の粉塵と砂煙に戸惑いを禁じ得ず悲鳴をあげたのは六課陣営、精神が未熟なFW陣とシャーリーやルキノ等ロングアーチの女性達だ。荒事に慣れている隊長副隊長達や元航空武装隊員のヴァイスはさすがにみつともない声は出さないが、「さすがにこれはちよつとやり過ぎじゃないかな……」と一切の容赦がまるでないヴィータに表情を引き攣らせている。バトルフィールド中に蔓延した砂煙の中で決定的な一撃を叩き付けたヴィータも確かな勝利を確信した笑みを浮かばせる。

――手応えあつた! ここまで念入りにブツ潰してやりやあ流石に――

そう、ロツキー・マオの小さな身体はこの巨人の鉄槌によつて確かに地に叩き潰された。デバイスが非殺傷設定の為その身体自体は無事だろうが、通常ならこれ程の大質量で遙か上空から地に叩き潰されたならその体内に流れている液体という液体全てを

爆散させて大変グロテスクな死に体が出来上がっていた事だろう。故にこの勝負はこれで決着した――

……筈なのに、これはいったいどういう事だろうか？

「ウウウオ、アチヨオオオオオーツツ!!」

「ぐはっ!!?」

砂煙が晴れていく隙間に覗き見られた光景は衝撃的に予想外にして想定外過ぎにも程があった。大質量に膨張させて地に特大のクレーターを形成した巨大鉄槌の長柄から小さな両手が手放され、自分の背とほぼ同等の高さの少年の拳によつて左頬を殴り

飛ばされてその小さな身体を宙に躍らせるヴィータの姿……砂煙が完全に晴れると同じ時にヴィータは派手に地面を転がり、横倒しに制止した体勢で放心した表情を見上げた視線の正面に立つ、突然現れて自分を殴り飛ばした少年に向けて驚愕を露わにする。そこに奴が五体満足な姿で立っているなど有り得る筈がないと……。

「そんな……バカなっ!? 何で、何でテメエ……っ!!」

まるで生ける亡霊でも目撃してしまったかのように不可解と戦慄を入り混じらせた困惑の眼にその少年と側のクレーターに打ち付けられた巨大戦槌の下敷きになって確かに存在しているロツキーの姿を映し、ヴィータは説明に全くなっていない疑問を震える声で発する。理解不能だ。なら目の前で倒したロツキーの《テイエンテイ天地》と全く相違

ない鉄甲型デバイスを両手に嵌めいて、荒ぶる怒りに視認可能な程の闘気を身から滾らせているこの少年の存在はいったい何だというのだ!?

「使わせたな……テメエ、よくもオレの大嫌いなこのレアスキルを使わせやがったなああああああっ!!」

何故ならこの少年もまたロツキー・マオに他ならなかつたからだ。ヘンテコな言葉

の語尾は無くなり、その身体から立ち昇らせる闘気は真夏の陽炎や砂漠の蜃気楼のように背景と彼自身の輪郭を揺らがせていて、気配は側のクレーターで巨大戦槌に潰されて倒されたロツキーのものと全くの同質……故にそれは経った今、ロツキー・マオという

同じ存在”が奇妙で不可解な事に同次元に二人存在しているという確証であった。

「許さねえ、ふざけんじゃねえっ！　ブン殴つてやる、オレの気が晴れるまで殴りまくつてやるアアアアアアアアアアアアッ!!」

「なっ!!」

未だに理解できない現実に戸惑いつつも起き上がったヴィータにロツキーの慟哭が浴びせられた。鉄槌の騎士を射貫くその視線には底知れぬ憎悪が孕まされていて、瞳からは何に悲しみ嘆いているのか涙が流れ出ている。彼の慟哭に鳴動するかのよう  
に身体から溢れ出る陽炎のような闘気が爆発的に膨張していく。

「ロンフオン流天鳥拳——奥義ッ!!」

カッ！　と眼を見開いて技を繰り出すべく取ったその構えはロンフオン流天鳥拳の基本の戦闘姿勢である。『飛び立つ鷹』を連想させる恰好ではない。直立に立ち、縦になるように前に翳した左腕の手首の横下に右拳を付ける威風堂々とした構え。その姿勢をした直後に彼の存在が何重にもブレては広がり、重なるという奇妙で不可思議な現象が発生。その総てからは例外なくロツキーの気配が感じ取れる故に、それはまるで何人ものロツキーが全て実体をもって其処に存在しているように錯覚させられる。ふと側のクレーターに視線を向ければ巨大戦槌の下敷きになって倒されていたもう一人のロツキーの身体は霧のように消滅していた。

——レアスキルを使つたつて言つたな。いったいどういふ——ツツ!!!

相手に発生している理解困難な現象に困惑するばかりのヴィータだが、能力の全貌を読み解こうとさせる間もなく陽炎の鬨気を纏うロツキーが右拳を振り上げると同時に地を深く陥没させる程の踏み込みをして真つ直ぐ正面から堂々と飛び込んできた。

困惑している状況ではない、考えるよりも今はとにかく真正面から大振りに振るわれて来た拳をどうにか遮つてやる事が先決だ。

「《パンツァーシルト》——ツ！」

攻撃が襲い掛かつて来る正面に展開したベルカ式魔法陣の形容をした三二角トライアングルシルト盾が風纏わせる渾身の太振りで振るうロツキーの鉄拳を遮らんと顕現する。

——こんな大雑把な太振りが奥義だあ？ 一見攻撃の挙動が単純過ぎでちよつと横に身を移動させれば楽勝に躲せそうだが、奴の使つたレアスキルがどういふものなのか解らねー以上は見た目に騙されて油断はできねえ。でもなのはデイバインバスターも防げるこの《パンツァーシルト》な r ——

ヴィータがその刹那にそんな考えを脳裏に巡らせている間にロツキーの右ブローがパンツァーシルトに叩き込まれたその瞬間、彼女にとって本日最大級に驚愕的な事象がヴィータを強襲した。

「——がはあ、あ、あ、つ!!？」

——なん……だとおおっ!!? このガキの殴りがパンツァーシルトにブチ当たった瞬間に、アタシの脇腹にいきなり何か<sup>!!</sup>にブン殴られたみてえな衝撃がっ! ……しかもかなり重め……え……ツツ!!

視認把握できぬ間に唐突と受けた強烈な打撃ダメージに堪らずその衝撃に全身を腹部から側に折らされて猛烈に苦鳴をあげながら体内の胃液を大量に吐き出してしまいういーた。彼女は己の身に受けた理解の範疇を超えた正体不明の攻撃に先程以上の困惑を露わにして眼を大きく見開く程の動揺を走らせた。いったい何が起きたと言うんだ? そのあまりの破壊力を受け止めた為に三角盾の総体積約半分にまで亀裂が入りはしたが、彼女が正面に展開した防<sup>パンツァーシルト</sup>御魔法は見るからにロッキーが繰り出して来ていた拳を防いだ筈だ。なのにいったい何故……何故ういーたは右方向から脇腹に一発の拳打撃を貰っている!? まるで抉り上げられるように宙にその小さな身体を浮かされ、正体不明の攻撃をモロにくらわされた脇腹の打撲痛に眉間を険しくして苦悶を露わに無防備を晒したその瞬間、彼女は極<sup>オ</sup>限<sup>バ</sup>状<sup>レ</sup>態<sup>プ</sup>の知覚加速によって時の流れが停滞した感覚の中で更なる驚愕を目の当たりにする。

「な………に………っ!!?」

これは何の冗談か? クリティカルヒットの大ダメージを受けた苦痛を必死に堪えるういーたの視界全体に“複数人のロッキー”がまるで一人から分身したかのよう

広がって映し出された。周囲全体360度を見回しても全身の輪郭を陽炎のように揺らがせる多数のロツキーが取り囲んで続く左拳をその全員が全く同じ動作モーションを時差皆無に振り被っているのは流石に目の錯覚だと思いたいが、先程と同じようにその全員から感じ取れる気配は例外無しにロツキー・マオ本人のものであるのは間違いない。故に永き古の時代より戦場で鋭く研ぎ澄ましてきた歴戦の騎士の感覚は己の周囲を取り囲んでいる複数のロツキーはその総て例外無しに実体を持ったロツキー・マオ本人だと結論付けていた。

「有り……得ねえっ！ 実体が……分身する……レアスキル……な——」

瞬間、動揺に無防備を晒したままのヴィータに無情にも周囲を包囲する複数のロツキー全員が容赦なく一斉に拳の連打を浴びせて来た。

「「「「ううあたたたた、たたたたたた、あたたたた、たたたた、たたたたたた、たたたた——ツッ!!」「」」」」

「がああああああああああ——っ!!」

まるで大嵐ハリケーンのような複数人同時全包围一斉乱打チ。大粒の大雪崩に飲み込まれたようにヴィータは小さな全身を休みなく鉄甲拳に殴打されて断末魔の絶叫を上げた。非殺傷設定の模擬戦故にこれだけの乱打を数秒間全身に受けたところでたぶん死にはしないだろうが、仮にも幼いゴスロリ少女の出で立ちをしている彼女がエリオと特に差

は見られない歳頃の少年だからとは言え、複数の男に取り囲まれてリンチに晒される光景は非常に痛まし過ぎる事この上なく、外野でそれを目の当たりにした六課陣営一同が顔を青ざめさせて表情を歪むくらいにまで引き攣らせている。幼い胴体には陥没の痕を無数に付けられ、小さな四肢は惨く拉げて、生意気そうながらも可愛らしい顔には殴打の痣が出来ていく。

「うおおあアアアアアアアアアアッ!!!」

「が——あ——あ……ッッ!!!」

そして最後の一撃は阻むパンツァーシルトを怒濤の乱打をもつてステンドガラスのように粉々に破砕した真正面のロッキキーが踏み込んで来て、見るも無残にボロ雑巾と成り果てたヴィータの顎にとどめの右アツパーを全力を籠めて天高くかち上げたのだった。

「《陽炎孔雀・千手拳》——ッッ!!!」

天に覆い出していた分厚い雲海に届いた拳圧で巨大な孔が空いた下でカチ上げた拳を掲げると同時に勝利の雄叫びの如く奥義の名を叫び轟かせる。無念にもチカラ無く宙に放物線を描く鉄槌の騎士の姿を六課陣営側は口を両掌で塞ぐなどをして啞然と、ロストウイング陣営側は歓喜や安堵に呆れなどといった十人十色の表情を浮かべながら見上げていると、奥義の名を言い放った奴以外全てのロッキキーが忽然とその存在を現



世から消失させた。

「――」  
そしてドサリと地面に落下した静謐の中、身を横たえさせた満身創痕の鉄槌の騎士は  
瞼を閉じたままその意識を引き取る……決着だ。

「勝負ありやな。ウチのロッキーの勝ちや」

「……ヴィータ（ちゃん）ッ!!」

ガンマが模擬戦の結果を口にするのとポロ雑巾のような無惨な姿にされた家族に居ても立っても居られないと八神一家全員が一斉にヴィータが気絶して倒れているバトルフィールド内へと駆け出して行く。逸早く駆け寄ったはやてが地に意識を失って倒れるヴィータの頭部を膝に乗せて彼女の安否を非常に心配する焦燥で確認するように介抱し、医務官の資格を持つシャマルがその正面に腰を下ろしてヴィータの受けたダメージを見る。先日の六課壊滅の事もあってぐったりと満身創痕に気絶した大切な小さな家族に今にも泣き出しそうな形相をして必死に呼び掛けるはやての背中にリイン、シグナム、ザフィーラの二人と一匹も囲うように寄り添って安らかに眠っているヴィータの顔を心配そうに覗き込んでいる。

「シャマル、どうや? ヴィータは……ヴィータは大丈夫なん!」

「落ち着いてはやてちゃん。大丈夫よ、ちゃんと非殺傷設定による魔力ダメージの

ノックダウンで気絶してるだけみたいで特に目立った外傷は無いわ」

「そ………そか。 シヤマルがそう言うんなら安心やな………ホンマによかった………」

家族の無事を確認できて心からの安堵を浮かべたはやてにその背中から見守っていた八神家の家族達も真剣に硬く強張らせていた表情を緩ませる。一応模擬戦の規定通りに非殺傷で行ったのだから滅多な事にはならないだろうが、粗暴な雰囲気で見入らない相手を潰すのに手段を選ばなさそうなロストウィングの連中が果たして模擬戦のルールを守るものだろうか？ はやて達はそう彼等に不信を抱いていたので正直不安に思っていたようだが、どうやらそれは杞憂だったみたいである。

「はあつ、はあつ！ ぜえ、ぜえつ！ ……クソツ、チクシヨウでガス！ オレは………オレの存在価値はつ！ ……こんな………こんなアアーツ!!」

そんな彼女達の側で息を取り乱しながら受け入れ難い悔しさに耐え切れず悲嘆するように地面に座り込んで空に泣き叫ぶ、勝負を望まぬ形で勝利したロッキーの無様を、なんだか顎に片手を添えながら興味深そうに見遣るガンマは――

「ほお、勝負に負けず嫌いが揃つとるロストウィングらの中でも特に意地つ張りなあのロッキーが勝負に勝つといて尚、ぎよーさん居る人前であないな不満を盛大にブチ撒けとるやなんて、二年前にあのガキンちよがウチに入隊してきた日に無謀にも部隊長ホスにケンカを売りに行った挙句に散々フルボッコにされて悔し泣き喚いとつたあの時以来や

で。まさかあんな頑なに使いたがらへんかったレアスキルを使わざるを得へん状況までにアイツを追い込むやなんて、あのゴスロリハンマー娘なかなかやるやないか」

「……………えっ!？」

意外にも摸擬戦に敗北したヴィータの事を称賛していたが故になのはは非常に思いも寄らなかつた言葉を耳にしたかのように驚いた表情で彼に視線を向ける。他のロストウィング部隊員を見渡しても仲間の勝利に歓喜している者はいても勝負に負けたヴィータの事を嘲って侮辱しようとする声をあげる人間は誰一人として見当たらない。「せやけど相手が悪かつたなあ、幾ら一騎当千で知られとる夜天の守護騎士とは言っても対人近接戦闘を念頭に置いた戦闘スキル主体な古代ベルカ式の使い手にとつてロツキーのレアスキルは最悪の相性や。《陀羅尼摩利支天》だらにまりしてん、その真髄は『己の成し得る選択肢の可能性』を無数に拡大して『並行世界線に存在しとる数多の己を実体のある幻影として呼び出す』事を可能とする。ニンジャが主人公のマンガとかに出てくる影身なんかにもよー似とるが、このレアスキルのチートさ言うたら顕現させた分身体その全部がアイツ自身の可能性存在——要するに全てがロツキー本体な訳や。せやから例えスキルを使い並行世界の奴を呼び出した直後を突いてスキルを使った奴を一瞬で殺したとしても『呼び出した並行世界のロツキー』の内の一人の存在をこの世界に定着させる事で『ロツキー・マオ』という生命体『を世界に存続させれる……つまりはそ

の一瞬において同時間軸のアイツの可能性を余すことなく全部ブツ潰す事ができへん限りはあのガキンちよを倒す事は絶対に不可能って事なんやで、ホンマ言つてチート過ぎやと思うやろ？」

とガンマは肩を竦めた苦笑いでロツキーが忌み嫌う彼の生まれ持った才能レアスキルについてを説明してくれた。確かにスキルの内容を聴いた限りは戦いに使用するにおいて原則と言える異能だ。何せ使用すれば使用者に可能な限り幾らでも頭数を増やす事のできるうえ、その全ての存在がスキルを使用した本人そのものであるが為に某ニンジャ漫画に出てくる影分身の術のような本物は一人だけという弱点もなく刹那の時にその内の一人だけでも生存してさえすれば、この世界にスキル使用者の存在権を生存している可能性存在に引き継いで存続させられると言うのだから、余程の規格外が相手でない限りはまず戦闘で敗北する事はないだろう。

しかしそれ故に生まれ持ったその才能レアスキルが優秀過ぎたロツキーは両親や生まれ育った町の友人や知人達に自分の存在価値をその宝石レアスキルの入れ物としか認識してもらえなかった……「摩利支天」は他者の目に己の存在を揺らがせて捉えさせぬ陽炎……自分自身としての存在価値を過去に大切だった人達に認めて欲しくてもただ運良く生まれ持っていただけに過ぎない宝石の入れ物としてしか見てもらえなかった彼にとつてその名は皮肉と言つてもいいところだ。頼むから皆『オレ自分』を見てほしい』、そんなささや

かな渴望<sup>ねがい</sup>の為に必死にチカラを付けようと幾ら努力してもその全ては真夏の陽炎や砂漠の蜃気楼の如く誰からの目にも儂い虚像にしか映ってくれない……それはなんて嘆かわしく虚しい幼少期だったのだろうか？

魔導師として破格の才能を持って生まれ、それでいて良き両親や数多くの友人知人に恵まれて幼少期を育つてこれたなにはその途方もない彼の辛さや孤独感を想像し理解する事など到底不可能だ。どうしようもなくガンマ達の許にトボトボと歩いて外野に出て行くロツキーに同情する視線を向けてやる他はできない事をなんとも歯痒く思うなのは達……と、そこへ――

「すまなかつたな、ウチの連中が色々とお前達の気を悪くさせてしまつて」

「「「「うわあぁっ!?!」「」」」」

さり気無くなのは達とガンマの間にぬうつと割り込んで来たのは身長2m超は有るであろう巨漢であつた。ガチガチに硬く角張らせた頭髮に眉と唇が太く厳つい顔付きで律儀にも身内の無礼を謝罪してきた筋骨隆々な巨軀を持つその青年が放つ存在的威圧感を前にして六課陣営一同は思わず仰天に身を引いてしまう。唐突に現れて視界全体を塞いだ巨漢の山脈のように広くゴツゴツとした背中に一驚させられたガンマが猛烈な勢いで文句を飛ばした。

「おいゴリ！ いきなし間に入つてくんや、驚くやろが!!」

「ぬ？　　そうなのか？」

「当たり前や！　アンタみたいなゴツツイゴリラ顔の大男が何の前触れも無く突然横から現れたら、そら驚くわ！　ホラ見てみい？　アンタのデカブツっぷりを眼前にして高町達も超が頭に三つ程付けられそうなくらいにドン引きしとるやろが！」

「そ、そうか。　それはすまなかつた……」

驚きに身を引かせているのは達を指さして機関銃のようにガミガミと苦情を言ってくるガンマに気圧され、両掌を自分の頭部の両脇上に翳してしどろもどろするゴリラ顔の巨漢。　敵つくも巨軀の威圧感を持っているのに反して何所か生真面目な印象という彼のギャップになのは達も思わず戸惑っていた表情を変えて苦笑いをしてしまう。

「あ、ははは……なんだか毒気を抜かれちゃったね、フェイトちゃん」

「うん、そうだね。　考えてみればロストウイング<sup>等</sup>の事はまだよく知っていないんだし、これから徐々に私達が彼等に歩み寄って互いの事を知り合っていけばいいか……」

ガンマとゴリラ顔の巨漢が微笑ましくやり取りしている様を愉快に笑っているロストウイングの隊員達を眺めていると今はそう割り切っておいた方が今後と彼等と良い関係を築いていけそうだと、なのはとフェイトは互いに思った。　そう、今はこの模擬戦で彼等に自分達の事を認めてもらう為に全力を尽くして彼等にぶつかると第一だ。

「ふむ。　不届千万ならず者ばかりかと思っていたが、なかなか見所のある者も居た

ようだ」

其処に人型へと変身したザファイラを先頭に気絶したままのヴィータを伴って八神一家が揃って戻る。ガンマの猛烈な抗議にたじろぎの姿勢でいたゴリラ顔の青年が振り返り、感嘆の声を自分に掛けてきた人型のザファイラに正面から向き合う。筋骨隆々の長身巨軀で厳つい漢二人が互いに視線を衝突させ、緊迫した空気を醸し出す。

「我は最後の夜天の主八神はやての僕——《盾の守護獣》ザファイラと申す」

「特務遊撃支援部隊ロストウイング、《アームストロング小隊》を率いる隊長を務めている《ゴートン・リライラス》だ。以後よろしく頼む」

「フツ、少々淡々としているようだが他と比較して良い印象だ。しかもその大柄な剛健に似合う頑丈な肉体と実戦で鍛え上げられたであろう強靱な剛腕を合わせ持っている」と視得る」

歴史ある闘技場において数々の戦いに勝利を重ねてきた剣闘士グラディエーターの如き猛者の闘志を静かに滾らせるゴートンに真つ向から不敵の闘志を激突させるザファイラ。ゴリゴリマッチョな厳つい野郎二人……なんだかむさ苦しい顔合わせだが衝突させたその視線は互いに極上の獲物を見るような獣のように鋭い。

「面白い、次鋒は我が出るとしよう。そなた、気に入っただ。是非とも拳を交えた

」

「……いいだろう。この《鋼猿金剛》ハガンコンゴウの鋼拳、その身でたつぷりと味わうといい、夜天の盾の守護獣ッ」

見た目麗しく叙情的な魔法少女達を差し置いて、次の対戦カの組み合わせは決まった……。



## 男と男の戦い。ザファイラVSゴートン

機動六課VSロストウイングの団体模擬試合。激戦の末、初戦はロストウイング陣営の先鋒を務めたロッキー・マオの高位レアスキル《陀羅尼摩利支天》によって六課陣営の先鋒に出たヴィータが惜しくも逆転負けを喫してしまった。

己自身の価値とチカラを示したいが為、過去の悲劇から忌避して自ら封印していたレアスキルを解禁した事で、顕現させた幾多の並行世界の自分自身の分け身と己自身が相手の全包围から一斉乱撃を浴びせるロッキーの必殺技《陽炎孔雀・千手拳》を防ぐ術無く袋叩きにされてしまったヴィータはその小さな全身に限なく打撲痕を付けられ、見るも痛ましく惨い姿にされてノックアウトされてしまう。その結果、意識を飛ばして気を失い派手に倒されたヴィータは彼女の大切な家族であるはやて達により甲斐甲斐しく介抱され、今は六課陣営側の応援席として仮設してある外野のベンチに寝かされている。

はやての膝枕で安心したようにスヤスヤと眠る鉄槌の騎士の無念と彼女の仇をとつてくれという六課の同胞達の声援を背中に背負い、六課陣営の次鋒としていざ威風堂々と戦場へと立った夜天の主の《盾の守護獣》八神ザファイラ。これに距離二十メー

バトルフィールド

トルを挟んで相対するのは特務遊撃支援部隊ロストウイング随一の屈強な巨体を持ち、この部隊隊舎の防衛総指揮権と実働小隊の一隊《アームストロング小隊》の隊長を任せられている炯眼の士の偉丈夫——《鋼猿金剛》ハガンコンゴウゴートン・リライラスであった。

「うわあ、二人共凄い大きい……」

「キョクくるる〜」

「ザフィーラさんも背が高い方だけけれど、相手の人はそれより頭一つ分大きく見えるし、身体に付いた筋肉量も圧倒的で、まるで御伽噺に出てくる巨人みたいですよ……」

「ああ。両者共になんと重厚な威圧を放つ。これだけ距離が離れた外野から眺めているだけなのに、こちらが圧倒されてしまうな」

「うん、あの大きさは圧巻だよ。あの二人の巨体を前にしたら、執務官の任務で過去数年様々な凶悪次元犯罪者の殺意と対峙してきた場数と経験がある私でも足が竦んで動けなくなっちゃうかもしれない」

フェイト達ライトニング分隊をはじめとして六課陣営側の人間全員が戦意を漲らせて睨み合うザフィーラとゴートンの巨体が放つ威圧感に気圧されていた。彼女達の身内には二人のような長身筋肉漢マッチョマンはあまり多くないが故、両雄がその巨大な凶体を向かい合わせて互いに無言の闘志をぶつけ合う様を目の当たりにして怯み気を吞まれるのは仕方がないと言えるだろう。片や屈強な体格を持つ男手には事は欠いていないで

あろうガンマ達ロストウィング陣営側は多少慣れてはいる為フェイト達程気圧されてはいないが、やはりこれ程までに厳しい筋骨隆々の偉丈夫同士が面と向かって突き合やす光景にはどうにも威容な緊迫感が拭えない様子を見せている。

「かーっ！ こりやまた随分とガチムチでむさっ苦しい組み合わせの試合になったもんやなあ」

「しゃああつ！ 漢おとしのケンカだ、一発かましてやれ、ゴリさん!!」

「うええつ。 エロい身体をした美少女揃いの機動六課の中に何であんなガチムチ使い魔が混じってるの？ 折角今日は試合中のフェイトちゃんやなのはちゃん達の乳揺れやパンチラ観察で目の保養に務める気でいたのに、あの犬コロ野郎とゴリのようなガチムチ筋肉達磨野郎同士の男臭いど突き合いなんか観たくなかったなあ……ガツクシ」

「かっかっか！ それは残念だったなあ性欲大魔王。 それはさておき、何度見ても身体のデカさ以上にゴツデカくて目が惹かれるな、ゴリのあのデバイスはよお」

「むほお。 アレにはきつとイ○ド人もびつくり☆」

特に周りの視線が釘付けになったのはゴートンの右腕を丸ごと覆い尽くしても尚持主の巨体と同等の全長サイズを持ち、黒漆に光る無機質な塗装と肉厚の重質量という圧倒的な威容をした「機重鉄腕ヘヴィアイアーム」だった。黒鉄で覆われ分厚く隆起した右肩には極太の鉄杭のような円柱型の出っ張りが飛び出していて、それもまたその巨大な鉄腕が放つ存在感

を一際立たせている。その巨体に比例した巨大な手の指にあたる五隅からはまるで突騎槍ランスの如く如何なる物をも刺し穿つように鋭利に尖らせた円錐状の爪先が長たく伸びて煌く、ゴートン・リライラス専用の熊の鉤爪型アームドバイス——

「——銘は伝承に伝わる獐猛なる巨獣にあやかり、『ベヒモス』と名付けている。果たしてこの鉄腕がお前に受けられるか？ 盾の守護獣ザフィーラよ」

「無論だ。最後の夜天の主を守護する盾として、受けてたとう、『鋼猿金剛』ハガンコンゴウゴートン・リライラス」

相手から挑発を受け、ザフィーラは真つ向からその挑発に自信満々と応じて文字通り獲物に牙を剥く肉食獣のような鋭い戦意を対峙するゴートンに向けて戦闘態勢に移行、激しく迸る魔力光を発し出した。同時にゴートンもその戦意に応えるように猛々しい闘気と魔力を解放して全身に漲らせ、その重質量をもとせすべヒモスを嵌めた右腕を勢いよく肩の後ろに持ち上げて、弓矢のように引き絞った。両者共、激突する用意は万端だ。あとは試合を始める合図を下ろせば二人の男の拳が激突する。

「……よし、んじやあ今度はアンタが試合開始の合図役をやりいや、高町」

「え、わたしが……やっつていいの？」

「初戦はロスロストウイング陣営側のワイがやっつたんやから、次は六課陣営側ソクの人間がやるんが公平フェアつちゆうもんやろ。細かい事はええから早ようやれや、このウストラト



女々しいから変えろなどと土壇場で後ろからロストウイング陣営側と外野の野次馬共に滅茶苦茶な批判罵倒を浴びせられた。その所為で一度下ろそうとした右手を止めるを得なかつた。

——うう、このハゲチャビンヤンキースども。人に合図を任せておいて、好き勝手に文句をおおーっ!!

先程の事で一瞬でもこの最低不良軍団に気を許そうと考えた自分が恥ずかしい。なのは湧き上がった苛立ちをなんとか抑えてから再度言葉を言われた通りに直して

「いざ、尋常に——始めッツ!!」

彼女らしからぬ敵かで拳の効いた声が響き渡ると共に試合開始の合図がようやく振り下ろされた。

「ゆくぞおおおおッ!!」

「ぬうんッ!」

同時にザフィーラとゴートンが地を揺るがす裂帛の踏み込みと共に渾身の鉄拳を正面衝突させる。自分の身の丈に匹敵する程巨大な重量を持った機重鉄腕ベヒモスを、装着した右腕の腕力のみで軽々と豪快に振るってくる相手への感心を示して狼の鋭い犬歯を一瞬覗かせつつザフィーラはその巨大な鋼爪の威力に負けじと己の自慢の右拳でそれ



う猛烈な衝撃波が周囲を薙ぎ払っていく……バトルフィールドのご真ん中、ゴートンとザフィーラはまるで機関砲から乱射される無数の弾丸のよう幾重もの残像を生じさせる程の超速度で機重鉄腕と拳を五月雨式に繰り出し、乱舞を打ち合っていく。その光景を六課陣営側の外野応援席で啞然と眺めているルキノやアルト等のような常人の眼には両者の間で幾重もの火花が継続的に弾けて二人が繰り出す無数の拳を隔てる壁と為っているかのように映っている事だろう。それ程までの高速で二人は激しく拳の連打を打ち合っているのだ。

——筋力と巨体は魔法戦の役に立たないからどうした？俺はもう二度と……己の至らなさ”になど、決して負けん！

そんな一瞬の気の緩みも許されない高速の打ち合いの世界の中で、《鋼猿金剛》ハガンコンゴウゴートン・リライラスは自分がその決意をするに至った過去の後悔を思い返していた。

そう、先程鉄槌の騎士を墜としたロツキー・マオと同じくこの男もまた、過去に癒えぬ傷を負って未来へ羽ばたく翼をもがれている……。



ゴートン・リライラスは特務遊撃支援部隊ロストウイング創設当初の初期メンバーの一人であった。

ロストウイングの構成員は部隊加入以前の生まれや職場に特殊な経歴を持った者が大半を締めている中で、彼は珍しく普通に管理世界出身の平民だった。

『——皆さんはじめまして、ゴートンです。この度は“魔導師ランクC”を取得し、本日この部隊に配属する事となりました。恥ずかしながら自分は保有魔力量と魔法適正には恵まれなかった為、魔力身体強化と単純な防御魔法ぐらいしか魔法が使用できませんが、この通り腕力と身体の頑丈さには自信があります。この取り柄を活かしていち早く部隊の役に立てるよう努力していきたいと思えますので、これから宜しくお願います』

入局当初、ゴートンは十代前半にして190cm台の長身を持ったガタイの良い体格をしていた為、“その巨体の頑丈さと腕つぶしの強さは前線で身体を張る事で活かす事

ができる戦闘職向きなのだろう」という何処にでもありふれた動機で、最初は正規の武装隊に志願して所属していた平凡な局員だったのだが……。

『オラ、邪魔だ新入り！ お前のデカイ図体が邪魔で前方の敵が見えないんだよ!!』

『す、すみません。直ぐにdぐああつ!!』

『ちよ、ちよつと!!? いきなりこつちの射線塞いで来ないでよね！ 折角チャージした

砲撃魔法を誤射しちやつたじゃないの!!』

実戦演習でも——

『コラ新入り！ 一人だけもう五周も遅れてんぞ！ 何やってんだもつと速く走れッ

!!』

『は、はい……はー、はー！ ぜえ、ぜえ……うつぶ』

『まったく、鈍臭せえつたらありやしねえ。これだから筋肉バカはダメなんだ!』

日常に行う体力強化トレーニングでも——

『図体デカイ奴が前に座るな！ 後部席の前が見えなくて邪魔だ!』

実習講義でも——

『狭い場所や前に立たれると無駄にデカイ図体が味方の邪魔になる。無駄な筋肉付けている所為で反応と行動が鈍くて遅い。おまけにロクに攻撃や補助の魔法の適性無しで、唯一マシンにできる防御と身体能力強化魔法も肝心な保有総合魔力量が平凡々だか

ら出せる強度は並居る一兵卒のそれとほぼ変わりないときたもんだ。ハンツ』

『巨大な岩石を身体魔力強化を使わなくても持ち上げられる筋力が強み』と言つてもねえ。そんなの魔導師ならCランクの筋力強化魔法を使えば誰でも簡単に熟せる事だし、魔法の世界じゃ大して役に立たないわよ』

『多少頑丈なだけが取り柄か……それだけで魔導師の戦場を生き残れると思つていたと？ 貴様、武装隊を舐めているのか！』

そして現場研修においても、ゴートンは他人より巨大な体格とそれ故の鈍重さの所為で度々と部隊の足を引いてしまい、次第に周りからお荷物扱いされるようになっていったのだつた……。

魔力さえ有れば身体能力強化魔法を使う事で一般のトップアスリートを軽く上回らせる事が可能な魔導師達にとつて多少頑丈なだけの鈍重な巨漢など味方に必要とされておらず、寧ろその巨体によつて味方の行動と連携の妨げになる邪魔者。そう役立たずのレットルを貼られるのに時間は掛からず、ゴートンは武装隊配属から僅か一月の間に同僚達の信頼と評価を地の底に落としていた。

そんなある雨の日、やつとの及第点でようやく部隊研修を終える事ができたゴートンは隊の前線に組み込まれ、管理局の魔導師として初陣任務に出る事となつた。

『今回はこの廃棄工場に潜伏している違法魔導師どもを一人残らず捕縛する事が目標と

なる！ 奴等の中にはAAランク以上の高位魔導師が数名か紛れ込んでいるとの情報もある故、敵の抵抗も熾烈を極めるだろうと予想されるが、勇敢なる武装隊の諸君であるならば必ずやこの任を成し遂げられると信じている！ 各員、健闘を祈る!!」

地上部隊のある第一管理世界ミッドチルダのとある廃棄工場を根城にしていた違法魔導師集団の制圧任務……その際に犯人グループ確保に乗り込む班を外でサポートする通信後方支援班を護る最終防衛ラインにゴートンは配置されていた。

建物内に潜む敵魔導師が窓枠から狙撃し難い廃工場正面の入り口や窓の陰になる位置に部隊が仮設した簡易テントの中で端末を軽やかな指使いダイビングで操作して廃工場内部の見取り図を空間モニターインカムに映し出し、緑の点で表示されている突入班員達の現在地と照らし合わせ、通信機を通じて現場の突入班を赤い点で表示される敵魔導師と有利に交戦できそうな位置ポイントへと誘導している、武装隊の女性通信士オペレーター——《プリエ・ナネット》。

『ハリス二等陸士、その付近のボイラー室扉前に敵魔導師が二名潜んでいるようです。壁脇の通気ダクトがボイラー室の天井に通じていますから、上手く利用すれば敵の背後を突いて逆に奇襲できます』

ポリウムのある金髪がフワリと揺れるのが特徴的なプリエは部隊にお荷物扱いされて周りから蔑まれていたゴートンの事を気に掛けて応援してくれていた唯一人の同僚であった。攻撃と前線での連携では未だに役に立てない自分でも、せめて彼女の壁

になるくらいならこの鈍重な巨体が役に立ってくれるだろうと……否、必ず、砕けぬ壁  
“ になって守ってみせると、ゴートンはこの時思っていた……だが。

『——っ!!? こっちのレーダーを阻害している魔導ジャマーが……しまった!!? リライ  
ラス君、危ないッ!!』

『なに——ぐあああああつ!!?』

他者の視覚から使用者の全身を認識不能にする光学迷彩魔法を利用してこちらの後  
方支援へと闇討ちを仕掛けて来た敵魔導師の砲撃による不意打ち……プリエがそれに  
気付いてテントの外の自分へと回避を呼び掛けてくるまでそれに気付く事が出来な  
かったゴートンは反応して身構える間もなく敵の砲撃の直撃を受けてしまい、無念にも  
その場に倒れて意識を失ってしまうのだった。

その後事件は突入班が敵のリーダーを無力化して拘束した事による敵の統率崩壊と  
別部隊の援軍到着によって廃棄工場に立て籠っていた違法魔導師達が全員制圧された  
事で解決され幕を閉じたのだった……敵魔導師の闇討ち砲撃を受けて倒れたゴートン  
は重症は受けたものの幸い人並み以上に頑丈な身体のお蔭で命に別状は無かったが、後  
方支援部隊を護る壁役であったゴートンが呆気なく倒されてしまった所為で、プリエを  
はじめとするゴートンの所属武装隊の後方支援班ほぼ全員が、その闇討ちを仕掛けてき  
た敵魔導師の手によって殺されてしまったのであった……。

その後、三ヶ月のリハビリを得て重症から回復したゴートンは事件の大失態を追及されて武装隊に復帰する事なく、当時「デイビット・マクラウド」とある問題児のエイズ“の二人によって創設されたばかりの非公式特例部隊——《特務遊撃支援部隊ロス・ウイング》へと左遷処分されたのであった……。

「うおおおおおおおっ!!」

殴る、殴る、殴る殴る殴るッ！ 一心不乱に嵐のように、二人の男が猛然と雄叫びを上げて互いの岩山のように立派な肉体を豪雨の如き鉄拳の連打で殴り合う。相手に一撃打ち込む度に周囲の空気が蹴散らされ、台風のような衝撃波が天地を激震させる。

「そこやつ！ そのままいてこませええ、ザファイラーアアーツ！」

「頑張つてヴィータちゃんの仇を取つて下さいですう！」

「二対一の決闘でこれ以上我らヴォルケンリッターが無様を晒す訳にはいかんぞ！」

「いったれゴリ！ コロセヤーツ!!」

「ガンマさん!? これ模擬試合ですからコロセはないですよ」

「ヒヤツハーツ、これだよこれ。 やつば漢おとしの戦いつてのは何と言つてもガチンコの殴

り合いが王道つてもんよっ！ いいぞもつとやれ！ オラオラそこだーーツ!!」

小細工抜きで真つ向から激しい殴り合いに興じる大の男二人の勇猛さに感化され、外野の両陣營の声援も温度を上げて一気に盛り上がり熱狂していく。信頼する仲間達の応援を受ければ俄然とチカラになるものだ。二人の男は益々気合いを入れて拳の打ち込みを更に重く、加速させていく。

——あの時は「己が未熟で至らなかつた所為」でナネット先輩達を護る事ができなかつた……あの時の無念と後悔はとてもじゃないが忘れられるものではない。『お前

が下手を打って敵の不意打ちに倒された所為で、掛け替えのなかった多くの仲間が殺されたんだ!』という古巣の元同僚達や犠牲になった元同僚の遺族から浴びせられた糾弾や罵倒も。成す術なく敵の砲撃に撃たれて気を失う直前に微かに目にしたナネット先輩が必死に倒れる俺に手を伸ばして悲愴に涙を流していた光景も……次に目覚めた時、あの直後に俺を倒した敵魔導師の手によってナネット先輩が殺害されたという悲報を聞いて、みつともなく泣き喚いたあの慚愧に堪えぬ程の無念と悲痛! そして何よりも、一度護ると心より誓った人を護れずに、いとも容易く敵の不意打ちなどに倒された脆弱極まりない俺自身への恥と激怒をッ!

鉄盾の如く堅い相手の肉体を右腕に嵌めた機重鉄腕で殴りつけた瞬間に腕に生じる強烈な反動と負荷、その機重鉄腕を一度も下ろす事なく継続的且つ超高速でひたすらに振るいまくる毎に比例して尋常ない早さで削られていく右腕筋力の消耗、そして同じように相手の硬く重い拳が己の肉体の至る部位に打ち込まれる度に感じ取る痛烈な痛みと体内に蓄積していくダメージ——などなどといった様々な要素が要求される超近接での殴り合いの中では一瞬の雑念が大きな隙となってしまう。

「何か考え事をしているようだが、拳を交える最中には徒ぞ!」

ゴートンが打ち込む速度が刹那の一瞬鈍りを見せた僅かな隙……古よりの歴戦の戦士であるザフィーラはこれを見逃さない。若干速度と威力が落ちた一撃を上を流し



払い、それによつて相手の懐が大きく空いたところをザフィーラは足底を陥没させて小クレーターを形成する程にチカラ強く踏み込み、肘を十分に引き絞つて繰り出した渾身のボディーブローを炸裂させた。

「ふんツツ!!」

——「させん! もう『至らぬ己』などに負けるものか。摸擬試合とはいえ、今の俺の後ろにはロストウィングの仲間達がいる。この背中に守るべき仲間が居るのなら、俺は奴等が見ている前で二度と倒れるわけにはいかない……故に——」

「俺は……『鋼のように屈強に、決して碎けぬ男になりたい』——ツ!!」

ゴートン・リライラスという男はその渴望を果たす為に、何者のあらゆる攻撃や天の厄災をも防ぎ、跳ね返す、鋼と金剛の皮膚を纏う《鋼猿金剛》ハガンコンゴウになつたのだ。

「《金剛反射装甲》ツツツ!!」  
リアクティブアーマー

「な——に……ツツツ?!」

渾身の威力を籠めた絶拳が的の広いゴートンの鳩尾に叩き込まれた直後——ザフィーラのその左拳から腕がまるで猛スピードで追突事故を起こした車両のように、ぐちゃぐちゃに変な方向に曲がつて拉げていた。目の前の奴は今、何をした? いったい何が起こつたと言うのだ? 無惨なまでにぐにやぐにやに拉げきつた自分の左腕を相手の鳩尾から引き抜いて原因も解らず身に起きた負傷を前に直ぐには理解が追い付





の隙を完璧に突いた完全無防備にクリティカルヒットさせた決定的な必殺だった。

その筈なのに、その会心の決定打はゴートンの巨体を地に倒すどころか少しも揺るがす事さえ出来なかった。ザフィーラが言い知れぬ困惑を露わに睨み付けた目の前ではゴートンが何ともない無機質な表情で平然としている様を見せている。そればかりか相手の人体の急所を殴り付けたザフィーラの左拳の方が、どういう訳か逆に接続する腕ごと見るも無惨に拉げ曲がって潰されていたのだから訳が分からない。ザフィーラはとにかく使い物にならなくなった左腕を右手で力強く押さえつけ痛覚を徐々に麻痺させる事で激痛を和らげ、ゴートンへ疑問を投げつける。

「貴殿……いったい今、何をやった……ッ!?」

「攻撃反射防衛結界魔法《金剛反射装甲》……文字通り金剛石に等しい硬度の防衛結界で膜のように全身を蔽い、外からの攻撃や危害を高い防御力をもって遮ると同時に、結界に付加させた“指向性攻撃反射効果”により受けた攻撃の接触時にそれが持つ攻撃方向作用を強制的に反転させ、跳ね返す……もう二度と、護るべき仲間を背中にして敵に倒される事などしないように……決して砕けぬ鋼と金剛の皮膚を持つ《鋼猿金剛》と成る誓いを果たす為に、俺がこの部隊で編み出した“奥の手”だ」

右腕の機重鉄腕を豪快に振り上げて構え直しながらゴートンが抑揚なく語ったのは、たった今ザフィーラの左腕を潰したのは攻撃を反射する防衛結界魔法で自身が編み出

した「奥の手」なのだという事と、それを修得するに至った漠然な経緯だった。

要するに、ゴートンが直前に自身の全体を金剛石並に硬い膜状の魔法結界で蔽い、その上からザフィーラの左拳が勢いよく殴り付けられた結果、彼の拳の攻撃力では金剛石並の堅牢さを持ったその魔法結界を砕くには足らずに阻まれ、更にはその面に拳が接触したと同時に結界の付属効果で攻撃の指向を無理矢理逆方向に反射させられた事で、運動の向きが拳に連接する腕の関節構造的に曲げられない方向へと強制的に曲げられた結果、骨が折れ拉げてぐちゃぐちゃになってしまったと言う仕組みだ。

加えて補足をすれば、非殺傷設定にしても魔法効果の二次的要因による「物理的被害」だけは防げない。その事はこの場に居る全員が理解している常識であるが故に、今のザフィーラの負傷に対して誰もゴートンの反則を訴えたりはできない。

「お前の実力とチカラは、確かに俺より一回りも二回りも上の領域に在るんだろう。

だが、それだけではこの《鋼猿金剛》ハガンコンゴウの鋼の皮膚は——砕けんツ！」  
「ぬっ!？」

半端不意打ち気味にゴートンが右腕の機重鉄腕を豪快に振り被って距離を詰めて来る。対するザフィーラは先程よりはマシになったがまだ己の負傷した左腕の痛感に慣れていなかっただけで、反応はできたが対応が大きく鈍り、不格好にも真正面から暴風を纏って突貫してきたその鉄拳を受けざるを得なかつた。



それを零距离でもとにくらってしまったザフィーラは黒い爆炎を頭から上半身までを濛々と埋もれさせて背中一直線に吹っ飛ばされてしまった。はやく 主の悲鳴が外野から聴こえてきた事で、まだ負けてなるものかと奮起し、場外に飛び出す前に地表に両脚を伸ばして踏ん張りを利かせる事で急ブレーキを掛ける。足の裏が地面にガリガリと擦り削られ、気高き人狼の血で約100mの赤道がバトルフィールド半面に敷かれたその終点で再びド派手な大爆発が巻き起こった。そして爆風の余波が更に後方のフィールド外野線を越えた先に広大と生い茂る雪林の木々を蹴散らして、その最奥まで放射状に爆進して行った。

「ひええええええええーッ!!」

「気を遣わずとも、なんて凄まじい……破壊力なんでしょうか……」

「どうやら相手のデバイスに付いてたパイルバンカーは一定の強さ以上の衝撃値を加えると、作動して射出される先端に『接触発動式簡易爆裂魔法』の術式を仕込んでいたみたいだね……」

「渾身の一撃を叩き込むと同時に相手に零距离の爆裂魔法を炸裂させるギミックを搭載したデバイスだなんて……クッ！ 敵ながら私のデバイス技師としての浪漫感をよくも擦ってくれますね……」

「いやいやいや！ なのはさんもフィニーノも感心してる場合じゃねえよ！ いったい

ザフィーラの旦那はどうなった？　なのはさんのラウンドシールドよりも堅い旦那のあの障壁がああも簡単になぶつ壊されて、余波で後ろの森まで丸ごと……あ、あんなのまともにくらつたら幾ら機動六課随一の防御力を持つザフィーラの旦那でも、さすがに……」

外野の六課陣営側はゴートンが機重鉄腕ベシモスの隠しギミックを使用して炸裂させた最大火力の必殺技——《パイルブロウ》の文字通り爆発的な破壊力を目の当たりにして大変圧倒されていた。　ヴァイスがテンパリながらツツコミしているように、六課随一の防御力を誇るザフィーラが展開した障壁を一撃でいとも容易く粉碎した挙句、二重仕掛けで発動させた零距離爆裂魔法はザフィーラほどの巨躯を紙も同然に吹っ飛ばしたどころか全長約50平方キロメートル奥まで模擬戦場外に広がっていた雪林を中央一直線に爆破して大変見通しの良い大道路を開通させたときたものだから、その威力を前目が飛び出ても無理はない。　なのはでも魔力最大収束フルチャージさせたエクセリオンバスターでも撃たなければこの破壊規模は到底出せないだろう……それ程の大技を零距离でもろに喰らったザフィーラの安否が危ぶまれたが。

「いや、その心配は無用だ。　あれを見てみる」

ヴァイス達の動揺の声を取り鎮めてシグナムが指差したのは、ゴートンのパイルブロウを受けてザフィーラが大きく吹っ飛ばされてきた、約100mの赤道の終点先——



「ぬう……我とした事が、つい抜かってしまったな……」

先程の大爆発によって連鎖的に発生した爆煙が色濃く其処一面を覆い尽くしていたところが晴れ、そこに潰れた左腕を庇いながら全身を黒焦げにしたザフィーラが辛うじて無事な姿で立っていた。

「ザフィーラ……よかった、なんとか無事そうや……」

「あ……ははは……。さ、流星は<sup>八神部隊長</sup>夜天の主の守護騎士。あんな破壊力をまともに受けておいて、さつき潰された左腕以外は殆ど無傷で済むだなんて……」

「なに、当然だろう。いかに奴等ロストウイングが精強であろうと、我ら<sup>ヴォルケンリッター</sup>夜天の主の守護騎士が誇る鉄壁の盾をそう易々と碎けはしないさ」

「でもあの左腕を庇っていて、流星にノーダメージとはいかないみたい」

「そうだね。幾らザフィーラさんが頑丈でも、あの酷い怪我だと自慢の防御力は本来の性能を発揮するのは難しいと思う。正直に言って長期戦は厳しいかな……」

彼の主であるはやてを筆頭に、ザフィーラの健在を見ては安堵やら驚きやら、負傷を抱えながらも相手の強烈な一撃に耐えきった彼の事を誇らし気にしたり、冷静に状態を視て今後の戦局を分析したりして、六課陣営側は皆それぞれ心嬉し気な様相を呈していた。しかしそんな彼女達の安堵にガンマが水を差してくる。

「成程、噂通り大した硬さとタフさやなあのだヤロー。せやけど——」

気を抜くのはまだ早い、戦局の主導権はまだ鋼猿金剛にある。爆煙が晴れてザ

フィーラの無事を確認するや否や、相手の態勢が整う前にゴートンは右腕の機重鉄腕を肩の上に豪快に振り上げて戦車の如く地を重々と踏み鳴らし、爆ぜるが如く突貫。

「容赦せんで！ ハアアアアアッ!!」

「ぐぬうッ!!」

そして如何なるものをも粉碎する暴威を纏い、相手との距離を詰めたと同時に突き放った剛鉄爪はまさに戦車砲弾だった。言葉通り、もう鋼猿金剛は一切容赦はしない。鋭く風を切り裂き爪尖に円錐状の衝撃波を生じさせて迫る重烈な攻撃を、手負いの獣が正面きつて捌ききるのは流石に難しく、ザフィーラは咄嗟にまだ動く右腕でゴートの爪突を一瞬引き受けたのは大きく跳び退く事で衝撃を和らげて回避するが、逸らされた機重鉄腕の暴威が空気を伝播して猛烈な波濤となり、豪風の如き衝撃波と化して周囲の自然に烈々たる破壊を齎していく。間一髪巻き込まれる直前に魔力強化を施した後ろ脚で地を強く蹴り宙へと逃れた。

「途轍もない破壊力だな……たったの二振りですべて戦場全体にまともに踏める足場が無くなってしまう有り様とは、恐れ入った。其方のその鉄腕、まさに古き伝承に伝わりし破壊獣の名を冠するに相応しいと言える」

ザフィーラは眼下を見下ろし、地上の惨状を目の当たりに目を丸くする……見渡す限

り隙間なく隆起と陥没と捲れ上がった土層でバトルフィールドはまるで爆撃機で大空襲を受けた跡のように荒れ果てている。兵共が夢の跡。もし刹那の判断を誤って先程の衝撃波に巻き込まれていたらと思うと額から流した汗が止まらない。しかしそれ程に相手のチカラが大したものである事が裏付けられ、故に同時に背後へ跳躍してきた、この地上の惨状を作り出した張本人へ「見事だ」と惜しまぬ称賛を送った。

「こっちの攻勢でそんな余裕そうに騎士の礼儀を尽くされると、なんだか豪く嘗められているように感じて、少しムカツときたぞ」

「フツ、それはすまない。何分、我やシグナムは誠マコトに腕の立つ相手に対し、戦いの最中でもない敬意を払ってしまう性分なのだ。許せ」

「ハハツ、別にそのくらいはいいさ。だが、褒められたからと言って攻めの手を少しでも緩めると思ったら、大間違いだッ！」

両者が距離を詰める合間に少ない遣り取りを交わし合う事で一息吐くと、互いに標高9000m超というメルクーリア連峰山頂の少ない酸素を限界まで肺に取り込んで、そのまま高速の連打を御見舞いし合う。両腕を満足に繰り出せるゴートンの怒濤ラッシュに対して右腕一本しか使えないザフィーラはその右腕を盾にゲリラ豪雨のように猛烈と飛んで来る相手の連続パンチを防ぎ、或いは巧みに流していなしつつも、普段の彼はあまり使わない蹴り技を使って応戦していく。だがしかし…。

——甘いぞ《盾の守護獣》！ 片腕が潰されているにも拘らず、それでも両腕五体満足な俺の高速連撃を辛うじて受けきり、尚且つ反撃できる程の体捌きとは、流石は古代ベルカの名高き猛者だと感服する。だがそれでも——

「——そんなザマでは、この《鋼猿金剛》<sup>ハガンコンゴウ</sup>の皮膚は絶対に砕けぬぞオオー——」

落下しながらの高速の空中格闘戦を激しく繰り広げた末、荒れ果てたバトルフィールド上へと着地した両者は同時に旋風巻き起こす威力を乗せた回し蹴りを衝突させ、足下の土を捲る突風の如き衝撃で互いに大きく後方へ弾かれる。凡そ10mの距離が開き、両者は拳と機重鉄腕を振り上げて猛然と相手へ再度の突進。歩が前進する度に巻き上がる砂煙を強靱な男の肉体で左右に引き裂きながら瞬く間に接近した両者は同時に振り上げた拳を打ち出し、助走で威力を乗せた会心の一撃を正面衝突させる。

それがあまりにも強力な拳<sup>エネルギ</sup>威<sup>ベヒモス</sup>同士の激突だった為か、衝突したザフィーラの右拳とゴートンの鉄拳の接触面に激しく螺旋渦巻くような小烈風<sup>ストーム</sup>が生じた。直後の瞬間、まるで密封された容器に容量の限界を超える水量が流し込まれて破裂するかの如くそれが爆発的に急膨張し、大の男二人の腕力をもつともせず両者の拳を左右に弾くように押し返した為に、二人の巨体は大きく背中を仰け反らせた。

「ぐぬぬぬっ、負けぬ！」

それでもザフィーラは執念で足下を強く踏みしめて地に脚を刺し止めた事で体勢を

崩す事なく、大きく体勢を崩しているゴートンに次の一撃を渾身を込めて打ち込もうとする。それは完璧に相手の無防備を突いた決定的なものだったが……しかし——

「——ッ!!」

己の拳が相手の肉体に直撃するまさにその直前で鈍色の薄い魔力膜がゴートンの全身に被われた為にザフィーラは双眸を見開いて条件反射的に振るつた右拳を止めてしまふ。

「すううー、ふんッ!!」

「がはあっ!!」

その硬直を狙っていたのか、ゴートンが後ろに倒れかけていた上体を強靱な腰のバネを利用して弓の弦を弾くように一気に引き起こし、強烈なヘッドバットを落としてザフィーラの脳天を地面に叩き付けた。

外野のロストウイング陣営側からは野郎共の歓声が、機動六課陣営側からは少女達の悲鳴が上がる中、ゴートンは間髪入れずに構わず足下に突っ伏させたザフィーラの腹部をトーキックで蹴り飛ばし、彼の筋骨隆々の肉体質量が宙に大きな放物線を描く。先程ゴートンのパイルブロウの余波で破壊された雪林とは逆方向の場外へと墜ちるとザフィーラの巨軀を土地が受け止めて生じた巨大な衝撃が周囲の木々に振動伝播され、林に蔽い被さっていた積雪がドサドサドサアアア！ という音を立てて一斉に剥がれ落

ちた。更にはそれで舞い上がった大量の粉雪煙が剥げた林を包み隠してしまう。

「よっしやあつ、やったか?」

「……いや、まだや」

「ビスマルクが立てたそのフラグ通り、ガンマの言った否定通り、潰れた左腕以外は五体満足のザファイラが立ち込める粉雪煙の中に空洞を突き空けてミサイルのように待ち構えるゴートンへと一直線に突撃飛来。その猛々しい雄姿を見た外野のはやて達が「ほつ……」と安堵の息を吐く。だがそれも一瞬の束の間、ザファイラは三度相手の全身を包み込んだ鈍色の魔力膜を前に右拳を相手の顔面へ叩き込むのを躊躇つてしまい、逆にザファイラがゴートンのデバイスを嵌めていない左拳を顔面にモロに深く減り込まされて真横に殴り倒され、その勢いのまま地面に分厚い皮膚をガリガリと削り取られた。それでもザファイラは焼けるような摩擦痛に歯を食いしばり、相手から30m程離れたところで右手の受け身を使って強制停止させると共に透かさず立ち上がる。

「ぬおおおおおおおーッ!」

相手に追撃する間を与えまいとして凄まじい気迫の雄叫びを上げて突進を繰り返すザファイラ。だが鈍色の魔力膜を纏うゴートンにまともな攻撃を打ち込む事を頑なに躊躇つてしまい、何度突撃しても滅多打ちにされて最後には派手に殴り飛ばされて鍛

え抜かれた立派な肉体が地面によって削られていく。

どんな威力の高い攻撃をも遮って丸ごとそのまま跳ね返してしまうという《鋼猿金剛》ハガシコンゴウの鋼の皮膚を前に夜天の主を守護する盾を司る人狼は文字通り手も足も出せず、サンドバッグにされるがままバトルフィールドに次々と彼の気高き血で赤い道線が引かれていく……この一方的で凄惨な戦況を冷静に観ているには、幾ら数多の死線を乗り越えてきた歴戦の魔導師とてまだ二十にも満たない年若き乙女達の精神にはとてもじゃないが耐え難いものだった。

「そんな……バカな。 一対一の戦いなら絶対無敵と言われている、あの八神部隊長秘蔵の守護騎士の一人であるザファイラさんが……まるで手も足も出ないだなんて……ッ！」

「相手の人が使っているあの攻撃反射防御結界魔法、凄まじく高い強度と効力発揮能力を持つているみたいだね……どうにかして打ち破る術を考えないと、このままザファイラさんは……」

「確か【金剛反射装甲】って言ってたっけ？　「リアクティブイアーマー」って名前からして、恐らくは戦車なんかのそれと同じように、魔力膜の上にもう何枚か薄い魔力膜を覆い被せる事で衝撃負荷を大幅軽減させる仕組みなんだと思う。　そうする事で直撃した攻撃で中の身に及ぶ被害をより最小限に塞ぎ止め、同時に砕けた極薄の魔力膜の破片

で柔軟に受け止める事で威力を軽減せず攻撃を反射できる……といった感じかな？」

「御明察や」

フエイトが口にした分析を盗み聞きしていたガンマが感心を示してそれに追加説明を加える。

「ゴリの《金剛反射装甲》リアクティブピアマーは、たとえ強力な結界破壊効果を持つとる高町のスターライトでも壊せへんし、確実にその悪魔的な破壊力と結界破壊効果ごとそつくりそのまま撥ね返してくるやろな。あの魔法はゴリがロス此トウイング知を何モンからも護りきる為、僅かな防御結界魔法の才能をフルに試行錯誤して開発した難攻不落の鉄壁で、《鋼猿金剛》ハガンコンゴウの二つ名を象徴しとるアイツの魂さかい」

「ナウなヤングなピチピチギヤルのオネーチャン達にはダサく思う言い方だと思うけど、「両腕を潰す覚悟」も見せられないような甘ちゃんじゃあ、この先の戦いのレベルだとソツコーでバイビーするねるねーる☆」

「つたりめーだろ。オレらのロストウイングを絶対に護ると腹決めて編み出したつう、あの鋼の反射防御結界魔法にはゴリさんの漢の魂が籠められてんだ。あんな御利口な戦術理論を優先して自分の腕二本すら捨てる根性もねえような犬コロなんかに破れる訳ねえんだよ！」

攻撃すれば問答無用でそのまま威力が身に跳ね返されてくる為、迂闊に手が出せず攻



めあぐねているザフィーラの事を「覚悟が無い」だの「根性無し」だのと見縊るように捲し立ててくる不躰千万なロストウイングの不良共に対し、はやて達八神家が聞き捨てならないとばかりに眼尻をピクピクと小刻みに震えさせて不快と憤りを露わにする。大切な家族の事をこうも舐められては黙ってなどいられない。

「アンタら……さつきから黙って聞いていれば、随分と私の自慢の家族に対してふざけた事を抜かしてくれるやないか。ええ加減にせえよッ！ 大体、攻撃したら全部反射される事が分つてて攻撃するアホやトンチキが何所におるかいな？」

「はやてちゃん言う通りですう！ ヴィータちゃんの事もザフィーラの事も、バカにするなんて許しません！ それに貴方達つて、やつぱり見た目通りバカなんですかあ？

【両腕を潰す覚悟】だなんてどう考えても馬鹿げています。そもそも戦術的に考えたつて普通、両腕潰しちやつたら余計に不利になるじゃないですか」

「機動六課の主任医師として、何よりも八神家の一員として、これ以上ザフィーラが負傷するのは認められません。本当だつたら彼の左腕が負傷した時点で試合を止めに入るべきだつたけれども、先鋒で負けたヴィータちゃんの仇を絶対に取るのだという彼の決意を無下にはできなかつたわ。私達も同じ気持ちだから、ザフィーラには勝つてほしい。もちろん無理をして傷付いてほしくはないし、これ以上危険な状態になつたら今度こそ試合にストップを掛ける。けれども守護騎士わたしたちの中で誰よりも【守護の意志】

を強く心に持つている盾の守護獣に「覚悟が無い」だなんて言わせないわ！　ねえ、シグナム」

「……そうだな」

夜天の主の守護騎士の誇り高さと絆を信じてザフィーラを擁護するように言ったシヤマルに同意を求められたシグナムが口数少なく相槌を打つ。ベルカの騎士の矜持と覚悟を最も誇りに持ち、それを貶す発言を無視する事などは守護騎士の中で一番でないであろう筈の《烈火の将》は意外にも冷静であった。彼女は淡々と組ませた両腕の上にフェイト以上にポリウム大な双丘を大胆に乗せ、毅然とした目線をバトルフィールド内に向けている。

——このままやられっぱなしで倒されるお前ではないだろうか？　我ら誇り高き夜天の主の守護騎士ヴォルケンリッター、その中でも誰かを守護する事に懸けては随一とする盾の守護獣たるお前が、守護への覚悟を侮られて何の一矢報いず終わる筈がない。信じているぞ、ザフィーラ！

その確かな信頼を向けた眼差し先では、ザフィーラがゴートンの全身を覆う《金剛反射装甲》の所為で手が出せず防戦一方になりながらも相手の反射結界を破る術を見極めようと冷静に観察しつつ立ち回り、孤軍奮闘していた。

彼の眼はまだ諦めてはいない。ゴートンが太い右腕を豪快に振り上げ、抉る様に突

き出してきた機重鉄腕の爪突を障壁で防ぐが、先程の焼き増しのよう反動でデバイスに外付けされたパイルバンカーが作動し零距离で鋼鉄の手甲から射出された鉄杭が機動六課最硬を誇る障壁を穿ち貫くと同時に杭先に刻み込まれた簡易爆裂魔法術式が発動。何もかもを爆砕する圧倒的な暴威が荒れ果てたバトルフィールドの地表諸共ザフィーラの巨体を豪快に吹っ飛ばす。

流石に歴戦の守護騎士ともあろう者が二度も同じ轍を踏む事はなく、ザフィーラは咄嗟に空中で身を翻して即座に体勢を直し相手から約40m離れた場所へ着地成功。

芸術点が付くなら余裕で十点満点は堅いだろうが、外野から盛大な拍手が贈られる間も待たずザフィーラは勢いよく振り返って魔力を纏わせた右拳を突き放つ。すると纏っていた魔力が突き出されたザフィーラの右拳から解離して大砲の如く撃ち出され、空気を貫く一瞬の内に大技後の硬直で体勢を崩した状態のゴートンに見事直撃した。だがしかし、次の瞬間直撃した筈の魔力の弾丸が目にも留まらぬ高速で跳ね返されて来て、それがザフィーラの右頬を掠り切って飛んで行った。

——ぬう……やはり遠距離攻撃も反射されるか……ならば、これならどうだ！

「縛れ、《鋼の軛》っ!!」

背後で流れ弾が先日の六課襲撃戦でファングの魔拳にバキボキに砕かれて全治四ヶ月とされた腹部に命中したヴァイスがベンチから転げ落ちて地を芋虫のようにのた打

ち回っているのには目もくれず、ザフィーラは続けざまに拘束魔法を行使する。今度  
はこっちの番だと言うように超へビー級の重量で大きな地響きを踏み鳴らしながら  
真つ直ぐ突進を仕掛けて来るゴートンの進攻上に敷き詰めて行く手を阻むように出現  
させた幾つものベルカ式の魔法陣より魔力の鎖が射出されてゴートンの巨軀を滅多刺  
しにして生け捕りにせんとする。攻撃性のない拘束捕縛用のスキルならば反射でき  
ないだろうと予測して差し向けた《鋼の軛》だったが――

「無駄だ。ふんっ!」

ゴートンの全身を覆っている鈍色の魔力膜に触れた途端、虚しくも魔力の鎖は一本残  
らず音を立てて粉々に砕け散る結果に終わってしまう。

――くっ! どうやら攻撃的実害性の有無など関係無いらしいな。外から指向性  
を持つて触れたモノは何であれど問答無用で弾き返してくるというのか、小賢しいッ!  
ザフィーラは実に忌々しそうに苦虫を噛み潰した。如何なる効果を持つ攻撃や妨  
害も一切合切反射してくる防御結界を全身に纏いながら動けるだなんて、インチキ効果  
もいい加減にしやがれ!

しかし、まさに暴れる類人猿<sup>キ</sup>巨大怪獣<sup>グ</sup>の如き威圧感と重量の地響きを鳴らして一直線  
に距離を詰めて来たゴートンの機重鉄腕突騎<sup>ラン</sup>槍突<sup>ス</sup>きを重心移動により最小限の動きで  
躲しながらも、その隙を突いて反撃を打ち込んだりしたものなら問答無用で反射されて



ゴートン・リライラスという台風の暴威を間近に受けているザフィーラは堪ったものではなかった。雑に放たれてくる攻撃は障壁でなんとか防げはするし、大半は威力を出すのに大振り気味で飛んで来る為に動体視力を強化せずとも見切れる程の攻撃速度なので一流の戦闘者なら回避し続けるのは決して難しくはない。だが、相手の猛攻が激し過ぎる上に一撃一撃がとにかく重く、障壁や無事な右腕で防御する度にその反動が全身を隈なく打ち震えさせてくるから正直耐えるに苦しい。極めつけは相手の全身に纏わり付いている《金剛反射装甲》がある所為で迂闊に反撃できないときたものだから、もう八方塞がりと言っていいだろう。百年以上もの間、魔導書によって何度も転生を繰り返し数多の戦場を潜り抜けてきた歴戦のヴォルケンリッターの盾の守護獣たるザフィーラとて、幾ら何でもこんなのお手上げだ。

「どうしたこんなものかっ！ まさかもう降参だと言うんじゃないだろうな？ だとしたら拍子抜けもいいところだ！」

そう言つて宙に跳び上がったゴートンが右腕の機重鉄腕を宛ら大型重機のパイルドライバーのように地突きしてきたのを咄嗟に飛び込み前転で緊急回避したザフィーラだったが、その一瞬前に彼が居た地面がベヒモスの鉄爪によって穿たれた直後に爆砕された地面の破片が忽ち散弾と化して付近に飛び散った。爆心地点の真横に転がったザフィーラは当然のように散弾の巻き添えを受け、全身の至る箇所如雨霰の如く土の十

イフが突き刺さり、強烈な爆風によって大きく吹っ飛ばされてしまう。

「ぐはああっ!!」

「ザファイラアアツ!!」

まるで針鼠のような惨い有り様を晒して地に叩き付けられた守護獣に守るべき主の悲痛極まった呼び声が山彦に反響して鳴り響く。地に仰向けに倒れたまま外野に向けた眼に映ったのは、これ以上もう止めてくれと泣き叫びそうに揺らがせた眼で家族じぶんの倒れた醜態から背けずに真っ直ぐと見据えてこの身の傷を心配してくれている最も大切な御主人はやての顔だった。

「もう……ええ。十分や。無理して勝たへんでもええから……これ以上、怪我せん  
といて……なあ……」

「我が……あ……るじ……ぐぬおおおつ!」

しかし、はやての右眼から頬を伝って流れ落ちた一滴の涙を目の当たりにし、ザフィーラは奮起するばかりの唸りを上げて立ち上がった。まだ負けられない、絶対に守るべき掛け替えのないものがあるのはこちらだって同じなのだ。

「ふっ、まだ立つか……やはり俺と似ているな。だが——」

容赦はしない。そう言わんばかりにゴートンは地を踏み抜く程の脚力で蹴り、爆発のように蹴り上げた土砂を背中にして爆進。身体に蓄積したダメージでよろめくザ

ファイラに機重鉄腕で全力のブローを御見舞いする。

突き放ちの出の際に互いの間に立ちはだかつていた空気の壁を巨大な鉄爪が穿つと同時に上空を覆っていた曇天にまで威力が伝わり落雷のような轟音と共に直径50m程の大孔が空く。

その直後に文字通り一瞬にして天変地異を引き起こした剛鉄腕が、最大硬度に固めてザファイラの前面に展開された障壁に突き刺さり、しかし一秒持たず爆散するように砕け散つて成す術なくザファイラの巨体は紙のように軽く吹き転がされる。

最早激戦で凹凸だらけとなったバトルフィールドの上を何度も大きくバウンドして外野の大樹に激突した。

「この《金剛反射装甲》の前にはどうしようもないだろう？　しかしこの程度のもので拳を出せなくなるなどとは——そんなザマで何かを守るだなどと、笑わせるな!!」

殺傷設定だったら細胞ミクロ単位で全身が粉々になりかねない超過ダメージと副次的な要因による外傷で全身血塗れの満身創痍になりながらザファイラは一瞬飛びかけた意識に根気という名の鞭を打つ事で叩き起こす。「まだだ!」と不屈の闘志を絶やさず立ち上がってくるザファイラの精神に追い打ちをかけてゴートンが喝破を入れる。

「どうしようもないというのは残酷だ、耐えようもないほどに」

すると今度は、戦いの最中に説教などふざけるな黙らせてやる、と吠え掛かるように



ザフィーラが立ち上がり様に付けた助走を使って一秒も間もなく相手との距離を踏破すると、仕返しとばかりに全力で右ブローを振り被る。だが、やはりどうしてもゴートンが纏う金剛反射装甲を前に手を出すのを止めてしまう。

止むを得ず近接距離で立ち止まり、両者は雁首を突き合わせて睨み合う姿勢に。

「誰かを守りたい」という独り善がりの願いななど脆弱だ、世界の悪意と強大な邪竜デカラの前には……そう……これは呪いだ!!」

まるで呪言のように忌々しく耳にこびりついてくる相手の言葉を、歯を食いしばって傾聴する以外に選択の余地がないザフィーラの顎に無情にもゴートンの左アッパーが痛烈に打ち上げられる。

「そのどうしようもないという呪いを打ち払う為の鋼の皮膚を、俺はこのロストウイングという奈落に墜ちた底で決意を持って必死に磨きあげた! もう二度と何者の悪意にも屈しないように、大事な仲間を俺の目の前で邪竜などに踏み潰させぬように!!」

曇天にぽつかりと空いた大孔が、胃の中の液を吐き出させられて背中を丸め汚い放物線が無様に描くザフィーラを嘲笑うように見下ろす中、宙を舞った彼の背中に向けてゴートンが己の過去の後悔と決意を拳に血が滲んで震えさせる程強く握り締めて怨念を呪うように語り叫ぶ。

あの時未熟だった自分は守るとい意志も覚悟もチカラも全てが中途半端で、何の夢

も目標も持たずただなんとなく自分に向いてそうだったからという嘗めた理由で魔導師の戦場に立ち仲間の足を引つ張つて、拳句に優しくしてくれた人にどこまでも甘えていただけの木偶の坊だった。だから守れず肝心な時に敵の不意打ちに倒されて……大切だった人を殺されてしまった。喪失の業を背負い、「誰かを守る」というのは独り善がりではいけないと知り、奈落の底へ墜ちた。そして強く渴望し叫んだのだ、『鋼のように屈強に、決して砕けぬ男になりたい』と、護るべき大切な仲間を背中にしたら決して倒されぬ、『鋼猿金剛』に成つてみせると誓い、メルクーリア連峰の過酷な自然環境下で愚直に努力を積み重ね、そして仲間に降りかかる全ての火を弾き返す金剛の皮膚——《金剛反射装甲》リアクティブアーマーを手に入れたのだ。

「お前にこの決意の重さが理解できるか？ 前に立ち誰かの壁となる孤独が！ チカラ及ばず脆くも崩れてしまう無念が！ 倒れる最中に背中へ垣間見た、必ず守つてやる筈だった人が悪意の石榴に心臓を刺し貫かれる光景の悪夢が！ 悪夢から覚めた時には既に守りたかった人が棺桶の中で永遠の眠りに就いてしまつていた絶望が！ 己が無様に倒された所為で大切な仲間を守れなかつた屈辱と慟哭が!!」

それが分らぬと言うのならばいいだろう、最早これまでだ。今や岩山地帯と見紛う程に酷く歪曲凹凸とした荒野と成り果てたバトルフィールドを魔力強化した脚力による踏み出しで丸ごと陥没させ、巨大隕石落下痕へと変貌させた斜面へ背中から落下して



守りたい」という独り善がりの願いなど脆弱？ ……いいだろう、よくぞ言った。ならば是非も無い。大切な主や六課の仲間達を守護する盾としての使命を背負ったこの双肩に懸けて、見縊りきった貴様のその問いに応えてみせようぞ！ 最後の夜天の主”八神はやてが守護騎士の一騎《盾の守護獣》ザファイーラの名に懸けて――

「――悔るな若造……その苦痛を、決意の重さを、我が解らぬ筈など………ないっ!!」

着地の瞬間、巨獣ベレモスの破壊鉄爪が己の腸を抉り貫く前に、今まで戦略的に引き下げた左拳を不退転の決意をありつけたけ込めた撃鉄へと変え――

「な………にッ!? まさかお前、その左腕で」

「ぬおおおおおおおおおおおおッ!!」

鋼猿金剛の無敵の皮膚に全力で叩き付け、グシャリという粘土が潰れるような音が鳴った……。

## 拳と悔し涙と不変の渴望（イジ）

ぐしやりという熟れたトマトが潰れるような鈍い音が鳴った途端、模擬戦場全体の時が停止したかのようにその空間の流れが遅延した。その瞬間に外野で観戦していたはやて達機動六課陣営全員がそれぞれ衝撃と悲痛が入り交じった反応を露わにし出し、たつた今バトルフィールド内で戦っている仲間のザフィーラが行った血迷ったとしか思えない行動とその結果として彼の身に及んだ因果応報の惨状を目の当たりにして、凝視か目を逸らすか悲鳴をあげるなどをして皆大きな動揺を見せている。

「グフ……ッ!?!」

それは先程、如何なる攻撃をも跳ね返してしまうゴートンの《リアクティブアーマー金剛反射装甲》によって惨く拉げ潰されていたザフィーラの左腕が再度、余計に酷く潰されたからだだった。

彼は相手の挑発に乗って無事である右拳ではなく、あろう事か使い物にならない程重傷だった左拳で再びゴートンが纏う無敵の皮膚を全力で殴打したのだ。「ザフィーラアアアツ！」と家臣かぞくの名を嘆き叫んで盛大な慟哭を露わにしている彼の主はや信てじられないという動揺の目で前で起こった仲間の惨状に悲痛な面持ちで啞然としている六課の仲間達は無論の事、ロストウイング陣営と彼の捨て身の殴撃をその身で受け止めた



れられるのと互角のものと言えるだろう。一端の戦士であろうとも死にたくなる程耐え難いはずだ。ゴートンはそう非常に信じ難い瞠目で、そんな激痛を遂ぞ耐えきつて元に戻した左腕をだらりとチカラなくぶら下げながらも、まだ光を失っていない目でこつちを睨みつけてきている、目の前のザフィーラの姿に戦慄を隠せない。

「お前………いつたい何を………ッ!!?」

その問いを投げかける前に再びザフィーラの絶拳がゴートンの腹部に炸裂する。しかもまた重体の左拳でだ。

「——がはあッ!!」

正気・の沙汰ではない。腹を突き上げられて大量の胃液を嘔吐し、ゴートンはそういった驚愕の表情を露わにしながら、堪らず凹まされた腹部を抱えつつよろよろと数歩後退した。ザフィーラは打撃インパクトの一点に魔力を集中し、極小攻撃範囲にとどまるがブレイカブレイカーの束魔法を上回る貫通力を発揮していた。その結果、ゴートンが纏っていた《金剛反射装甲》をザフィーラの左拳が見事打ち貫き、遂に《鋼猿金剛》ハガンコンゴウの無敵の皮膚に傷を入れたのだった。

「ぐぬあ”あ”あ”あ”………ッ!!」

無論、その成果の代償は無情凄惨極まりなく返って来た。鋼の皮膚を砕いたズタバ口の左拳から血塗れの左上腕までに走る血管という血管が反射抵抗により生じた内部

圧力によって破裂し、守護獣の気高き鮮血が花を咲かせて弾け飛ぶ。もはや血の一滴まで残らず流れ出尽くしたと言わんばかりに鮮血に染め上げられた左腕を庇い、三度齧された地獄のような激痛に苛まれてザフィーラは惨憺たる姿を晒した。彼が狂い哭く姿にゴートンは目に果てしない動揺を浮かべてひたすら絶句しながら立ち尽くし、頭の中は相手のしてきたイカレた無謀に対する狼狽の感情で訳が解らなくなっていた。

「ぜえ、ぜえ……もはや使い物にならぬ左腕など……はあ、はあ……何度潰れようと……構うものか……ッ!!」

「馬鹿な……お前、どうしてそこまでして?」

「言つた……はあ、はあ……咎だ。貴様の持つ【守護の意志】……守れなかった苦痛……守るべき大切な者を背中には二度と倒れぬ」という重き決意……ゴホッ……我とて……それは同じだッ!!」

己の片腕を犠牲にしてまでこの勝負を諦めないと思も絶え絶えに言ってくるザフィーラにゴートンはその理由を問ひ質した。それに対してザフィーラは全身の疲労困憊を強靱な意志で捻じ伏せて、宇宙の果てまで届けと言わんばかりに吼え返した。自分にだって大切な者を守れなかった時はあつただのと、その無念も後悔の苦しみも無論知っている、不倒の決意をしているのは貴様だけだと思ふなど!

「ぬおおオオオオオッ!」



「くっ!!」

ザフィーラは咆哮とともにゴートンの纏う鈍色の魔力膜へ左拳の連打を浴びせていく。腕の骨と筋肉を魔力で強固に固める事で《金剛反射装甲》の反射効果による骨折ダメージを最小限に抑え、強引に鋼猿金剛が纏う無敵の皮膚を削り取っていく持久格闘戦法に出た。

「ぐぬぬッ!!? この程度オオオーツツ!!」

だがそれで反射効果による負傷度は大幅に軽減されたものの、打撃する度に腕に掛かる反射負荷は軽減されるどころか、硬く固めた事で更に増大してしまっている。これでは諸刃の剣も同然。だが、ザフィーラは一撃鈍色の魔力膜へ左拳を打ち込む毎に左腕へ齎される特大の激痛を気迫をもって休みなく堪え続け、ゴートンへ打ち込む連打の勢いを決して衰えさせようとしない。彼の左腕はもう血を流し過ぎて黒に近いまで真っ青となっており、細胞耐久度は危険値を越えしまっている。これ以上酷使すればやがて細胞の壊死がはじまり、シヤマルのクラーヴイントでも治癒不可となつて、ザフィーラの左腕は完全に使い物にならなくなってしまうかもしれない。だがそれでも――

「片腕一本ごとき、失つて構うものか! 我はこれ以上、掛け替えのない主や仲間達を傷付けさせぬと……そして、それら皆が大事にするものを、何者だろうと決して奪わせは

せぬと誓ったのだツ!!」

そう雄々しく吼え猛るザフィーラの気迫を受けてゴートンは返す言葉も出せず気圧されるがまま相手の発してくる熱き情念の言葉を聴き流せずに殴られるがまま立ち竦んでしまう。依然として彼の全身に纏う無敵の鈍色の魔力膜が相手の拳を阻み返しているお蔭で一発一発受けるダメージは微々たるもので、その度に打ち込まれるザフィーラの左腕には猛烈な負荷が掛かっていく。先程潰れた時に内部圧力で破裂した箇所の間々から噴出した血が流れ出過ぎてしまい、とうに激痛を越えた猛烈な悪寒に変わってザフィーラの左腕の感覚は失われつつある。にも拘らず、金剛反射装甲の金剛石並の硬度を執念で上回り、一撃打ち込む毎に徐々に威力が上乘せられて、今や相手の巨体を一発殴打する毎の衝撃が50cmほど仰け反らせて、背後へ貫通した波濤がその先の景色を粉碎していくレベルに達していた。

限界を超えてもこれ程の闘志を捻り出すザフィーラの信念は古代歴戦たる夜天の守護騎士としての矜持だけではない。彼にもゴートンと同じように、守るべき大切なものを守れなかった無念と後悔が過去に幾度もあったのだ。

今から十年前、当時まだ九歳になったばかりの八神はやての手にあつた夜天の……否、その時は遙か何代も前の悪しき心を持つていた魔導書の主が己の欲望を満たす為に使うべくして自分の都合で魔導書を改悪した所為で、その後の魔導書に選ばれた持主達

の命を蝕み喰らい、世界を滅ぼして転生を繰り返すという破滅のテンプレートを強制的に実行し続けるバグプログラムに侵されていて、【闇の書】という名の呪いの魔導書だった。【烈火の将シグナム】【鉄槌の騎士ヴィータ】【湖の騎士シヤマル】、そして【盾の守護獣ザフィーラ】の四人は魔導書の持主に忠実に仕えて守護する騎士プログラム《ヴォルケンリッター》であり、まだ九歳の幼い少女だったはやてにも今までの主と同じように変わらなず彼女の忠実なる僕しもべとして仕えるべくして彼等は召喚された。しかし、物心付く前に両親を事故で亡くし、《ギル・グレアム》という後見人から毎月仕送りされて来る援助金で独り天涯孤独に生活を過すごしてきた新たな幼き主は、守護騎士達を自分の願望を叶える為の道具として従わせる事を拒んだのだ。そればかりか前代未聞な事に、はやてはザフィーラ達を自分と対等な家族として暖かく迎え入れ、彼等に“人”として生きる自由を与えたのだった。

だがしかし、闇の書の破滅の呪いはそんな心優しき幼き主の命をも容赦なく蝕み、放っておけばはやての未来は昏き闇に閉ざされてしまうのも時間の問題だった。当然、遙か過去より歴先代の魔導書の主達に人ならざる道具や奴隷として扱われてきた自分等に“人”としての生き方を与えてくれたはやての命を闇の書の破滅の呪いの生け贄にされてしまう事などザフィーラ達守護騎士一同が見過ごせる筈もなく、幼き主の恩義に報いる為には彼女の命を破滅の呪いから解き放つべくして、今まで歴代の主の願望を

叶える為に行ってきたように魔導書にインストールされていた「魔力蒐集」機能を使って、人間の魔導師を含む次元世界中の高い魔力を持つ生物等から魔力を奪い取って闇の書に蒐集していった。

その中でヴィータが、当時ははやとと同じく九歳の少女魔導師であった高町なのはの持つ巨大な魔力量に目を付けて彼女を襲撃した出来事を皮切りに、彼女と彼女の友人であるフェイトや彼女達二人の身を保護していた時空管理局らに因縁を付けられてしまつて、それからののは達には蒐集活動を幾度も妨害されて対峙を繰り返したりしたが、その世界でクリスマスと呼ばれている聖夜を迎える直前にやつとの思いで主の願いを叶えるシステムを使えるあと一歩手前までの魔力量を闇の書に蒐集するまでに至つた。

だがしかし……。

「嘗て我らは、まだ幼子だつた我が主の命を希望への未来へと繋ぐ為、突然我らの味方を申し出てきた『仮面の男』二人の手を借りていた」

相手の鋼の皮膚を繰り返し殴り続けながら、ザフィーラは当時の出来事を語り出す。その語気は淡々としたものだが、憎々しげな決まりの悪さを孕んでいる。無論、それはその内容が彼にとつて忘れられない程に忌まわしい過ちと後悔の記憶を掘り返すものだからに他ならない。

「だが彼奴らの正体が、我が幼き主の身を闇の書ごと永久凍結封印する企てを目論んで

いた《ギル・グレアム》の使い魔である《リーゼロッテ》と《リーゼアリア》——「リーゼ姉妹」であるという事実には、我らは愚かにも最後まで誰一人として気付く事が出来ず、闇の書完成間近にして予定調和の如くリーゼ姉妹に裏切られた。そして不覚にも我ら守護騎士は四人共々リーゼ姉妹の手に掛かり、魔法プログラム体である我らのこの身そのものを闇の書を完成させる最後の生け贄とされてしまい、我ら守護騎士が絶対に守るべき大切な幼き主——八神はやての意識は絶望の闇の内へと墮とされてしまったのだ。主の守護騎士である我ら四人が……否、他の何者よりも、主の身の盾となるべき使命を持つ我自身が一人、不甲斐なかつたばかりにな……ッ！」

「ザファイラ……」

「あの時の事、まだ気にしていたの……」

ザファイラは闇の書事件ではやてが一度闇の書の呪いに墮とさせてしまった事を自分一人の所為にし、この十年の間その時の自責を背負い続けて深く苦しみ足掻いていた事を白状した。今思い出しても心底悔しくて仕方がないという感情を剥き出しにして歯茎から出血させるほどに強く歯を噛み締めるザファイラの後悔に塗れた昔語りを聞いて外野のはやて達も彼の心中を察して感傷を漏らしていた。しかしそうしてやつたところであの時リーゼ姉妹に傷付けられた《盾の守護獣》のプライドに塩を塗るだけだ。不意を突かれたとは言え、彼はあの時、守護獣として守るべき幼き主を守つ

てやれなかつたのだから。

「高町達の奮戦のお蔭で、暴走状態で表へ出てきた魔導書の管制人格——《リインフォー・アインス》の中に潜んでいた闇の書の永続破滅転生プログラム——《ナハトヴァール》を取り除いてどうにか消去する事ができた。我が主も闇の書の呪いから解放された事で徐々に現在のような健康体を取り戻す事ができた。無論、我々守護騎士一同も主の命を希望の未来へと繋ぐという悲願を果たせた事に大変歓喜したものだ、主を救ったのは紛れもなく高町とテスタロッサが暴走したアインスを相手に必死に戦って止めた活躍によるものが大きく、我ら守護騎士はその間〔闇の書〕の中に囚われ何もできなかった悔しさを噛み締めた」

そう淡々と語りながらも既に五十回以上はゴートンの《金剛反射装甲》リアクティブアーマーを殴り続けているザフィーラの左腕からは、先ほどまで大量に流れ出ていた血がそろそろ尽きかけて、殴る度に少ない血滴がブシュブシュと小刻みに飛び散らせている。反射効果で折れてしまわぬように魔力強化で骨と関節を固定しているものの、《金剛反射装甲》の堅牢な魔法結界に衝突させて生じる反動と反射効果の負荷によるダメージの蓄積は確実に彼の左腕を蝕んでいる。尚も仁王立ちで無抵抗にザフィーラに殴打を浴びせられ続けながらゴートンは無言で相手の悲壮な過去語りを聴き続ける。

「魔導書の転生プログラムが破壊された為にアインスが先に逝き、魔導書のバグが取り

除かれた事で元の夜天の魔導書としての姿を取り戻した経緯を得て、*「闇の書事件」*が終結した後も、改めて我ら夜天の主の守護騎士一同はリーゼ姉妹に後れを取った不足を痛感した。尊き主と大切な仲間達の進む希望の未来を守護する為に、今後これ以上我らが不甲斐無くてならぬと気を引き締め、守護騎士としてより精進を志し、騎士の戦技を一層に磨き高めていった……だがしかし、それから七年の月日が経ちても尚、またしても我ら守護騎士は襲い掛かる *「黒き猛虎」* の牙によつて成す術なく倒され、チカラ及ばずもその牙によつて守るべき主や仲間達の身を深々と傷付けられてしまった……」

*「闇の書事件」* 解決から七年……つまり現在から三年前、管理局本局のお膝元にある戦技教導隊が突然一人の男によつて襲撃されたという事件があつた。襲撃者の男の名は*《ライ・サンライズ》*といい、その素性は管理世界最大規模の反管理局勢力である*《アーノルド決起団》*、その中でも黄道十二星座*《獅子宮<sup>オ</sup>》*の称号を持つ十二人居る大幹部の内の一人という、数多に名を軒並み連ねる次元犯罪者の中でもSS級以上というトップクラスの戦闘力を誇る超大物だつた。

「管理局内でも有数の才と戦闘技能を持ち合わせる高位魔導師が集う戦技教導隊に単身で挑み掛かつて来たその決起団幹部の男は、戦技教導隊員という百戦錬磨の猛者達を、まさに獅子奮迅の如き暴威をもって圧倒し無双の強さを振るい蹂躪した。この由々しき緊急事態に本局武装隊本軍は過去に例を見ない無双の戦闘力を持った襲撃者を無

力化して捕らえるべく、高町やテスタロツサや我が主はやてと我ら守護騎士にクロノ・ハラオウン等といった本局の主戦力を中心にA A＋ランク以上を持つ最高位の魔導師総勢三十名以上をもつて「特選征伐隊」なる付け焼刃の最強部隊が編成され、その襲撃者たる決起団幹部《ライ・サンライズ》の征伐へと向かった。我はこの戦いを闇の書事件での際の不覚を晴らす絶好の機会だと息巻き、絶対の自身を持つて黒き猛虎へ挑んだのだ……だがしかし、彼奴は想像よりも遥かに強く、何よりもその闘争に燃やす意志と執念が異常な程に強大であつた……」

闇の書以来の新たな強敵——ライは獅子の鬣を思わせる漆黒の頭髮を長く肩より下に伸ばし、長身堅骨の体躯を持ち、猛虎の如き鋭い眼光で狩る獲物の全てを畏縮させ、百獣の王たる獅子の如き威風を放つ、黒き獅子虎ライガーのように勇猛苛烈な青年であつた。しかし彼の者は黒鋼くろがねの四肢を持ち、それを一度振るえば千匹もの獲物を薙ぎ倒す。そしてその黒鋼の四肢が顕示するように、己が内に秘める飽くなき勝利へ燃やす執念と鋼の闘志をもつて、どれだけ身体に痛みや傷が付こうとも狙つた全ての獲物の喉を噛み切るまで決して止まらない、凄まじき「光狂い」の猛獣であつた……。

「彼奴は我らが幾度となく剣で斬り付けようと、槍で貫こうと、鉄槌や拳で殴打しよう  
と、炎撃で燃やし、雷撃を浴びせ、冷撃で凍て漬かせ、拳句の果てに我が主と高町とテ  
スタロツサで三人同時収束砲撃を撃ち込みまでも……どこまでも歯を食い縛り、決



して地に倒れる事無く無尽蔵の体力と精神力を發揮して果てしなく我らに抗いの牙を向け続けてきた。　「まだだッ！」と一言吼えれば満身創痍の心身に鞭を打って益々

奮起し、彼奴はまるで「覚醒」したかのように闘気と戦闘力を無限に底上げさせて止まる事知らず我らに猛攻を加え……やがて「特選征伐隊」は我ら現機動六課の主戦力とクロノ・ハラオウンの計八名を残して全滅させられるまでに追い遣られていた……」

「そしてお前等は決死の激戦の末に獅子宮のライ・サンライズと双方相討ち、結局のところ奴の身柄を拘束できず逃亡させてしまった上にお前等を含む「特選征伐隊」は全員ライ・サンライズとの激闘を経て全治半年から一年半……最悪だった者はライ・サンライズの不倒の猛威を受けた体験が心的外傷<sup>P T S D</sup>となつてしまい二度と魔導師として戦う事が出来なくなつてしまい、本局はその一時期深刻なまでの戦力損失を被るに終息したという《A K 事件》……三年前に起きたその事件の顛末は俺達の耳にも届いている。　成程な……お前はあの戦いでまた大切な存在を守つてやれず傷付けられた事を今も悔やんでいるというのか……そしてその挫折に極め付けて追い打ちを掛けたのが、先日次元王軍ラグナガンドの襲撃を受けた出来事の結末の……機動六課崩壊という訳か……」

「光狂いの黒き獅子虎」に「異次元より飛来した破壊の紫竜の爪牙」と、夜天の主と仲間達の大切なものを奪いに牙を剥いて襲い来る数々の強敵達によつて立て続けに脆くも盾を砕かれ地に這い蹲らされ続けた、この十年間に亘る夜天の主の守護騎士の敗

北の戦歴……それは身を盾にして主とその仲間達を守護する役目を背負う守護獣たるザフィーラにとつて溝鼠の糞を嘗めるに等しい屈辱に他ならず、彼は昔語りを続ける内にそのあまりに無様にも程がある己の晒してきた醜態の数々を振り返つて、さすがに平静を保てなくなり、振るい続ける拳の勢いが衰えだしてきた。そのところで無言を保っていたゴートンの口から同情が漏れ、ザフィーラはそれを聞いて己の情けなさに心底落胆を露わにする。

「無様な話だろう……フツ、嗤うがいい。遙か数百年も昔、古代ベルカの戦乱の世において単騎の戦ならば無敗無双と謳われた我らヴォルケンリッターが、四騎揃いも揃つておいて三度も敵に後れを取り、護るべき主を背中にして屈辱にも地に倒され、その至らなさ故に我らの大切な主や尊き仲間達を傷物にされ、拳句皆が大事にしているものを奪われ……あろう事か我らが支えるべき主に——はやてに慟哭の涙を流させ、そして我らの失態の重責を彼女の小さき背中に背負わせてしまっているのだ！彼女に道具としてではない、家族として迎え入れて貰つた十年前のあの日から、今に至るまでもツ!!!」

集中的な部分魔力強化を用いて皮膚内部の骨組関節を完全に固定させた左腕の拳で執拗にゴートンを纏う金剛反射装甲の上から殴り付けながら、ザフィーラは遂ぞ自制が耐え切れなくなり、眼から大粒の涙を決壊させて心の内に秘めていた嘆き事を喉が枯れる程に哭き叫ぶ。

「悔恨やましくして仕方がなかった！ 我は十年前の『闇の書事件』の失態で主であるはやてを守れず、彼女を絶望させ一度闇に墮とさせてしまったあの時から今まで経過して何も進歩せず、『盾の守護獣』の責務を全うしてやれた事など、これまでに一度もないのだ！ 幾度となく襲い来る不埒な者共からはやての大切なものを守つてやれなかった！ その度にはやてに喪失の涙を流させ、彼女は不甲斐無き我ら守護騎士の敗北の尻拭いの為に重い責任を背負い続けた！ 我は十年間ずつと主はやてばかりに負担を重ね重ねと背負わせている！ いったいなんなのだ、この騎士として恥ずべき、主君に対してどこまでも不義理な犬畜生は!? 身も心も繋がる絆も、夜天の魔導書の主の全てを、我が身を盾にして守護する使命を持つ守護獣が、逆に守護すべき主によつて守られてどうするッ！ そんな使命の一つも全うできず、自由の生を与えて貰った恩義を報いぬ不義の騎士たる我なぞに、はやては身も心も傷付き続けながら気丈な振る舞いで……暖かな笑顔に向けてくれるのだ……ッ!!」

「ザフィーラ……」

「それ程の重い後悔を背負つて、今まで辛い思いをしていたのですか……」

「馬鹿……はやてちゃんを守れなかったのは、なにも貴方だけの所為じゃなのに、あんな無茶をして……ッ！」

「……」

ザファイラが心の内に破裂しそうな程に溜め込んでいた慙愧の念を吐き出しながらゴートンの巨体を、既に耐久力の限界を超えて朽ちる寸前の左拳で幾度も殴り付けては相手の身を守る無敵の《金剛反射装甲》<sup>リアクティブアーマー</sup>によって魔力強化で固定された左腕が傷付き、その尋常ではない負荷によって齎される地獄の激痛に耐え忍び続けて苦鳴をあげていく……大切に唯一の男性である家族の雄々しくも悲痛なその姿を目の当たりに、はやて達八神一家は彼の心中を労しく思い、同時に彼と同じはやての守護騎士の身であったシャマルとシグナムは過去から現在までの度重なる敗北によって途方もない無力感と後悔を心に抱えては誰にもその闇を明かさず一人苛まれ続けていた同志に対して、温度差は真逆なれども二人共に憤りと悔しさを向けていた。我らは同じ八神はやての守護騎士で家族だろう、なのはどうして一言も私達に相談してくれなかったんだ、何故その苦しみを私達にも共に背負わせてくれなかった!?

……だが分かっている。ザファイラは守護騎士の中で唯一、男に生まれてきたのだから。歴戦のベルカの騎士の矜持とは別に、《盾の守護獣》としての使命とも別に、どうしても譲れぬ男の意地を持っているのだ……しかしそれでも、他の何よりも家族の身を大事に想い遣る心優しい彼の主は、自分の為に家族が心苦しんで無茶を行い傷付いていく光景を黙って見ている事など、とても耐えられなかった。

「もう……限界や。これ以上ザファイラにこんな試合は続けさせられへん。シャマ

ル、応急手当の準備を頼むで！　なのはちゃん、早くタオルをn「お待ちください、主はやて」——シグナム!?!」

ザファイラの試合棄権宣言用のタオルを審判役のなのはに投げ入れさせる為に渡そうとしたはやての行動に、片腕で制止を掛けてきたのはシグナムだった。彼女のその行動は同じ八神家の一員であり、彼女とは古くから共に並び立つては歴代の夜天の魔導書の主に仕え、長年切磋琢磨してきた守護騎士の同志であるザファイラを見殺しにしろと言っているのにも近しく、あまりにも薄情極まりなく見えた。　はやては信じ難い感情を籠めた涙目をシグナムの背中に向けて、戦々恐々とその真偽を問い詰める。

「何で……止めるんやねん。　あの叫び苦しみながら酷く傷だらけになっていつとるザファイラの姿が見えてへんとは言わんやろ？　一刻も早う手当せえへんと、ザファイラの左腕は駄目になってしまいかもしれへんのや。　そないな事になったら……私は……ッ!!」

「主の御心に反するのは百も承知の上です。　我が不敬に対する罰も、万が一の場合の責任も、この試合後に全て我が身をもって受け入れます。　ですがしかし、ザファイラは今、守護獣の威信を賭けて戦っています。　お願いです主はやて。　今はどうか、奴に己の意地と矜持を貫かせてやってください！」

シグナムに真剣な声音でそう懇願されては、はやてはこれ以上何も反論できずに唇を

噛み締めて引き下がる他になかった……制止の腕を取り下げたその握り拳には彼女の内に流れる気高き血がだくどくと滲み垂れ、腕は寒々と震えている。彼女だって本音は今直ぐにでも試合を止めに乱入したくて仕方がなく、心苦しいのだ。自分と対等の守護騎士であるザフィーラが、あんなにも身も心もスタスタになつて無茶な戦いをしてる姿を、黙つて見ているしかできないなどと……。

「我が無力で不甲斐無いが為に、はやてにあのような偽りの笑顔をさせてしまふなぞ、この左手の痛みなんぞよりも何億倍耐えられん！ぬおおオオオオオオオツ!!」

「ぐがッ!」

そして遂に、無力な自分への嚇怒を籠めて打ち込み続けた拳が鋼猿金剛の纏う無敵の皮膚に罅を入れ、ゴートンの巨体を大きく殴り飛ばした。ここにきて初めて相手から大きな一撃を受けたゴートンは靴底を滑走による地面の摩擦で削り、拳を振り切つた体勢のザフィーラから5 m程離れた所で停止し、ほんの二秒間掌で一撃を貰つた右頬を押さえて痛みを和らげる。その掌を離すと自分の鼻血が付着していた。

「信じられん。まだこれ程のチカラが残っていたのか」

「舐めるなど言つただらう、ゴートン・リライラス。貴様が守りたかつた大切な者を守れずに喪つた過去の懺悔を悔やみ、『鋼のように屈強に、決して碎けぬ男になりたい』と願ひ、このロストウィングで鋼の皮膚を磨き抜き、無敵の《鋼猿金剛》<sup>ハカンゴング</sup>となつたように。

我にもこの十年間、幾度も大切な主や仲間達を守り抜くという《盾の守護獣》の使命を一度も全うできず、主達が大切にしていたものを幾度も敵の手に奪わさせてしまい、己が無力と無念に苛まれながらも、100年以上も前から我がこの胸に抱き、意地と使命を貫く糧としてきた騎士の矜持と己の「渴望」をこの手に、これまで夜天の主の守護騎士の一騎として心折れず戦い抜いてこれたのだ！」

傍から見るのも惨たらしく思う程にズタボロな状態のザファイーラに丸くした目を向けたゴートンは戦慄を混じらせた驚嘆を漏らす。その言葉を聞いてザファイーラが不敵の笑みを見せながら相手を真つ直ぐと見据えてまだまだこれからだと言わんばかりに増々燃え猛る闘気と漲る魔力を纏い、雄々しく拳を構えて吼え猛る。

「我は『何者にも皆を傷付けさせぬ不破の盾で在りたい』ッ！」

その誓いこそ、彼が百年不動として胸に持ち続けてきた渴望——

「魔導書の持主に従属する為だけに作られたプログラム体に過ぎない我ら守護騎士などに人並みの人生を与えて下さった我が主はやてを！ シグナム、ヴィータ、シャマルら百年以上の永い刻を共に歩み幾多の戦場を潜り抜けてきた夜天の主の守護騎士の同志達を！ リイン、なのは、フェイト、スバル、ミクティーン、エリオ、キャロ、ヴァイス達掛け替えのない機動六課の仲間を！ クロノ・ハラオウン等我らの大事な隣人達を！  
そして、これから先は貴様達もだ、ゴートン・リライラス。特務遊撃支援部隊口

ストウイング!!」

「何? 俺達の事も守る……だ?」

「無論だ。この団体模擬試合が終わつた後は貴様達ロストウイングも晴れて我らの仲間内に入るのだから。全ての仲間を如何なる害敵から守護する事こそが《盾の守護獣》の名を持つ我が使命……そして我が胸に宿る『不変の渴望』だツ!!」

「……フツ。いいだろう! 先程お前の『守護の意志』を見下げて悔つた事を謝罪する」

確かな『守護の意志』を示し。その根幹に在る渴望を打ち明け。身内は勿論、本局のトップエリートと辺境世界の最底辺不良部隊という格差の隔たりがあつた為にこうして互いにいがみ合い、団体模擬試合という形で自分達と対立しているゴートン達ロストウイングの連中も含め、この身を盾にして全てを護つてみせると大胆不敵にも言つてみせたザファイラの魂に強く懐深いものを垣間見たゴートンは、それに敬意を表してこの試合中に相手の持つ『守護の意志』を自分に比べれば取るに足らないものだど侮辱した全ての非礼を詫びて潔く前言を撤回。そして目の前の誇り高い人狼の騎士を己と対等の『守護の意志』を持つ戦士であると認め、彼を全力で拳を振るうに値する相手だと認識を改めて、全身全霊の魔力と闘気を練り上げて右腕を覆う機重鉄腕を今まで以上に豪快に振り上げて一陣の突風を起こすと共に薙ぎ払い、その鉄爪を眼前に立つ盾の



守護獣へと差し向けて言った。

「ここから先は、ただひたすらに互いの意志と魂を懸けて全力の拳をぶつけ合うのみだッ！」

「フツ、いいだろう……征くぞ。ロストウイングの鋼鉄の守護神——《鋼猿金剛》ハカンゴンゴウゴ

トン・リライラスッ!!」

「来い。機動六課の誇り高き守護神——《盾の守護獣》ザファイラツツ!!」

ここに両陣営の守護神は互いの持つ「守護の意志」を認め合った。ならば最早言葉は不要。そう互いに相手の名を呼び合ったのと同時に最終ラウンドのゴングは鳴り、先程ゴートンの踏み込みによってバトルフィールドを丸ごと陥没させて出来た巨大クレーターリングの中央で二人の漢の拳と拳が激突し、火山の大噴火と見紛う朱い衝撃波が天を突き抜けた。

……ここから先の試合展開はまさに「泥仕合」という他に言い様がなかった。魔

法も戦技も戦術も駆け引きもそこに介在しない、只ひたすらに互いの顔面を拳で交互に殴り合い続けるという、泥臭く品の欠片もない唯の喧嘩であった。しかもゴートンは

「ここで不公平だと言って手加減をしては、対等と認めた戦士への侮辱だろう」と考えて無敵の《金剛反射装甲》リアクティビティーマーを解除しないでそのままやってきている為に、ザファイラばかりが相手からの殴打と攻撃反射効果でほぼ一方的にダメージを蓄積していくという、そ





まで意地を振り絞ったのが誰の目にも分かるような、互いへ腕を伸ばし合った両者の雄々しい倒れ様を目の当たりにして両陣営はあまりにも壮絶な男の戦いの決着に唾然となつて誰しもが数秒の間声を出せないでいたが、審判役のなのはが「……はっ!？」と逸早く我に返り、バトルフィールド（クレーター）内で互いに倒れ伏した二人へと近寄つて直接両者の意識が無い事を確認する。

「ザファイラさんとゴートンさん、両者共にノックダウン……です。よつて二人共戦闘不能と見なし、この試合は引き分k——「ぶつ……ぐぶつ! は——! は——!——ツ!!?」

「————な——ツ?!」

「嘘……やろ……?」

なのはがこの場に居る皆へ向けて引き分けドロウゲーム試合を宣言しようとしたまさにその直前、倒れ伏していた二人の男の内の片方だけが息を吹き返して意識を取り戻したのだった。

その為なのはの試合結果発表が途中で止まり、全力を出し尽くした満身創痕の有り様で再び立ち上がったその男の雄姿を、完全に気を失い倒れたままの方の味方陣営側一同全員がとても信じられず衝撃のあまりに眼を剥いて驚愕と放心の様相を表していた。

そして立ち上がった男は自分の目の前でこちらの足下へと左手を伸ばしきつたまま前のめりに倒れ伏している相手を見下ろし、勝ち誇る微笑を浮かべると共にその重い口

を開き――

「見事だ……《盾の守護獣》ザファイラ。俺はお前と全力で拳を交えられた事を……誇りに思う」

そう本物の【守護の意志】を持った誇り高い対戦相手へ健闘を称えたのだった。

「しよしよしよ、勝者は――ロストウイングの《ゴートン・リライラス》さんツ!!」

なのは審判役として公正に改めてこの試合の勝者の名を高らかに謳いあげた。

その直後同時にザフィーラの全身が眩い光に包まれ、それが剥がれるように消えると其処には守護獣形体の狼の姿へと変わったザフィーラが疲れ果てて泥のように眠っていた。試合で体力も魔力も持てる全てのチカラを出し切つて枯渇した為、エネルギー回復の為に自動で守護獣形体に変わったのだろうが、それでもゴートンの《金剛反射装甲》<sup>リアクティブアーマー</sup>に打ち込み続けて反射ダメージ負荷を耐久力限界を超えるまで蓄積させた左腕は血の抜けた紫色に染まり切つていて非常に危険な状態にあった為、我先にと六課の部隊主任医務官であるシャマルが六課陣営側のベンチから飛び出し誰よりも逸早くザフィーラの許へと駆け寄つて、早々と眠る彼の左腕に応急手当を施しては、デバイスのクラールヴィントを使つて治癒魔法を掛ける。その行動が功を奏し、幸いにも取り返しが付かなくなるギリギリで、ザフィーラの左腕はなんとか壊死に至らずに済んだのだった。

数秒経つて処置を終え、「安静にしていればもう大丈夫」だと言つてシャマルがザフィーラの容態が安定した事を伝えると、六課陣営の皆は一先ずほつと安堵の様相を呈し、それでようやくシグナムに道を開けてもらえたはやてが泣き出しそうな顔をしてザフィーラの許へと歩み寄ると、我慢しきれず目から涙を決壊させて隣に寄り添うようにして彼の毛並みへと顔を埋める。

「ごめんなあ。そして、ありがとな……ほんまに……ありがとう……うう、あああああ  
あーっ！」

今まで十年間ずっと、こんな酷くボロボロになって私の大切なものを守ろうと頑張つてくれてありがとう、私の自慢の守護獣……そんな感謝の気持ちを表すようにはやては愛おしい家族を労しく抱きしめ、同時に彼の仕える主としてどこまでも自分は力不足であると痛感し、その事が情けなさ過ぎるあまりに嘆いて泣き叫んだ声が悲愴なまでに山彦に反響するのだった……。

## スバル激怒? ガングロチャラ男、フォックス・ストーン現る

メルクーリア連峰の気候は実に変態的だ。男と男の戦いの決着が着いた後、まるで試合が終わった後にスタジアムの外周スタンドから満員の観客が一斉に退場していくかのように、どんよりと空を覆い尽くしていた曇天が映像の早送り再生の如く素早く彼方へと流れ去っていった。己と同じ誇り高い【守護の意志】を持った騎士ザファイラとの戦いを終えて自陣営側の外野ベンチへと戻っていく勝者ゴートンを太陽の直射日光がその栄光を称えるように祝福していた。

「ゴリ、お疲れさん! 満足そうなその様子やと聞くまでもあらへんやろが、あの犬コロと戦った手応えはどうやった?」

バトルフィールドから外野に出ると同時に劳いの言葉と共に試合の感想を訊ねてきたガンマから汗拭きタオルを投げ渡される。死闘で流れた身体の汗を拭いつつ、ゴートンは今しがた自分が試合をしていたバトルフィールド内へ目を見遣る。その視線の先で、死闘に敗北して意識を失い屈強な人狼の戦士から狼の守護獣の姿になったザファイラが、全身に立派に信念を懸けて戦い抜いた戦士の勲章(包帯)を付けながら安



らかに眠り、己の守護する主君と機動六課の仲間達と守護騎士の同志等に見送られて、タンカで医務室へと運ばれて行っている。

ゴートンは瀕死レベルの重傷を負いながらも『何者にも皆を傷付けさせぬ不破の盾で在りたい』という渴望をどこまでも貫き通して自分とギリギリまで渡り合った盾の守護獣を心から敬服する眼で見送りながら、ガンマからの問いに答える。

「ああ、本当に大した男だった……。

結果的には俺が勝利したが、俺がロストウイング

の創設期から今まで此処の変態環境と隊の常在戦場の掟の中で昔の後悔に誓った『鋼のよう屈強に、決して砕けぬ男になりたい』という渴望と共に鍛え磨き上げてきた、この《鋼猿金剛》の無敵の皮膚に、ザファイラは何度振った拳を阻まれ砕かれようと、己の背中にする八神はやと仲間達の為に決して倒れぬと奮起して、仕舞いには俺を相打つ寸前まで食い下がってきやがった。フツ、流石は戦乱の古代ベルカに名高き夜天の魔導書の守護騎士が一騎《盾の守護獣》だ。この鋼の皮膚を通して骨身にまで響く、良い拳だった……」

「うっわ、キモイ程の絶賛っぷり。ホモかよ……」

「漢と漢の拳と拳、極限までトコトン殴り合って最後に分かり合う。これこそ男の浪漫よ！　ゴリさん羨ましいッス！」

「ハッ！　ロストウイングの最古参メンバーのアンタにそう言わせる程なら、文句なし

に上々やろ」

腕を組んで首を縦にウンウンと揺らしながら戦った相手への称賛を気分良く流暢に語るゴートン。その周りに、ベンチから寄って集まって来たロストウイング陣営の連中がそれぞれの感性で賛否両論に彼が言った感想に反応を示してくる。ザフィーラの実力は申し分ないと掛け値なしに言ったゴートンの返答を聞いて、ガンマも腕を組んで満足を得たように清々しく口端を吊り上げていた。

「さて、次に機動六課陣営から誰が出て、それで試合相手に誰を選んで来おるんやら……まっ、ロストウイングのド阿呆共が、相手の思い通りにさせる訳はあらへんけどなあ。くつくつく……」

と、意地悪そうにガンマが見据えた先では、運ばれて行ったザフィーラを見送り終えたはやて達が自陣営側ベンチに集合して次の試合に出る人間をどうするのか、悩ましく話し合っていた。

「まさかヴィータちゃんに続いてザフィーラさんまで負けちゃうだなんて……」

「そうね。みんなが知っている通り、あの二人は歴代の夜天の主に仕えてきた守護騎士プログラム体。過去数百年に渡って途方もない数の戦いを潜り抜けてきて、【単騎無双のヴォルケンリッター】と次元世界中に畏怖されるようになった、紛う事なき歴戦の騎士。それを一対一の試合で二人連続で敗北させるだなんて……どうやら、こつ

ちの想像以上にロストウイングあの戦力は規格外の実力者が揃っているみたいね……」

予想外にもヴィータとザフィーラといった歴戦の古代ベルカの騎士で機動六課の主戦力が立て続けに打ち負かされ、なのは達はロストウイングが保有している戦力レベルの高さとその層の厚さを実感して少なからず衝撃を覚えていた。敗北を喫した二人は決して対戦相手に純粹な戦闘力で遅れを取ってはいなかったのだが、《陀羅尼摩利支天》や《金剛反射装甲》といった無敵に近い強力無比の武器を持っていたロッキードとゴートンの方が上手であった。無論、それだけではなく彼等は胸に秘める渴望しんねんも強固で、戦技教導官の役職に就いているのが見積もって純粹な魔法戦闘技能の方も二人共にAAAランク相当に高いと評価できている故、決して彼等の能力は理不尽能力頼みものではないのだと理解している。

……しかし、それでも納得できない人間が一人は出るものだ。

「きつと調子が悪かったんだ。じゃなけりやヴィータ副隊長達が、あんな最低な人達に負ける筈がない……!」

「スバル……?」

握り拳を震えさせながら唐突と腹の底の激情を吐露したのはスバルであった。彼女の秘める夢を指して曲がらずにどこまでも真つ直ぐに進む性格を表すように大きく澄んでいた瞳は、驚く事にどういふ訳だか汚泥のように濁っていた。まるで自分が

今まで絶対だと信じて已まなかった大切なものを赤の他人によつて壊されて、その事実を受け入れられずに片意地を張つて否定するような異常な剣幕を露わにしだした彼女の異変に、隣から心配そうにその顔を覗き込む彼女の同僚にして無二の親友のミック・ティーンヌをはじめとして、機動六課陣営全体が騒然となった。

「そうだ。そうに決まつている。機動六課の隊長陣は……なのはさん達は次元世界の危機を何度も救つてきた英雄で誰もが認める絶対無敵のエースなんだから本気を出したら絶対に負けたりなんかしないんだ、誰が相手だろうと！ 次元王軍ラグナバンド？ 特務遊撃支援部隊ロストウイング？ いったい何所の馬の骨なのさソイツ等は？ 全然なのはさん達の敵にならないってーの！ アハハハハ！」

突然スバルは完全に瞳孔を開かせた目をして明らか妄言を吐き出し泥酔したように哄笑しだした。どう見ても今の彼女は正気ではない。仲間の錯乱に皆が戸惑いを露わにする中で、スバルの分隊指揮官の立場であるのはが冷静に部下の興奮を落ち着けようとする。

「スバル、いきなりどうしたっていうの？ 気を確かに持つて、君は今普通の精神状態じゃないよ。疲れているんだつたらファイーラさんと同じ医務室に行つて少し休ませてもらいなさい」

「アハハ！ 何を言つてるのなのはさん？ あたしは全然正気ですよ〜」

「じゃあ変な事を言つて笑うのは止めなさい。先日の方がシヨックだったのは解るけれど、機動六課は襲撃してきたラグナグンド軍の第二二六強襲中隊に完敗して拠点を失つたの。だから管理世界に侵攻して次元世界全体規模の戦争犯罪を起こそうと企んでいるラグナグンド軍の打倒に向けて、失墜した機動六課の再起を図る為に、クロノ提督の勧めを受けて、敵に対抗できるチカラを持つているというロス・ストウイングから拠点と協力関係を得ようとして、今こうして彼らを相手に団体模擬試合を行っているんだよ。それは当然、覚えておいてね？」

「ええ、それは勿論覚えておきますよ。ラグナグンド軍とかいう数だけ矢鱈と多い反管理局組織が機動六課の体制がまだ整っていない部隊の稼働日を狙つて奇襲なんていう卑怯な手でやって来た所為で六課が崩壊したんでしたよね？あの時は本当にアイツ等よくもやってくれましたよね、本当は全然大した事ない癖に、卑怯な方法であたし達の隊舎を壊してくれてさあ、まったくふざけるなつての！もし部隊が稼働して数日の間に体制を完全に整えていた頃だったら逆にあんな連中全力全開ののはさん達が簡単に叩き潰して機動六課が完勝していたつてのにさあ〜」

「……スバル、ちよつといい加減にして、口を閉じなさい」

「そもそも、こんなまともな機器が無くて薪や炭を使わないと火も熾せないようなド田舎世界の片隅にあるポロ砦なんかには駐留して、世間の知らない裏でコソコソと何か後ろ

めたそんな事でもやっていそうな怪しい部隊れんちゆうなんかの所に管理局のトップエースで次元世界の英雄であるのはさん達が頭を下げて入れてもらおうとしている状況になっている事自体が間違っています! 会っていきなり難癖付けてきてケンカを売ってくるわ、仮にも治安維持組織である時空管理局の部隊なのに人への侮辱やセクハラ行為を平気でするわ、隊舎の設備と衛生環境は劣悪だわ、部隊長はいい加減な人だわ、拳句に部隊の構成員の殆どが見ての通りガラが最悪で失礼最低極まりないチンピラばかりじゃないですか!」

しかし、そのようになのはが幾ら口を酸っぱくして言っても、スバルの口は止まらずに益々ヒートアップしていく。感情の制コントロール御を失って機関銃のように吐き捨てていく彼女の息は荒く、熱気を帯びた目の焦点は完全に定まっていない。もはや誰が見たって、今のスバルは極めて危険な精神状態だと判断できた。

「連中の戦い方だって、全部一遍に倒さないと倒せない分身を出す反則レアスキルとか、相手の攻撃を全部反射してくるインチキ効果の防御結界魔法とか、いちいち汚過ぎる能力ばかり使ってきて卑怯にも程がありますよ! ふんだ! どうせロスアストウイング等はみいチくんトな反則チみたいなのが効果のスキルを持つてるんでしよう!? あーあー、汚い汚い。そう言えば先日の戦いでなのはさん達の窮地に駆けつけて、ラグナガンド軍の奴等を撃退したっていう《シルバーガスト小隊》っていう人達もロス此ストウ旭イング部の所屬

だつて言つてたけれど、どうせその人達も反則効果スキル使つて——」  
「スバルツ!! 本当にそろそろいい加減にしないと、本気で怒る——」

頭に血が上り過ぎて思考を正常に保つ事が出来ず遂には機関銃のような剣幕を露わにしてロストウイングへの批判アンチを吐き捨て始めたスバルに対し、なのはは精神異常をきたしている彼女にこれ以上発言させてはいけないという焦燥感に駆られ、思わず怒声を出して一発殴り掛かりそうに手を上げてしまう。

これ以上行つたら機動六課陣営は取り返しのつかない事になつてしまう……そんな内部崩壊寸前の危機的状況で、顔面同士を接触ギリギリまで寄せて睨み合い一触即発寸前のところのスバルとなのはの肩を、空気を讀まない何者かの手がポンポンと叩いた。

そして——

「ガチョー——————ン！」

「ふにやああああああーっ!!?」

何奴かと二人が背中を振り向いた瞬間、気色悪い程にギチギチと五本の指を高速開閉させる誰かの手がそれぞれの眼前至近距離にあった為、互いに仲良く猫が甲高く驚き啼いたような変な声を出してビツクリ仰天し、『ドッスン！』と地面に盛大に尻餅を着いてその勢いのまま両脚を高く上げて背中からひっくり返ってしまった。スバルはトレーニング用のズボンだったからいいが、災難な事になのはは戦技教導隊の女子制服のタイトミニスカートを穿いていた為、それがペロくり♥ と捲れ上って彼女が本日穿いて来たショーツがこの場の衆目に大公開させられてしまうのだった。

「うほお☆ これまたリボン付きのピンクとは、なかなかマブエロじゃくん♪」

「確かに、これはなのはちゃんのエロカワさを存分に引き立たせる、ええパンツチョイスや♪ せやけど、もう成人<sup>はたち</sup>目前なんやし、もう少し大人っぽいのを穿いてもええと思うで? ガーターベルト付きのスケスケとか」





「おっはー☆ セニヨリター！ 僕はロストウイング《クロイス小隊》のイケイケでシャレオツな小隊長《フォックス・ストーン》きゅん、どえくつす！（きゃび☆）趣味は、ナウなヤングのシティーボーイトレンディの流行を押しえたおニユーの服を買ってきて部隊のみんなにドヤ顔して見せびらかす事と、サタデーナイトフィーバーの夜のディスコにブイブイと練り出して朝まで踊り明かす事。得意な事は、サクランボの帯を口の中で蝶々結びをする芸とマ○ケンサンバ。好きなものは、紅茶キノコとピチピチギヤルのオネーチャン。階級は二等陸尉ナウ。シクヨロく、ヨロヨロ丸たそ！ だつちゅくの♡」

そう言った内容に合わせて、彼はシュシュツと空ジャブを打ちながら「フォックス」という自分の名前と部隊内での役職を名乗った後、自分の片眼を間から覗かせるように人差し指と中指を添えてウインクしてみたり、着ていた背中に白い星のマークが書かれている眼に痛い程に真っ赤な革ジャンを半脱ぎして強調しドヤ顔してみたり、サングラストと両腕にひらひらした糸のようなものを着け出して人差し指を頭上に掲げてキラリと輝く白歯を見せてみたり、その他もなんやかんや忙しくポーズを付けながら自己紹介アピール。最後に自分の持つ階級を明かしてその場で華麗に一回転ターンを決めると、スバル達に向けてビシツと指差し宜しく(?)を言った直後、何故か腰を前屈みにして前全開にした革ジャンから覗く白シャツに薄く浮き出た胸板を強調した気色悪い

ポーズを取つてみせた。小隊長なだけあつてなかなか筋肉は付いていた。

「おっはー」とか「だっちゅくの」——「じゃっな——いッツ!!」

ここで我慢できなくなつたのはがやつとパンツ丸出しの体勢から起き上がった。運動音痴である事が嘘のような鮮やかなヘッドスプリングでダイナミックに跳ね立つた彼女は気が狂いそうな程の興奮に駆られた様相を見せて、だっちゅくのポーズ中のフォックスに奮然と物申す。

「いきなり人を脅かして、もの凄く恥ずかしい格好を曝させておいて、よくもそんなふざけた態度の挨拶ができるよね君！ 何で喋る言葉が地球わたしの生まれ故郷の日本の死語と死にネタだらけなの!? ……ていうか、さっきの試合前にわたしに「エース・オブ・チョベリバ」とか、イラツとくる死語で煽つてきてたのつてひよつとして君だよねえ、にやはははは……」

その言葉の色から察するに、なのははここまでロストウイングの連中から受けてきた数々の非礼にいい加減にキレかかっている様子だ。周りのスバル達が身の危険を感じて畏縮しながら徐々に彼女から後退りして十分な距離を取ろうとしている。彼女がフォックスに向けている笑顔の目が全然笑つておらず、ピクピクと小刻みに吊り上がる口端と眉、前髪から覗く額には青筋が浮かび上がり、途轍もなくピリピリとした雰囲気を出している……。

「それに、何なの君のその格好は? そんなにワックスで髪を突っ立てて、顔をゴテゴテしたピアスだらけにして、そういった人種じゃないのに全身の肌を小麦色に焼いて、チャラチャラと……ふざけるのも大概にして! 幾ら実力主義の場所だからって、人に對して失礼にも程があるよ!」

ところがなのは恥辱をかかされた事への私怨で手を上げる事などはせずに、普通に叱った。フォックスは真面目さ皆無で剽軽な態度と一緒に外見もそれに違わずおちやらけていたからだ。彼は青紫色の短髪をまるでパンクミュージシャンのように奇抜に逆立たせ、耳や鼻や唇の端など顔面の至る部分に複数のシルバーピアスを刺し着け、瞼には髪と同色のアイシャドウを濃く塗っていて、地肌は全身派手な小麦色に焼いてあった。その姿は見るからに一昔前のガングロチャラ男そのもので、着ている古臭い革ジャンも相俟って、他人が視界に入れるには非常に痛々しい見た目をしていた。

彼の格好はともじやないが他人に挨拶を交わすには大変失礼極まりなく、いかに他人行儀が苦手で誰からも気軽に接して貰った方が好意的である価値観を持つなのとはとて、これ程までに不誠実な手合いの男には流石に不快感を覚えて激しく不服を捲し立てる。

「いやあ、それはメンゴメンゴ。アィムソーリー、ひげソーリー☆ わっはははは!」

しかしなのはの劍幕にもフォックスは何処吹く風であり、彼のまったく悪びれる気持ちが籠っていないチャラけた死語での謝罪に、機動六課陣営は全員物凄い不快感を露わ

にしていく。　　いったい何なんだこのチャラ男を絵に描いたようにふざけた野郎は？

エア剃刀で顎髭を剃るジエスチャーが輪をかけてウザったい。

「みんなそんなにプンプンしないでしょ。　　せつかくキミタチがピリピリムードであわや一触即発☆禪〇ールしそうになっていたのを止めてあげたんだからさあ☆」

「確かにそれについてだけは正直言つて助かったよ。　　でも君のその態度と喋り方は他人を馬鹿にしている感じがして、凄く失礼だよ」

「んほ？　　言つてる事わけワカメ。　　別にキミタチの事、馬鹿になんてしてねーし☆もしかしてエースさん自意識過剰チヨメチヨメ決めちやつてるの？　　やっべ、アイタタタツ☆」

「……もういいよ。　　それで、いったい何の用なの？」

この人とまともに取り合おうとしてもイライラが溜まって頭痛が増すばかりだ……これ以上は埒が明かかないと思つたなのはストレスに痛む頭を片手で押さえつつ、諦めて話題を変える。

なのはあの【教官潰し】のガンマ・ウェストをはじめ、大半以上のメンツが機動六課自分達のような俗に言う本局のエリート部隊に対して深い軋轢があるだろうというロストウイングの人間が、相手が仲間割れしそうなのをわざわざ仲裁してやりに一人で自陣のベンチから離れてやつて来たりはしないだろうと思つていた。　　故にフォックスには

こちららに対して別の用件があると踏み、彼にその真意を問い質した。

彼女の目は真剣だった。少しでも誤魔化したりしたら許さないという刃のように鋭い視線に射貫かれて、フォックスはこうなつてはふざけている場合ではないと感じ、先程までの剽軽な態度を少しばかり鎮める。

「いやなに。別に本気でケンカ止めに来たわけでもエースさんのおパンティー見に来たわけじゃあないんだみそく。ただねえ……その青髪シヨートのベイビーちゃん、ドーもカマトトぶつた事を言っているのが聴こえてきたもんだからねえ」

「おパンティーって、君ねえ……」

「青髪シヨートのベイビーちゃんって、あたしの事ツ!? それにカマトトぶつた事って、いったい何がさ!?!」

しかし若干真面目な顔になつても彼はチャラけた調子と口から出てくる死語だらけの喋り方を直さない故、話を聞いている側からは誰がどう見ても人を小馬鹿にしてふざけているようにしか感じられない。どさくさにしつこくシヨートの事で弄られたなのはに至つては羞恥に赤面させて肩をブルブルと震わせつつも、あまりにも今時間かなくなつた単語で言われた為に憤慨よりも勝つてもはや白目を剥いて呆れ果ててしまつている。

しかし、赤の他人に知り合つていきなり「ベイビーちゃん赤ん坊」などという見下げた呼び方をさ

れたうえに、こちらの話していた義憤に対してカマトトぶった事……要するに見苦しく見て見ぬふりをしているなどと、矢継ぎ早に暴言を向けられたスバルは相手の言っている事の意味が解らず、目を見開いて上半身を後ろに仰け反らせながら、言葉の真意についてフォックスへと聞き返す。しかし、彼はその返答を聞くや否や、心底呆れるように肩を竦める。

「キミさあ。別にロス僕トウイングらの事をどう思つて言おうと、全然、まったく屁の屁のカツパなんだけどね」

やれやれしようがないなという風に、フォックスは左右に近寄つていたシグナムとヴァイスを退かして、後退り戸惑うスバルへと歩み寄る。その雰囲気は異様な圧を放っており、それを真に受けさせられているスバルは無論の事、周囲を囲むものは達にも息を吞ませた。そして被りを振つて動揺を見せているスバルの眼前にやつて来て足を止めたフォックスが腰を前に曲げて、威圧に引き彎らせている彼女の顔を真正面からグイッと覗き込み、まるで容赦なしに言った。

「何なのキミ、そのみそつかすなザマは？ 自分が絶対無敵だつて信じてた次元世界の英雄の隊長サマ達が負けて、そんなにシヨッキンキングだつたつぴ？ ……あじゃばー！ キミつて頭がピーマンなんじゃない？ スカタン過ぎてオヨビでないんだよ」

「……………どういふ意味さ？」

シルバーピアスが刺さりまくった汚い面をこちらの顔に息がかかる程に寄せてきて何されるのかと慄きながら身構えていたスバルだったが、直後に相手から言われた内容がどうにも彼女の癩に触れる。途端に警戒の意識が忽ち憤りに変化し、ニヤつく相手の眼を剣先で刺すように睨み返して追及した……その次の瞬間――

「他人の背中ばかり見て自分を弱くする憧れなんてクソくらえだつちゅーの。そんな



のは犬の餌にでもすれば？」

相手から浴びせられたその最大の侮辱に、スバルの中の致命的な琴線がプツリと切れた。

「お前……今、なんて言った……？」

みるみるうちにスバルの童形ながらに端整可憐な貌が歪み出し、項垂れた前髪が目にかかつて憎悪の陰を墮としていく。火山が噴火する直前は静かに震え出すものだ。

それと同様に彼女は肩とだらりと垂らした腕を静かに震えさせ、幽鬼のように全身を一度ゆらりと揺すり、かかった前髪の陰から覗かせた憎悪の眼光でギロリとフォックスを睨み付けて、そう問い詰める。

『いけない。今のスバルの雰囲気はさすがに不味いよ。止めなきや！』

『せやな。機動六課総員、あのフォックスとかいうギャル男がこれ以上に何かアホンダラな事をほざいて、スバルが怒髪天を突き破る前に何とかして取り押さえ——』

そのスバルの様子は尋常じゃ無く不味い雰囲気を放っているという事はこの場の誰の目にも明白だった。胸が締め付けられるように殺伐とした重い空気が押し掛かり、なのは達は咄嗟に念話のやり取りで、スバルが溜め込んだ黒い感情を爆発させる前になんとか食い止めようと、彼女の身柄を全員で取り押さえに掛かる段取りを付けようとするが——



「や、やめなさいスバル!」

「激昂する気持ちは理解できる。だが落ち着け!」

「気を遣って言つて、シグナム副隊長の言う通りですよ。正直もどかしいと思うけど現状の機動六課はロストウィングに協力をお願いしに来ている立場なんですから、たとえ相手から許せない程の侮辱を言われても試合じやないところで彼らに暴力を振るつたりなんかしたら、益々ボクらの立場が不利になりますよ」

引き絞つた右腕は放つ直前で自分が最も懂れている人の手によつて掴み止められ、更には背中をシグナムに羽交い絞めにされて取り抑えられた。そして直ぐ様空いている左側に近寄つてきたミクティーヌからの説得によつて、ようやく頭が冷めた……かと思いきや——

「——そう………だつたら、試合でならこのクズピアス面チャラ男ヤロウを思いつ切りぶん殴つてもいいつて事だよね……!」

私闘が駄目ならば正式にフォックスへ試合を申し込んでバトルフィールド内で戦う分には問題無しだ。嵐の前の静けさのように、一旦激情を胸の奥に無理矢理押し込めて、静かに俯きながらそう洩らしたスバルの声音と歪んだ瞳の奥には昏い焰が燻つてた。

「ひっ!?!」

「スス、スバルちゃん? い、いったいどうしたっていうんですか…?!」

殺意や怨恨にも似た昏い雰囲気を生じた、ただならぬスバルの様相を目の当たりにして、機動六課陣営側内に戦慄が走る。曰く付きの過去を得ているとは言えどもまだ歳幼く心が純粹無垢であるエリオとキヤロ、更には非戦闘員であるが故にこのような殺伐とした気配を受ける機会は稀であるシャーリーにルキノとアルト、殺気に不慣れであったこの五名は一瞬で背筋が凍り漬いて明確な畏縮や動揺を大きく露わにしている。

「ふえええつ!? スバルちゃんの目が、とつても怖いですうう」

「おいおいおい! スバルの奴さつきから様子が変だぜ? そりやあ確かにこのふざけたチャラ男のガキの言った、機動六課隊長陣はさんに対する侮辱に關しては俺だつて絶対に許せねえけれどよ。今のスバルのブチギレ具合は幾らなんでもシャレになつてねえぞ」  
「これは不味いわね。スバルあちゃんの瞳孔が完全に開いちゃっているわ」

ラインにヴァイスやシヤマル等、前線経験豊富である者達はさすがに多少取り乱す程度に留められた。しかし、幾ら他人フォックスから無遠慮に横を突かれて、自分の敬愛している次元世界の英雄なに対して好き勝手な誹謗中傷を吐かれたからと言つても、その敬愛なしている人はや同期の親友ミクによつて制止されても尚、怒りの矛を収めようとしないうスバルの様子に尋常でない不穏を感じていた。

そんな中でミクティーヌは思案顔を作り、スバルの精神異常に関してちよつとした心当たりがあつた事を思い出す。

——そう言えば、此処へ来る前から気を遣つてスバルの様子を看っていて、度々彼女の表情が異様に昏くなつていた気がしたけれど、やつぱりアレは見間違いではなかつたんですね……。となると原因はどう気を遣つて考えても——

「なのはさん、フェイトさん、シグナム副隊長。勝手言つて悪いですが。次の試合はあたしが出ます」

ミクティーヌがスバルの異常なまでの怒りの原因を憶測ながらに掴みかけたところで、間が悪くスバルが一旦掴んでいたフォックスの胸倉を乱暴に前へ突き飛ばすように解放しつつ、地面に倒したフォックスを冷徹な敵意が籠つた眼で射貫きながら、隊長達に次の試合は自分がやるという旨を淡々と告げてきた。

「……駄目、それは許可できないよ」

「そうだね。今のスバルはどう視たつて正常な精神状態じゃないからね」

「模擬戦形式の試合と言えど、相手の挑発を受けて、そう簡単に怒り冷静さを失うような未熟者を戦いに出す事など到底出来んな」

——せやけどスバル、私の存在はもしや無視シカトかいな？ 私、部隊長やのに……。

当然、この場に残っている三人の隊長（何故だか総部隊長ははカウントされてない、

乙)は即答でスバルの申し出を却下。前の二戦を得てロストウイング陣営の戦力は最大戦力だと思われる氷眼の少年らシルバーガスト小隊が不在であっても、穴がどこにも見当たらない程に凄まじく高い戦闘能力を持った人員層が厚いという事は皆当に解っている。加えて、スバルを含む機動六課F W陣の四人はまだまだロクに実践経験を積んでいない新兵で、戦闘能力値も並の局員よりかは少しばかり優れている程度の未熟者だ。恐らく彼女達がそれぞれ一対一で軒並み連ねるロストウイング陣営の高位陣に挑んだところで敵わないだろうというのは想像に難くない。

ただでさえそうなのに、ご覧の通り相手からの挑発を受けて異常なまで精神を乱してしまっている人間を戦いに送り出すような無能な隊長など、たとえ破壊の紫竜の爪牙によつて一度墮とされていても百戦錬磨の英雄が集う機動六課には存在しない。冷静さを欠いた者は戦う前から負けているも同然だからだ。

隊長達の指摘に間違いはない。しかし、それでもスバルは大人しく引き下がる様子はなく、依然として眼前足下で調子を全く崩さずどこまでもこちらをおちよくるように自分を見上げてきているニヤけたピアス面を、嚇怒の焰を宿した昏い瞳で睨み返している。

これはどうしたものかと困ったが、そこでやれやれよっこいせと上体を起こしたフォックスが、右腕を左斜め上の角度で自分の首元前に上げてその掌の甲を左耳元近く

に添えながら変顔をし、口を発した。

「アイ〜ン！ 別に出してあげてもいいんじゃない？ そのプツツンハツスル具合だと、青髪ベイビーちゃんが試合の相手に指名したいのって、僕でしょう？ だいじょうV！ だったら僕にッチョベリグな持ち込み企画があるめぼ〜☆」

フォックスはその場に立ち上がってお気に入り革ジャンに付いた砂をパンパンと叩き落とし、御調子よく右手でVサインを突き出したその指でスバル、ミクティーマ、エリオ、キャロを順番に指し、提案する。

「キミ達、四人がかりで纏めて掛かって、いらっしや〜い☆ ラーメン・ツケメン・僕イケメン！ これなら青髪ベイビーちゃんのフォローを三人がやればバッチグーだし、四回分の試合数を纏めて消化できる。問題かいしょー省エネルギー・安近短の

スリーピース 完璧だぴよん♪」

既に上に逆立っている前髪を手で大袈裟に掻き上げたり、三本指を立てて非常に腹立たしいドヤ顔をしたりと、相変わらず時代錯誤の寒いジェスチャーを忙しく取りながら詳細説明するチャラ男。死語と死にネタだらけの酷い文章で何を言っているのか途方もなく理解し難いが、要はこういう事だ。

「四人掛かりでって……もしかして複数対一の変則形式試合をやろうと言うのでしょうか？」

「そんな……幾らなんでも貴方一人で、僕ら四人を同時に相手にして戦うだなんて、できるんですか?」

「モチのロンよ、寧ろキミら四人つて、どう見てもトリーシローで経験値の足りてないザコ助のびよこ侍にしか見えないしいく。魔導師歴十二年のボクに掛ければイチコロだっぴー☆」

今時の若者にとつては宇宙語に等しい意味不明の説明文の中から数少ない通常単語を拾い、辛うじてフォックスがたつたの自分一人で機動六課F<sub>分</sub>W陣四人を一斉に纏めて相手に試合してやると言ってきたのであると理解できたキャロとエリオは相手の正気を疑った。戦闘とは基本的に数の優位がモノを言うもので、しかも折角挑発して平常心を失わせた敵兵の援護を付けさせるなどという塩を態々送ってくるなど、幾ら何でもこちらに優位をやりすぎだろう……だがしかし、そこまでのサービスをくれてやっても尚、相手は勝つ自信を微塵も揺るがさずに余裕綽々といった構えを取っている。素人に毛が生えた程度にしか過ぎないド新人の陸戦魔導師など、四人掛かりでも屁の屁のカツパだと言うのだろう。

「……いいよ、それでやろう。四人でタコ殴りにしてやって、機動六課F<sub>等</sub>Wをそこまで嘗めた事を存分に後悔させてやるだけなんだから……ッ!」

「スバル……」



「《マツハキヤリバー》、セツトアップ」

人は怒りの臨界点を超えると激するよりも冷静になるらしい。スバルは自分の大切なものを侮辱された挙句にこちらの実力やミクテイー又達FWの仲間までをも見縊られて、もはや敬愛するなのはに止められても引き下がる事なんて出来なかつた。嚇怒の大きさを顕すかのように燃え盛る青い焰の如き魔力を解放し、此<sup>ロストウイング</sup> 処へ出発前に六課のデバイス開発整備担当のシャリーから受け取つていた新型デバイス——《マツハキヤリバー（待機形態の青いクリスタルのネックレス）》を右手に握り締め、これからブチのめす相手<sup>フオックス</sup>に果たし状を向けるかのようにして掲げ、武装展開<sup>セツトアップ</sup>！

マツハキヤリバーが一足の大型のインラインスケートに変化して相棒<sup>スバル</sup>の両足に装着され、同時に彼女が昔に殉職して亡くなつた母から譲り受けたと回転式六弾倉付属の拳装着型アームドデバイス——《リボルバーナックル》が右手に装着される。続けて運動的に健康美抜群の肉体に装着されたバリアジャケット<sup>高</sup>は、髪の色と同じ青いホットパンツ<sup>高</sup>ツック、そして彼女が憧れて己まない不屈<sup>高</sup>のエース<sup>高</sup>・オブ<sup>高</sup>・エース<sup>高</sup>の戦闘衣装に色合い・デザインを類似させた外装<sup>ジャケット</sup>が羽織られた。

最後に格闘家<sup>ファイター</sup>の象徴たる純白の鉢巻<sup>高</sup>きが額に巻かれて、武装展開完了！ 憧れへの夢を乗せた鉄拳で立ち塞がる壁をブチ破る、青き魔法拳士が今此処にボールを脱いだ。

「アンタをブン殴る！ そしてあたしの大切な憧れを馬鹿にした事を、絶対に改めさせ

「やる!!」

「ヘエイ! カマン、ベイビー!」

遠慮せずに何所からでも掛かって来い新人共、軽く捻ってやるよ、と、こちらの戦意を煽り立ててくるように余裕の笑みを浮かべて手招きしてくるフォックスへ、望むところだ、空の上までブツ飛ばしてやる! と、迸る闘気オーラにも似た青色の魔力光を激しく散らすようにして纏わせた鉄拳を突き出して闘志を燃やすスバル。

団体模擬試合、第三戦目の組み合わせカドは、機動六課F W陣チームVSオンリー(スバル、ミクティーンヌ、エリオ、キャロ) VS フォックス・ストーン——四対一の変則マッチで行われる事に決定されたのであった……。

# 灼熱の中の四対一。機動六課FW（フォアード）チーム VS フォックス

次元の海を走る靈脈レイラインが多数集まった特異点の一つを孕んだ靈山である《メルクーリア連峰》の氣候変化は大変変態的である。

その靈山の頂上に建てられている時空管理局の裏に存在する非公式の特務遊撃支援部隊ロストウイングの隊舎アジト……その裏側に広がる此処、ロストウイングの模擬戦場の中央では20mの距離を挟み、一人のチャラ男と四人の少年少女がそれぞれ起動セットアップしたデバイスとバリアジャケットで武装してピリピリとした空気の中、互いに向かい合っている。

二人の男が互いの持つ守護の意志に懸けて己の中の渴望イジと渴望ケツイを秘めた拳と拳を衝突させて泥臭く殴り合いを繰り返していた、前の試合の時まではバトルフィールドの土の底まで凍り付く程の極寒の風が吹いていたが。今現在になつてはフィールド外野の周囲に層厚く積もっていた積雪があつという間に全溶けして微温湯ぬるまゆの水溜まりへと融解され、そしてその瞬く間にその水溜まりが爆速で熱気体へと変化し蒸発されていくという、普通の自然氣候ではありえへん神速の相転移変化が見られる程までに気温が急

上昇し、真夏の熱帯風へと激変されていた。

「暑——っついわあああああツツ!!」

変態過ぎる気温急上昇に我慢ができず、己の全身から流れ出た汗によって内からぐしよ濡れになった局員制服の上着を乱暴に脱いだはやてが大声で発狂しながら手に持った上着を自分が座っている外野ベンチの真下に叩き付けた。若千十九歳の若い娘から生成させた汗水が上着から弾けるように飛び散って、暑さに乾いた地面に刹那の瞬間だけ染みを付けては、一秒待たずして直後にそれが瞬く間に水蒸気と化し熱帯の空気に同化されていく。乙女の流した汗水すらも、永遠には成れない刹那であった。

「うっほおー♥ はやてちゃん汗ずぶ濡れスケブラワイシャツ姿キターー!」

「おっ? なくんだ着痩せするタイプだったか? チビタヌキ娘の割には意外とおっぱい有るじゃねーかよ。まあ、アタイと其処のパツキン執務官のダイナマイトおっぱいと比べたら全然小っせーけどな♪」

「そこ、やかましいわ!! セクハラ発言の罰として後で迷彩柄見せブラっ娘の方はそのダイナマイトおっぱい揉ませろや! てか、この山は変態気候もええ加減にせんか——いっ!! 経ったの数分で真冬から真夏になつとるやんけ——!!」

相手側ベンチのスケベ金髪男と迷彩柄見せブラっ娘に自分のあられもない恰好をガシ見してセクハラ発言させた為、二乗になった暑さの苛立ちを叩き付けるようにして二

人へ指をビシビシと差しつつ盛大なる文句とセクハラ発言返しをブチ撒けるはやて。彼女の苛立ちも理解できる。この隊舎へは徒歩で山登りして来た為、機動六課一同はなるべく動きやすく寒暖温度両用のトレーニングシャツや局員制服を着ているが、流石に—10℃から40℃への気温激変は堪ったものではないだろう。両側のベンチを見渡せば機動六課陣営もロストウイング陣営も皆全員が身に着けている衣服を自分の汗でびしょ濡れにしている、タオルで汗を拭いたりクーラーボックスから冷却された飲料缶を取り出しては開けて飲んだりをしている様子が見られる。特に、この変態気候環境に不慣れである機動六課陣営は急激過ぎる気温変化に体温調節が上手く出来ずに皆それぞれ大小さながら参った様相を曝している。試合に負けて未だにベンチの上に横になっていまままだであるヴィータにはシャマルが氷入り袋を頭に乗せて冷やしてやっているが、その氷も40℃の熱帯気温によってあつという間に溶けてしまうのだった。

「いやー、急に暑くなったねー。ボクが寒いのが苦手なのを知って、お山が気を遣ってくれて気温を暖めてくれたのかな? でもここまで暑くし過ぎると流石に喉がカラッカラになって困つちゃうなあ。おチビ君ちゃん達は大丈夫?」

「は、はい! バリアジャケットの体温調節機能のおかげ様で、僕とキャロはなんとか平気です」

「それはそうなんですけど……」

「ふあああ（ほじほじ）」

「……ギリッ！」

さつきまで積雪の湿気に湿っていた模擬戦場の土はすっかり乾燥して硬くなり、辺り一面が陽炎に歪んで見える程の熱気の最中、暑さに堪えるながらもバトルフィールド内の中央に試合開始準備万端で立つ機動六課FW陣四名。 中央司令塔役のミクティー

又が年少コンビであるエリオとキャロに調子を確認する傍ら、自らの鼻の孔を指でほじりながら、だらしなく欠伸を掻いている対戦相手フォックス・ストレンを殺意に近しい敵意の籠った眼で睨むスバルは、その完全にこちらを侮りきった相手の態度に益々大きく苛立ちを募らせて耐えかねぬ忌々しさに噛み締めた歯を鈍く軋らせている。

「スバルさん、ずっと対戦相手の人を凄く怖い顔で睨みつけて怒っていますけど。大丈夫なんですようか……」

目前の余裕ぶったチャラ男の憎たらしい顔面に今すぐ殴り掛かりたいという衝動に駆られているのを隠そうともしていないスバルの危なげな様子を見て、キャロが心配を口にする。

自分が最も敬愛する最高の魔導師のの背中への憧れと、その背中を追い掛けて追い付きたいという己の夢ねがを、このフォックスというふざけた男は「犬の餌にでもすれば？」な

どと最大に許し難い暴言を吐いて馬鹿にした。絶対に許さない。そういった腹の底から湧き上がる溢れんばかりの義憤と憎悪がスバルの純粹無垢な心をドス黒い感情に塗り潰しているのだ。

試合が開始された瞬間、この激情に身を燃やすこの青髪の魔法格闘少女の鉄拳は待った無しに目の前のピアス面へ向かって振るわれる事になるだろう。しようがないねとミクティーンが肩を竦めて嘆息を吐いた。

「まっ、そこは気を遣ってボクラら三人でフォローするしかないよね。隊長達からも決して一人で無茶をしない事」と口酸っぱく命令されてる訳だし。それに、シャーリーさんから此処に来る前にFW陣ボク等は新型デバイスをプレゼントしてもらって、ちよっぴり戦力アップしたからね。頑張ればなんとかなるんじゃない?」

「えええ……」

「そんな樂觀的に考えていて大丈夫なんでしょうか。あの対戦相手のフォックスっていう変な人、なんだか妙な雰囲気を感じますよ」

キヤロは若干不安そうな顔をして、二枚のプ○ングルズチップを口に銜えてアヒルの嘴を作る遊びをしている対戦相手を一瞥してみる。彼の纏う戦闘衣装バリアジャケットは前開きのフード付きベージュ色ローブの中に薄紅色シャツと黒色ズボンと茶色皮ブーツという、普段着が目にも痛い風な流行遅れファッションである割には意外と簡素な恰好をしている

（だがしかし、中身は顔面ピアスのガングロチャラ男のままである為に、そのギャップで何処かの秘密結社にでも居そうな不良黒魔術師っぽいビジュアル感が凄まじい事この上ないww）が、妙なのは得物デバイスの方である。

手に持っている簡易魔導術式演算仕様のストレージデバイスと思われる錫杖も変わった得物ではあると思うが、それ以上に彼の両手の指に嵌められている七つもの指輪型ブーストデバイスに奇怪な目が行く。注目すべきは指輪の中心に嵌められている

ものは宝石ではなく、無骨に光る「金属の塊」が七種類、それぞれ別々の指輪に一塊ずつ分けられて納まっている。右手の人差し指に「鉄」、中指に「銅」、薬指に鉛。

左手の人差し指に「金」、中指に「銀」、薬指に「水銀」、小指に「錫」……古いにしえの占星術において7惑星と結び付けられる「七金属」を施した、神妙不可思議な感じのアクセサリーオブション端末機器だった。

「ボク（錫杖型デバイス）っのなまえは《マグヌス》ッ！ ボク（七金属の指輪型デバイス）っのなまえは《オプス》ッ！ 二人っ合わせて「マグヌス・オプス」だっ♪ きくみとボクとでマグヌス・オプスだっ♪ グワツ、グワツ☆

フォックスが口にプ○ングルズアヒル嘴芸をしたまま、全身大汗だくで水分補給をしていたのはが聴いていて「なんだか、わたしの子供の頃に故郷の世界のテレビCMで、似たような歌を聴いた事があるような……」と首を傾げながら呟かせる、幼児教育音楽



風に天真爛漫の明るい曲調のオリジナル(?) デバイス紹介ソングを口ずさんでその場をクルクルと踊り、決めポーズに右手に持った錫杖型デバイスの《マグヌス》を正面に向き合う対戦相手四人に差し向けてアヒルの鳴き真似をしつつ、キリツとしたドヤ顔アピールをかます。このチャラ男、試合開始直前の普通緊張する場面においても、ひたすらにウザイ事この上ない。あまりの相手のウザさに沸騰したやかなの如く顔面真っ赤にして怒りの臨界点をMAXにまで引き上げたスバルがもう我慢の限界だと言わんばかりに、この試合の審判を務める事になった、メイド服を着てオドオドしている童顔少女——《リゼル・アントニー》へ怒鳴りつけるように催促する。

「審判ッ！ 向こうもこっちも、もうとつづくに戦る準備はできているから、さっさと試合開始の合図を出せ!!」

「ふひやあああ!? は……はい!! でででは、これより、ロストウイング対機動六課の団体模擬戦第三試合を執り行いますうう! りりよりよつ、両者各選手、各自戦闘配置に着いて——」

とぼつちりによつて浴びせられた怒声に竦み上がり、リゼルは慌てふためきつつもバトルフィールド中央線の奥に立つて、フィールド内の試合参加選手五名へと戦闘準備を呼び掛け、合図を切る為の右手を垂直に天へと掲げる。東——ロストウイング陣営側のフォックスが二枚のブ○ングルズを口に銜えたまま錫杖型デバイスの《マグヌス》を

右手にだらんとぶら下げるようにして適当な構えをしながらフィールド中央線の手前に立ち。 対する西——機動六課陣営側のFWチーム、狙撃手でFWリーダーであるミ

クテイーヌは中央司令塔、俊敏な機動力を有するエリオは側面遊撃、味方への支援補助

を得意としている召喚師であるキャロは後方支援、そして近接格闘戦得手として高い

突破力を持つ攻撃の要であるスバルは最前衛へ、それぞれが新型デバイスと緊張感を

持つて戦闘配置に着く。 スバルは目の前で未だこちらを侮りきった態度を崩そうと

しない憎き相手を射殺しそうな眼力で睨みつけ、益々と戦意を滾らせている。 まだ始

まらないのか？ 早くこの舐め腐ったアヒル嘴ガングロ野郎をブン殴らせろと溢れき

れんばかりの昂ぶりを抑えきれず、構えた右手を苛立ち横薙いで、今にも飛び出し

そうに前のめりになった……その時、孔を空ける程敵意を乗せて睨んでいた対戦相手が

唐突に口に銜えていたプ○ングルズを噛み砕いて飲み込んだ。

「バリバリッ、ゴックン！ あ、そうだ。 ピキーンツと良いこと閃いちやった、ちよん

まげ。 ねーねー、キミたち」

「……何よ？」

「もしよかつたらさ、僕は左手だけで戦ってあげようか？ そうしたら、少しはマシな試

合になりそうじゃないカナ？ カナカナ？」

「——ッッ!!」

左腕を上げて鳴らしながら、自分は手加減ハンデを付けて相手してあげようか？ などと、相手からこちらを最大に愚弄する提案を持ちかけてきた瞬間に、スバルは己の中にある堪忍袋の緒を『ブツツリッ！』と切断する。そしてその直後――

「試合――開始ッ！」

審判リゼルが上げた手を勢いよく振り下ろし、遂に第三試合開始の火蓋が切つて落とされたのだった。

「舐めるなああああああーっ!!」

「えっ……!!? ちよ、ちよつと待つてくださいいスバルさん。一人で突っ込んだら――!!」

試合開始と同時にスバルが抑圧されていた激情を爆発させて、武器マグヌスを持たない左手の指で『COME ON BABY』と宙空に魔力光文字を描いて挑発しているフォックス目掛けて脇目も振らずに飛び出していく。背中を引き留めようとする味方エリオの声などまるで耳に入っていない。火山の大噴火の溶岩の如く解き放たれ、止めどなく吹き出る相手への敵愾心によつて剣の刃のように鋭く細めた青い目の中心で見開き切らした瞳孔と、激怒のあまりに歯茎から血管が浮き出る程に強く食い縛られた歯によつて、元々は15歳という若輩の幼さを残しながら精悍に整っていた彼女の美貌は怒りに狂った獣の如く醜烈に歪まされ。両足に履かれたマツハキャリバースバルの車輪が相棒の

激怒を主張するように地面に真つ赤な轍を引いて火花を上げて駆けていく。それが齎す爆発的な加速に勢い乗せて、己の大切な憧れを馬鹿にしたチャラ男野郎を思いつきリブン殴るべくして握つた右拳を大振りに振り上げ、相手へと正面突攻を仕掛ける。神風の如き速度をもつてこちらが拳打攻撃有効範囲に迫つても尚、未だに右手にぶら下げている錫杖を構えようとしてもしないフォックスの余裕ぶつたピアス塗れの顔面に狙いますまし、周囲の空気を歪ませるレベルの衝撃波を拳に纏わり付かせる程に超速回転させた回転式六弾倉を伴つて肩の後ろに大きく引き絞られた右拳を弾丸を撃ち出すようにして突き放つた。

「くらええつ、《リボルバーキャノン》——ッ!!」

「【ふっ】とな☆」

「つて、のわああああー!?」

スバルの繰り出した渾身の鉄拳は、フォックスが半身をズラして軽々と躲された。

空を貫いた右拳にそのまま上半身を引つ張られてつんのめつたスバルは一瞬覚束なくなつた足もとをフォックスに足払いされて、突攻の勢いそのまま地面にキスしてコメディーのキャラクターのように足を大きく上げてステーション! と転倒した。

「足もとがお留守だぜえ、ベイビ〜♪ そんなプツツンした闘牛みたいな、おバカ一直線のパンチングウ〜が当たたる訳なんて、あ〜りまへんがな〜。カトちゃんペ」

「くっ……っおんのおおー！」

無様に顔面と全身を砂塗れにして倒れ伏したスバルに、鈍間な子供を揶揄う感覚をもつて煽りまくるフォックス。益々頭に血を昇らせたスバルは直ぐさまに立ち上がり、指二本を鼻の下に据えた挑発ポーズをする相手へと再度突撃。ワン・ツーと連続で右左のストレートパンチを繰り返すが、煽りを受けて破れかぶれに放つ攻撃など、幾ら身体魔力強化と彼女の人数並み外れた身体能力でプロボクサーを大幅に上回るシングルスピードと打撃力を発揮したとして、ベテランの戦闘経験値を持つ魔導師に通用する道理はない。防御結界魔法を張る事もせず、フォックスは飛んで来る拳を当たるギリギリまで引き付けてから素早く首を左右に傾けるだけの最小限の動作でそれを避け、眼前に映る魔法格闘少女にほくそ笑みを浮かべる。それを見て完全に見縊られたと受け取ったスバルは更に輪をかけて憤りを増大させ、我武者羅になって続けざまにフォックスへ殴り掛かる。

「オラアツ！ てりやあ！ うらああつ！」

右ストレート、そして左アッパーからの二回回し蹴り……それからも猛然と疾風怒濤の連続打撃を放ち続けるが、しかし、どれだけやっても攻撃は当てられない。防御どころかこの期に及んで武器を構えることすらしていない相手に上半身のフットワークのみを使って躲され続ける。

「クソツッ！ 逃げっ！ るなっ！ ちゃんどっ！ 戦えっ!!」

「おくにさくんこつちらく、手くの鳴くる方くへく♪」

こちらは必死になって攻撃しているのに、相手は真面目に相手をしてくれず鬼ごっこ遊びのように手を叩いてはこちらの苦勞を、煽って、煽って、煽りまくりながらも汗一滴流さず余裕綽々と躲し続ける。それが実に腹立たしくて堪らず、スバルは止まる事なく溢れ出る憤怒で思考を塗り潰してしまい、拳フオクを打ムつ型も無茶苦茶にして、猪突猛進にフォックスへ殴り掛かつては避けられて拳を空に切らす事をひたすらに繰り返すばかりだ。まるで公園の砂場で丹精込めて造りあげた砂の城を他人の子に蹴り崩された子供が癩癩を起こし、壊した子へと有無を言わさず恨みの暴力を振るうような、直線的で不格好な有様であった……。

「ダメだ。 あんな単調な攻撃で当たる訳がねえ。 スバルの奴、完全に怒りに飲み込まれてやがる」

「未熟者め。 だから言っただろうが、相手の挑発を受けて簡単に怒り冷静さを失う者を戦いに出す事など出来んと……」

最早元のシューティングアーツから掛け離れた下手な喧嘩殺法で無駄な正面攻めを自棄になってやり続けるスバルの姿を眺め、外野ベンチの機動六課陣営は早くも難色を示しはじめている。特に元航空武装隊のヴァイスやヴォルケンリッターの将である

シグナム等、長年の戦歴を持つ古<sup>ふる</sup>兵<sup>つわもの</sup>から観てして今のスバルの醜態は見るに堪えない様子だった。無論、なのは達隊長陣も部下の異常な暴走ぶりを観て非常に険しい色を浮かべていた。

「あっちゃー。スバル、あのウザい死語しやべる GANGUO 男に完全に遊ばれとるやんけ……」

「うん……。スバルの精神状態<sup>コンディション</sup>の不安定さを事前に視て、たぶんこうなるだろうとは予想できていたんだけど……」

「相手への怒りで完全に我を忘れているようだね。実力が未知の相手に対し様子見で測りもせず、味方を置き去りにして、無茶苦茶な突攻を繰り返すだなんて、愚の骨頂もいいところだよ……」

大振りのパンチを放つては相手に軽く避けられ、その度に足を引つ掻けられて地面に転がされては、立ってまた相手へと猪突猛進に突撃していく愛弟子を目の当たりに、なのはは嘆かわしく空を仰いだ。南国レベルの灼熱の日差しが眼の中に射し込むのも相俟り、頭が焼けるようだ。

「<sup>尊敬する人</sup>わたしに憧れる気持ちや自分の目指す夢の事を馬鹿にされたから許せない、というスバル<sup>あの子</sup>の憤りは十分に理解しているよ。だけど、シグナムさんの言う通り、その怒りに自分を支配されて冷静さを見失う事は、戦う相手に対して大きな隙を見せる事にな

る。 そうなったら勝てるものも勝てないし、格上が相手なら尚の事危険になつてくる。 これが実戦だったなら、今のスバルは一発で返り討ちになつていようだろうね……」

そのようになのはは戦技教導官として教え子の愚行に対し手厳しいコメントを語る一方、その後方で佇んでいるもう三人の教え子達へ何かを期待する目を向けていた。

——ベンチで観ている事しかできないわたしじゃあ、スバルの目を覚まさせてあげられない。 今は一緒に試合を戦っている君達だけがあの子の助けになれるんだ。 だから頼んだよ、ミクティーン、エリオ、キャロ……。

「これなら……どうだあああつ!!」

「パラグライダー!」

「こっの! ちょこ! まかとつ!」

「ジュー○アナトーキョー、朝までランバダ、ランバダー! フォーウ!」

外野ベンチの上司等と仲間達から大変な心配を向けられても尚、スバルは気にも留めず一人でフォックスへ猛攻を加え続けるが、彼女の拳は一向に相手へ当てられず空音を鳴らすばかり。 腕を引き引き絞つて撃ち放つた大砲の右ストレートは背中を屈めて手足を左右に大きく開き伸ばしたヘンテコな恰好跳びによって股下に潜り抜けさせられ、ならば手数で勝負だと切り替えて矢継ぎ早に爆裂拳を繰り出そうともバブル世



代を思わせるクネクネした踊りの前に翻弄されて上手く狙いが定まらない。あまりに相手が真面目に戦ってくれない所為でスバルの苛立ちが益々と募っていく。

「いい加減にしろ！ 何でさつきから、ふざけた変な動きして避けてばかりで、全然反撃して来ないんだ？」

「マ○リックス回避！ そんなのキミがみそつかすに弱つちいから、手加減してんに決まってるジャンw w。パンチはエリマキトカゲよりもスロウリイで、戦法もただ真正面からバカマルダシでブツ込みジョートーくれて来ているだけ。今は戦後ではないツピ。そんなんじやオハナシになすりま千年☆」

「ふ……ふっざけるなああああああつ!!」

こちらがはち切らしそうな程に濃い青筋を額に浮かべて、ともに応戦せずふざけまくる相手への抗議を物申しながら突き放った右ストレートを、某SFアクション映画の主人公が飛んでくる銃弾を華麗に躲すアクションシーンを再現するようにして大きくエビ反る体勢になってやり過ぎしつ相手が返してきたこちらへの侮辱千万を受けて、スバルは烈火の如き激怒の叫びをあげる。彼女自身が己が魔導師として憧れのエースや隊長陣のような一流にはまだまだ程遠い未熟者である事は先刻承知である。だが、顔中にピアスを付けてふざけた死語で他人の夢を馬鹿にするばかりか、試合になつても手に携えた得物を構えたりもせず真面目に戦わない、そのような失礼で

ふしだらな低俗者相手から「お前超ザコだから手加減してあげるww」などと挑発をされて、黙ってなどいられる訳がないのだ。

「だったらこれで、やる気にさせてやる！ マッハキャリバー！」

『OK相棒<sup>パディ</sup>。術式展開！』

完全に頭に来たスバルはどこまでも自分を舐め腐ってくれた相手に目に物を見せてやると思い、マッハキャリバーのAIに高ランクの魔法発動術式を展開させる。自分の足下に自らの魔力光と同じ水色の近代ベルカ式魔法陣を出現させ、開いた両手を前方へ突き出し、掌に魔力を練りあげて集中させていく。

「うおおおおおおお！」

そうして雄々しい咆哮を轟かせながら練り上げる魔力によって水色に輝いた両掌を掲げたその前方にバレーボール程の質量を持つ魔力球体<sup>スファイア</sup>を形成した。

「ヒュウ♪ これはアツと驚く為五郎。意外になかなかの魔力出せるジャンよ」

「ハン！ 今更驚いたところでもう遅いよ。 あたしの憧れの人 なのはさんを馬鹿にした暴言の数々、この一撃を受けてみてから取り消してもらうよ！」

スバルは作り出した魔力球体<sup>スファイア</sup>の膨大さを目の当たりにして粹に口笛を鳴らしながらも一瞬だけ物怖じをしてみせたフォックスを見て、少しだけ機嫌を和らげさせて不敵に笑む。だがこれだけで自分の大切な憧れを貶したこの相手を許す訳にはいかない。



## FW (フォアード) チームの実力

スバルが撃ち放った怒りの魔デイバインバスターフォックス 砲は対戦相手を丸飲みして後方約100m程に敷かれた外野線の手前まで地面を抉り進み、そこで大爆発を起こした。

「のおおおっ!? やべえ、爆風がこつちん——『ガアンッ!』シヨウメーイー! うぼあ  
…… (チーン)」

「ヴァヴァ、ヴァイスッ?!」

「おおーっ! へへ、何だよ? 突っ込むだけしか出来ない能無しかと思わせておいて、意外にイイ爆発火力の砲撃魔法を撃てるじゃないかよ、あの青髪ショートのへソ出し格闘少女」

バトルフィールド東側外野線の周囲一帯を白い爆煙でまるっと覆い尽くす規模の魔力炸裂爆発によって近場に立っていた夜間照明灯がバラバラになって吹き飛ばされる程の衝撃風が吹き荒れてくる。デイバインバスターの炸裂爆風に猛烈と廻りつけられてまるで“ひよつとこ”のように変てこに歪まされたヴァイスの顔面へ外野控えベンチまで飛ばされてきた分解された照明の一部が見事命中して、これまた変てこな断末魔を叫んで照明を顔面にめり込ませたまま頭上に可愛いヒヨコを回してベンチの後ろ

にバタンと卒倒してしまったヴァイスを横目に見てシグナムが流石にも普段のクール然とした顔付きを崩させて顔面蒼白の絶叫を曝している。それとは反対にロストウイング陣営側の爆弾魔パンク美少女のD、Dは爆風の猛烈な逆風を受けて自身の獅子の鬣のような髪を更に逆立てて激しく靡かせて、まるで回転する扇風機の前に顔を近付けて涼むかのように気持ちよさそうにしながら、スバルのデイベインバスターの威力の高さを絶賛しつつ彼女の能力の評価を見改めている様子。

砲撃炸裂の余波を受けた外野控えベンチの両陣営の反応<sup>リアクション</sup>を見ても一目瞭然のように、スバルが撃ち放ったデイベインバスターの威力は相当なものだ。高町<sup>高町なのは</sup>本家本元のもの

と比較すれば射程距離が短く、使用者の魔力と魔法構成練度の量の違いから攻撃力も数段ランクが劣っているものはするものの、それでも並の防御力ではとても防ぐ事は叶わない会心の一撃だということは誰の目にも判る。

魔砲<sup>デイベインバスター</sup>を打ち出した右拳<sup>リボルバーナックル</sup>を、砲撃着弾地点を濛々と覆い尽くした爆煙の方へと突き出した体勢で、砲撃反動による数秒の硬直状態となっているスバルの背中より後方に控えたままであった他のF.Wの三人もスバルが放った“一撃必倒”の魔砲の威力に呆然と目を見張った。

「凄い、凄いよスバルさん……！」

「うん。精度や燃費はともかくとして、前よりまた一段と魔法発動速度と破壊力を上

げたようだね。 気を遣って言っても、スバルのあの魔<sup>デイベインバスター</sup> 砲をまともにくらつたら、幾らロストウイングの主力部<sup>ネー</sup>隊員<sup>ム</sup>が強かろうが人間なら一溜まりもないだろうね」

「それで、あのフォックスという対戦相手の人はどうなったのでしょうか、ミクテイーヌさん？」

「ちよつと待つてね。 今煙が晴れるようだよ……」

爆煙が熱帯の空に舞い昇って晴れてゆき、覆い隠されていたバトルフィールド東側端の様子が顕わになっていく……やがて煙が完全に取り払われると――

「は……はあああああーっ!!?」

「おいおいおいマジかよ? フォックスの野郎、見事にブツ倒されてやがる……!」

意外! その光景はなんとスバルの魔<sup>デイベインバスター</sup> 砲に飲み込まれたフォックスが外野線の前の地面にうつ伏せにして倒されていたのであった。 さつきまで余裕綽々とスバルの猛攻をあしらっていたフォックスが楽勝かと思われた相手が破れかぶれにブツ放してきた砲撃魔法を受けて普通<sup>ノックダウン</sup>に昏倒されるという、あまりにも予想外の結果が顕れて模擬戦場は騒然となった。

「ハ……ハハハハ! やった。 <sup>な</sup> <sup>は</sup> <sup>さ</sup> <sup>ん</sup> <sup>の</sup> <sup>魔</sup> <sup>法</sup> デイベインバスターでブツ倒してやったー!!」

砲撃がモロに直撃した事を示すように身に纏ったバリアジャケットのフード付きローブを真つ黒焦げにし黒い煙を頭部から立ち昇らせてピクリとも動く様子もなく倒

れ伏して沈黙しているフォックスを目の前にして、砲撃使用反動の硬直を解いたスバルは驚き半分に苦笑を漏らした直後に歓喜をあげて跳び上がると同時にガッツポーズ。

「アハハハハ！ いやまつたく。コイツあれだけあたしの事を散々馬鹿にしておいて、砲撃一発くらつてアツサリとこんなザマになるだなんて、本当にザマアないとはまさにこの事だよ！ 所詮はロストウイングなんて、口だけ達者の不良や犯罪者予備軍が集まった最低部隊n——」

それで本当に倒せたのかどうか眼前の地面に伏したフォックスの意識の有無を確認せずには勝利したと思ひ込み、気分爽快に浮かれて舞い上がるスバル……その刹那、倒されたフォックスの身体が霧散した。

「——んだ……よ……ふえっ？」

「スバル！ 油断しないで。試合の決着はまだ——」

倒したと思つた対戦相手が突然に消滅し、浮かれた気分を冷めさせて惚けたスバルへ外野のなのからはから叱咤するような注意喚起が飛んでくる。しかし遅い。スバルが構え直す間も待たずに北北東の宙空から紅紫の魔法光弾ステインガが熱気の層を貫いて真っ直ぐ飛来してきた。

——あ、ダメだ……今からじゃあ防御しようとしても、とても間に合わない……。

狙撃に気付いて振り向いた時にはもう魔力光弾は文字通りの目前にまで迫ってきて

いたのだった。唐突な万事休すを前にして脳の処理速度が急激に上昇し知覚加速が引き起こされる。今スバルの視界に映されているのは遅延動作でゆっくりと何重もの幻影を引いて自分の眉間へと突き刺さろうとして来ている紅紫の閃光鏡。見える景色の動きは全て鈍いが制御不能となった脳の指示速度が異常に速くなり過ぎて身体が全く付いていけず動く事は不可能で。彼女がもうやられると思った、その間際――

「――《コカトリス》。妨害粒子波、光速展開――ッ!!」

そう背中の後方よりスバルが訓練校生の時からずっと聞いてきた擲揄い上手な女子の親友の声が張り上げられると、その一瞬に彼女の目元数センチ前に接近していた魔力光弾が急に軌道を大きく曲げて左眼の横をギリギリすり抜けて行き、傍の地面へと突き刺さって粒子分解するように消滅した。

「……ミク?」

間一髪で危機を脱したスバルはコンマの一秒で無防備状態の自分の頭に直撃しそんなところまで迫り来ていた魔力光弾が唐突に弾道を逸らして自分から外れて行った事に呆気にと取られて二秒間ぐらい固まったが、直ぐにその不可解な事象がこの試合開始から後方に控えていた親友の妨害魔法によるものと気付く。

冷や水を浴びせられたように我に返って親友の声がした背中の方へ首をぎこちなく振り向く。するとスバルの目に入ったのは、今彼女が身に纏っているモノと同じく



所属分隊スタワーズの隊長である高町なのはのバリアジャケットを思わせる白基調青配色のカラーリングカラリングの色合いをしたケープブラウスのトップスとキュロットスカートという華やか風のバリアジャケットを身に纏ったミクティーンが、彼女専用専用に支給された新デバイスのライフル型ストレージストレージデバイスを両手に、普段の軽々しさと打って変わり毅然として構えている様であった。それはまるで南国鳥を思わせる色彩艶やかな装飾と騎馬鎧のように洗練とした形体フォームと猛禽類の嘴を連想させる鋭利で長い銃身を持った狙撃魔騎銃であり、複数弾薬庫交換装填式マガジンの魔力瞬間増幅薬莖装填機構カートリッジを採用しているのが確認できる事から魔力弾を全自動で連射が可能なのだろうと想定できる。《コカトリス》というのは恐らくこの魔騎銃の名前なのだろう。管理世界はおろか、なのはやはやての生まれ故郷である第97管理外世界の伝承にも書き記されている程に有名な幻想生物である「見た者を石化させる魔眼を持つ四ツ足の魔怪鳥」の名前がそれと同じで、よく見てみるとミクティーンコカトリスの魔騎銃には銃身の付け根の左右に、遠目では赤い眼と見紛える楕円形の排気孔を確認できる。そして、相当に魔力強化した視力を凝らして観察しなければ視認が出来ない程に微小な妨害粒子波ジャマがその赤い眼から放出されて周辺一帯に広がっているのを視るに、どうやらそれでスバルの急所アタマに命中寸前だった魔力光弾の制御を奪って曲げてみせたのだらう。

「ふうん? 気を遣って言って、光弾射撃魔法も囿ステインガースナイブのようだね。

幻影分身魔法フエイク・シルエツトでこつ

ちに倒せたとおぼせておいて、本体は複合光学迷彩魔法を使つて、隠れているのは光弾が飛んできた……真逆か！ エリオ、七時の方向！」

「了解！ いくよ、ストララーダ！」

『承知！ 突撃推進機構噴射!!』

今度はミクテイーヌが敵の隠れている位置を特定して指示を出した方へと、白基調の騎士甲冑を纏つたエリオが槍型デバイスの《ストララーダ》のブースターを噴射して猛烈な勢いの加速を付けてカッ飛んで来る。ストララーダはエリオが以前から愛用しているアームドデバイスでありスバルのマツハキヤリバーやミクテイーヌのコカトリスのような新しく支給された新型のものではないが、代わりに機動六課が誇るデバイス技師であるシャーリーの手によつてそれ等の新型に勝るとも劣らない性能へと強化改造されていて、ブースターによる推進噴射の出力と馬力も先日の機動六課の部隊稼働初日訓練の時よりも数倍上昇している。

「ハアアアアアア!!」

裂帛の叫びを放つと同時に槍を両手で思いつきり前方へと突き出し、全身を腹這いにして矢の如く七時の宙空を射抜く赤毛の少年騎士。すると何も物が無い筈の空間に突き穿つたストララーダの穂がガキイイン！ という金属同士が衝突したような甲高い音が鳴り響き、弾けて飛び散つた火花が複合光学迷彩魔法を使つて空に擬態し隠れ

潜んでいた対戦相手の姿を炙り出した。予想外を受けて半分驚いたような様子で彼が咄嗟と展開した前方防御結界魔法がストラダーの穂先を正面から受け止めて、押し競り合いになった恰好になって現れた。

「ワアオ☆ これはチョビつとオツタマゲた。僕が姿隠蔽の魔法を使つて隠れてしているつてのがよく分かつたつピね？ 赤毛のチビつ子君の槍のロケット突撃もケツコービリリとしてるよ。やるね〜♪」

「余裕かまして……でも、これで終わりじゃないですよ。 キャロー！」

「錬鉄召喚——《アルケミックチエーン》！」

「およ？！」

「捕まえた！ 今だよフリード、《プラスチックフレア》!!」

「キュオオオオオ——！」

エリオの槍を止める防御結界を維持させて機動力を固められたフォックスを包围するようにして小規模のピンク色の召喚魔法陣が複数出現し、そこから召喚された複数の鋼鉄の鎖が彼の身体に巻き付いて捕縛。両腕ごと身動きを封じられた彼へ透かさずキャロの召喚使役幼童であるフリードの口から吹き出した火炎砲が浴びせられ、為す術なく命中して幼童の使役主が事前に付与していた着弾時爆裂術式が発動して爆発が巻き起こった。エリオはキャロが錬鉄召喚したアルケミックチエーンがフォックスを

捕縛した時点で彼の傍から後退し、尚且つ炎炎砲命中時の爆発も小規模だった為に巻き添えから無事に逃れている。

「よし！ やったk——」

『いや、気を遣って言って、避けられたね。その爆発の後ろだよ』

炎炎砲が相手に命中したと思つて左右一对のグローブ型ブーストデバイス《ケリユケイオン》を装着している両手を前に可愛らしく握り小さくガッツポーズをして喜びそうになるキャラだったが、砲撃が命中した手応えが無い事に直ぐ気付いたミクティーマから念話が飛ばされてくると同時に彼女が指し伝えてきた位置に紅紫色の光線が走り、一閃が消えると共に五体満足のフォックスが己の身を拘束していたアルケミックチェインからすつかり解き放たれた自由の身を現した。

「あれは《ソニックムーブ》?! まさか、あの一瞬でキャラのアルケミックチェインを破壊してから咄嗟に即時発動術式の高速移動魔法でフリードの炎炎砲を回避したというの!」

外野から高速機動魔法戦のスペシャリストであるフェイトが長年に渡り高速機動に順応させて既に人間離れの域に到している動体視力でフォックスがやった事を観て愕然と驚愕の声をあげる。それを実行するとしたらSランクの高速機動特化型魔導師である自分にも成功率が相当低くなると思う難度の拘束脱出神速回避行動であつた為、

それを中距離射撃を戦闘主軸にしていると思われるキャラ男系魔導師がやってのけた事が正直に信じられなかったからだ。……だが、驚くのはそれだけではない。

「みんな！ 油断しないで。もう既にフォックス君は反撃の一手を仕掛けているよ！！」

「「「っ！！」」」

「なっ、なんやってええー！！？」

「部隊長が驚くのですか！！」

高速機動特化型魔導師としての自信が傷付いて項垂れたフェイトの横でなのはフォックスが何らかの攻撃をしてきている事に感付いて、翻弄状態のFW陣を飛ばした檄で背筋を叩く。しかし、フォックスの攻撃は完全に肉眼には見えず、なのはとは約半年分程度しか魔導師歴が違わないベテランであるはやてが思わず仰天の声を発して、その膝の上に幼女サイズになって二重座りしていたリインが堪らず耳を塞いで通常の妖精サイズに戻り変身ツツコミをしてしまう。

「遅いぜ窓際族ども☆ あ、そーれ。クイツとな！」

そしてその直後を見計らったように爆発の後ろに身を隠したフォックスが錫杖マダススの柄をバトンのように翻し、その動作に合わせてバトルフィールド中の地面の中から桁外れに大量の数の紅紫色の魔力球スファイアがボコボコとゴルフボールサイズの穴を空けて地上に現

出した。その総数は軽く10000を超えている。忽ちFWチーム四人全員の顔から一瞬で血の気が引いて真っ青に染められた。

「嘘おおおおおおおっ!!」

「ままま、待つて、待つて!! 少しは気を遣つて手加減を——」

「そうは問屋が卸しまへん♪ ……てな訳で、四人全員魔力球全部ボツシュートさせて頂きます!」

慈悲は無い。屈託の無い素敵で残酷な笑顔を浮かべたフォックスが天高く掲げた錫杖マクヌスを振り下ろすと同時に、広大なバトルフィールド全体、その空の上まで埋め尽くされた桁外れの物量の魔力球スフィアが一斉に全部、絶望一色に染まったFWチーム四人全員へと殺到する。

「うわああああああっ!!」

豪雨の如く降り注いで来る紅紫の弾幕滝を前にして為す術も無く絶望の阿鼻叫喚をあげる事しか出来ないFWチーム。百戦錬磨の英雄である隊長達とは違い、まだまだ戦士としては未熟者の烏合の衆にしか過ぎない四人にはこの膨大な物量の魔力球スフィアをどうにか出来る手立てなど無い。ミクティーナの手にある新型デバイスコトリスで妨害粒子波ジャマを展開したとしても自身を含め疎らに離れた位置に居る味方四人を1000発の魔力球から守りきるには明らかに出力不足だ。

——クソッ！ もうダメか……こんなふざけたピアスヤローに一撃も与えられずアツサリ負けるだなんて……ツッ!!

自分の一番大切な憧れゆめを馬鹿にされた相手に為す術なくやられてしまう悔しさを心に喚くスバル。そして無情にも紅紫の弾幕滝が四人の頭上に落ちて、全員飲み込まれる——

『ブウウウウウウウウウウウウツ!!』

「二二のああああつ、臭つつつさ————い!!」「二二」

「ク……ギュル……ル……ツ!!」

その直前に1000発もあつた大量の魔力球スファイアは全部泡のように弾けて消滅すると同時にその場で放屁の如き悪臭を大音量を鳴らして炸裂させた。スバル達はそれを零距离360。からくらわされ、屁音によつて耳の鼓膜を、途轍もない腐臭によつて嗅覚を破壊されて更なる悲鳴をあげながら熱帯昼下に晒されたミミズの如く地面を激しくのたうち回つた。人の何千倍以上もの嗅覚を持つ竜種であるフリードに至つては激臭のあまり鼻が痙攣けいれんを起こして陸に打ち上げられた魚のように大変な呼吸困難に陥つてしまつている。

「ゲロゲロゲーロ! やーい、引つ掛かつたー♪ 1000発もの魔力球を遠隔誘導操作なんて、そんなガンマでも出来ないようなチキトンな事、僕ネイビーに出来る訳無いんだよ、お

マヌケベイビー共があゝ！これは次元世界で一番に超絶臭い屁を出すバナワシと記録されている現生魔法生物〔シユールストレミンスカンク〕の放屁カクワカシイカガリ弾だっちょベリバ☆」

模擬戦場全体に充満した屁煙の真っ只中で文字通りの死に物狂いに鼻を手で押さえ、地べたをジタバタゴロゴロと猛烈に転げ回っているおマヌケベイビー共を空中から見下ろして痛快だと言わんばかりに彼女達へ指をさしながら大爆笑するフォックス。

〔シユールストレミンスカンク〕が放出する放屁の臭さは危険度S級の巨大魔獣ですら速攻失神すると言われているレベルで激烈なのだ……ならば生身の人間ならその臭いを嗅いだ瞬間にほぼ100%の確率でショック死するだろう事は容易に想像できるし、ありとあらゆる実害から魔導師の身を守ってくれるバリアジャケットを展開していても地獄の掃き溜めの如き臭さに襲われるだろうという事は現在進行形でその放屁の中を顔面濃青にしてDVDの10倍速再生の如き超速挙動で藻掻き苦しんでいるスバル達の様子を見れば一目瞭然である。これは酷い、まさに地獄だ。ある意味本気で魔力弾1000発をくらわされた方がマシだったかもしれない……やがてバトルフィールドから屁煙が晴れると、FWの四人と使役竜の一匹が地獄の臭さに壮絶と苦しみ悶えて虫の息で地面を這いずった酷い有様を現した。

「うええ……くさい……死ぬ程臭いです……」

「ぜえ、ぜえ……バリアジャケット展開してなかったら……はあ、はあ……即死だったね



……気を遣つて言つて……」

「キュ……ピ……」

「フリード!? 大変、フリードが息をしていない。直ぐに回復の魔法を——」

「ゲホッ! ゲホッ! ……畜生ッ! あのクソツタレのチャンチャラピアスヤローが! ……どこまでもふざけやがって、もう絶対に許さない——!!」

相手のおふざけの所為で次元世界一臭いオナラを嗅がされて体力を無駄に消費させられ、スバルの憤りは淑女にあるまじきレベルの汚い言葉遣いを吐き散らす程に天井を突き破っていた。上で手足を叩いて爆笑が冷め止まないでいるチャンチャラピアスヤローを憎々しい眼で睨みつけると彼女は屍累々の有様でいる方をまた置き去りにして、射出されたミサイルの如き爆速で猛然と飛び出す。

「マツハキヤリバー!」

『《ウイングロード》空中展開』

マツハキヤリバー  
車輪靴の中心に嵌め込まれた水色の核が淡く点滅すると駆ける車輪の足下から後に引き敷かれるようにして核と同じ色に輝く空中車道が展開される。飛翔魔法を使つて宙空に浮遊している憎き敵へ向けてスバルが空をまつしぐらに駆け上がった、曲がりは一切作らず翼の道はグリーンと一直線に伸ばされていく。

この特殊移動魔法はスバルの今は亡き母である《クイント・ナカジマ》が作り出した

固有<sup>オリジナル</sup>スキルであるらしく、現在はスバルと彼女の姉《ギンガ・ナカジマ》にスキルが継承されている。スバルが右手に装着しているリボルバーナックルもまた母クイントから受け継いだ形見なのだ。

「くらええええっ!!」

「おっとつと」

余裕ぶっこいてムカつく程に芸術的な空中四回転スピンを決めているフォックスのもとへとウイングロードに乗って爆走してきたスバルはその勢いのまま回転式六弾倉<sup>ナックルスピナー</sup>を超高速回転させた右<sup>リボルバーナックル</sup>拳<sup>リ</sup>で衝撃波<sup>ポ</sup>を纏<sup>ル</sup>った右ストレート<sup>キヤ</sup>をフォックスのニヤけたピアス面を狙い打つが、直撃寸前に相手が首を逸らしただけで爆速の勢いを乗せた拳は簡単に外されてしまう。そのまま横にすれ違う両者。時が遅くなったような感覚の中で互いの視線が重なった刹那、フォックスが明らかな相手への挑発を孕ませたほくそ笑みを浮かべる。

——キミの信じる憧れの力つてのはその程度なの？ 超<sup>紙</sup>手<sup>め</sup>加減<sup>プ</sup>してやつてる僕に一

発すら当てられないそんなスロウリイなチヨコヘナのパンチしか打てないとかさあ、さすがにシヨボ杉ww。噂に聞くあの高町<sup>キース、オプ、キース</sup>なのは戦術教導も、ちくつとも大した事は無かったツピね☆

「~~~~っ!!」

そのように至近距離で視界全体に映された憎たらしいピアス面に貼り付けられた嘲笑の言葉を感じ取った瞬間にスバルは相手への怒りで元々頭に昇っていた血を極限以上に煮え滾らせた。己への實力不足を見下してくるのはまだいい、しかしまたしても憧れの人へ対する許されざる侮辱を……もうダメ、我慢の限界だ——！

「このクソヤローがああああああああーッッ!!」

スバルは溢れ出る憤怒に耐えきれずに我を忘れ、激情に任せてフオックスを猛追。

だがしかし、冷静さを完全に失くした彼女はもはや力任せで出鱈目なパンチやキックしか打てず、もうそんじよ其処らの半グレチンピラが喧嘩に使う素人の暴力にすら劣ってしまっている。型が崩れた不格好な大振りの連続ブローが上半身スの引き逸ウエらしで躲イされて、五度目に腕を振り抜いた直後にクルツと回してきた錫杖マグヌスの柄によつて脇腹に強打を受ける。堪らず胃の中の体液を吐き出して痛烈なダメージをくらった脇腹を左腕で押さえつけて悶絶を二秒間した直後に足下のウイングロードを蹴って大きく跳び上がり、自分の頭よりも高く振り上げた右脚の踵を相手の頭上から薪を割る斧の如く力いっぱい叩き落とす。しかし相手が身体を後方に半歩下げて跳躍踵落としを空振りにされると、更には高低が合わさったタイミングで錫杖の突きが胸（両乳房の中心と首の間ら辺）に刺されて、肺の中の空気を吐き出させられながら10m程突き飛ばされる。直線上に後ろへと飛ばされたのが幸いして下に墜ちず空中に真つ直ぐ引き敷いてきていた

ウインググロードの上に受け身を取る事ができ、硬直もなく即座に相手へと再び突進をします。

「これならどうだ！ リボルバーシュートオオオオ！」

今度は右手の回転式六弾倉に瞬間魔力増強薬莖を一発装填して超速回転させ、突進の勢いに乗せて突き放ったその拳に纏った衝撃波を弾丸にして撃ち出してみる。

分厚い岩盤をも撃ち砕く程の破壊力を持ったスバルの数少ない射撃魔法はウインググロードの上に沿って直進し、その道の先でフォックスが張った広範囲防衛結界魔法と正面衝突。三秒間の拮抗の後にスバルの衝撃波弾丸がフォックスの防衛結界を噛み砕いて風穴をブチ空けるが、貫通して来る前にフォックスは亜音速移動魔法で回避した為弾丸は元気に照り輝く太陽の光の中へと消えて行った。

「クソッ、外したか……！」

「おーほっほっほ！ おたんこ茄子めが。 さっきの砲撃も合わせて魔法の破壊力にだけは驚き桃の木山椒の木だったけど、全体的に攻撃動作が御丹珍なんだよねー。

キミみたいなウスノ口単細胞一人なんて僕にかかればお茶の子さいさいさ☆」

「——だったら、四人と一匹を同時に相手したらどうかな？」

心底悔しそうに歯噛みをして憎たらしく睨みつけてくるスバルを文字通り上から見下ろして嘲笑しているフォックスへと地上から第三者の声が響いてきた。

「ヴァリアブルシュート！」

「サندانレイジ！」

「シューティング・レイ！」

「キユオオオオ！」

その直後に地上から四色（緑・黄・桃・赤）もの攻撃魔法が盛大に撃ち上げられて来た。それ等はスバルの横を通過すると一つの線状に重なり合つて渦を巻き四色多重の螺旋波動となり、リズミカルに両腕を上下に振つてモンキーダンスを踊りながら調子こいて油断しているフォックスへと殺到する。

「およよー?！」

ビリビリと空気を揺るがす猛烈な波濤と渦巻くような上昇衝撃風を身に浴びて物凄い勢力を伴う量の魔法攻撃が下方より迫つて来ている事に気付いたフォックスが不意を突かれたように間の抜けた声を漏らした。その直後に無防備状態の彼の足下から四色の螺旋波動が命中してドツカアアアン! という定番の爆発音を鳴らした。

「スバル、いい加減に一人で勝手に突つ込むんじゃないよ！」

螺旋波動が直撃したフォックスの安否を隠して白濃い爆煙が濛々と上がる中、鼻のダメージから回復して螺旋波動を協力して放つたミクティーマ達残りのFW陣三人と一匹が地上からスバルの敷いたウイングロードの上を駆け上がって来て、スバルの背中に

溜まった文句を投げつけてくる。

「さつきから一人で無茶苦茶に戦わないで下さい！ 僕達も味方に居るんですからね！」

「四人で一緒に連携を取って戦いましょう！ 勿論フリードも忘れずに入れて！」

「キュルルー！」

親友で訓練校時代から付き合ってきた相手パートナーであるミクティーンだけでなくエリオもキャロもフリードも、この試合開始してから対戦相手に煽られるがまま一人で身勝手に突っ走って味方じぶんたちへ見向きもしてくれないスバルへ怒り、同時に共に協力して戦おうという心遣いを向けてきている。

「気を遣って言って、今の君は君らしくくないぞ？ 尊敬する上司とチームメイトの夢の事を馬鹿にされて、相手にアタマにきてるのはボくらだって同じなんだからさ。少し頭を冷やして、冷静になりなよ」

「……」

ミクティーンから窘められて冷静になったのか、スバルは味方に背中を向けたまま肩を下ろして無言になる。前に垂れ下げた前髪の影に眼元が隠れているので彼女が今どんな表情をしているのかは判らないが、とりあえず味方の心配する声はちゃんと届いている様子だ……そして爆煙が晴れてきてフォックスの姿が露わになった。

「ぷっふう〜。 あっぶねえ油揚げ麵だったぜ☆」

残念ながらミクティー又達の不意打ち合体魔法攻撃は、奴には身に纏っているバリアジャケットのローブの襟や裾を少し焦がしただけで、全然ダメージを受けている様子はない。 奴は攻撃が直撃する寸前に自身の紅紫色の魔力を防御膜にして自分の全身に纏う事でダメージを防いだのだ。 全身防御系結界魔法《フォース・フィールド》だ。

「……さすがにマジか？ 気を遣って言って、フォスファイル（フォース・フィールドの略称）とかプロテス（プロテクションの略称）と同じで訓練校生が初歩で習うような簡単な防御魔法だよ？ そんなのでボくら三人と一匹の合体魔法攻撃を完璧に防御しちゃうなんてなあ……」

ロストウイングに来る前にFW陣みんなで練習していたとっておきの合体魔法が初心者向けの結界魔法で無傷で防がれた事を受け、いつも凶たくマイペースを崩さないでいたミクティーもこれにはさすがに目を丸めざるを得ずに驚嘆を表した。 するとフォックスが相手の悔しがる声を聴いて益々ご機嫌になつて嗤う。

「もけけけ！ 防いじやつてごめんちゃーい☆ でも今言った通り、今の攻撃はちよ〜と危なかつたつちよよ？ あとコマ数センチ秒魔法の展開をミスつたらバイビーしてたからねえ。 あははっ。 いよっ大統領！ 翠くせ毛ちゃんとおチビちゃん二人にレッドアイズホワイトドラゴンちゃんもなかなかやるジャン♪ その激お

「こぶんぶん丸してて言うだけバンチョーになってるヘツポコ青髪ベイビーちゃんとは違つてさあ」

「そんな汗ひとつ掻いてない顔して褒められても全然嬉しくない……」

「それに、レッドアイズホワイトドラゴン」って、もしかしてフリードの事言っているんですか？」

「グキューー！」

相手の茶目つ気に人差し指を立てた右手を耳元に翳して「いや、今のは惜しかったね」という風にわざとらしさを全面に出した謙遜アピールをしてくる様がこれまた凄まじい腹立たしさを掻き立ててきて、たとえどのような他人にも優しく出来るよう保護者フレイトによってそのように躰をされてきた子供達エリオとキヤロも流石に不快感を感じずにはいられない顔を浮かべしている。ついでに隊長達の故郷の世界で大人気のカードゲームにでも出てきそうなモンスターっぽい呼称を付けられてフリードが白い貌を真っ赤にして吼えて激しく憤慨を主張してきているが、如何せん幼体であるが為にその怒り様も可愛いだけである。

「……マツハキヤリバー。ウイングロードをこのバトルフィールドの空中全体に張り巡らせるように追加展開して」

『OK相棒』



そして仲間達へのお世辞にも比較されて、「言うだけのヘツポコ」だと憎き相手からどさくさに言われたスバルだが、彼女は意外にも先程のような激情を表わさずに冷淡な声音で相棒のデバイスに指示し、陸戦魔導師であるFWの仲間達が空中戦を可能にする為の足場（ウイングロード）をバトルフィールド全体の宙空に広げて追加展開させた。先程の仲間達から叱られたのが効いたのか、相変わらず目の前の対戦相手へ向ける憎悪の瞳に灯された昏い焰は消えてはいないようだが、今度は激情に支配されて一人で暴走しそうな様子はない。

「スバル……」

「……いくよミク。 エリオとキャロにフリードも。 遅れないでよ」

「は……はいっ！」

「キュルルー！」

スバルが心配そうな視線を向けてくる親友と年下の同僚二人と使役竜へ共に戦う意思を促すように淡々と言つて、FW（四人と一匹）チームはようやく全員で横に並び立つ事ができた。

その様子を見てフォックスは何時間前から停留所で待ち続けてやっと回つて来た路上バスを迎えるかのように、大変待ち草臥れた感じに背筋を伸ばしながら両腕をいっばい上に伸ばして「んんん」と喉を鳴らしたり体側運動をしたりして身体をよくほぐしながらFWチームへと正面から向き合った。スバルが拳を握るとミクティーン達

も全員得物デバイスを一斉に構え、フォックスも今度は（彼なりに）真面目になって錫杖マグヌスの長い柄を棒術のように高速で振り回す演舞パフォーマンスを見せつける事でスバル達の戦意に応じる。

「最初に宣言した通り、四人でタコ殴りにしてやる！」

「ヘーイ、カモンカモン♪ ベイビーちゃん達が何人束で掛かってきたって、みくんなー捻りでイチコロよ！」

そして空に戦場を移して、第2ラウンドが開始される……。

幼きあの日、弱き少女は煉獄の炎の中に舞い降りてくれた絶対不墮の天使様に憧れを懐いた……

「臭っ——さああああああいいいいいいわあああああッッッ!!!」

模擬戦場全体に充満していた次元世界一の悪臭がするという現生魔法生物の放屁カゲワカシイカオリ

が消失したのを見計らって半球形ドームに両陣営の控えベンチを覆っていた結界魔法が解かれ、その中から出たはやてが我先にと抑えていた鼻の孔と口を大きく開けて肺いっぱい溜まった息を盛大に吐き出した。

「結界張つても死にさらしそうならいに超臭いわ、アホーッッ!!　ちちゅうか、オナラの魔法とか、ホンマにアホかつ!?　あのチャラ男、アホなんとちやうかあああああッ!!!」

結果が無かったら即死でしたね☆　と言えるレベルの激悪臭をとばつちりで嗅がされた理不尽に、エセ関西人芸人やがみんの魂が込められたツッコミ絶叫がメルクーリア連峰の山並みに反響し、珍妙な空気に響いてくる。　スバル達機動六課FW陣の試合対戦相手であるフォックス・ストーンが悪ふぎけに放った放屁魔法の攻撃被害範囲は広すぎて、その激臭はバトルフィールドの外野にまで及んでいた。　そのとばつちりです

ルフィールドの外野線が引かれた目の前に設置されていた控えベンチの両陣営に山よりも巨きな象型魔法生物ですらも嗅いだ瞬間に気絶させられるレベルの悪臭ガスが直撃し、はやて達機動六課陣営もガンマ達ロストウイング陣営も仲良く地獄を見る羽目になったのだ。幸い射撃魔法の誤射や流れ弾、広範囲に被害を及ぼす大技による余波などを想定して予め控えベンチに備え付けられていた緊急対飛来有害攻撃遮断結界装置が作動してくれたお陰で悪臭ガス自体に飲み込まれて全滅するという最悪の事態はなんとか免れたが、それでも結界を素通りできるように設定している空気にある程度の臭いが混ざって中へ侵入して来た為、はやて達は結界に密閉された狭い空間で数分間鼻を摘ままされて、皆半端なく息苦しい思いをさせられたのだった。(因みに、ザフィーラVSゴートン戦時の反発弾や先程爆風飛来してきた破損照明が、今六課側のベンチの下で目をぐるぐる回して絶賛気絶中であるヴァイスに命中した時に結界装置が作動しなかったのは、この模擬戦場と同様に長い事ロクに整備をしていなかった所為で二回とも運悪く不良停止を起こしたからであったw)

「いいや、ちいつとちやうなあ機動六課の部隊長はん。フォックスは管理世界史上空前絶後の大ドアホウや」

「ぶっ——はあああああアツ!! ゲフツ、ゲフツ……うええ、まったくだぜ。あの万年時代遅れのチョメチヨメ死語ヤローがああ。幾ら対戦相手がザコ虫のヒヨッコ共

だからって、テメエの御遊びで仲間<sup>オレ等</sup>まで憤死させに掛かってんじゃねえよ、クソがあああ……」

「ガスうく……うつぶ」

「八神。機動六課の連中も。何度も身内が馬鹿な迷惑をやらかして、すまないな……」

戯れに使用する次元世界一臭い放屁魔法の被害に同所属部隊の仲間である自分達を巻き添えにして鼻が捻じり千切られるような酷い目に遭わせてくれた、只今バトルフィールド内上空で束になって怒涛に攻め掛かるスバル達4人を纏めて迎え撃っている真つ最中であるフォックスを全員でゲツソリとした表情になって扱き下すロストウイング陣営側一同……ある意味で猛毒ガスよりも有害なガスを嗅がされた直後の気分悪さによって胃の中から吐き出しそうになっているロッキーの背中を横から片手を伸ばして摩っているゴートンがもう片方の手で恥と情けなさがゴチャゴチャになった自分の顔を覆い隠しながら、生真面目に身内が引き起こした迷惑行為に対する謝罪をはやて達へ向けて伝えてくる。その誠意を見て、はやてはどうか溜飲を下げれて気を落ち着ける。

「あ……てか、いやいや。別にリライラス三尉の所為やあらへん訳やし……」

「別に『ゴートン』で構わない。お前の家族も普通にそう呼んでいたからな」

「ハハハ……おおきに。まあ、もう過ぎた事やし別にええわ。それよりも試合状況はどうなつとるんや？」

はやては気を取り直し、鼻の曲がり回復した皆とともに上空で続いている試合の様子に視線を移した。

スバル・ナカジマは物心が付いたばかりの幼少の頃、今現在のような積極的で明朗快活な気質はなく、それとは真逆に当時は元来内気で人見知りな性格をしていて、戦いや争い事などは大の嫌いであった。少し怖い目をみると直ぐに泣きわめき出して、今は亡き彼女の育ての母である《クイント・ナカジマ》や現在は父《ゲンヤ・ナカジマ》が部隊長を務める陸上警備隊と一緒に勤めている姉《ギンガ・ナカジマ》の背中へとサツと逃げ隠れてしまっていた程で、その殆どの者が戦闘を生業としている魔導師などとは非常に縁遠いような、泣き虫な普通の女の子だったのだ……。

現在の新暦75年から約八年前にミッドチルダの首都防衛隊所属の陸戦魔導師であった母クイントがとある特別任務で殉職してしまい、スバルはその形見にクイントが魔導師として愛用していたアームドデバイス《リボルバーナックル》の右手用のを、姉ギンガが左手用のを受け継いだ。

でもしかし、よく懐いていた母の死に直面して、まだ幼かったスバルの未成熟な心には人一倍に大きな傷ができてしまっていた。元々暴力や争い事を嫌っていた気質が母の死後につれてそれが極端に酷くなった。大好きな姉であるギンガがシューティングアーツの稽古に誘ってもその途端に激しく泣き喚いて拒否するようになり、管理局の魔導師が活躍している戦地のニュースや戦いで悪人をやっつける特撮ヒーローや変

身ヒロイン物などといった戦いに関するTV番組は頑なになって視聴しようとはせず、街の公園で遊んでいて他の子供達がブランコの取り合いになってケンカを始めたのを視界に映した途端に酷く恐怖してその公園から遠くへと逃げ出してしまつて、その後日からはその公園には二度と近寄らないようになる。それ程までに「戦い」に関するあらゆる物事をスバルは大変嫌悪した。

『戦いはあたしの大事な人達を傷付けて、あたしからみんな奪つて行つてしまふんだ。

だから、戦いなんて、大つ嫌い……!』

姉ギンガが亡き母の跡を継いで管理局の魔導師になる為にシューティングアーツを磨き続けて陸士訓練校に入学していく傍ら、スバルは次第に魔導師になる道から遠ざかつていつていた……。

そうして時が流れ、現在から四年前となる新暦71年4月を迎える。スバルは陸士訓練校の春休み期間で休暇を取るギンガに父ゲンヤの勤め先である陸士108部隊へ遊びに行こうと誘われた。正直に言えば魔導師が大勢居て日常的に大嫌いな戦いが近くに存在している管理局の部隊になんて行きたいなどとは思わなかったが、今となつては自分と姉の唯一無二の親であり日頃から仕事で忙しくてなかなか顔を合わせていなかったゲンヤには久しぶりに会いたいと思つた為、しぶしぶと姉からの誘いを受けた。



そしてナカジマ姉妹は同月の29日に飛行旅客機を乗り継いで陸士108部隊へと向かう為にミッドチルダ臨海第8空港へとやって来た。

ところが其処へ再び不幸がスバルに降りかかった。次元航行便に何者かが隠して密輸されていた危険度SSS級の古代遺物ロストロギアが空港に着いた途端にエネルギー暴走を起こして大爆発し、忽ち空港は丸ごと火の海に包まれた。

爆発の衝撃で崩れ落ちる建物の瓦礫、迫り来る火の手、パニックになつて逃げ惑う人々の荒波……それらにナカジマ姉妹も否応なく巻き込まれてしまい、スバルはギンガと離れ離れにされて、挙句の果てには炎の中に独りぼっちで閉じ込められてしまうのだった。

『うええん。 熱いよお……怖いよお……助けてよギン姉え……』

火災から逃れようとして押し退け合いながら空港の出口へと向かつて行く一般客の雪崩に飲み込まれた時に脚を挫いてしまった所為で負つた怪我と自分の周りを取り囲んで逃げ道を閉ざした炎が齎してくる熱と煙、そして何時も頼りにしていた姉と逸れて誰も居ない場所に閉じ込められた中で齎され続ける耐え難い孤独感によつて、当時僅か11歳の幼子だったスバルは身も心も極限の苦痛に酷く苛まれていた。

『……もう嫌だよ。 戦いも、痛いのも、大切な人が死んであたしの側から居なくなつちやうのも、こうして独りぼっちにされるのも、何もかも大嫌いだ!』

彼女の身も魂も燃やし尽くしてやると言っているかのように周囲を包囲する炎が徐々になじり寄って来る中で、スバルはどうしてこんなに嫌な事ばかりが自分に降りかかるのかと不幸を泣き喚き、理不尽を怨む。

『だから、お願い……誰か……誰でもいいから……この痛いのを全部消して、あたしを助けてよ……ツ!!』

故に彼女はこう渴望願した。『総ての苦痛を消し飛ばしてくれる絶対不墮なる天使様、どうか星空から舞い降りて……そして、少女のその願いは不屈を司る星空へと聞き届けられる。』

『——よく頑張ったね。もう大丈夫だよ』

一時は何を身勝手な願いをするな無礼者がと言わんばかりに、傍に聳え立っていた天使の石像が周囲の炎に全身を燃やされながら倒れてきて、遙か古いにしえに禁忌を犯して知恵の実を食し楽園から追放された人類へ神々が課した罪業の一つである苦痛と死を拒絶したいと願った罪深き少女を頭上から押し潰そうとした……だがしかし、神の怒りの炎を纏わせた天使の石像が彼女へと落ちる直前に間一髪その身体が桜色の光を放つ天使の環で縛り留められ、少女の願った通りに星空から天使は舞い降りた。

『安心してね。これで安全な場所まで一直線だから!』

両足に履いた光の翼の靴で宙を舞い、一切穢れの無い白き衣を纏った長い栗毛の可憐

なる天使——当時は15歳だった時空管理局の若手魔導師きつての不屈のエース。高町なのはは左手に携えた黄金の杖を分厚い鉄板が数十層にも重なって星空を覆い塞いでいた天上へと向けて掲げると、杖先の強化フレームが砲身に変形し、その中心に嵌められている赤色の珠の先に膨大なる桜光の魔力球体を形成する。そして——

『ダイバイイイーン——バスタアアアアアアアッ!!』

その魔力球体は極大の光禍となつて天上の鉄板を全層纏めて突き貫き、総てを破壊し尽くして星空への道を切り拓いた。

『あ……ああ……っ!!』

その桜色の光は幼いスバルの目に尊く焼き付けられ、そこから流れていた不幸を嘆く涙は止んでいた。何故ならまさしくその光は彼女から総ての痛みを消し去つてくれたのだから……。

それから、スバルはなのはの片腕に抱かれて砲撃で空けた吹き抜けから星空へと飛び出し、別の場所でフェイトに救出されていたギンガとともに、父ゲンヤのもとへと無事に送り届けられたのだった。

あの日、煉獄のような炎の中で苦痛からの救済を願った自分のもとに舞い降りた天使の姿と、天使の杖から放たれた全ての苦痛を消し去る桜光と、天使の腕の中から見た満天の星空の輝きを、スバル・ナカジマは今でも鮮明に覚えている。彼女はこれから先

も一生涯その光景を忘れる事は恐らく有り得ない事だろう……。

そしてスバルは思ったのだ、『高町なのは……あの人が、あたしや次元世界の総てから、痛いのを全部消し去ってくれる、絶対不墮の天使様に違いない』『あたしはあの天使様に近づきたい。その為なら、どんなに痛くても我慢できるし戦えるんだ!』と……そうしてスバルは絶対不墮の天使様に妄信的なまでの憧憬を懐くようになり、自身の将来の目標を「高町なのはのように、誰かを助けられる立派な魔導師になる」事に決めた。

その夢を絶対に叶えてみせるとして、スバルは母クイントが亡くなった日から今まで頑なに拒絶していたシューティングアーツの稽古を再開。後に亡き母の形見であるリボルバーナックルを右手に、姉ギンガが通つたのと同じ陸士訓練校へと進む。そこで訓練候補生寮で同室だった縁もあって《ミクティーン・ベクターン》とコンビを組む事となり、互いに切磋琢磨して訓練校のカリキュラムをやり遂げ、彼女は見事首席という最高の成績で卒業してみせた。涙々の卒業式を終えた訓練校門の前で訓練校で授業と生活をともししているうちに親友関係になつていたミクティーンと卒業記念に訓練で破損した訓練用デバイスの部品を交換した時の思い出はあれから二年経つた今も彼女の記憶に色褪せず残っている。

それからスバルは卒業してからすぐに訓練校からの推薦状を持つて親友ミクティーン

又とともに念願の時空管理局へ入局を果たし、二人共々《陸士386部隊災害対策課》に配属され、陸士部隊の先輩方から仕事の基本をビシビシと叩き込まれた新人研修期間を終えて……。

新暦75年4月初頭、スバルに待ち望んでいた憧れの人との再会と転機が訪れた。

この日、彼女はミクティーンと一緒に「陸戦魔導師ランク」のBランク昇格実技試験を受けるため、ミッドチルダ北部に在る荒廃都市区画へとやって来ていた。

妖精サイズの試験官から実技試験内容の説明がされ、試験が開始する。二人一組で荒

廃都市内の指定されたコースを走り、そのコース上の至る所に設置されている自動迎撃機能搭載の標的を全て撃墜してから制限時間以内にゴールを目指すという至極単純明快な試験内容だったが、標的の一部が受験者が段差を登った丁度真上から不意撃ちしてこれる絶妙な位置取りで待ち構えていたり、並の攻撃では破壊不可能な程に頑丈で他のより一際大きなボディを持った強敵が最後に立ち塞がってきたりした為、Bランク用の試験にしてはなかなか歯応えのあるコースだった。

それでもスバルの機動力と突破力、ミクティーンの精密射撃と妨害魔法を駆使する事で、二人は無難に全標的を撃墜し残り時間を五分以上余らせながらコースを見事完走した。ゴールラインを切ったところに飛んで来た小さな試験官からも文句無し的好評価を貰い、合格間違いなしの雰囲気になって思わず小さく飛び跳ねる程に大喜びして

いた二人のもとに、この試験の監督責任者であった立派な魔導師が空より舞い降りてきた。

『お疲れさま、二人とも』

『あ……』

その立派な魔導師の浮かべる優しい気な微笑みとその人から掛けられた労いの声をハッキリと認識し、スバルは思いも寄らないサプライズを受けたかのような感激と呆然とした声を漏らす。自分の記憶に留めて忘れもしない、あの空港火災の中で炎の熱さと怪我の苦痛と孤独の恐怖の中ただ怯えて泣いて誰かに助け求める事しかできないでいて、とても情けなくて弱かった幼い自分のもとに舞い降りてくれた、白い衣を纏った長い栗毛の天使様——時空管理局が誇る絶対無敵の《エース・オブ・エース》にして本局戦技教導隊所属のSランクオーバー級空戦魔導師、高町なのは一等空尉。4年前のあの日見た時よりも彼女は益々と凛々しく美しく身体もより理想の女性らしい豊かな起伏に富んでいて、しかしあの日と全然変わらぬ優しさと頼もしい雰囲気と纏わせて、今再び成長した自分のもとに舞い降りて来てくれた。自分の事を苛んでいたあらゆる“痛み”を桜光の砲撃で消し去って救ってくれたあの瞬間からずっと狂おしい程に憧れを懐き、その背中に追い付きたいと思っていた人と再び出会えた感動に、両目の奥に熱いものが込み上げてくる。

『なのは……さん……』

『ん?』

『あ……ああ、いやっ！ 本局の高町なのは一等空尉……ですよね？ ええと、あのおう

……そのう……』

『……ふふ。別にそんなに硬くならないで。 “なのはさん”でいいよ。みんなそ

う呼ぶから。……それと、4年ぶりかな？ ちよつと背、伸びたね』

『え? ……あたしの事、覚えていてくれたん……ですか?』

『うん。元氣そうで良かったよ、スバル』

『っ！ はい……はいいいッ!!』

あの日憧れた天使様は自分の事をずっと覚えてくれていた。自分をはじめ、次元世界

の英雄と呼ばれる相手にとつて自分の存在なぞ所詮は次元世界の法の守護者である管

理局の魔導師として大勢救ってきた名と力無き一般民衆の内の一にしか思っていない

ののだろうかと思っていた。しかしそうではなかった。この人は自分の名前まで

ちゃんと覚えていて呼んでくれたのだ。

スバルは憧れた英雄に自分の名前を呼ばれた感激が極まり過ぎて、もう堪らず目許に

溜めて我慢していた涙をその場で決壊させていた。そして、この瞬間に彼女の中で高

町なのはという存在は絶対的な崇拜対象になってしまった。





痛感していた。しかしそれでも、たとえ自分が倒されても次元世界歴戦最強の魔導師達と称される機動六課の隊長陣がまだ健在なら……否、管理世界中の誰もが認める絶対無敵の《エース・オブ・エース》高町なのはが居る限り、こちらに敗北の二文字が刻まれる事など絶対に有り得ない。そう強く信じて疑いなどせず、安心して眠りに落ちていった。それなのに……。

——なのはさんが敵に墜とされて負けただなんて、そんなの絶対に……嘘だ！

竜が去った後に医療センターの病室のベッドの上で眠りから覚めた時、隣のベッドに寝転がりながら「誰の心でも簡単に踏み躪れる友情ゴツコのススメ」という変に怪しい表紙タイトルの心理学本をゲラゲラ笑って読んでいた何事も無い様子の親友を見て一時は安堵していた。それで、自分が気を失ってから隊長達が襲撃者を難なく打ち倒し勝利したのだと期待して、こちらが目を覚ました事によろやく気が付いて本を閉じた親友にあれからの戦いの結果がどうなったのかを盛大な歓喜を上げる用意をする半笑いを向けて訊いたら――

『ん〜、気を遣って言うと……ゴメンね。気を遣った言葉が思い浮かばない程、フルボッコにされて負けちゃったんだ。なのはさん達……』

『……トク……』

ちよつと申し訳なさそうな口調になった親友からの返答は例え次元世界中の天地が

ひっくり返ったとしても絶対に有つてはならない隊長陣の敗北結果報告だった。勝利の期待とは真逆の内容を聞かされて思わず耳を疑い、表情を硬直させて茫然自失と聞の抜けた声を口から漏らした。

『ご、ごめんミク。ちよつと寝起きで耳がボケてたかもしれない。もう一度言ってくれる?』

ふふ、またまたあ、悪い冗談を言わないでよね。どうせ、時々意地悪な性格が出るこの親友がいつも自分にやってくるドッキリかイタズラなんだろう……そうだよね?頼むから、そうだと言ってくれ。

『そんな事言つて、聴こえないフリして誤魔化してるんでしょ? 信じられないのは分かるけれど、現実見た方が良いよ。気を遣つてもう一度言うけどね、次元世界の英雄は負けたんだ。《次元王軍ラグナバンド》って連中に手も足も出ないで——』

『嘘だあああああああッツツ!!』

そして現在、スバル・ナカジマは悪夢のように思い返していた過去の己と重ね合わせ、絶対無敵だと信じていた次元世界の英雄が敗北したという現実を否定して狂い叫び、半狂乱になって眼前の試合相手へ殴り掛かった。

「トウギューヒラリーマンチーング & バ○チョップ!」

「ごがつ——!!」

「「スバル（さん）！」」

しかし、がむしやらに振り被った右ブローリボルバーキャノンは相手に狙いがまるで定まってない。当然

然そのような攻撃など曲りなりにも管理局のエースを超える精鋭揃いである特務遊撃支援部隊ロストウイングの主戦力ネームドに数えられているフォックスにとつては曲がれない猪の突進よりもいなす事は容易だった。彼は真横にして掲げた錫杖マクダスから薄布状ヴェールの魔力幕を垂らし下げてそれを闘牛士のマントに見立てると、瞳孔開いて猛進して来たスバルの右拳を魔力幕に突き打たせる事で方向を見失わせ空を切らせる。そしてそのまま大振りを外して前につんのめったスバルの脳天に高所から垂直に左手の手刀チヨツブを落とす。簡易強化魔法で威力強化されたそれは打撃インパクトと同時に周囲の熱気を吹き飛ばし、憧れを馬鹿にされて憎悪の焰を燃やしていた魔法格闘少女の両眼に白を剥かせて、空から地に勢いをつけて叩き落とした。まるで隕石が落下したような物凄い轟音と地響きを鳴らし、衝撃でバトルフィールド上全体の砂塵が原発事故の大爆発を思わせるような規模でド派手に巻き上がった。

『くっ！……キャロ、強化を頼む！』

『あ……う、うん。わかった——』

「——エリオ君お願い！ 《ブーラストアップ・ストライク&アクセル》!!」

猛烈な勢いで地面に叩き墜とされたスバルのダメージは心配だが、この隙に相手から

追撃されたら危険だ。高速機動特化型魔導師が故の高速思考回転速度で真つ先にその判断したエリオは念話で自分が居るすぐ側のウインググロード上に立ちながらスバルが墜とされた地点を苦悶の表情で見下ろしていたキャロに能力強化補助魔法を自分へ掛けてくれと頼むと、彼女は直ぐに我に返りながら咄嗟に振り向いてエリオから向けられていた真剣な視線を一目で見えて相方の彼が何をするつもりなのかを察し、即座に攻撃力と速力を一定時間上昇させる能力強化補助魔法を二重行使してくれる。キャロの持つ魔力光である桃色の淡い光を全身に纏わせたエリオは敢えて推進装置スラスタを使用せず銃ストライダーを片手持ちに構えると、裂帛の気合いを溜めてからの速攻でフォックスへの単騎突撃を敢行する。

「かー〇ーはーめー——「ハアアアアアーツ!!」——つて、うおっぴい!」

彼の予想通り相手自身が真下へ叩き墜としたスバルに向かって追撃の収束砲撃魔法を撃ち込もうとしていた直前に滑り込む形でエリオは横から不意を突く。得物である錫杖マグヌスを背中に差した無手になって、右腰の位置で開いた両手を違えるようにして構えたその中に魔力収束を誰もが無処かで聞いた事があるような気がする技の掛け声を発しながらの動作で行っていたフォックスの格好を外野控えベンチから見上げていたはやてが「アツカーン! その技は偉い人から怒られてまうわ——つ!!」と自分の脳天をクソを幾つも前に付けそうな程ヤバそうに両手で抱え込みながら絶叫をあげてい

るのも気にせず、エリオは相手が魔力収束を完了させて両手を開きながら腕を突き出して砲撃を撃ち出そうとする直前に生じる決定的な隙を狙ってストラーダの穂付きを疾風の如く繰り出した。

しかしフォックスは寸出のところでエリオの横槍に反応し、突き出しかけていた両腕を引つ込められた事で高速射出されてきたストラーダの穂先をギリギリ躲した。

「ふう、危ない「まだだッ！」——つて、そのまま近接格闘戦クロスレンジバトルいっちゃうナウ!?」

だがエリオだつて自分よりも魔導師として経験も実力も圧倒的に格上の相手に対して、不意を突いた攻撃でも必ず決定打を当てられるなどと思いがつてはいない。彼は攻撃が躲された直後にその場の空中でクルつと身を横に半転させる事であつんのめるのを防ぐと同時に相手が躲した先に回り込み、更には此処でストラーダの推進装置スラスターを出力弱めで吹かして滞空ホバリングをしながら体重移動を巧みに駆使する事でそのまま空中浮遊しつつ近接格闘戦に持ち込んだ。

「はあああああッ! やっ! ふっ! それっ! てりやあああああ!」

驟雨の如き神速の乱れ突き、からの体重移動の宙空一回転と手首の返しスナッを使って左脇から柄尻での石突き。それを相手の錫杖で横から弾かれてもその反動の勢いを利用して即座に逆回り一回転し、そのまま豪快な払い上げ。更には長い柄の中央を両手で掴み棒術演舞の要領でブンブンブンと高速振り回し、疾風怒濤の連撃乱舞をお見舞

いする。

《鉄槌の騎士》ヴィータ直伝の体捌きを使った長得物による途切れ無しの攻撃連係繋ぎ……精鋭揃いのロストウイングが誇る主力魔導師ネムの一人である《曼珠沙華》ロッキー・マオをも苦戦させた百戦錬磨の騎士である彼女の達人級の近接技巧と比較すれば大分拙い部分が目立つものの、管理局内最速の称号を持つ高速機動特化型のSランクオーバー航空魔導師であるフェイト・T・ハラオウンも太鼓判を押し、彼の持つ高速近接戦闘における才覚の高さ、更には彼の相方（パートナー）にして召喚使役と支援補助のスペシャリストであるキャロル・ルシエに施してもらった能力強化補助魔法も合わさって、攻撃速度のみならずヴィータをも凌駕していた。魔導師騎士を志すエリオは機動六課が創設される以前から彼の保護者であるフェイトを通じて八神家の守護騎士達にちよくちよくしてもらっていた稽古の賜物だろう。

「これならッ！」

「のわおとつとつ！ あつ、あぶにいい。ちよつとヤンチャしすぎでしょエキセントリック少年」

「誰がエキセントリック少年ですか！ でも段々とフォックスさんの動きに付いて行けるようになってきましたよ。F僕達Wの事を侮るのは此処までですからねッ！」

そう言って波に乗ってきたエリオが腕と手首を巧く使って突き出すストラーダの穂

先の軌道を制御する事で変幻湾曲自在な連続突きを繰り出して来る。フォックスはそれを若干冷や汗を掻きながら絶妙に虚実牽制動作を織り交ぜてギリギリ避けていく。

「いや、別に君とイイ性格の翠髪ちゃんとおチビの竜召喚士ちゃんはナメてねーから。そのデバイスのロケットばびゆんエンジンだつてガチな使い方したら突撃で加速威力付けて超特急新幹線あ○さ2号する時にブツパするものでしょうに？ それを空中ホバーに応用するなんて、なかなかのセンス持つてんジャン少年☆」

「別に、只の子供の思い付きですよ。実戦経験で上回っている格上の人相手に対して無暗矢鱈に勢いを付けて突っ込んだりしたら、スバルさんみたいに避けられて勢い余り停止が効かないところをやり返されてしまうと思いましたのでね」

自分の持つ武才の高さを相手から賞賛（相変わらず死語だらけの言葉遣いで褒められているのか馬鹿にされているのかイマイチ判断つかないが）されても、エリオは驕る事なく謙遜と説明を返しつつ隙の生じぬ槍捌きで果敢に攻め続けて、当たるスレスレを躲し続けるフォックスを徐々に疲弊させていく……そして、程なく肘の返しを柔らかく使った上下段二連突きを放ったところでとうとうストラーダの穂先が相手の青紫色ワックスがけツンツン頭に覆い被さっていたバリエージュ色ローブのフードに突き掠った。

「チヨベリバーー！」

「好機。これで、墜としますー！」

フードを突き取ってギラギラと照り付ける日の下に晒したフォックスのガングロピアス面に決定打となる一撃を狙い定め、エリオは《烈火の将》シグナム直伝の《紫電一閃》を放つ。

「紫電——一閃ツ!!」

シグナムが繰り出す自家本元オ리지ナルのは彼女が持つ魔力変換属性《炎熱》を瞬間魔力増幅葉莢カリートを使用して爆発的な威力に高めた烈火を騎士剣レヴァンティンの刀身に纏わせて百の敵をも薙ぎ払う大技なのに対し、エリオのこの戦技は彼が持つ魔力変換属性《電気》で槍ストラダーを丸ごと磁石化し、更には磁力化した槍の左右に相反する磁極性質を持った仮想電極棒を敷く事で、真つ直ぐに番えた穂先を電磁超加速で雷速の刺突撃を放つという改変技であった。攻撃範囲と破壊力こそ自家本元にやや劣るものの、雷速で射出されるエリオの《紫電一閃》は速射力と突貫力で規格外の必中必殺率を叩き出せる。突き放ちの初速の際に生じてくる音破衝ソニックブームが異次元の速度をもって射出された槍ストラダーの穂先に纏わり付いて放電する真空ドリルと化し、核シエルトにすら刹那の間に大孔を空ける。非魔導師は無論、近距離で放たれば管理局内最速の航空魔導師であるフェイトですらも回避は非常に困難を要するだろうという、人の内ではほぼ対処不可能な攻撃速度に達している。

——よし、当たつ……て、な——ツ!!?



フードが突き捲れて、高山特有の猛烈な直射日光が眼に刺さった為に一瞬の硬直を曝したフォックスの眉間に雷速の真空ドリルが突き貫いた——かに見えたが、非殺傷ダメージの手応えが無く、その頭部をストララーダの穂がすり抜けた。

「身代わりの幻影分身魔法!? しまつ——」

「背後からドーン!」

「——ぐば、あ”あ”あ”あ”あ”ああ!!」

ストララーダに貫かれたフォックスの幻影分身体が紅紫の霞と化して消滅し、それと同時に本体が虚空からエリオの背後に出現して隙だらけになったその小さな背中に左拳の四本貫手（親指以外の四本指で点を突き撃つ高等打撃術）が突き打たれる。打撃点から空圧のような衝撃波が発生して肺を貫通し、エリオは肺の中にあつた空気を大量に口から吐き出させられながら胸を弓形に大きく反らして砲弾のように突き飛ばされ、場外ホームラン。前の試合の時にゴートンが使用した簡易爆裂魔法バイルブローウの余波で薙ぎ倒されていた、バトルフィールド外野の山林跡地の上に曲線を描いて墜落した。

電磁超加速を使用した雷速の刺突を空突きした直後、若干十歳の幼子の細腕に襲い掛かってきた反動はその必中必殺の威力に比例して凄まじく、その猛烈な推進力を抑え止める事はエリオの未発達筋力では身体強化魔法で筋力強化を施しても難しかった為、柄に両腕を引っ張られて先程のスバルと同様に前傾姿勢につんのめってしまった。

更に言うところ、エリオの紫電一閃は技を繰り出すと、直前に得物を磁石化する際に電光を派手に迸らせるといふ事前動作が出る為、それで相手が特技を出してくると見破ったフォックスが雷速の槍が突き放たれて来る前に複合光学迷彩を使用してそれと並行発動していた幻影分身魔法体と入れ替わって身代わりにしたのだった。

「エエ、エツ、エリオooooooooooooッ!!」

「エリオ君oooooooooooo!!」

「キュオオoooooooooooo!!」

「クツ！ エリオのあの紫電一閃は強力な分、相手に付け入れられる隙は大きいかな……どうやら実戦で使うにはまだまだ改善と修練の時間が要するようだな」

「そうですね。だけどエリオも背中に攻撃を受けた時に、体内に巡る魔力を打撃点に集中して衝撃ダメージをある程度緩和していた様子だったから、たぶん外野から戻って来れば試合復帰できると思う。だけどその間、前に出て壁になってくれていた前衛と遊撃が離れたこの一時に司令塔と後方がどう凌ぐか……」

派手に外野へ吹っ飛ばされたエリオに彼の保護者と相手とその腕に抱かれた使役竜が悲鳴を響かせた中、技の師匠が教えた技を簡単に破られた事に口惜しそうな呻きを漏らしつつも浮上した問題点を取り挙げて今後の課題を考え。その横から同意を示した教導官が腕を組みながら、エリオは体勢を崩して隙を見せてもしつかりと防御をして

いたのが見えたから大丈夫だと言ひ、しかし壁役の二人が居なくなつた後衛の二人はどうするのかという心配と期待を半分半分にして、未だ宙空に敷かれているウインググロ―ド上に立つ教え子二人へ注目を向ける。

『よしキャロ。此処は氣を遣つて、教科書通り二人で背中合わせになつて守りをガツチガチに固めておいて、スバルとエリオが戻るまで時間稼ぎといきましょうか☆』

『そ……そうですね。エリオ君もスバルさんも沢山食べるから丈夫だし、きつと二人共やられていないと私も思います。時間稼ぎでいきましょう、ミクティー又さん——』

「ところがギツチヨン、そうは問屋が卸三杯！」

「——つて、嘘、いつの間に!？」

「百合の間に割り込んでかゝらくのお。秘打、ハクチヨウの舞い！」

「きや、きやあああつ！」

「ギャオギャオ！」

エリオが飛ばされて行つて落下した場所を見定め、彼が持つ高い機動力を考えれば其処からバトルフィールドへ戻つて来るまではそれ程長い時間は掛からないだろうと判断したミクティー又は念話を通してキャロに時間稼ぎ作戦を提案する。それを聞き、頼れる相方の少年がやられて一瞬放心していたキャロが氣を正してその提案を呑み、早

速作戦に移ろうとしてフリードを抱いたままミクティーンの許へと駆け寄ろうとするが、二人の作戦を読み切っていたフォックスが亜音速移動魔法を使用して閃光のように素早く接触間近だった両者の間に割り込んで来る。そのまま彼は野球のバットを構えるように両手で錫杖の長い柄を握ると片足を軸にして華麗に高速大回転し、前後に分断された二人と一匹へ同時に牽制攻撃を行う。まるでバレリーナの舞いのように優雅と見せかけて竜巻を思わせる程の猛烈な勢力を伴った錫杖の大回転スウィングを間近で受けて、魔法少女二人と幼童一匹は慌て出した悲鳴をあげながらも必死に打ち飛ばされまいと正面防御結界魔法を展開して防壁を張る。独楽のように高速で大きく円を描き振り回される錫杖が防壁と接触してガガガガッ！と引つ掻くような連続打音が打ち鳴らされる。

「うおおつと!? 気を遣って言って、ギャグっぽい格好の割に重い打撃力してるし。

でもボクはどつちかと言うと男の娘が好きだから百合じゃないっての」

「わわわ、私だってそうですよ! でも、好みの男性を詳しく言うなら。何時でも私の

側に居てくれて、とつても優しくしてくれて、何をするのも一生懸命で——」

「誰もタイプの男なんて聞いてないにー☆ あ、それー。何やら乗って参りましたー

! いつもより多く回しておりマッチョオオオオ!!」

「ヌーローツ!!」

「キュルルローーツ!!」

まるでギャグ漫画のようにコミカルなスピンドで回転し続けるフォックスを魔法の防壁で挟み、ミクティーンとキャロは防壁に超高速で断続的に叩き付けられる錫杖の打撃力が思いの他凄まじくて防壁を維持するのも一苦労だという様相を呈しながら、相手から何を根拠に同姓好きなのかと言われた事を否定する。その上聞かれてもいないのに二人共に男の好みまで暴露して、実は余裕なのか？ そう感じた為か、更に加速をつけて旋風の如く60m真下の地上から土砂まで盛大に巻き上げ竜巻と化したフォックス。回転速度の急激上昇に加えて竜巻の勢力とそれに巻き上げられた硬い土砂礫まで加わり、叩き付けられる錫杖の威力は途轍もないパワーとなった為、とうとう二人の魔法少女が必死になって張り続けている二枚の防壁の表面が魔力粒子に分解されて徐々に削り取られた。防壁を維持するのが極限に困難を極め、二人の少女と一匹の幼竜の焦燥苦鳴が山々に鳴り響いた。

「——ぐあっ!? 痛つつつてえ……おいフォックス! テメエ、外野ベンチにまで土の塊を飛ばしてんじゃねえよ!!」

機動六課FW陣四人と一匹を相手に一人で大太刀回り圧倒的な實力差を見せつけるフォックスの大暴れっぷりはバトルフィールド外野の両陣宮控えベンチにまで飛び火が及ぶ程に凄まじいものであった。上で前後に挟むミクティーンとキャロの防壁を

猛烈な勢力で押し退けていつているフォックスの超速旋風回転攻撃に巻き上げられた土砂礫が野球の弾丸ライナーを連想させる瞬間スピードで流れ飛ばされて来た、それが彼が自慢にしているトレードマークであるリーゼントのトサカを潰して頭にクリーンヒットした事で額に大きなタンコブを作ったビスマルクが真っ赤に茹で上げた蛸タコのような愉快な顔をしながら怒り心頭を露わにしている。その横で腕を組んでいるガンマも先程は呆れていたが流石にそろそろ我慢の限界が近いようで蟀谷に青筋を浮かび上がらせて歯をガチリと噛みながら沸々と苛立ちを募らせている様子。

「あんの多重次元宇宙一の超超超大ドアホウが——つたく！ さっきの絶死級オナラガス弾といい、そろそろええ加減にせえよ？ これ以上ふざけ腐れ続けとるんなら、あの GANGU ロチャラ男の股間のピアオンタマアに此処から一発弾丸撃ち込んで、ブチ抜き墜としたるわ……ッ!!」

「……なるほど、確かに大分強いね、あのフォックス君という子」「あん?」

対戦相手が格下の新人魔導師チームな上に軽い挑発で容易に激怒し暴走してチームの連係を無視し単身突撃スタンドプレーに走っている足手纏いを一人抱えているが故に、試合を不真面目に遊びふざけて戦って、何度もそのとぼつちりを外野の味方陣営の仲間にまでくわせておいて少しの自重もする様子もないロクでなし GANGU ロチャラ男に対し、ブチギレ

しかけて腰のホルスターから拳銃型デバイスを抜きかけるガンマ。しかし寸前に上空の試合模様を見上げながら思案顔を浮かべていたなのはの眩きを耳に入れて思わず思い止まる。何かと思ひ隣の相手陣営側ベンチの方に向けてみると、視線に気付いたなのはがこちらに顔を向けて何かを訊きたそうな目で訴えてきていた。

「なんや高町？ 人ん事ジロジロと見つめおつてからに……まさかワイに気でもあるんか？ 悪りいんやけど、面と乳と尻は良くても、お話しよう」と言つて街一つ丸ごと消し飛ばす集束魔砲をブチかましてくるようなマジキチ女は御免被るで」

「こつちだつて君みたいに短気で怒ると直ぐに銃抜いて問答無用で眉間を撃つてくるよ  
うな人を彼氏にしたいだなんて一生思わないからねッ！ ……ただね、ちよつとフォックス君について訊きたいの」

有ろう事か恋情を向けられていると勘違いされた挙句にセクハラセットで断じて言つたつもりもないこちらの告白をフツてやったかのような口ぶりを吐きながら上唇を噛み締める程凄く嫌そうな顔をしてきたガンマに、滅相極まりなさ過ぎたあまり途轍もなくムカツ腹を立てて自分もお前なんかを恋人にするなんて願ひ下げだと負け惜しみ全力全開でフリ返してやった彼氏イナイ歴Ⅱ年齢のまま成人を目前に控えた純潔乙女の高町なのは。その所為でとても不機嫌を被つた顔になつたが、なのはが訊きたかつた事はフォックスの戦闘能力についてであつた。

「近接距離での肉弾戦においては並の魔導師や騎士を超えるチカラを発揮するスバルとエリオの二人を相手にして軽くあしらえる程の高い格闘センスを持ち、射砲撃・防御結界・高速移動・幻影迷彩といった使える魔法の種類、類を多種多様に揃えていて、随分とふざけているけれどオリジナルの魔法術式を構築する応用力も備わっている。それに加えて、それぞれ得意な魔法技術と戦闘配置が全員異なっているFWの四人の多彩な戦略・攻勢に対し適切な行動や魔法の手札を選び切って迎撃する優秀な選読眼と空間把握処理能力に、その性能を十分に活かす事のできる俊敏な機動力と非常に冴えわたる直感力、相手の行動の裏を突いて隙を作り畳み掛けるといった連綿に狡猾で的確な手を打てる戦術構築能力も高得点だね。彼はまさしく魔導師として理想の万能型を体現していると言っても過言じゃない。正直に言つて、場数や戦闘経験値が不足してはまだまだ未熟なFW陣が相手にするには荷が重過ぎる強さだし、管理局有数のSランクオーバー魔導師であるわたしやフェイトちゃんも本気で戦ったとしても簡単には勝てないと思う。確かにフォックス君は文句無しに最高クラスの戦力に入れられるだろうね……」

「人の内の領域でなら」だけだね」

経つた今、竜巻旋風でFW後衛の二人の防壁を同時に粉碎しそのまま二人共仲良く外野へ弾丸ライナーで打つ飛ばし、グルグル眼を回してふらつきながら回転を止めたフォックスを怪訝そうに見上げ眺めるのは……彼女は戦技教導官として、自分の教え



子の四人(十一匹)を同時に相手取りながら完璧パーフェクトに限りなく近い万能型魔導師の性能を十分以上に發揮して見せているフォックスの実力に対し最高の戦力に値すると明言した。だがそれは“人の内の領域でなら”に限定されると口にした。何故そのような、普通なら全然問題にならなような要素を付け加えたのかと言うと――

「でもロストウイング迷が、並行世界線の自分を無数に呼び出せるレアスキルとか、どんな攻撃でも撥ね返せるオリジナルの防御結界魔法とか、みんな“反則級に強力なスキル”を持つていると思つてたんだよね。確かにそれぐらい出来ないところの山の変態劣悪環境下で本局とも地上とも切り離された非公式の遊撃支援部隊なんてやっていけないだろうし、管理世界わたし迷の常軌を逸するような埒外級の戦力を保有しているラグナガンド軍に対抗するのに人間の魔導師レベルで万能に強いつてだけだと、どうにも物足りてない気がするんだ、彼……」

「あ、そういう事かいな……せやけど、そないな事なら全然心配は要らへんで。

フォックスをよう観てみい、もうそろそろアイツはいい加減試合終わらせに“あのチカラ”を出すところになるやろ。アンタの教え子らの事も測り終わる頃合いやろしな」

なのはの疑念にガンマが何だそんな事かと書いたような真顔と共に蟀谷をポリポリ掻き、続けてフォックスはもうそろそろ本気を出してくると断言する不敵の笑みを浮かべて、激しい試合の余波を受けて濛々と立ち込めた大量の砂煙に蔽われたバトルフイ

ルド内にて、経った今地面から起き上がった魔法格闘少女の人影へ物を試すような鋭い視線を差すのだった……。